
東方悪食歌

ピュゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方悪食歌

【Nコード】

N0487M

【作者名】

ピュゼロ

【あらすじ】

自覚しているようで自覚しておらず。

空腹ではないようで空腹で。

歌を歌おう。口が塞がっているのは、食事も出来ないけれど。

はじめに。

はい、「東方鎮魂歌」を読んでくださっている人はこんにちは。そうでない方は、初めましてピュゼロです。

以下諸注意。

- ・この小説は「東方鎮魂歌」の執筆中に思いついたネタを書き殴る作品となっております。
- ・東方projectの二次小説なので、苦手な人は無理しないでブラウザバック。
- ・オリジナル主人公だよ！

後はだいたい「東方鎮魂歌」の方と同じ感じ。

ここまでで180文字、少なさにエラーがでた。

こちらの方も、できれば楽しんでいただけたらなーと思います。

目覚めを感じるもの

「輪廻転生の類って本当にあつたんだな」

まあ……とりあえず平成の世を生きていたんじゃないだろうか、このオレとやらは。

「しかし、だったら何故記憶を保ってるのだろうかねえ」

オレはたしか映画館で寝た。——いや、寝る前に映画館で寝たら気持ちいいかな、と思ったんだっけか？　じゃあ映画館で寝た記憶は夢か。

「さすがオレ。夢の中でも寝るとは」

言葉にすることに、特に意味はない。だから口にした疑問なんて一欠けられたりとも悩まない。

だって決まってるじゃないか。

オレが、思考を手放すわけがない。

「オレがオレであることはとりあえず大丈夫だ。名前が思い出せないのが難点……か？」

いや、これは逆に嬉しいこと。

「なんせ、齢十五、六あたりで始まる生まれ変わりもないでしょ」
自分を観察する限り、男で十代。後はなんか薄茶色っぽい着物を着ているぐらい、か？

オレは下駄なんて不安定な物じゃなくて、安全靴のような安心させてくれる物で安閑としたいのはさておき。

肉親なんかは自分じゃ選べないのだ。ならばむしろまっさらな状態から始めたい。

とりあえずは、同じ人間とコミュニケーションがとりたい。
まあオレったら、ちよつと寂しがりなところがあつたのね。

「とりあえず今がどこで何時代なのか聞かないと。年号を聞いて時代を考えるにしてもオレ元禄とかしか知らないぞ。元禄と……あ元禄しか知らねえ」

まあここが日本じゃなかったらもう終わりなんだが。英語？ まあちよつとは話せるが、今と昔じゃ言語体系も随分違うだろう。

「母国語ならなんとかなりそうな予感が。やっぱり幼少期の刷込みって偉大なんだな」

脳の形成への影響的な？

「まあ考えても詮無き事ぞ」

なんせ目の前は何もない平原。

現代日本じゃ地平線は見えない以上、ここは過去か外国かなんかなんでしょーね！。

「いや待て、決め付けるのはまだ早い」

そうだよ、寝ている間に拉致られて今現在噂の某国にいるかもわからんじゃないか！

「……………」

逃避にしても、もつと嬉しい状況を考えるべきだった。

オレは現在平原をだらだら歩くのにも飽き、横手に見えていた森に足を運んでみた。

「馬鹿野郎！ 現代のもやしっ子が森を舐めるんじゃない！ そう、さっきのオレに言いたい」

だけど、平原を歩いていても人の住居なんて見えもしない。ならば食料のありそうな森へ入るしかないじゃないか。以前下駄を履いた時には鼻緒擦れがひどかったものだが、なぜか痛みが襲ってこなかった事も一因ではある。

まあ集落みたいなものがあつたとして、受け入れられるかどうかもわからんけど。

そんな文化レベルにはない、と思いたい……が！

「どんだけ歩けば平原が終わつたんだよ。太陽が真上に来たくらいまで歩いたぞ」

実を言つと日陰を求めた意味合いもあつた。誰もオレを責められないはず。

それよりも、考えの中で荒唐無稽な類の案がいよいよもって現実味を帯びてきたな。

「さようなら、普遍的な事しか思い出せない現代平成な世界。こんにちはは、過去もしくはなんかな状況そして新しいオレの肉体」

……………生きるのって、難しい。

赤い太陽、見えぬ足跡

「なんか気色悪い・・・」

どうも。ロードローラーに轢かれて死んで、気がついたら異世界！
？なんて王道展開に、唾を吐きかけるような道を進んでいる名も無き人間の一般男性です。まだまだ絶好調に森を彷徨っております。
・・・ロードを走るロードローラーなんてなくね？でもそれじゃあ名前負けだし。

しかし空腹が募り過ぎて気持ち悪さが気色悪いほど感じられる。
オレこんな身長だったっけ？なんて疑問が沸いてくることが余計に拍車をかける。

ジャムおじさん。新しい顔をください・・・。あ、いや、体が。

「この肉体が・・・まだ完全にオレになじんでおらん証拠・・・」

ちょっとおかしいんじゃない？つてぐらいの食欲を抱えて歩く。とりあえずオレになじむ（味覚的な意味で）ものを早く見つけたいところですよ。

この若いときに一度は味わう悶々とした欲求・・・。
環境が変わっても生理的な欲求はきちんと沸いてくるんだね、と少し安心。

目の前に現れた黒い獣も、この本能に従っているんだろうかと思うと親近感が沸くね。

「何か狼みたいなんだけど。一匹とはいえ力が入らないこの状況ではいや、参った」

ハツハツと赤い舌を見せながら荒く呼吸を繰り返している。菜食主義者なんかでは決してなさそうな、その牙が眩しいぜ。飛び掛られたらまず殺されてしまうね、自信がある。

あれかな、相手が人間じゃないからかな？同属相手には強いって、生物として何かが間違っている気もしなくもない。

しかし、こうも獲物と睨み合うものなんだろうか。その双眸は、餌を見定めている様にも見える。

「知的な感じもするので一応訊いとく。もしかして襲うとか思ってる？」

今までの日常とはかけ離れているようなので、もしかしたら答えてくれるファンタジーもありえ……。

「どうかな、私も迷っている」

………おおう。

ファンタジー。

「貴様は、我ら妖怪なのか？何か妙な感じがするのだから躊躇してしまっている。

本音としてはすぐさま食いつきたい位美味そうなんだがな」

えー・・・。

しかし、妖怪？流石にそこらの動物までは喋らないのかな？

「そうか・・・貴様、能力持ちだな？

しかし使いこなせてはいない様子。

・・・ならば、我としては襲い掛かるしかないのではないかな？」

心なしニヤツと、そいつが笑った気がした。まあ喋るのならおかしくもないか。

しかし、能力。

能力ねえ・・・。

「とりあえず狼さん狼さん。君の名前を覚えてくれないか」

「——ほう。私を、恐れないのかね？」

「童話で悪いのは嘘をついた少年であり、いつだって人間の方だ。捕食についても、特に何も思わないね。生きるためだ」

若干狼を擁護しているような言い方だが、実は別に大したこと・・・言っていないんだぜ？

そんなオレの言葉に、一旦口を閉じふん、と鼻息を荒立てた彼（？）は言う。

「よかるう、人間。私の名は黒風（クロナギ）。

同胞以外に名乗るのは初めて故、少々傲慢な物言いだが許してくれ」

「成程ね、よろしく。呼び捨てで構わないな？

で、だ。クロナギ、二つほど質問がある。・・・能力と、妖怪について教えてくれ」

何だろ、会話が成り立つとはいえこんなんと普通に会話してる自分

が怖い。

てか名前聞かれたらどうしょ、されないように祈ってるしかないか。

「何だお前は。赤子でも聞かんぞ、そんなことは」

「お互いの知識の比較するのも悪くないだろ？いいから答えてくれないか？」

「——ふん」

オレの『中』に巢喰うこの空腹。

そのさらに奥に、思い感じるものがある。

正直そのせいで無駄に自信が沸いてくるから困る。でなきゃ土下座なり逃亡なりするだろうに。

「同胞って言っていたが、それは妖怪の・・・ってことでいいのか？」

「ああ、そうだ」

よかった。そこらの動植物までも話し出すメルヘンではなくて。何も喰えねーよそんなん。

・・・いかにいかに、何かすっかり大食いキャラになっている。

「妖怪って、クロナギみたいに人間食べるよね？」

「知らんのは貴様ぐらいだな」

「——じゃあ、能力って・・・なにさ」

試されている。さっきも、迂闊な返答しだいですぐにオレは肉塊に成り下がっていただろう。

しかしそれを飲み込んででも、訊かなくては。

現在地を、ここの情勢を、情報と情報と情報と情報と情報と情報と

情報と情報と情報と情報と情報と情報と情報と情報と情報と情報と——全てを。

この飢えを、満たす方法を。

「簡単な事だ。」

妖気を消費し使うそのすべ、異能を引き起こす力の事だ。

必然、能力持ちはその種族としての力も多い。私としては、美味しい」

「ふーん……。オレみたいな使い方もわからないヤツはうってつけなのか。」

あ、ということはクロナギって強いんだな？その能力は？」

コイツが異能と表現する以上、多少の例外はあれどその大多数の能力は、戦闘のためのはず。それを美味いがために狙うてことは・・。

なにそれ怖い。

「空を駆ける程度の能力」だ。

「……貴様もいつか自然と悟るであろうよ、自身の能力について。それは、そういうものだ」

能力を知った影響なのか、なんかクロナギの妖気？が見えるようになってる。

正直、すごく……大きいです。

よくわからんが、ヤバイということは肌でわかる。さっきまでのオレを殴りたい。

まあ能力の説明と今後のこと話された時点で、捕食エンドはほぼなくなった・・・と思いたいけども。

「ところで、オレ自身の能力についてたった今自覚した。

能力という概念を説明されたらなんかふっと浮かんできたんだが、ちよつと評価を貰えないだろうか？」

「・・・馬鹿か？」

「そんなご無体な。自分の事だ、自分が一番理解できるのが道理」

「——ふん。」

それで？私のように、戦闘を補助する能力か、それ自体がある程度の火力を持っているのか。

人間は後者でないと、生き延びるのは厳しいぞ」

「クロナギのそんな面倒見のいいところ好きになつたわ。

・・・でもってこれがなんとほんと、『相手を存在ごと喰らう程度の能力』」

「・・・・・・？！」

「あ、やつぱりちよつとまって」

クロナギの貴重な取り乱している様子です。出会って二十分もたつていませんがね。

しかし、この能力もちつといけるだろ。

「よし。」

——『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』。
これに変えた」

「はッ？！貴様、能力を成長させたのか？！！

いや、それ以前にそんな能力、ありえるわけがなかるう！！」

「いやそう言われても」

自覚が罪だ。自覚は罪だ。自覚の罪だ。
自覚したら、目の前に『ある』クロナギ。
——能力持ちは、美味・・・ね。

妖魔夜行

「なあ、なんでなんだ？」

目の前のそれに話しかける。

「なあ、どうしてなんだ？」

背が『喰い』千切られているそれに語りかける。

「なあ・・・なあ」

特に、意味なんて。

「何やってるの？おにーさん」

意味なんて——ないけど。

「よもや——私を食らおうなどと、考えてはいまいな？」

四肢に力をみなぎらせ、そうクロナギが言った。
首筋から尾の先まで、順番に順番に、だんだんと毛が逆立っていく。
なんかすごい。

——まあ、今の空腹感で一杯のオレに、気付かれずに接近するなんて不可能事なんだがな。

死角である真後ろから高速で飛来する”それ”を、気楽に首を傾けてひよいと避ける。

ただ、オレの意志とは無関係に何かが身体から飛び出て、それにかすっただけだ。

”それ”はそのまま、クロナギともオレとも等間隔の位置のこずえにとまった。

「・・・ちいい。」

黒風、テメエなに人間と仲良くお話してんだ？」

それは、一羽の黒いカラスだった。ぎろつとクロナギの方を向いて、言葉を続ける。

「おまけに妙な能力持ちときた。なんだコイツは。」

二、三本羽を持っていかれちまった」

「鎖々翼（ささば）、邪魔立てだけはしてくれるなよ！！」

どうやらオレのカウンターの精度も捨てたもんじゃないらしいね！問題があるとすれば、狙いをつけるところか使い方がわからないことぐらいだ。

そして、クロナギが動いて見せた。

宙に躍り出て、まるで足場でもあるかのように跳ね・・・跳ねて・・・。そのまま森の奥へ消えてしまった。

・・・え？

空を駆けるってそういうことだったの？たしかにクロナギの身体能力だったら、その能力でもって地面を走ると変わらないで空を『駆ける』だろうが。

それより問題は、目の前で睨みつけてきているカラスだ。よく見たら足が三本・・・え？八咫鳥？

「・・・逃げたか、腰抜けめ。」

しかし貴様、大した力も持っていないのに能力持ちだと？

——まあ、どっちにしろ未来は決まさきっているがな」

そいつがぐりん、ぐりと、つやのない真つ黒な眼球を動かす。その視線でもって、オレを射抜く。

どうしようね。

「私の能力は『盲点を操る程度の能力』。貴様がその目で私を意識すればするほど、より私を捉えきれなくなる」

あまりいい感情は持たれていないようだが、まだ敵対すると決まっただけでもない。

ここは言っておくべきか。

羽を広げ、今にも飛び立たんとするそいつが言葉を重ねた。

「人間よ、貴様がこの森にいる。それだけで私が動くには十分なのだ」

「一応言っておく。すぐ逃げろ」

そろそろ来る。とりあえず要点のみを掻い摘んで言ったが、はたして信じてはもらえず。

二つの黒が宙に飛び出た。

「いい加減そツ・・・!!」

鎖々翼、と言ったか。

能力が効いてきたらしく、細部までは見届けられなかったが、頭部が背後の黒い”何か”に貫かれて呆気なく停止したのは、わかった。その残骸は地に引かれて落ちるが、生命活動はどうしようもなく、停止する。

ピクピクツと少し動いて、それすらも停止する。

黒い何かが両の翼に覆い被さって、そして木立の奥へと戻っていく。翼が死体からなくなっていて、そして響き始めた咀嚼音。翼だけで、なんつーグルメ。

なんでなのか、自分でもよくわからなくなる。

・・・それも当たり前かもしれない。

特に意味なんて、ないから。

そして、姿を見せたのがその少女だった。

見た目幼い少女にしか見えはしないが、口元が赤い。

・・・ぞわぞわするね。

ササバとて、オレの知識がここでも符合するのなら神として数えられることもある八咫鳥。感じた力は本物だった。

それを、背後からとはいえ一撃でしとめる彼女はなんなのだろうか。あまつさえ食べるし。

神喰らいの少女が返事を待っているようだったので、とりあえずコミュニケーションを図ってみる。

「少し自分に酔っていただけ。

それより、君の名前は？」

まあ客観的に見たら自己満足の類なぞ、どれも十把一絡げだろう。

「ふーん。よくわかんないけど、そうなのかー。

——私、まだ名前はないの。もしよかったらおにーさん、つけてくれない？」

口を拭うこともせず、彼女は両手をすすーと広げた。聖者は十字架に磔られました、とても言うつもりか。

でも名前？

・・・！

「よかるう、この俺がお前の名づけ親ゴッドファーザーになってやるッ！」

「！」

「・・・・・・・・」

どうしよう。大口叩いたものの、今すぐに意味のある名前を考えるって難しいぞ。

・・・ダイ？大冒険でもするの？

・・・パトラッシュ？寒いの？

きらきらとした目でこちらを見つめているその表情を、失望させるほどオレは意地が悪いわけじゃあない、とは思っ。

小さいから、ちび、とか森で拾ったから、もり、とか人間らしくない名前しか出てこない。いや人間じゃあないんだろうけどさ。

あー。なんだか、雑炊に唐辛子を嫌になるほど振りかけたい。そこまで辛い物は好きじゃなかった記憶はあるけど。

「・・・ルーミアなんてどうよ」

完璧ただのフィーリングです。・・・なんかごめんなさい。

「ルーミア・・・？」

ルーミア・・・ルーミア。

うん！私は今日からルーミアなのかー！！わはー！」

でも。

まあ本人（人？）が気に入ったのなら、それは素晴らしいことなわけ。

しみりとしていた気持ちも、彼女の笑顔で一掃された。

「——まあ、とりあえずよろしく、ルーミア」

牙を立てない黒狼はかく語りき

さて、だ。

ルーミアーわはー！！とか楽しそうに叫んでいる彼女。

名付けとは、古来より”それ”を世界から切り離して確固たる一己の存在とする儀式……。のようなものであった気がする。

もちろん、縁逢^{えにし}った以上永らく付き合っていく気はある、が。

その『儀式』は、両者を明確に上下と区別するものではなかったか。

「一番よりNO、2！」とまで言うつもりはないが、オレは上に立つよりは対等な関係を結びたいし、それよりもとよりなによりきつと全て確実に完全に気概と意志と願いと闘志と殺意と妄想とでもって他者を下に見るなんて論外だ。吐き気がする。

――。

「まあ、そんなわけもないか」

どこでこんなに博愛主義者にでもなったのか知らないが、たかが命名ぐらいでそんな。

世の中には、親すら手にかける者も腐るほどいるぐらいだ。

「さて、どうせだったらオレの名前も承りたいものだ、が・・・」

せめて口の血ぐらい拭けよ。

近寄って、着ている着物の袖口で拭いてやり（残念ながら懐紙の一枚も持っていなかった。なんで着物よ、とつくづく思う）「そういえば、カラスの翼だけ食べるってなんてグルメ？」

ちつこいが頭は丁度手を乗せなくなる位置にあるな。精々撫でるぐらいだけで。

「グルメ？グルメおにーさん？」

「いや名前違うから」

「メー兄いじゃないの？」

しかも略すなっちゅーの。

・・・しかし不便だな。もうグルメから一字取って・・・愚銘？いや確かにネーミングセンスはないけど。

「命。命^{めい}でいいや。よろしく、ルーミア」

「うん！よろしくー！！」

改めて、今度は一緒にはしゃいだ。いやこれが楽しい。嘘だと思うなら今度美少女と無為に戯れてみ。

「ルーミア。いい名前じゃあないか」

背にドツと冷や汗を感じた、首が逝かれる位の勢いで振り向いた。黒風。黒風だった。黒風があった。黒風のようにだった。そいつが、鳥類とは違う濡れた様な瞳をオレに向ける。

「そのアホ烏ならオレが喰い散らかした。調子に乗った口を聞いたから能力を使ったこれなら誰にも負けないお前も喰われたくなかつたら何処となりと失せろ、クロナギ」

「――ふん。」

その子を庇いたてするのか？」

「何を言ってるかわからない」

右腕でルーミアを抱き寄せ、左腕をクロナギに向ける。一步一步、噛み締めるように歩く。

孤高の狩人、というイメージの強い狼だが実際には群れで行動する動物だ。妖怪同士のコミュニティとか言っていたし。

鎖々翼が死んでいる以上、とりあえず友好的に接するのは無理ってもんだ。

「三度は言わない。失せろ」

「ふん。そう邪険にしてくれるな。」

実を言つと、最初から見ていたんだ。その子が屠ったところからお前が命名したところまで、一部始終な」

「・・・」

潰すしかないか。

なんでそんなに知的なんだよなんでそんなに会話が成立するんだよなんでそんなに人間らしいんだよ。こんな環境に叩き込まれたからこそ残り滓でも人間性、というものは必要なんだよお前を殺したら心が心が心が、オレの心が痛む。疼く。血を流す。

――心なんて、あるかわからないけど。

あっさり死と死が訪れる世界で、あっさりとそれを認める世界で。

腕の中にかき抱くぬくもりだけが、真実のようで。

「——ふん。まずは落ち着け、私の方にお前”達”をどうこうする気はない」

「・・・え？」

え？

「今から二年ほど前、とある妖怪が生まれたのだ。

その妖怪は闇を操り、私たちでは太刀打ちできなかった。しかも先に『受け皿』として覚醒していたようだな、会話するだけの自意識もなかった。

一種天災のようなものを止めてもらったのだ、とりあえず感謝をしなければなるまい？」

思わずルーミアを見た、オレに寄りすがって寝ていた。

・・・大物になるよ、本当に。難しい話とかしたわけでもあるまいに。

「・・・。さっきはごめん、嘘ついた」

「ふん」

「でさ、受け皿って何？」

ルーミアを背中に背負いながら尋ねた。女体盛りってやつ？変態め。誰とはなしに罵倒してみた、世間ってヤツに冷たい目で見られたきがした。ルーミア案外重いな。いや軽いんだけど年齢や見た目よりは。

「まあまずはついて来てくれ。腰をすえて説明もしたいし、その子もずっとそのままでは辛いだろう」

「——じゃあ、よろしく願いします」

歩き出したクロナギの尻尾を追いかける。フリフリしていて掴んで掴んで！と主張している、ような気がする。しないけど。

「しかし、名付けただけのことはあるな」

「目覚めて何をなす、眠れる奴隷・・・何が？」

魂の歌を歌っていたら、クロナギが声をかけてきた。一瞬下手さ加減への苦情かと思つて謝罪三秒前だったぞ。

「なぜあそこまで庇いたたのだ？正直なところ、そこまで情に厚いようにはとても見えなかったぞ」

お前は、追われている時に群れに弱りだした者が出たら躊躇なく切り捨てられる人間だ。^{ケモノ}

にこりともせずにクロナギが言った。

それは——人間ならば、とても寂しいことのようにだがな、とも。

「なぜ名前をつけることと関係がある」

オレへの評価はすつ飛ばして肝要な部分を聞いた。

あつてはならないんだつての、人の先を決定付けるなんぞ。

「例え最初は本能に従っていたとしても、一度でも乳を与えれば雌オオカミは母となるものだ。」

なに、要は一度関わってしまえば情が湧く、ということをお願いしたいのだが？」

「・・・」

とりあえず尾を掴んでみた。

「な、何をする貴様！」

「五月蠅い、持ち上げて突き落としておいて」

「何の事だかさっぱりだ！痛い！離せ！」

「大体よー、ここは背中に乗せるものだろー。一瞬期待したオレの子供心返せよーちくしょー」

オレはアシタカよりサンよりヤツクルが好きだった。

てかさ、鎖々翼ほつといていいの？一応胴体部は残ってるのに。

尻尾を離してそのことを聞くと、尻尾の毛を繕いながら恨みがましい目で見られた。

「アレはいわゆる一人一種族妖怪だ。最近このあたりに流れてきて、好き勝手やっていたのを無理矢理引き入れたのだ。経緯が経緯だから、仇討ちは恐らくない。

向こうに山が見えるだろう？あれを象徴として、この辺り一帯の妖怪で共同体のようなものを形成している。理由はそれぞれあるが、とりあえずの条件としてはここで生きる以上例外なく加入することだ。でなければ出て行ってもらおう」

・・・仇討ちがないってのも、空しい話だな。いや、死者には何をしたところで無駄だからいいのか？神じゃなくて良かったのか悪かったのか。まあ、神が妖気しか持ってないってのもおかしいけどさ。とりあえずオレの中に生きていることにした。

さりげなく騎乗案を却下しつつ、クロナギが続ける。

「その共同体の、唯一の中心と呼べる妖怪がこの辺りで消えたのだ。元々そいつを探していてお前と会ったのだぞ。」

残された妖気を感じると、出会った場所からそう遠くもないのだが・

・見なかったか？

丁度今のお前が着ている服のような、茶色い毛並みの九尾狐だ」

・・・・え？

「つかぬ事をお聞きますが・・・その狐さん、妙に話がうまくなかった？説得とか」

「ん？たしかにそうだったな」

「・・・大変ですね」

——どうしよう。

牙を立てない黒狼はかく語りき（後書き）

オリジナルな分だけでも、のちにキャラ紹介していただくと思います。
あと、年とかの単位は時代ごとに変えたりしません。面倒、もとい
わかりにくいです。

B G M “組曲『人間賛歌』”

自分をはじから刻む音

結局、後はただ黙々と歩いていたら目的の場所に着いたみたいだ。

知らない人にはついていつちやいけないけどまず人じゃあないからノーカン！と自身の良心つてヤツに言い訳していたら（あくまで比喩的表現であって別に姿がコオロギとかでは無い事ははっきり言うておきたい）ここだ、と言われて面を上げる。

狼の集会場にでも連れて行かれると思つてたから、普通に洞窟だったので内心胸を撫で下ろした。この臆病^{チキン}さ溢れる自分が、別に好きでも嫌いでもない。

それよりも、さ。何で他の狼が「お母さーん！」つて言いながら出てくるんですか？

「ねえ、クロナギ・・・さん」

他固体よりはさすがにでかいから、じゃれ付かれていても振り向く前から区別はできた。

「え、お母さん？」

「そうだが？」

・・・いやいやいや。

「・・・まあ何が変わるってわけでもないか」

オレは平等主義者なもので。そんな理想を掲げてかれこれ5秒ぐら

いにはなります。

「・・・ん。

とりあえずお互い積もる話は明日にしません？正直すごく疲れていて、もう寝たいぐらいだ」

身体よりも精神的にね。感覚も薄れてるよーな・・・ルーミアまだ背中にいる？

「む・・・」

オレを見て、子供たちを見て、ルーミアを見て、唸る。しかし、葛藤も長くはなかった。

「——ふん。まあ・・・そうするか」

「あ、ちよつと待って」

ついてきてくれ、と洞窟の中に向かうクロナギを呼び止めて、ルーミアを任せようとした。

「ルーミアだけ、お願いしていい？その子達に微妙な思いをさせても悪いしね」

「いや、遠慮することはないんだぞ？」

「気持ちは嬉しいけど、その丘で星を見上げて寝るのがオレの日課なんだわ」

日課は嘘なんだけど、なんとなく寝そべりたいこの気持ちは本心。たった一日で洞窟暮らしも拒否する野生児にでもなったのか？

「そこまで言うのら止めはしないが・・・。

ふん。どれ、つれてきてくれ」

結局このまま担いで行くことに変わりはないんだな、これが。

「・・・」

ルーミアが、背後から黒いオーラを立ち上らせ、無言で四肢に力を込めて強く抱きついてきた。

オレの包容力に惚れたか？やめてくれ、首決まっつて地味にキツイ。

「えと・・・ルーミア？」

「・・・」

「お前の方は、中で寝てもらいたいんだけど・・・」

「・・・」

そろそろ首に掛かる負担が限界だ。攻める方向を変えてみることにする。

「なるほど。別に寝床はきちんとあつて、ここじゃ寝られないと」

「・・・く、暗いと眠れないの」

・・・。

助けてくれ、とクロナギに目で訴えると、任せろ、と心強く頷いてくれた。さすがクロナギ！伊達に尻尾生えてないッスね！

「そういえば、中が思ったより狭くてな。やっぱり、二人で寝てくれるか？」

「なんでだよー!!」

何もわかってなかったよ！なんで尻尾生やしてるんだよ！

「・・・っ」

——正解に辿り着いてしまったようで、背中に顔をぐりぐりとさ
れています。

え、なに、そんなに嬉しいの？

「・・・まあ、それじゃその辺で寝てるから。明日にはいろいろ教
えてねー」

「ああ。それでは、また明日」

まあ、それもいいか。

クロナギファミリーが洞窟の中へ入るのを見送って、軽く丘気味な
所まで歩く。何メートルまで丘で、何メートルから山だっけ？とい
うちょっとした疑問をぶつけられる唯一の話し相手は、全然話さな
いし離さないで担いだままだ。

「んー・・・」

見知らぬ場所（異世界ともまだ認められないオレの理性の微妙な表
現だ）初日の就寝場所は、小高い丘の上。吹く風とか空気だけでも、
寝る価値があるような具合だ。発達した文明を否定するつもりなん
てないけど、これはこれで新鮮でいい。

ルーミアを下ろすと、やっぱりというべきか、寝ていた。

優しく地面に寝かせ、髪を軽くなでる。服の一枚でもかけてやりた
いが、オレが脱いだら上半身裸になるしな！。絵的に許されるとか

そういうレベルじゃない。

オレもその横に転がって、視界を闇に委ねる。

——闇といえば。

「さすがに、殺すのは駄目だと思うんだ」

「知らない天井ではなかった」

目を覚ますと、夜空が視界一杯に広がっていった。鼻屑目に見ても天井とは呼べまい、屋根裏がないんだからな！

ところで何この感触、と右の方に首を傾けるとルーミアが引っ付いて寝ていた。・・・どんだけ寝るんだ。

とりあえず引っpegがそうとしたら、くしゅん、と小さくくしゃみを

する。

「・・・」

少しだけ抱き寄せる。べ、別にアンタが風邪引いたら心配とかじゃないんだからね、オレが寒いだけなんだから、かか勘違いしないでよね！

——死にたくなった。野郎がツンデレると、精神が病みます。お試しあれ。

「でも、ルーミアには素直なままでいてほしいけど」

そもツンデレ自体があまり好きではないし。なんでやったんだろう。

「——」。

いつの日か回り疲れた時は、傍にいてください——」

右手でルーミアを掻き抱いて、左手で夜空に手をのばした。

さっきと、同じことだけど。

今なら、何かを掴めそうだった。

「・・・」

・・・。。。

おっと。

「何も考えていなかった」

オレとした・・・ことが。

次に目が覚めたら、朝だった。てか太陽が真上から見下し気味なので、お昼頃だろう。

「やっと起きたのー？」

ルーミアにマウントポジションをとられているから、彼女の頭越しにお日様に挨拶するしかない。おはようございます、もう遅い？それでもおはようございます。

「起きて最初の挨拶はおはようだな、個人的に」

上半身を起こして、ルーミアを軽く抱きしめる感じになりながら、目線を合わせて言う。

「おはよう、ルーミア」

「うん。おはようね、命」

そのままじーつと見つめてきたので、オレも見つめてみた。

・・・・・・・・・・。

「この味は！・・・・・・・・・・嘘をついている『味』だぜ・・・・・・・・」

ペロ、と首筋を舐めてみた。

「わはー！くすぐったいのかー！」

——別に嫌がられなかった。

「・・・いや、正直なんでやったのかオレもわからない、が、唐突に衝動が襲ってきたのだ。味？仄かに甘い感じ。」

猫科の肉食獣なんかは舌がざらついていて、肉を舐めるだけでこそぎ取れるらしいが・・・・・・・・・・？！

つまり。性欲すらも食欲に汚染され・・・・・・・・・・そう、これはまさに汚染。

「・・・生きている理由が、果たしてあるのでしょうか？」

「いいや！当然だあるね！」

「~~~~~！」

オレの上でルーミアが、上機嫌ににこにこ笑っている。純粹に。

「・・・?どれ」

「おおー!」

彼女の二の腕の擦り傷を、今度は確かな感覚に従って一舐め。すう・
・と溶ける様に傷が消えた様を見て、彼女がちよつと驚きの声をあげた。

うむうむ、と納得してしがみつくるルーミアを離す、離す・・・。
よほど座り心地がよかったのか、結構抵抗されたが――腕のリーチ差を生かしてごり押す。

甘えなくなったら、もっと善いヤツに抱きつきなさい。

脇の地面に下ろすと、むーっと膨れ闇に包まれて消えてしまった。
・・・?!!

人間にそんなことできた・・・ああ、妖怪だったか。

一人合点していると、今度は視界の七割を見知らぬ狼に塞がれてしまった。

地面に座っていると、僅かにクロナギの方が大きいのね。

クロナギってか見知らぬってのは本当の話で、見分けがつかない以上唯一の知り合いだと思うしかないとか説明臭く思っていると、向こうから正解をだしてくれた。

「何をしていたんだ？」

「わからない？」

「そうか・・・ルーミアも母になるのか」

「なんでよ」

その昨日はお楽しみでしたね、的な視線は止めて欲しい。

「二人だけで、闇に包まれたまま夜を過ごしていただろう。

いや、知り合つて間もないとはいえあの子が母親になるのか・・・。
感慨深いものがあるな」

「いや違うから」

しかし、どうやら寝てる間はあの闇で覆われていたらしい・・・。
案外オレの人生の終わりもルーミアのさじ加減一つだったんだな。
まあこんなところで寝る以上、ノミに喰われるとかは避けられない
と思っただけだ。いやその点はよかったよかった。

「でも一回夜中に起きたぞ。夜空が綺麗でした」

「いや、そんなことは知らないが・・・。

ふん、それだけ思われているんじゃないのか？」

「・・・どうりで」

くしゃみをしたのもそれか。ルーミアの就寝の快適さを奪っていた
と思うと、あの夜空も随分罪深い気がしてくる。

彼女・・・。改めて「彼女」を見つめていると、「お前にルーミア
を救えるのか」とでも言われる気がしてきた。お前はルーミアの何
だ。

「さて。さてさて」

喋りながら、立ち上がる。

「とりあえず一から十まで、そして一周回ってまた一まで、いろいろと教えてもらいましょうか」

「ああ、そうだな」

しかしいい人（いや違うけどさ、突っ込んだら野暮ってことで、ね）だよクロナギ。

声に若干力が入っていて、目に剣呑な光が見え隠れしていても、大好き！って叫びたくなるね。

自分をはじから刻む音（後書き）

・・・あれ？ツンデレって普段はツンなのに二人になると隠し切れぬ行為でデレデレレ、のことじゃなかったっけ？・・・どうでもいいか。男だし。

B G M ”ダブルリアット” b y アゴアニキ

G o o , g o h e a r t g o g o !

「じゃあ・・・角取り」

「王手！」

ここに生活の根を張って、結構経った。

今は、日々に潤いを与える為に木片から作った将棋の駒でもって、ルーミアと戦っているところだ。

・・・ところ、だった。

「わはー！ルーミア強いー」

「命って全然上手くないね」

信じられるか？オレ、ルーミアに最初の対局で最早負けたんだぜ・・・？その後も勝てたためしがない。てか勝てる相手がいない。クロナギとかオレが二人分動かさなきゃならないのにあの強さだよ！やる気がそがれるってレベルじゃねーぞ。

しかしなかなか論理的な思考をするじゃないか。この分だとチェス作ろうがオセロ作ろうが碁だろうが同じだな。紙の発明を待ってボーカーで挑んだ方がよさそうだ。

けど世の中では出来の悪い弟子の方が可愛がられるよね（それなのに漫画では「お前にはとてつもない才能がどうたら」と出てくる辺りになんか人間の願望を感じる）。一瞬で追い抜かれたところで別に大した事と思えないのは情熱が足りないのか？

「たしかにな。頭の回転は悪くないのに」

後ろから、クロナギの声がした。将棋をルーミアにせがまれたから、

代わりに魚かなんか獲って来てとお願いしたのだ。

「ああ、ありがとさ……ん……」

……そりゃそうだ。

「いや確かにさ、口で啜えるしかないのはわかるけど！魚ぐっちゃぐちゃじゃねーか！」

ポタ……ポタ、と血が滴ってますよ奥さん！

「ふん。そうは言うがな、存外口に啜えて運ぶというのは難しいものがあるのだ」

「うるさいわ！所詮は畜生か？！」

「貴様言ってはならないことを！！」

結局、あの後のクロナギとの和平はスムーズに進められた。

オレはここいらの常識ってヤツを教わり、いくつかの取り決め——
——要は「お友達になるんだから、お互い仲良くしましょう」ってこと——
——を交わした。その後は、のんびんだらりと妖怪ライフ（妖怪の中に混じって送る人生）を楽しんでおります。

彼女の子供たち（旦那も子供もただの狼らしい。妖怪は生殖能力が低いのもشれない）に野山を駆けずり回されたり、ルーミアと新たな食の探求に赴いたり、能力の理解を深めたり。

能力の副作用なのか唾液が地面を焦がしたときはびびった。一歩間違えればルーミアも悲惨な結果になるところだったのだから、これからルーミアを味わう為に、能力の把握を頑張ったのだった。

体に在った力（たぶん妖気）を振るえば大抵自分の思った事が起きるが、何も考えずにやると能力がしゃしゃり出てくる。二時間ほど練習したら完璧に扱えるようになり、この前聞いた九尾狐の能力が完全に理解できた。

「相手と会話が出来る程度の能力」。・・・程度程度ってこのヤツらは皆謙虚さに溢れているな。

あと実は鎖々翼もあの場を離れる際に、暴発した能力が喰っていた。今のオレの妖気の八割はその二者の分だろう。

「そのキツネとやらは、この能力を疎んじていた節があるな」

相手をも、会話が出来るレベルまで「持ってくる」から。

で、なんだっけ——まあ、怠惰だけどこか充実している日常は、そうやって二ヶ月ほど経った。

「しずかちゃんって皆にさん付けしてるけど他人行事過ぎない？何度と一緒に大長編を乗り越えてきたんだろうに」

「??」

将棋の駒を並べている時にそう言ったら、怪訝な顔を向けられた。あの名作を知らんとは。

「まあこつちの話」

「・・・？そーなのか」

並べ終わり、まずはオレから駒を動かす。
そして冒頭に続くわけだ。

「まあ、ね。ただでさえ人間は頭の上からの攻撃には対応できないのに、そこにさらに狼の俊敏性ですよ」

口喧嘩からそのまま取っ組み合いに発展して。．．．．．まあなに、クロナギごとき軽く捻ってやりましたけどね！

洞窟の入り口のところに座り込んで、ざっと全身の傷の確認をする。実際本気を出せばここら一帯で危険なんてないに等しいので満身創痍でほつき歩いたって大丈夫なのだが、この前調子こいて怪我をほったらかしていたら運悪く大将がやって来て酷い目にあった。

大将は、クロナギの馴染みの熊の妖怪だ。荒っぽいが優しい．．．ところもある。体はかなり大きくて、ルーミアがしがみついていたら傍から見てもわからないくらい毛が長い。熊にとって、ハチミツは美味なのかという命題を問い掛けようとしているのだがいつも忘れる。そんな常識熊。

そんなメンツで喧嘩したら、その大将とクロナギ、そしてルーミアが三強として君臨し、オレはクロナギの子供たちとどっこいどっこい。平たく言えば最下層に位置する。

相手を殺すしかないオレの能力とは違って、ルーミアの能力はかなり応用が利くからだ。「闇を操る程度の能力」は文字通り闇でもっ

てなんでもできる。固めて叩きつけたり纏って衝撃を防いだり（防音、防寒もなかなか。二人で寝るときは大抵使ってもらってる）。オレは見えないが彼女には視界の障害にならないらしく、新月の夜に出会ったりなんかしたら絶望的な性能を誇っている。なのに真昼間での使用も何の負担も無いらしいし、最近「闇をくぐって瞬間移動できるようになった」とのこと。わはー。

ルーミアは大将にも懐いているし、大将も幼い同胞を無下に扱ったりはしない。ここに来るのも大概はクロナギの子供たちの教育だ。・ハチミツの獲り方とか教えないんだろうかね。

で、そんな大将はなんでかオレまで鍛えたがる。オレは人間だ！と抗議したら「どっちでも大差ない」と切って捨てられた。彼の前で弱った姿を見せようものなら「お前が弱いからそうなるのだ」と鉄拳教育が降りかかる仕組みになっているのだ（いや、鍛えるならせめて怪我が治るまで待つてもらいたい）。自分と互角に渡り合うルーミアは合格、だけどあの人間はまだまだ弱っちい、みたいな印象なんですかね。

「・・・あれ？オレ能力持っているって言うてなくね？」

普通の人間がこの森のこんな場所で生きていけるわけないだろうに！たしかに始終ルーミアと一緒にいるから、そんな誤解を生むのもやむなしけどさ。

やたらでかい山のふもとに広がるこの森は、年々少しずつ数を増す人間側から見れば妖怪の巣窟となっている。

この前一応集落を転々と渡ってみたが、文化レベルはどうみても縄文時代真っ最中だった。軽く見積もって一万年後の未来に生きた人

間からだと遊んでいるようにしか見えない拙い技術で、日々生を謳歌している彼らを見てみると幸せの価値観が変わる気がしたね。心がぐらつくのはまだ状況に戸惑っているから、と言いつつ自分を自給して早々と森に逃げ帰ってきたのだ。ルーミアに抱きついてたらそんな事どうでもよくなっただけだね。

「あれでも、もうれっきとした”死の恐怖”は持っているのか」

妖怪は、人間のそういつた感情から生まれるらしい。クロナギ達なんかは長く生き、畏怖を集めたから妖怪になっただけでこれ九十年は妖怪やってるとのこと（あの子供たちは七世代目で、一世代上の兄弟はもう死んでいる）。特にクロナギや大將は、ここの妖怪の最古参だ。

だが、ルーミアは人間の『暗闇を恐れる気持ち』から純粹に生まれた妖怪だ。彼らは妖怪の前に動物としての生があつたが、彼女は正しく妖怪として生まれた。オレに出会うまでは意志がなかったその能力でもって蹂躪する存在だったらしいけど、オレとの『会話』で自我というものが生まれらしい。

「だとすると、あれが彼女の産声か。なんだっけ——」何でもしてあげるよ、おにいちゃん”だったか？」

まあ、それは置いといて、だ。

様々な妖怪に聞いた話だが、人型の妖怪はルーミアが最初らしい。そして、オレはおそらくその次、だ。

この能力と、曖昧な自己と、あといくつかの点から——オレは『捕食者』に対する恐怖の受け皿、という事実が浮き出てくる。

野生の動物とは違い、はつきりとした「天敵」である妖怪が登場した事で浮き彫りにされた、オレ。^{きょうぶ}

そう考えると、大将やルーミアに抱きつくときにはパパママって叫んだ方がいいのかも知れない・・・しないけど。

この先、どんどん妖怪が出てくるのだろうか・・・。

オレは、人間である事を忘れないでいきたい。

G o g o , g o h e a r t g o g o g o ! (後書き)

今更ですが、この小説を書き始めた理由である書き溜ったネタ。紅魔郷以降なので歴史の頭から書いていたら結局意味ねー！現代からスタートして回想で過去をやってもよかった。

B G M " J o h n n y B . G o o d e " b y C h u c k
B e r r y

心碎けぬ闇の飢え

最近ここいらの妖怪の一部が、衛生環境最低の人里がどーのとうるさくなった。

「味者愚時サマア？」

「”ミシャグジ”ですよ兄貴！なんか最近人間達の信仰を一手に集めだしているらしくて！」

「べーつにいいじゃん。所詮、恐怖を認識した人間の儚い幻想。」

「人」の「夢」と書いて『儚い』！・・・・・・・・・・・・・・・・フフよくぞ言っただものだ」

周囲の木と比べるとやや小さいが、オレの感覚からすると十分な巨木の枝の一本。寝転んで片手だけを宙にたらし、二丁三メートル下の地面にいるのであるうサチに応えた。

「儚いどころか祟り神らしいんですってば！」

サチはリスの妖怪。こんなん恐れる人間もいないと思うんだが・・・妖怪事情は複雑らしいです。

「いやだからさー。神様つてのは人間の作り出した寄る辺なんだから？偶像のどこら辺を恐れればいいのか教えてくれー」

「鳥達が言うには集まった信仰でかなり強力な力を持っているんですって！実際に見た奴もいて！マジモン！！」

「マジモン？どこでそんな言葉を・・・」

「……ああ、日本じゃ一神教じゃないっけ。」

「だったら妖怪もいるぐらいだし、神だっているんだろう。」

「ちよつと真面目に聞かなきゃならなくなつたつばいけどさ」

八百万やちみずの方だつたら大丈夫じゃないのか？一々人間臭い神々だろう？

寝転んでいた枝に改めて腰かけて、サチを見下ろす。アイツも登つて来ればいいのに。降りたら再び登るのがしんどいからオレはここを動かないぞ。

「しかし何でオレに？こういうのはクロナギとか大将に話せよ。・
・なんなら言つとこうか？」

「兄貴はよく人間の集落とかにも行つてるでしょう？何か知らなかった・・と、聞こうとしてたんですけどね・・・」

確かに行ったりしているけどあくまで森の賢者のポジション（を指している）。文明の発展具合を計ろうとしたらそのまま顔を知られた程度で、あまり込み入った話とかはしないしされないんだよね。されないように『なつてる』し。

「それに、まだここいらに実害があるわけじゃないんです。ただあつしが心配だつて話で、大熊の旦那達を煩わせるわけには・・・」
「オレはいいのか。」
「……あがつ」

いきなりルーミアに首へ飛びつかれ、後ろに・・・。

「兄貴！？」

「わわわっ！」

慌てたような声と共にふわっ、と落下が止まった。

・・・心臓に悪い。

「——るううつみああアア？」

「い、いやぁ・・・」

地面とほぼ水平を保ったまま、背後のしがみついているのへ叱咤した。

・・・。。。。。

いや正直洒落にならんかった。

「お腹空いたなーって、ね？」

「・・・サチどう思うよ？」

「ルーミアさんすげえ！咄嗟に闇で支えるなんて！」

・・・ゆつくりした結果がこれだよ。

妖気だかなんだかしらないけど、あくまで人間に過ぎないオレには必死な状況というものがある。例えば木から落ちるとか。

・・・オレに慣れたのか？結構腕白な子だったか、いまいち自信がない。

「まあ、そっちは追々話しておくから、気楽にね、サチ」
「了解っす」

妖怪は必要悪ってやつだ。

トイレという存在が汚いからといって壊して回っても、結局困るの

は人間なのだ。

「いい？」

「大丈夫だよー」

そんな返事を聞いた瞬間、身体に重力に引っ張られる感覚が戻り、
「闇」をくぐる。

・・・実際これ使われたら接近には気づけないよな・・・。。

「甘いものが食べたい——今すぐによ！ってか？」

サチから相談される二日ほど前、オレは降雨によってぬかるんだ地面を嫌い、適当な大きさの岩の上で昼寝に興じていた。

「・・・！！？」

というより、しよっぱいものすらもう生きている間はまともに食べられないじゃん！」

能力が看板倒れ！

オレのありとあらゆるものを喰らう程度の能力・・・ありとあらゆる・・・程度・・・ありとあらゆるものを喰らう程度の能力？」

「能力の語尾から『程度』が離れない！なにこの呪縛！どうでもい

いけど！」

・・・。

よし落ち着いた。

「最古の塩が確認されたのが・・・確か古墳時代か」

現在の人類は・・・装身具なんかをつけていないから・・・。ああ土器は結構いろいろあったな。

「子供の頃を思い出すなあ～～行きたくもない「サマーキャンプ」でこうやって歴史を憶えさせられたっけなあ～～」

本当は行ってもいないし教えるわけ無いと思うけど、まあどうでもいい。

紀元前0年をまたいで・・・塩が作られるまで推算、最低後5300年ほどか。

「ははっ！オワタ」

「いたいたっ」

・・・まあ塩はね、それほど期待してないし。オレが海行つて作り方教えてもいいし。・・・歴史？食欲の方が大事。

大本命の砂糖は・・・伝来こそ奈良だが本格的な精製は江戸になつてから。西洋のほうでも確か11世紀。

「ちくしょう！なんて世の中だ！」

「メイー？」

手で目を覆うと、急に背に感じる岩肌がとげとげしくなった気がする。・・・なんか泣けてきた。

「メイってばー」

「カタカナで言うのとトロっばいな・・・」

ん？と、肩を揺するまま小首を傾げるルーミアに、なんでもないと手を振った。・・・なんでもないから揺するの止めてー。

ずるり、と擬音の入りそうな具合で闇を抜けて着地した。一メートルぐらいならオレでもそれなりに柔らかく落ちることができる。

背中のを抱え直して、左右に目を走らせると森の端だった。木々の合間の向こうに集落が見える。

「何食べるの？」

しゃべるルーミアの呼気が首にかかる中、空を見上げると鳥の群れが見えた。

「あれでいいんじゃない？」

「わかったー」

二ヶ月も背負い背負われた生活を送っていると、お互いに多くを言わなくても通じてくる。

オレの視界の右からにゅっと右手が伸び、何かを握り締める動作をする。

「ばーん」

むしろゴツと鈍い音がして、三羽の鳥が黒い塊にぶつかり頭部をそのまま貫かれた。最後に闇が鳥をこちらに弾き飛ばす。

「・・・」

「むふー」

「無風？」

彼女の達成感の雄叫びらしきものにやや混ぜっ返しつつ、飛んできた鳥を掴む。

「・・・やり過ぎ、なのかなあ。」

筆ってーと鳥を手渡し、返ってきた了承の声と共に火をおこす準備を始める。

そして、そこらの枝をルーミアに闇で削ってもらい、それで鳥を炙る。それだけ。

「・・・・・・」

・・・今更味に文句をつけたりしているわけではない。それに関しでは、自分で思っていたよりも順応性が高くて驚いているぐらいだ

（なにせ初めて兎を食べるとき、悩んだのが”可哀想・・・”じゃなくて”これ素手で解体するしかないのか・・・”だったからね！）

ルーミアは、必ず奇数・・・つまり二人で分ける様な数を獲る。今も、それぞれ一羽ずつ胃に収めて三羽目をオレが千切り「はい、あーん」「あー」とやつてる。いや本当最初の方はすぐ焦がして大変だった。まだ熱い所に思いつきり指突き入れたりしてさ、人間やればできるもんだな。未だにルーミアの口の中に指突っ込みすぎて噛まれたりするけど。

・・・ああ、そう、ルーミアは「オレ」をどう認識しているのだろうか、って話だった。

見た目相応に、まだまだ精神は幼い。だから、ただ元気が有り余っているだけで残虐性なんて・・・ない。

・・・オレは他人の心なんて『理解』できないから、それはあくまで可能性。

「——ルーミア」

「ん？なに、メイ？」

——オレが死んだらどうする？

わはー！と至福を表情で体现しているルーミアに、誰が何を言える。

「——愛しているよ」

「・・・私もだよ、メイ!」

——目の前のまっくろくろすけみたいな妖怪は、ルーミア。
別に、それで十分だろう。そう思わなくも、ないんだけど。

ふたりのあかいやくそく(前書き)

いのちが『死ぬ』ってなんですか？

ふたりのあかひやくそく

「あ・・・ああ・・・・・・」

ルーミアがオレの下で小さく蹲り、かすかに吐息を漏らしている。
・・・頬を赤く上気させて肢体をよじる様はいささか刺激が強すぎて、そのまま激情に支配される。

「大丈夫、痛くないから・・・」

そう言い聞かせ、彼女の”それ”から出てくる水を優しく口で啜る。幼さがまだ残る顔立ちに浮かぶ表情が、いい知れぬ色に染まっていた。

「いつ・・・あ！・・・・・・はやく・・・」

刺激が走るたびに身じろぎし——とうとう、小さく懇願を舌に乗せる。

その言葉で自身のモノを確認し、穴に一気に突き入れた。

「っ！！！！」

指に何かが触れると同時にそれを素早く掴んで抜き出す、歪な形状・
・・・殺意の塊。

わかりきったことなのでそれをすぐ離し、再び傷口に口をつける。
今度は鎮痛だけではなく治癒を目的としている。

苦痛に歪んだ彼女の顔を伝う脂汗と、目じりに溜ったその涙と。

「め・・めーにい・・・」
「よく頑張った。もう大丈夫だ」

大将は強い。

呼び名こそその風貌からの印象で決めたが、実際名に違わぬ大妖怪だ。能力はないのだが、種族としての地力と積み重なる年月からくる妖気がそれを補ってなお有り余る。オレが能力の使用無しで唯一まだ勝てない・・・てか勝てる気がしない。毛皮とか人間に不利過ぎるだろ、眉間を本気で殴ってオレの手首の方が痛んだんだぜ？

「がががぼっ！！！！」

そういや、そのとき「この感触絶対骨折れたなー」とか思ってたのに二日もしたら治っていたな。軽い捻挫だったのかしらん。

左手の親指と人差し指の腹を擦り合わせながらそんなことを考え、無造作に右手を沈める。

サラリーマンが鬱になるって気持ちがあった気がする。このまま希望の無い未来が死ぬまで続くとかわかってしまったら、人間は激しくやる気を失うんですね。

「ああ・・・せめてもう一度、甘い物食べたい・・・・・・・・」
「がぼぼぼっ！・・・・・・・・」

ぐいぐいと沈めていた右手から、ルーミアの抵抗が感じられなくな
った。

・・・やっちゃった？と掴んでいた頭を持ち上げる。

「じゃーん！」

盛大に川の水を撒き散らしながら、右手に高々と掲げた魚を見せび
らかしてきた。

「魚は内臓系がいまいちなあ・・・生臭いし。動物なら多少生でも
食べるけど、魚はなあ・・・」

「えー、食べようよー美味しいよー。」

・・・って、なに人を殺しかけてるの！！」

最近、この手の話題変換に引きずられなくなってきた。

「ルーミアが体を洗いたがらないからだっての。女の子は身だしな
みに気をつけなさい」

「女の子ってなんだー！」

わー、はー！と振るわれる裏拳を華麗に側頭部で受け止め、痛みで
視界をうつすらにじませながら薪の傍へ放り投げた。

「寒い寒いーって熱っ！」

欲求に身を任せて火に近づき過ぎたらしく、「寒いー熱いー」と左

手を差し出してきた。

「体は一つしかないんだから、大事にきなさいな」

「メイがいれば大丈夫でしょ？」

差し出された中指を舐め、火傷を治療する。甘い甘い。

最近この味が、ルーミアからにじみ出る妖気だとわかった。クロナギの鼻面もそれなりだったが、お互いの気持ちを尊重しようということとそれ以来舐めていない。・・・今度は大将の右手かな。ハチミツの味がしたらビンゴだ。

「オレだって近いうち死ぬさ。その後、の・・・こと」

「・・・？メイ、死ぬの？」

髪からまだ雫を滴らせながら、真顔でルーミアは尋ねた。

「私が死なせないよ？」

・・・。。。

・・・。。。

「そう。ありがとうね」

「うんー！」

その後は、お互いに乾くまで他愛もなく話し続けた。

「ルーミアさ、髪にリボン飾ったら？ いや、思ったただけだけど
いや思ったただけなんだけど」

「・・・リボンってなに？」

「なんかこう、赤い色とかしてる布切れ。」

「・・・まあどっちにしろ、人間の発明を待たなくちゃいけないけど
ね」

「・・・そーなのかー」

「・・・人間のことはどう思ってる？」

「人間って、あの森の外に住んでるやつ？」

「そうそうそれ。オレみたいなの」

「よくわからないけど、メイなら好きかな」

「・・・そかそか」

「——友達になれる？」

「・・・ルーミアが、怒ったりしなければきつとなれるって」

「クロナギたちは妖怪だけだと思ってるけど・・・オレは人間だからわかる。そのうちどんどん能力を持った人間が生まれてくるよ
ー。そういう子を探すのも楽しいかもね」

「いつぐらい？」

「——まあ少なくとも、百や二百の年月じゃきかないぐらいかな
「えー？人間ってそんなに長生きなの？」」

「いいや、死ぬよ。どんどん代替わりして、どんどん進歩していく
からさ。ルーミアみたいな妖怪だけが見届けられる」

「ふーん・・・あれ？でもメイは、人間、あれ？」

「はっはっは」

そうやってしばらくお喋りに興じていれば、服が乾くぐらいあつという間だ。

「遊んでくるねー!」

「ご飯までには帰ってくるのよー」

はい、と元気よく返事をしてルーミアは自分の影に沈んだ。闇と影って区別しないの?とか思いながら、ルーミアが立っていた地面を見つめる。

・・・ネタを言っても反応がないって寂しい時代だなおい。

そのあと川の傍なんだから、と念入りに水をかけ火を消した。毎回薪の始末には気を使います。山に引火とかしたら洒落にならん。

「木を使う薪に気を使うとはこれいかに。

・・・はあー」

あくびを一つ漏らして立ち上がる。ぐきりと首を鳴らしながら、下駄を踏みしめ森へ歩を向けた。

「今日はどこで寝ようかなー。それとも晩ご飯を作ってなきやいけないのかなー。

・・・むむ?」

木の根につまづいたとき、近くに人間の息吹を感じた。

人間に飢えているオレは、そんな遠くなければ同胞の存在ぐらいは

感知できるぞー！

「どもねー」

「——メイさん！」

茶目っ気出して背後から声をかけると、結構驚かれた。わかる、オレも経験あるよそれ。心臓に悪いよね。
・・・今度から普通に話しかけるか。

「はい、森の奥とかの木の実」

「わあ、ありがとうございます！」

森の入り口つつーのは妖怪が一番よく出没する。なんでって、人間が出るからさ。言わせんなよ恥ずかしい。

表情が気分に合わせてよくころころと変わるのが特徴の、目の前の少年。森の中で迷っていたところを助けたら、恩人ということで集落の中を案内してくれた。それ以来、時々見かけたら話しかけたりしている。

そんなとき大きい人たちは、あんまり歓迎してくれない雰囲気だったけど、さ。

「ところで、メイさんはまだ森の中で暮らしているんですか？」

「ん？ああ、一応ね」

集落の人数の増減を聞いたりとかしていたら、また同じ質問をされ

た。

そら人間が妖怪のはびこる森で生きていくのは大変だろうから、心配されるのもわかるし純粹に嬉しいさ。まさか妖怪とよろしくやっているとは夢にも思ってたないだろうけど。

「今度、魅惑の存在”砂糖”について話してやろう！」

「おもしろそうですね、ぜひ！」

——人と話していると、眼球の奥のほうが痛む気がする。ルーミアはなんともないのに人間だと、だ。

前のオレなら「はいはい厨二病厨二病」とほったらかすんだが（それでひびの入った骨が完治してた。後日何かの機会で全身検査を受けたら医者に引かれた）、この世界だとなにが致命的な事に繋がるかわからない。

「——そろそろ帰れ。森は危ないって言ってるだろう？送ってやるからさ」

「えー……」

「……わかりました……」

会話をそこそこにして打ち切り、ほらほらと促して歩き出す。

「……んーむ。」

前を歩く姿は少年なんだが、実際はもつといってるんだろっな。栄養事情は生体にもろ出るんだね、身長とか。

ちよつと「盲点」のずれた話ではあるけどねー。

「——めーにい……………」

涙でぐしゃぐしゃな彼女を抱きしめて、落ち着くまでそうしていた。

「怖い事は忘れる。楽しい事だけ思い出すんだ」

「ふ、ふざけ、ふざけて兎、追っかけてたら…………い、いきなり…………」

「もういい、大丈夫だから…………」

周囲の状況から大体分かる。あの子を送ったときにやけに大人が少ないと思ったら、狩りに出ていたのか。

（オレはこれに報復すべきなのか？妖怪でもないのに？私怨こそ人間の十八番なんじゃないのか？恨んだのなら人を傷つけていいのか？オレに何をする資格があるというのか？そもそもオレは何をしたのか？何をすべきなのか？何かが出来るというのか？）

心の一部が冷たく囁いてくる。

…………やめろ、今はルーミアだ。

（前々から考えてた事だ。実際には考えていない。考えていないだけでどこかで思っていた。実行するいい機会であり口実だ。すぐそこにあるだろう。実際には”そこ”ではない。問題ではない。問題では——）

そうだ。

まずは話さなくては。

「今すぐ人間共を食い殺すべきだ！」

山の一端、崖っぷちのある程度開けた場所。ルーミアを後ろへ背負いなおし、今オレは妖怪たちと対峙している。この山の妖怪のほぼ全て、とだ。

あらましを淡々と説明し終わると、叫ばれた意見に同調し他の声も次々とあがる。その逐一に背中からの反応があった。怯えている・・・わけじゃあないのか。

「待つてくれ、まだ種族間で考えるべき問題じゃないって！」

「うるせえ！テメエよくそんな口がきけたな！？」

「餓鬼は黙ってるや！」

「とんだ薄情者だな？よくまあクロナギも・・・」

これだ。——すぐこれだ。

「っ……。……？」

少し頭に血がのぼり過ぎていたらしく、いつの間にか場が静まり返っていた、が……？

なるほど、大將がいつの間にか全員を睨み回していた。

崖を右手に、オレと対峙している妖怪勢。……ルーミアを背負いなおし、左に立つ大將を横目に見る。

そのねめつけるような視線がオレにも回ってくるが、すぐに逸らした。……昔から、怒った後に誰かと視線を合わせるのが苦手なんだ。

「………」

大將が心持ち纏った空気を弛緩させると、お役目交代とばかりにクロナギが進み出た。

両営から等間隔の位置で、いつかと同じような……” なにか ”を込めた目がオレに突き刺さる。

「………」
命^{メイ}」

雰囲気を一手に担う、この風格。山の頂点に君臨する黒狼。

一言発しただけで場が一層静まり返る。呼吸どころかそれこそ針を落としても聞こえそうな静寂の中……。……なんとなく右足で地

面を踏み躪って、その調和を崩した。

「我等は妖怪だ。人間の恐怖の具現であり、だからこそ人を襲い食らうのだ。その上で、お前の気持ちはわからなくもない。・・・なればこそ問おう。なぜ止める？」

「・・・」

こんなとき、なぜか思い出した。

・・・赤い赤い林檎、林檎。

目で愛でた。指で撫ぜた。鼻腔で愛し、慈しんだ。さて飢えを満たさん、するとだ。

蛆が湧いてきた。

こんなとき・・・いやこんなときだからか？
現^{うつ}だったか・・・夢だったか。

オレはただ、愛そうとしただけなのに。

「・・・ただなんてことの無い理由。
オレが人間だから」

「———そうか」

オレの単純明快過ぎ稚児の駄々みたいな回答を聞いて、緩慢なほど

の速度で目を閉じクロナギは頷いた。

「いいや、違う。いい加減に認めたらどうだ」

そこへ大将がいきなり割って入ってきた。

——随分と・・・珍しい。

・・・大将は、相手の話が終わるまでは決して微動だにしない。

オレと、ルーミアと、クロナギと、大将の四人。その思いは皆、他の妖怪たちと一線を画しているはずなのに・・・。

この場で一番、銘々が違う理念を抱えていた。

「そうやっていつまで目を背けているつもりなんだ？命。

その体と、その能力。抑えもしていない妖気。俺達の中に交じり、俺たちの中で暮らしていて、よくまあ自分は人間だと言え・・・」

「そこまでだ。・・・それ以上は、いい」

少しだけ。

初めて、クロナギが疲れているように・・・見えた。

まあ多分疲れているのはオレの方なんだろう。そのうえで屹立しているオレは、一種この場に神聖さすら感じてきた。

「そういっただろうとは思っていたよ、命。

・・・おそらくは、私すらも・・・」

「もういいじゃないですか、旦那方」

その空間に走った——雑音。

「所詮は新参者一人に同胞食いじゃあないですか。なにを話し合う必要があるんです？」

三匹の野猿のうちの二匹が進み出た。

そう話す雑音を聞いて、ルーミアが背中中で強張る。

「あつしらは、それに仰山仲間を殺されたんですよ？」

「旦那方にはわかりやしないかもしれませんがね」

強く強く、強張って――

「そりゃあたしらは妖怪ですけどね、そのあたしから見ても、ね」

エテ公がそう言うのと背中から重みが消えるのと、果たしてどちらが先だったのだろうか。

「どう考えたってそりゃ、バケモ」

とうとう始終雑音しか発さなかった頭が、グシャッ！と視界ぎりぎりまで転がって行って、

「るっおおおおがああああ！！！！」

大將が横っざまから人の首根っこを掴んで、崖へと全力で投げつけた。

最後に見えたのが、オレを投げ闇に吹き飛ばされる大將と、ぎりぎりで身を躲すクロナギ、両手を残った猿二頭に向けるルーミア。すぐに見えなくなった。

「えっ？」

展開が早過ぎる。早過ぎた。

二、三十メートルはある高さから叩きつけられ、衝撃で指一本動か
せない。

オレに残されていたのは、崖に切り取られたような空に、じわつと
広がりだしてきた痛みだけだった。

・・・いや、もう一つだけ。

何かの叫び声と共に、見えない崖の上からオレの視界へと赤いもの
が、

「ルーミア、ルーミアアアア！！」

・・・！！

突如心の空隙を埋める、一つ概念。

・・・・・・・・・あああああああああああ
あ！！

「ふざけんな！こんなところで、こんな場所で！誰が死ぬか阿呆が！
何も無い、何も満たされない！なんなんだよもうオオオツ！！」

現実には物語のように、登場人物が全員納得してから進みはせず認識できない者はおいて行かれるだけ。

猛烈な痛みとルーミアとクロナギと宙を舞った瞬間とルーミアと死ぬ恐怖と大将とルーミアとオレとルーミア。

そして、岩場の感触と空の青さと左右のせり出るような断崖と自分の鼓動と上から聞こえる怒声。

「テメーで勝手に死んでろゴミが！反吐が出んだよ、そのツラも声も何もかも！

死んでたまるか！お前ら全員殺してやる、ぶっ殺してやるからな！
」

血のようなものが込み上げて来たが無理矢理嚥下し、無意味に叫び続けた。

激痛に全身で浸っているはずなのに、それだけできた。

ゆっくり、ゆっくりと、崖の上から怒号が止んでいった。

・・・おお、ましになってきた。人間痛みが麻痺するって本当だったんだ。熊が谷底へ落とした岩を鬼熊石と言つらしい、と益体のないことを考える程度には回復してきた。

「い、ぎぎ・・・・・・・・」

大丈夫、エサなら朝に食べた。崖を無理矢理よじ登る事も、まあ可能だ。

ボロ雑巾と見間違えるレベルの体をさらに酷使し、ようやく上に手が届いた。一旦深呼吸……。

・・・なんでオレ、こんなに頑張っているんだろう？

登る前から強烈な死臭が鼻について仕方がないのにも関わらず。

「がぁぁ！」

最後は転がり込むように上がる。あー・・・今ので左肩の筋、切れたっばい。

そのまま地面にうずくまり、選り好みせずに体力の回復に専念する。

「・・・・・・・・」

のろのろと立ち上がると、立っていたのはルーミアだけだった。その足元には脳天に闇が突き刺さったクロナギ。流れ出る赤い液体に、妙に現実感を覚える。

「——ルーミアッ！！」

名前を呼んだ。

ルーミアが振り向いた瞬間、その目に写り込んだ恐怖がオレ胸ごと心臓を抉られた。

「・・・・・・・・っ！」

一気に上体が軽くなった気がして、よろけそうになり。ただどやけに全てが鮮明に見えて、だからルーミアの目じりに溜まった涙も見えた。

「・・・・・・・・」

右手を伸ばして・・・伸ばした。なにをどうするというわけでもなかったけれど。強いて言うなら・・・闇に掻き消えたルーミアを求めたかった。

「ふうむ・・・」

胸骨を中心に綺麗に挟り取られた輪郭をなぞりながら、知った風に呟いてみた。殆ど意地だけで立ち、指を円運動させるさせる。おお、なんか治ってくるぞ。

「・・・・・・・・」

心臓もないし両の肺もない、それどころか脊椎すらない。例え完全に貫通した穴が徐々に徐々に狭まって来ているとして、それまでの生存が不可能だ。あれ、なんで喋れるんだ？

「本当、なんで生きてるんだろうっねー」

ないはずの心臓が痛い。それが鼓動を刻む度に、鈍痛が走る。

「・・・・・・・・」

そうこう考えているうちに完治してしまった。

——それなのに。

それなのに、この痛みだけが消えてくれない。

「・・・・・・・・」

認めなきゃ、状況を。戦わなきゃ、現実と」

どーも。気がついたら新しい世界に生き、便宜上命と自分を命名した一介の人間です。

・・・なんて、そう信じていたのはオレだけで、人間だったときなんてなかったようだ。

「そういえばそうだ。

髪伸びないつめも生えない」

そこで一旦言葉を止め、右手の人差し指を口に咥える。
噛み千切った。

「指は生える」

口内の肉をぶつ、と吐き出し二の句を継げた。

今は血の臭いだけがあるこの場所に、オレの肉片が、落ちた踏んだ潰れた。

「おれは人間をやめるぞ！ ジョジョーッ！！」
—— やめていた、だけど。

ふたりのあかいはくそく（後書き）

えーまあ、冒頭でシリアス以外を感じた人は全員正座、みたいな感じの第9話「ふたりのあかいはくそく。」でした。

今更、な話なんですが・・・。

この主人公の能力、慧音のお株奪ってね？一応やれることは全然違うつもりですが。

舌はその味をいくつか失う（前書き）

必要とするってなんですか？

舌はその味をいくつか失う

「昨日から獲物が全然いなくなっちまってんだよな」

「俺・・・山で餓鬼射っちまって・・・あれは山の神の使いだったんだ！」

「それよりおい、見てみる！ 山の形が変わっちまってるぞ!？」

「ああ、昨日からだよ。それでこいつが、神を怒らせちまったってうるさいんだって」

「だが実際神の怒りなんじゃないか？ 獣共までいなくなるなんて異常だろ」

「だが妖怪もぶつとり見なくなっただぞ？ どういうことなんだ？」

「それで、どうじゃった？ 首尾は」

「ミシヤグジ様のご加護で、山の奥地まで行けましたが・・・。その必要もありませんでした。一部では死臭が立ち込めており、山全体から生き物の気配が感じられません。」

「どうやら妖怪がなんらかの理由で全滅したようです、長老」

「ふむ・・・それは蛇神様の行いではないのじゃな？」

「ええ、違うようです。」

——しかし長老、いなくなったのならそれでいいのではないですか？ 幸い、動物達は一時的に近隣に逃げただけのようです。

狩りの範囲を広げれば、戻る間程度はしのげるでしょう」

「そももいかんじやろ。妖怪たちが滅んだのなら、その原因があるはず。それがこの村に牙を剥かないとも限らんしの。」

『ちかえしのおおかみ』に頼り切りもいかん」

「結局、なんだったんだろうな」

「まあこれで、狩りのときに妖怪を心配する必要がなくなっただけからいいだろ」

「森の外れでヨタカが鹿の群れを見たそうだ」

「そういえば、今年の神事は誰なんだ？」

「ニギだ。あいつもでかくなっただからな、長老がそろそろやらせてみようということらしい」

「神事といえばよ、蛙つてのは食ったらうまいのかね？」

「それよりも兎が食いたいよ」

「くーべーつーするモノなど 無い・・・」

左手の親指と人差し指の腹を擦り合わせながら、眼下に一眸する自身の成果。

「・・・・・・・・」

大将も死んだ。サチも死んだ。クロナギも死んだ。あの場になかったやつも残った死体も、全部オレが×××××。山も×××××。形を変えた。

「×××××つてなんだよ。
食べたんだろうが」

大きく張り出た古木の枝、その一本に寝そべりながら、山腹を這い回る蟻を無頓着に見つめる。・・・いや、人間なんだけどね。

見たとこ五人、しかも武器の類を持っていない。完全非武装。もうね、妖怪を舐めてんのかとね。全滅させたのオレだけだよ。いや、ルーミアか？ 判断の難しいところだな。

まあ多分神の加護でもあるんだろうね、それこそミシャグジ様か？ オレなら見えるかとも思ったが、特に何も見えない。加護つてのがまじでエネルギーみたいなものなのか、それとも着いて来てるんだけど見えないだけか。食べたばかりとはいえ病み上がりだし、集中力も欠如してるよね。最初からだけど。

「・・・最初から、ね」

それこそ、最初からだった。

九尾さんが、この世界でのオレの最初の食事だったらしい。能力があるし、なんとなく実感もある。着物の色はおまけ程度に考えておくとして、「最初」という影響は今のところは見られない。次が鎖々翼か。

八咫烏さん。言っちゃあなんだけど、翼が生えてこなくて胸を撫で下ろしたりもしたのだよこれが。正直出落ちという印象を拭えないんだが果たして。案外強かったのかもわからないけどさ。

前はこの二人の妖気だけでも、今は山の妖怪勢全員の妖気がオレの

中に。どうなんでしょうね、妖気なんて使い方もわからんものこんなにあっても少々宝の持ち腐れなんだけど。

「・・・・・・・・・・」

暗く暗く青い世界、やや急勾配の坂のイメージが浮かんだ。

とにかく真っ暗で、だから坂が見えているという異常が際立っている。だから坂の上の方はなにも見えないけれど、坂の終わりは水面だった。黒い水が広く広く・・・・・在った。

その中から、ササバが死に物狂いで這い出そうともがいていた。

・・・・・・・・・・とりあえず、丁重に水中へお帰り願った。

そんな馬鹿な妄想に浸っていると、下の彼らのほうで結論が出たらしい。・・・・その小枝にオレの手は届くか？・・・・ああ、届かない。

妖怪がどうあろうと、彼らは日々を生き抜いて子をなすのだろう。連綿と続く生の家系図・・・・・・命の繁栄。たくましいと思うし、好ましくも思う。・・・・人間から弾かれたところで依然揺るがない価値観に少しだけ、安心した。

帰途に着く彼らを見送りながら、妥協して手が届く範囲・・・・自分が寝そべる枝の細いやつを一本折る。

勝手に自滅して、何も知らぬ人間は繁栄する。妖怪なんて、そんなものだ。よき隣人であろうとすれば風化し忘れ去られるだけだけど、赤子のように世界に自己をを叫べば人間に憎悪される。・・・・我な

がらひどい言い草だ。

「——人類の敵、『天敵』」

天敵、ね。

鏃^{やじり}にツバを塗って怪物の眉間を貫いた英雄譚とか酒呑童子を退治した英雄譚とか、人間は常に歩き続けている。どうなんだろうか、ここでも人間は克服するんだろうかね？・・・全てを。

「克服・・・つまりは弱みを乗り越えること。いいねいいね、実際すごいことだね。その行動動機の大半が悪意からつてのもすごいよね」

今この瞬間こそ満ち満ちているが、怒りつてのはかなりのエネルギーを雀^{すずめ}り取っていくのだ。

誰かを怒る、憎むって実際不毛だよ。釣り合わないんだもの。でもそのただ漏れる情熱でもって進歩してきたんだよね。

「いつかはあの病気も不治の病じゃなくなるのかな？」

飢えという病。オレの半分。

手当てが遅れれば死ぬしその間が物凄く苦痛で、個人的にはかなりの大病だと思うんだけどね・・・この能力が”在る”前から。

唯一の緩和剤である、美味しい食事を作るにはそれなりの環境が必要だとは思っただけど、いまやこの山全体がキッチンみたいな有様だ。

いや、キッチンというよりはむしろ——^{テーブル}食卓。

オレはディナーで粗相をしでかしたあの子を、叱らなければいけないのか？

「・・・ナプキンは取られた、か」

テーブルに、完璧なまでに左右対称に置かれたディナーセット。席に着いた者は、左のナプキンを取るか右のナプキンを取るか。

——正解は『最初にとった者に従う』。誰かが最初に右のナプキンを取ったら全員が「右」を取らざるを得ない。もし左なら全員が左側のナプキンだ。そうせざるを得ない。

ルーミアが『殺戮』を取ったから、オレは『全滅』と続いた。・・・だからオレは悪くないって？ 言い訳がましい。

・・・大体、山の形を変えたのは。

「変えたのは、いつかルーミアに聞かれたときに誤魔化す為。全部丸ごと喰らって、究極的な証拠隠滅だ」

・・・。。。

だったらそれこそ、ルーミアを追っかけなければならぬのに。

「——大事なことが控えてる朝、なんとなく布団から出たくない気持ち。

あれに似てる」

頭では起きなきゃいけないとわかっているのに、心がすごくだるい。若干寝たりないような気もして、ああそういえば眠い気のようなもする。

・・・大事なことって、大抵が嫌なこと。

あー・・・と幹にもたれて一眠り決め込もうとするけど、今までのルーミアとの寝心地に慣れすぎていたようだ。

・・・どうでもいい。

「時間は腐るほどあるんだから」

妖怪になった気分ですう呟いた。

まだまだ高みで頑張っているお日様に左手をかざす。血管も欠陥も、これといって見えはしない。
とりあえずどうにでもなれ、って気分だ。——流れに身を任せる。
・・・という、『流れ』。

眠る意義を見失って、食べる意味をも見失ったまま夜を迎えてしまった。ついでにルーミアも見失ってる。・・・うまくないって？
いいんだよそんなの。

心臓が一つ鼓動を打つ度に体温が一度上昇する、という悪夢を現在進行形で刻まれている真つ最中だったりするから、涼を求めてふも

とまで山を降りてきてみた。妖精でもいそうな感じのするかなり大きい湖だ。霧がかかったりかからなかったりしているのだが、今日は向こう岸まで見通せるほど視界は良好。これも日ごろの行いの賜物だよ、世界に皮肉られたからって可能性もなしにもあらずだけどさ。

自分の影と夜の闇の輪郭が溶けあい、風のそよと吹く音もない、深淵なる闇に形作られる世界。邪魔しちや悪いと隅っこの木の根元に背を預けて静かにそれを堪能する事にしている。

なにせ五日間はこうしていたから。「あれ？ あれでもう太陽五回目のお休みじゃね？」って状況だ。

律儀に持っていた小枝を、水面に投げてみる。軽い波紋を立ててすぐに見えなくなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

—— 思考を深く深く沈めていく。黒くて青い、矛盾している水面下へ沈んでいく。

心象風景ならば純に透き通っているのはオレらしくないなとか思うのだけれど、暗くて何も見えないからやっぱりオレの心象らしかった。

無自覚な悪こそが真の邪悪というのならば……。

オレはどうなのか。邪か正か、闇か光か。下……『後ろ』に控える飢えを持っていて。

……テーブルにまず”着く”資格があるかどうかもあやふやだ。

その食卓は社会の縮図・・・ならば、なれば人間から”弾かれた”オレは、どこに立つのだろう。

着ける者、着く資格のないもの。選ばれた者、”着けない”と選ばれた者。

・・・選択肢から除外されたモノ。

「どうでもいいか」

———すぐに底に当たった。

人間、間違う事は避けられないけど。

「なーに、なんの問題もない。

人間やめたんだから」

・・・あるとき、ねえ。

———一時的に物凄い風通しが良くなってなのに辺りに血の一滴も出ない超常現象今更かな？「精神攻撃だったのか？」まあたしかにオレには効果的な手ではあるあまりに残滓がなくて思わずそう錯覚したくなったのだ胸の中で鼓動を打つ黒い黒い心臓が——

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

元人間だから、わかる。正直なところ。

人間が闇を恐れるのは理由無き悪意であって、決して妖怪ではないのだ。

「『死なせないよ』・・・か。あの頑張り屋さんめ」

「ほっ」

妖気ってやつを鬼火みたく固めて、

「よっ」

喰う。一種のろ過ですね、わかりません。

固めて能力で喰べてまた固めて喰べて。五日間も口をずっと動かして続けていれば、さすがにそれぐらいはできるようになるさ。あっても困るそれだけは、無駄にしないように。

無駄に無駄を足して無駄をかけて、さらに無駄で自乗したような無駄なこととしても、マイナスに浸っているオレにはあんまり意味がなかった。自分でいっている意味もよくわからなかった。

・・・・・・・・。。。

「くち口ひらを開きけなばおと聞き慣れた音はな無く　あか赤い欠片かけらがのど喉をこ焦がすわ」

オレが歌わないと曲も聞けないのか。

・・・・・・・・自分の声は、とても不愉快で。

五日間もずっと”口”を動かして続けたから、ルーミアのから出る血液がなにをもち狂ったのか舌を伝う始末。

「融^とけてた 闇^{やみ}が形状^{かたち}取り戻^{もど}す 私は^{わたし}もう気^き付^づけない」

「三本足・・・」

美しい月の光が映りこむ青の湖畔。
その白を避けるかの様に木の幹にもたれている彼は、思案顔を隠そうともせずに一人ごちた。

「月夜見・・・御使い・・・なあ・・・・・・むむむ！
ひらめいちった」

そう言つて、

「”全て”を喰い尽くそう」

彼^かの『人間』は、霞む世界に別れを告げた。

舌はその味をいくつか失う（後書き）

ナプキン云々は「スティール・ボール・ラン」からです。

本当は天狗に山を攻めてもらおうとか思っていたんですが、そんな昔にいたるわけないだろうと変更しました。

しかし調べたところ天狗って室町初期に出てきたんですね、600年ほど前。・・・射命丸は1000歳。

とりあえず天狗は史実よりは前に出ます。

主人公のぐちゃぐちゃな心象を、と念頭において書いていたらいつもと同じ文章です。本当にありがとうございました。
とりあえずいつもより意味不明さ二割り増し。

B G M ”もうなにもきこえない” b y S Y N C ・ A R T ・ S

設定？（前書き）

あれだ、よくある人物一覧表。
読んでも特に幸せにはなれない。

設定？

・サチ

日本リス、だったはず。正直よく覚えてない。なにせ最初は兎の予定で……。大型獣ばかりでは絵的にあれだな、と小説を書いている思ったので急遽登場させました。

本当に怖いって、赤ちゃんのような存在をいうのかもしれない。弱さは怖さ。

・黒風（クロナギ）

旦那は最低七人もいる肝っ玉母さん。尾の毛並みがキュート。意外と集落では一番の知名度がある。もちろん食い殺した的な意味で。ふらふらとふもとにでも出歩くのかもしれない。それを他の妖怪はやらないだけかもしれない。

案外言葉の通じる人間を捜し求めているのかもね。

能力 『空を駆ける程度の能力』

よくあるよね、その本人でないとそこまで強くはないだろうって能力。そう、彼女です。

考えたら霊夢と似てなくもないと気付いたが些細な問題です。これは空中で、自分だけが踏みしめられる足場のようなものを「駆ける」能力。停止は不可。誰かを足場にさせるのも不可。今この一

瞬を駆ける、そんな極致。

名前はなんか色を入れたいな、というのと丁度目に「ヴァルブルギスの後悔」が飛び込んできたので黒風。

もちろん名前の後に黒狼と決まった。黒い犬にシロとはつけないでしょう。

最初はただの助言役だったのにいつの間にか頂点に君臨していた。オリジナル妖怪も元々は彼女だけの予定だった。

「いつまでうずくまっているのだ？ 食い殺されたいのか？」

・鎖々翼（ササバ）

誰か忘れてると思ってたらこの結果だよ！

登場から退場までを実にスピーディーにやってくれました。彼自身より能力の方が絶対多く出てるのかな、すまないとは思ってるんだ。でも別に今後登場する予定もないってかそもそも生き返る予定もない。こればかりはしょうがないとも思ったりする。

モデルは——実は八咫鳥なんです。

能力 『盲点を操る程度の能力』

初めて盲点というやつを知ったときはちょっぴり感動したものです。だからどうというわけでもないんですが。

よく考えたらこれもサニーミルクと被ってる。自重は、しない——ッ——とまあ冗談は置いておいて真面目にいくと、彼女が光を屈折させ虚像を見せるのに対し、これは意識の方に働きかけます。

そして主人公はさらに曲解して異なる発展をさせています。一応性質も違つて、鎖々翼は盲点の方を引っ張つてきますが主人公の方は自分が盲点みたいなものになる、という感じ。要は姿を隠すつて認識でいいと思います。

・大将（たいしょう）

熊の妖怪。なんかそれに尽きる気がする。

ほとんど人前に出ない妖怪。それでいて実力は本物だ。実はこの時代の妖怪はまだまだ人間にも退治できなくもない存在。彼は自身が山を降りないことで若い妖怪が真似しないようにしているのかもしれない。雑種、もとい雑食。

抑止力の権化、として恐怖を集めていた。ダンジョンの奥にいるからラスボスなのです。

ネーミングは大将大将呼ばせてたらイメージがそう固まってしまった。今更名前とか……みたいな心境になってます。

熊つて以外と走ると速いんだよーと言われ、へーそうなのかーじゃあ出するか、みたいな流れで登場。こうして書き表すと碌な理由ねーな……。

能力がないのは時代。能力を持つてるほうが貴重なのだ。幻想郷成立後に登場してれば時間系の能力にしていたかも。

「食う食われる、そんなことを一々考えるのは人間だからだ。妖怪は、生きるか死ぬかだ」

・人里の少年

これにルビ振つてもしょうがねーよ！

女にしていたら性別偏るじゃねーか！ 唯でさえ後半ほぼ女性なんだから！ といまいちわけのわからん理由で男に決めた。でも男にした途端描写が少ない少ない。なにが悲しくて野郎の心解説しなきゃならないんだよ、という私はもう駄目かもわからね。

「貴方は……神の御遣いなのでしょう？」

・村の皆さん

山の惨状調査隊、話し込む数人、その他。

この時代は個人という線引きがあまりないらしいです。わからないのに事実在即さないのも好きではないので突っ込んだ書き方はしません。十分理解したのなら崩して書きますが。

ミシャグジ信仰は古代の統括的な「神」への信仰そのものでもあったみたいですね。現代では「ミシャグジ」という名が示す物が曖昧で多岐にわたるため、そのような見解がされてるとか。一世代昔は「ファミコン」がゲームのことを言ったような感じでしょうか。

「妖怪を殺すことの何がおかしいんだ？」

・長老（ちようろう）

ちよ、人間勢でこの人だけルビかよ！

あくまで権力のある地位、というわけではなく村に意見するリーダー役、といった感じ。ひげ長い、白い。

人間の意地つてものをしつかりと持った人格者。そうだよこいつた人を書きたいんだよ。

老体に鞭打って妖怪と討ち死にしたとか、そんな最期が似合う……と今決めた。大出世だ、すごい。

「悔いは……お前の行く先を、見届けられないことじゃな……」

・ルーミア

東方二次小説だからとりあえず一人は出そうや、でもこんな昔から出てるやついたか？ だったら脚色という名の曲解しちまえ！ などによって彼女が一番の年齢詐欺となりました。とりあえず昔の自分にグッジョブと言いたい。

実際能力から考えたらこのぐらい昔からでもおかしくはないと思うんですがね。いまいち腑に落ちないのは一面ボスという原作のポジションか？

書いていて最も愛着が湧いた。

能力 『闇を操る程度の能力』

その名の通り固めて突き刺したり防御したり。本人がいまいち闇と影の区別がつかないので能力も曖昧。「黒」と言い換えてもいいかもしれない。

げんさく？ だいじょうぶ、おぼえてるおぼえてる。

「——わはー！」

・命（メイ）

一応平成の世に生きていたらしい、とは本人の弁。

詳しくはあれだが家族がいたらしい。心配はしないのだろうか。

人間の強さを表現したかったキャラ。よくある記憶喪失＋見知らぬ異世界にそこまで動揺しない人間、だが普通に泣いて笑って。

普通の人間『も』強い。

能力 『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』

意外と原作ではありとあらゆる、という能力がフランしかいなかった。せっかくなのでその意味を重くする予定です。

完全に思いつき能力。しかし話が広がる広がる、気がついたら小説まで書いていた。真の主役は彼ではなく能力自身なのかもしれない。

当初まったく名前が思いつかず、名無しで通そうかとも思ったほどだった。結局真面目にグルメから取ったのだが、以外とシリアスに

も対応できる名前。

しかしトトロしか浮かばない名前でもある。シリアスな場面でそれを思い出したときにはもう駄目だ。ポニョ、メイ、好きー！

「だまれ ぜろといちの しゅっぐおうたいがあ」

設定？（後書き）

とりあえず話が一段落することに設定紹介は入れていく予定です。

呻く彼女は矛盾に。(前書き)

いきているってなんですか？

呻く彼女は矛盾に。

前の世界でメイは「人の悪意」の能力を持っていた。実際その手のことに関しちやあながち間違いでもない。

それで・・・そうだな、まあ確実にアイツに恐怖して、逆に追いつめるだろう。

核兵器は大国に対する恐怖から生まれた自衛力云々理論で、やられる前にやってしまえというのが弱者の数少ない手——そうそう、そいつだってきつと能力があつたんだ、それでメイはここまで”弾かれた”。そして悪意の能力が、人類にとっての最悪である能力にとって代わった、と。

もつとうまい説明を思いつくまでは、そういうことにしておくことにした。・・・忘れなければ。

曖昧なままじゃなんか怖いのだ。恐怖が「曖昧」なままで、それゆえどうしたらいいのかが判別できない。

虫が怖いのなら潰せばいい、その残り滓が汚くなるのなら拭けばいい。人が怖いのなら潰せばいい、やっぱりその後汚いから拭けばいい。メイは食べるがね。

今でもよく覚えてる。普遍的なこと以外思い出せないんじゃないの？ 家族のことを「覚えていないと」普遍的じゃないだろう。

群像に対しての「個人」が異質なのだ。異質もなにも全てを包括してこそ「雑踏」じゃないの？ 「お前」だれだよ。

——悪意が、「受け皿」を求めた。

「受け皿」も、悪意が具合よかった。

・・・恐怖の、具現。

そんなことをとめどなく考えながら、必死に自分の内側だけに意識を集中させようとしていた。

・・・とりあえず、なにが起こったんですか？ 誰か三行で説明して・・・くれなくても別にいいですよやっぱり。そんな簡潔にまとめられるとそれはそれでなんか癪だ。

まず確認。いつもの着物着てて、下駄履いて、別に足を引きずるような負傷もない。空腹と睡眠不足は持ち越し。上を見て・・・青い。・・・なんか背中に変な汗かいてきた。

「やっぱりまだ混乱しているんだな。

あー、ここに来たことと能力の発現の理由は今考えたから・・・そうだな、オレの知識とこの世界の歴史は符合していくのかを考えてみ痛っ！」

遠慮や加減を知らぬ、といった勢いで背後から何かがぶつかってきた。突然の奇襲に、オレはろくに受身も取れずアスファルトに手を突く羽目になる。

びっくりしてばっ、と振り向いたら、眼鏡をかけた女性が視界に飛び込んできた。

「×××××・・・」

オレとぶつかったらしい左肩をさすりながら、腑に落ちない、という顔のまま・・・向こうへ歩いて行った。

その目はオレをそこらの石以下としか映していなかった。
というよりも、見えていなかったよね？

「はあっ?!」

意味わからん、など万感の想いを込めて叫んだら、今度は周りの通行人が視線をよこしてきた。

しかしそれも微妙にオレに向かずふらふらと定まらない。ためしに五歩ほど歩いたらオレも野次馬の輪に溶け込める位置に。

.....。

「新手のスタンド使いかつ！」

幸い、未だオレに「焦点」を合わせてくる人間はいない。

いないのに、どんどん妖気が削れていくから.....いくから、「恐怖」を「闘志」に替えて異常な状況下でも冷静に行動できるのは、物語の主人公だけだと思ったり思わなかったりしたりしなかった、り？

——どんな鼓舞の言葉を使おうが、オレにできるのは、この場に背を向けて走り出す事だけだった。

これでたしか五つ目になる自販機の前を走り、そのまま右に折れて入った路地を駆け抜けた。

小汚くてほどよく薄暗い、この街の掃き溜めのような・・・死角のような場所。

「・・・あああ」

すぐにぶち当たった、オレの前に立ちはだかるようにある壁に額をつけて、肺から衝動的に荒い息を吐く。

「・・・死角というより、盲点。
そうだ、『盲点を操る程度能力』」

頭冷えれば、減っていく妖気はそういう理屈でしかなかった。

・・・どうりで。言っちゃえば全ての人から壮絶な無視を喰らってるわけだが、今ならある種究極の露出プレイができるぞ。漏れ聞こえた会話はそれなりにきついものがあつたが。

なんだか不味そうな物ばかり食べつつ逃げていたから栄養が足りないし、自前の能力じゃないから妖気を喰う。

ササバにや悪いけど、アイツの使い方そのままじゃ応用が足りないね。

「うはっ、完全に一人ぼっちきたよコレ。
もうまじバクシーシじゃね？」

バクシーシつつてんだろ！ と口の中で呟いてこの路地の奥へ進んでいく。

より汚れていて、暗い世界へ。

「・・・と言うほど汚れてはいないんだよね。変に小奇麗なんだよ

な、どこもかしこも」

より奥へ、奥へと歩きながら、目立った染みも無い壁やら何も落ちていない足元に目を移す。あ、地面はさっき言ったかもしれないけど、なんかアスファルトです。

多分アスファルト。

うん。

「・・・・・・・・」

袋小路だったらしい。

大して歩いたわけでもないけど、戻るのもめんどくさくなってその一筋の光も差さぬ囲われた場所に決めた。

行き止まり！ とその全身で表現している壁にもたれて、見上げれば光を遮る原因になっている摩天楼。看板の文字が読めん。

そう。それこそが重要だ。

オレはこんな町並みを現代日本でしか知らない。外国なのかも知れないけど、都会は都会でも小さい建造物なんかにお国の気配を感じるね。

ただ、光だけが。

「光」だけが、オレの知ってる何かとうまく噛み合ってくれない。

「・・・・・・・・」

行き止まりって、何を阻んでいるんだろうか。

「×××××」

呼ばれた気がしたから、顔を下げた。上を見ていたところで気が滅入るだけだったから、視界を元に戻す点でも喜んでやるね。

この路地のどん詰まりに立つオレのその少し先に、この日本っぽくて日本じゃないところ、つまり似非日本じゃ珍しくはないらしい銀髪の、女性。

袋小路の壁に預けた身を起こし、よくよく相手を見る。・・・ふむ、見目麗しいのはいいことだ。

「おお、ご同胞よ！ 会えて嬉しいのは嬉しいんだけど少々登場するのが遅くない？」

「え？ え、ええそれはごめんなさいね」

安心に変わりつつある心細さから、思わず批難してしまった。相手もやや困った感じに笑う。

右足を僅かに動かすと、まるでなにかえげつないことでもしたみたいに大仰に身を固くされた。

「早速で悪いとは思うんですけどさ、ここってなんなの？ なんで摩天楼があるの？ 日本なの？」

もしかして死後の世界なら早めに言ってね、心の準備が解けつつあるから」

むしろ死ぬの？ という気分でまくしたて、彼女の顔色を伺うのだが。

「先に聞いておきたいのだけど、見えないのは貴方自身の仕業・・・と考えてよろしいのかしら？」

右の耳に視線を固定したまま目の前の女性は言った。ブルータス、お前もか！

「たしかに”オレ”の能力ですね！。でもそんな状態で、どうやってここが？」

どんな仕草をしても相手にはばれないんだな。・・・いや、やらんよ？

「二時間ほど前から突発的に様々な機械が壊される事件があり、それに比べれば規模はまるで小さいけれど、前後するかのように数人がとある場所で見えない何かと衝突した、などと情報が入ってきた。視覚以外の探知機能を搭載した警備用ばかりを15体破壊して、もろもろを概算しても結構な損害よ？ それだけ派手に動かれれば、一時間もあれば足取りは掴めるわ」

「わーお」

どうりで、人間には気づかれないのにやたら機械がうなり出したわけだ。

疑問解明に声を上げて喜びを示して、少し見当違いな箇所を凝視している彼女を改めて見つめた。

・・・ん、そうか。

「このままじゃ失礼ですね」

そう言うとおレは、まるで見えない服が一枚脱げるような感覚と共に能力を解除したのでした。^{まる}

「あら……。信用の証、と受け取っていいのかしら？」

さりげなく視線をオレに戻して、彼女は言った。

「まあ、失礼だしね。」

……ここまで追いつめられ、能力持ちが単身接触してくる時点でオレの負けなんだろうさ」

煮るなり焼くなり好きにしてくれ、と言うと不審げな顔をされた。

「どうして私が能力を持っていると？」

「や、どうしてって……。さっきご同胞って言ったじゃん」

あらら？ お互いに微妙な食い違いがあるようで。

「私はここ、同じ月出身って意味だと思ったのだけれど」

……はっ？

「月？ あ、え、ああ！ どうりで」

兎耳がやたらいると思ったが、妖怪つてのと厄介なコスプレイヤー、どちらの可能性も否定できなかった。そうか、まじで月に兎はいたのか。

「餅ついてるとか薬作ってるって様子でも、なかったみたいだけどさ」

少々過去をさらって情報と比べようとしたが、ひどく鈍痛のする脳漿どもは仕事をしてくれない。

ふむ、どうしようかと思っていると、また女性の方から切り出してきた。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。

私は八意永琳（やごころえいりん）。いま言ったようにここ、月の住人よ」

「おっと、オレとしたことが気もきかなんだ。

命。メイと呼んでくれ。どうやら、あの青い地球出身ってことになってるようですね」

現実が俯瞰して見える。寝る前のあの全身の脱力感が襲ってきている。

丁度自分の後頭部が見える感じでいい具合にこの脳みその使えなさがわかるよー。

「月は地球の衛星とはいえ、一応宇宙人ってことにやあなるのかなねー。

なに、オレは人体実験でもするために呼ばれたの？ それはちよつと困るかなー」

かなー、って語尾を伸ばしながら問いかけるが、無視された。考えることは人と話するときには止めなよ、と悩みごとのないアイツに昔言われた気がしたな。

やや虚ろげな・・・永琳だっけ？ その永琳の瞳が、オレを直視したままぶつぶつと呟くさまは正直普通に怖かったので、心の中で別れを告げて路地から出ることにした。

ここが月だとわかっただけでも収穫だ。ああ、半日と経っていないのにもう母星が恋しい。帰ったらルーミアを探して、肋骨の一本でも折れるほど抱きしめてやんよ。

あの光だとかもろもろの推測がつく中、横を通ろうとした永琳が急にガツ、と肩を掴んできた。いいい痛い痛い！

「月はそれほど無秩序に地上から奪ったりはしないし、かといって一介の妖怪に易々と侵入されるほどざるでもないわ。一体どうやって・・・いえ、立ち話で終わりそうもないわね。場所を変えるのはどうかしら、お茶の一杯でも出すけど？」

妖怪だって。ばれてーら。

それよりなにより、彼女の目が怖いんだ。さっきとは別次元で怖いんだ。

「いえ、可愛いくて反抗期の娘が帰りを待っていないで殺そうとしてきたので。

それに他の娘達もぞくぞくと出てくるでしょうし、そろそろ帰らないと」

肩の指をそつと一本一本外そうとして、その力量差に愕然とした。

「ここじゃ地上は穢れた下界として認識されているわ。見つかったら即刻消されるわね。

それに、アナタの帰る方法も提案できるかもしれないわよ？」

「月のお茶か、いい冥土の土産になりそうだな。

うん、ご相伴させてもらおうじゃないか。そのお茶に一服盛ってな
ければ」

しょうがないから毒を吐いたがまるで聞いちゃいねえ。

「私の後ろについてきてくれれば大丈夫よ。

もちろんその隠蔽術は使った上でね」

「能力、な。能力。技術わざじゃないんだなこれが」

「まさかあんなに歩くと、誰が予想できたでしょうか」

「あら、軟弱ね」

20キロは歩いただろうか。肉体的な疲労はある程度緩和する手段
がなくもないが、口を閉ざしてろってのが応えたね。

案内された八意家。聞けば一人暮らしだということで、暇つぶしに
考えた家族ご両親への挨拶が無駄になったじゃねーかとか女の一人
暮らしが男を招くかおい、ああオレ妖怪扱いとかいろいろ考える
元気もない。

むしろ外見普通にマンションでびっくらこいたわ。・・・警備用口
ポとかいる時点で気付くべきか。

「てかさー。皆バスみたいなのに乗ってたじゃんー。なんで乗らなかったの？」

「重量で気付かれるでしょう。アナタが1キロ以下だったのなら、乗った方がよかったですけどね」

・・・やべー、永琳絶対頭いいわ。

案内された部屋の机に突っ伏して、彼女が実に楽しそうに薬品とかを準備する光景を視界に入れないようにしつつ、せめて横槍を入れようとするのだがその槍で逆に心臓を貫かれた気分を満喫しながら、それでも会話を続ける。

「お茶は？」

「話してみると結構図々しいのね」

そんな憎まれ口を叩きながらもはい、と差し出してくれるあたりできた女性だね。

「・・・普通だな」

「インスタントだから」

う、まじかと顔をしかめると、

「・・・今の地上の文明レベルでは、インスタントなんて概念ないはずよ。バスとかね。

どういうことなの・・・か、を今説明するんだったわね」

そこまで言つて、永琳が向かいに腰を下ろした。

「ちよ、月で最初に飲むお茶がインスタントかよ。夢も希望もねー

な」

「冗談よ。一応高級品のつもりなんだけど？」

「実際そんな違いなんてわからないから安物でよかったんだけどね」

「・・・・・・・・・・」

疲れた表情を浮かべた拳句、はぁ・・・と溜め息までつかれた。オレは優しいからそっとしておく。

視線を回すが、室内で特に目立ってオレの知らないものはない。掃除は行き届いてるね。

「どうすっかな・・・。実際帰り方さえわかればどうなるうが知ったこっちゃないんだよな・・・。」

見返りはおそらく実験体としての妖怪の体の提供、か。薬品の臭いから医療関係らしいし、路地の位置を特定してみせたあの頭脳なら単独でもやりたいことは山ほどあるんだろう。・・・そう、監視の視線を感じないしここまでの移動手段からほぼ独断と考える。

ここの技術は視覚を誤魔化す程度で居住区まで侵入できるのか？

それは常に彼女の後ろにいたことと無関係ではあるまい。つまりその周囲の警備レベルが下げられるほどの要人・・・。そう・・・ならばこの展開に、不都合はあれど矛盾は生じない。

穢れ、と言った。彼女もそうだし、他の月人も言っていた。ならば・・・・・・・・・・」

「はいはい、聞こえてるわよ」

パンパンッ、と至近距離で手を叩かれて反射的に口を止める。

やっべ。・・・やっべ。

「ご推察、お見事といっておくわ。たしかに私は薬師だし、月の使

者のリーダーみたいなこともやらせてもらっているわ。
でも——そう簡単には、返さないわよ？」
「なんのことー？」

ぺらぺらと調子よく回っていた口と舌も、肝心なときに役に立たない。

ふふふ、と微笑んでくる永琳に合わせて、とりあえず笑顔を見せておいてお茶で口の中を湿らせる。

・・・医者といえば。

「他人の傷を舐めたら再生速度があがるんだよね。わからない？
お医者様」

「正確には薬屋よ。そうね、じゃあまず唾液から調べましょうか？」

「まず帰り方だろうが」

まず、ってその後も続くこと前提じゃねーか。

「だから一応それを最優先にはするわ。

・・・たしかに月から地球へ行く方法が皆無ってわけじゃない。むしろ選べる程度にはあるわ。

月の光を編みこんだ質量0の『月の羽衣』とか・・・」

「『月の羽衣』？ まっじで？！ てかさり氣に月の光編みこむとか質量0とか、無理に近いようなこと言ってません？」

「落ちて着いてほしいわ」

「はい」

今きらつと反射した物。間違はなく刃物の類だった。

「それは主に兎が使うような原始的な手段よ、お勧めできないわ」

「そういえばそうだ、宇宙空間とかまったく考えてなかったわ」

今のオレじゃ、万が一地球まで辿りつけたところで大気圏突入で死にしまう。

机に顔を落として、自身がいかにもまずい状況に陥ってるかを再確認した。

・・・・・・・・となると、だ。

「他の経路も、おいそれと不審者を乗せて地球まで行ってくれるような都合のいいものではないわ。

だから、調べましよう。アナタ自身や、そのときの状況を」

手を見る。机を隔てた向こうから、差し伸べられた手を。

いまいち信用ならなくて、なぜか親しみの湧く、目の前の彼女に頼むしかない・・・のか。

「一年」

ぐっ、と手を握って真っ直ぐ永琳を見た。

「一年で進歩がないようなら、最後の手段に出させてもらっ」

でもごめん。最後の手段に出るくらいならここに骨を埋めるわ。だから地味に条件がゆるい。

「ええ。善処させてもらっわ」

握り返す彼女も、こちらの意図が分かっているのか分からないのか微

笑を浮かべている。

「でもまずは、食事のようね」

「あ、わかる？・・・薬屋の域越えてるだろ」

握った指をちらと見ただけでそう言った永琳に、とりあえずそういつておいた。

さて。

「お互い文化も何も違っていているから、多少のことには目をつむりましょう。こと食事のときってのは、文化間の違いが如実に表れるって誰かが言っていた、気もするし。

例えばオレの生きてたところでは、食事は全部食べるのがマナー」

「ええ、そうね」

「ところが、違う文化圏だと残すのがマナーなんですって」

「あら・・・そんなところもあるの？」

「ええ・・・そうなんですよ。」

だから正直、かなりの覚悟を決めて食卓に臨んだわけです。例えば虫が出てこようと、相手は好意で出しているわけだから食べなければならぬ・・・ああ、すいません食事中なのに」

「いえ、気にしないで結構よ」

「ありがと・・・。」

それで何が言いたいかというともう思いつきり和食やん！」

テーブルの上には白米、味噌汁、なんかの魚など。まさか箸まで出

てくるとは。

「まさか生きてるうちに和食と再会できるなんて思いもよらなんだ・
・・」

揃えた両手・・その手だけを見て栄養状況がわかるってどんだけ？
どうでもいいやいただきます、と手を合わせてまずは味噌汁。・・・
うまつ。

「これも一致するのね。・・もうわけがわからないわ」
「食文化はそうは変わらないか・・・」

あれ、魚がなんか妙に不味い。
味があつて食感があつて風味があつて、「何か」が足りない。

「穢れ、って具体的にはなんなの？」

野菜の煮物は美味い。白米も美味い。

「簡単に言つなら・・そうね、生物に寿命をもたらすものよ」
「——つまり、『死』なの？」

箸を口に運ぶ。

「いいえ。
生きようとすればするほど強くなる、死の『匂い』ってところかし
ら」

器用に魚の骨を取り除きながら、物から永遠を奪うとか生物に寿命
を与えるだとか言つ永琳を軽く聞き流す。頭いい人は何言ってるか

わかんない。

生きようとすればするほど。そこがオレに関わってくる、と思わなくもない。

「穢れ、ね・・・」

見た目アジな宇宙魚を齧りながら、生返事を返す。

きつと、穢れたアジの方が美味いさ。

「やめられない止まらない、なお菓子もあつたんですよ」

「額面通りに受け取るのなら危ない匂いしかないわね」

食事が終わり、なんだか風呂まであるそうです。なんかもう探したらファミコンとかあるんじゃないの？

廊下を歩きながら、さっきぼろつと言った事と今ので永琳は果たしてどこまで真実に近づくなーとか考えた。

・・・たどり着きそうで怖い。

「さて、一見して使い方の分からない物とかはある？」

「んー・・・ないね」

永琳め、学習したな。一々説明するのが面倒になったか。さすがにビップ、うちの風呂より広い広い。

・・・オレが入ってたら永琳が背中流しに来たりとか、

「しないわよ」

「ですよー」

日本人の醍醐味、風呂ですよーと張った湯船に飛び込むわけもなく静かにつかる。

「あー・・・」

醍醐味って牛乳温めたら浮いてくる膜のことだよ、たしか。正直そこまで美味しくない気がするんだけど。

「生き返るーつつたら死んでることになるから、さしずめ死なないーってか？」

ゆらゆらと立ち上る湯気に当てられたか、妙に理屈っぽく回転するオレの頭脳。はっは、よきかな。

前のオレの肉体の身長・・・思い出せないけど、それと大して変わらないんだろう。いきなり身長が変わるって事は全身のバランス全てが変わる。

「どうでもいいいい・・・」

ゆっくりと、左手をかざす。

・・・まあどうでもいいか。

「×××××、×××××。
××××××××××××××」

おそらくは月の言語で書かれているのであろう紙が、異常なほど綺麗になった着物のうえに置いてあった。

「読めねえよ。なにこの放送禁止用語の連発されたかのような文面。書いた人は見識を疑われるぞ」

おお、袖もとのこびりついた血までとれてやがると月の技術に感心しながら、さきほど歩いた廊下を進む。やはりあの環境で清潔な生活するのが無理だったか。

「——あら、メイ。メモわかった？」

「ごめん、一言たりともわかんない」

角を曲がったところで、その永琳が出現した。

「字はわからないのか・・・。」男物の服がないから、とりあえず洗ったこれを着ていて頂戴”と書いたんだけど、別にいらなかったみたいね」

「まあこの選択肢以外は全裸ですから、あまり心配する事でもないと思いますけどね」

湯加減は大丈夫だった？ あのとぐらいには熱くないと風呂じゃない、などのやり取りをしていたら最初の部屋まですぐだった。

先程と同じように椅子に座る。湯上りの体に、開いた窓から吹く風が心地いい。

その窓を見たら、意外と暗くて驚いた。こんな月でも夜、あるんだな。

「——そんな風情をぶち壊すようであれなんですけど、今晚は泊めて頂けるのですよね？ あのとくに確認するの忘れていたんです……」

微妙な居たたまれなさから敬語になるなるなる……。しかも女性だぜ？ 试试看ればヒモだよ。

「あら？ 私は最初からそのつもりだったのだけれど。それこそ一年間ね」

「ほんとありがとう永琳大好き」

「……まあ感謝の気持ちを素直に伝えられるのはいいことよね」

むしろ自分に言い聞かせるように、そう言った。

メイのところに 604 ものダメージ！ 彼は瀕死だ！

「……ねえ、貴方の体にいろいろと興味が出てきたわ」
「えっ」

体に興味があるなんて、そんな……。

「そついう意味じゃないわ」

「……宿代と帰る方法の代金は体で払え、と」

「その表現は確実に間違っているけど・・・ま、期待してくれていいわ」

「・・・まあ異世界人かはともかくとして、宇宙人だしね。人間の尺度で考えるのが間違ってるのかもわからん。

椅子を引いて立ち上がると、

「あ、用意した寝室は廊下を左よ。扉は開け放しておいたからすぐ分かるわ」

「・・・」

「ばねえ。」

「・・・暑い」

寝台に寝てはいたが、掛け物を跳ねのけた。

用意された一室。まあ寝ればいいや、と碌に見もせず倒れこんでさて照明どうしようかと思っただが、結局は自分で消した。目を閉じてても開いていても、視界に移りこむ闇。

「暑いつつーよりは——人恋しい」

否が応でも意識してしまう、ルーミアの幻影。
そんな調子で数えた羊は一万の大台に。

.....。

「夜這いでもかけるかね」

そう呟いて、体を起こした。

経験上、こういうときは冷水を頭から浴びればいい・・・なんて、
こんなに悩んだ事がないから理論的に証明できる噓。

廊下は照明なんかも全部落ちているけど、数ヶ月も野生に生きた才
レにそんなもの通用しないんだぜ。

迷うほどでもない廊下を歩いて、一応食堂を覗いてみた。食堂とは
一度でも食事を取った場所のことなのだ。

「エイリーン？」

ここだけ、扉を開けた途端明かりがついた。眩しさに目を細めて呼
びかけるが、返答なし。しょうがない、勝手に使わせてもらうか。

「部屋まで聞きに行ったらそれこそ夜這いとでも疑われるしね」

風呂へは・・・ここか。

そうやって歩き出してすぐに、かすかな水音が聞こえた。

「ここで聞こえるのがそこらの主人公とオレの違いなわけですよ！

開けた途端きゃーえっちーとでもなると思ったか……何言
ってんだろオレ」

食堂の扉を後ろ手に閉めながら、なんか深夜でテンションらしきも
のが上がっている自分を戒める。

三度椅子に座って、永琳が上がるのを待つ事にした。

……。

「……………」

寝れないのなら。

体が渴望する睡眠を、こんな調子で延々ととれないのならば、最終
手段をいきなり最初に持つてくるのも、悪くは無い気がした。

「……………」

周囲を空間つつー概念で『喰らう』と、中の自分は何処へ逝くので
しょうか、と」

……。

がちゃ、と扉の開く音がして、

「あら、メイじゃない。起きていたの？」
「服着ろよ」

呻く彼女は矛盾に。(後書き)

受け皿・・・まさかな。

永琳とのラブコメ展開を予想した方は残念ですが正座。・・・これ
はいないですね？

BGM "Dark Star" by The Grateful
Dead

抱きかかえる命を口の中に（前書き）

離れるってなんですか？

抱きかかえる命を口の中に

「お名前が、命（メイ）さん……ですね？」

「はい、そうです」

慢性的な睡眠不足で頭の芯が痛むように、ただクリップボードを掴む永琳の指だけを見て……答えた。

軽く紙の上をなぞる音だけ、やけによく聞こえた。

「人間だった頃の名前が思い出せないとありますが？」

「ええ、元々人間だったはず……他者に記憶でも植え付けられていない限り。今の名前は便宜上そう称していましたが、もう本名でいいなと思っています」

「ふむ……では、この年齢の方は？」

「妖怪始めてからになりますね。この年で生後4ヶ月とか」

「……なるほどね。——では命さん。これによると特技はイオナズンだそうです」

「はい、イオナズンです」

……くるか？ 突っ込んでくるか？

僅かに身じろぎをすると、オレを支えているパイプイスがぎぎぎ、と鳴った。

「わかりました。けれど、その次の能力の欄が書き込み過ぎていて判別ができないのですが」

「イオナズンをさらっと流されたからです」

「真面目にね」

「はい」

一筋の閃光、心動く刹那の圧力。——それがわたしの『エレクトロ・ワールド』。

「それで、ここを読むとアナタは複数の能力を持っているらしいのですか？」

「はい、刃物のきらめきの前に従順な人形と化す程度の能力……は

い。現在のところ『相手と会話が出来る程度の能力』『盲点を操る程度の能力』『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』の3つです」

「簡潔でいいですね。これでアナタが文字を理解できない理由がわかりましたし、姿が隠せる理由もわかりました。——ではなぜ、複数の能力を所持しているのか。それと、最後の能力について話していただけませんか？」

言語なんかは一部固有名詞の発音が真似できないだけだったりするんだけどね。

「口の中に石鹼でも突っ込まれたような気持ちです。その二つの質問には一つだけ答えれば済みます。『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』は食べた相手の能力をもオレの一部とするからです」
無駄な言葉が話せないとなると、存在意義が瓦解してオレはもうお終いです。

指を擦り合わせながら、唇を舌で湿らせて、とりあえずわかることを話す。

「相手の生死は関係なく、また腕一本などではただその分の肉が栄養となるだけなので、能力や妖氣を得るにはある程度の『大きさ』が必要みたいです。また、オレ自身が肉体に致命傷となりうる傷を負ったとしても、それまでの『栄養』を再生に回して生き延びる事ができます。足りなければ能力が周囲のものを片端から『喰い』ます」

「妖氣、ですか……」

よどみなく一定の速度で質問を問うてきた永琳が、そこで初めて口ごもった。

「私には何も感じられないのですが……差し支えなければ、どの程度妖氣を得る機会があったのか話してもらえませんか？」

「機会……ねえ……。あー、食べた妖怪自体の数は40ほど……でしようか。感じられないと言うのなら、それもこの能力の特性だと思われれます。とにかく強欲な能力であり、オレ自身ですから——口

に入れたものを、こぼすのはもったいない上にみつともない、汚らしい、とでも言えはいいのかな？」

もつ少し理由を考えたが、それぐらいなんだろうと判断。我ながら単純な結論だ。

——そういや以前クロナギに妖気がどうのと言われたが、これも成長の証と受け取っていいのか？

「——まあ、そんな感じ………です」

尻切れとんぼに付け足して、両の指を握り合わせる。

ふむふむ、とぞんざいに返しながら紙になにごとか書き付けるさまを見つめて、あの細い指のどこにあんな贅力があるのだろうと思った。

永琳はしばらくそうしていたが、右手で顔に掛かった髪を掻き上げて、視線をよこす。

にびいろの目に、オレが写り込む。

「『最後に自由にどうぞ』の欄に“能力を持った人が47人いて驚きました。僕がいたところは片手の指で足りるほどだったので、月はすごいなと思いました”とありますが、現在公式確認されているのは私を含め46人です。なにか勘違いをされたのではないでしょうか」

「え、嘘お。——いやでも、勘違いの類ではなかったと断言します」
綺麗な言葉を使いすぎて、そろそろ真面目に苦しくなってきた気が。

うまい例えを探してあー、と口を濁らせたが、別に何も思いつかなかった。

「あのとき、気付いたらいきなり月というわけのわからん場所に放り出されたオレは言ってみれば“完全に一人ぼっち！！”状態……。あな悲しきや！」

よよと目尻を押さえてみたが、物凄い沈黙というプレッシャーを感じた。

うえっほん、と咳払いをして話を戻す。

「死地にいるのにも関わらず気を抜く様な鈍感な奴は生き残れない環境で生き抜いてきたもので、能力持ちの存在はそれなりに正確に感じてたわけです。大体等間隔に感じたのに、この辺だけ二人分あってああこれ抹殺されるなどか覚悟はしてた」

もうお分かりですね、一人は貴方です。と、永琳を指差す。

使いつぱなしの口の中に、ちよっぴり林檎の風味を感じた。

「無届けの野良能力者とかいるんじゃないの？」

「……いえ、それは考えにくいわね……」

膝の上——に乗せたボードに、あごを乗せて言う。

「アナタがどうやって感じ取ったのかはわからないけれど——まあおそらくはその能力でしょう——能力を保持している、ということは結構目立つ事なのよ」

理解力の出来ばえが悪い生徒に言い含めるように、一つ一つ噛み砕いて、永琳が言った。

オレ？ オレは人格形成が致命的に手遅れな生徒です。

「気の利いた装置を持ってくれば、能力持ちは葬式に裸で参列するぐらい目立つわ」

「わーお」

こんな美人さんが裸だつて。わーお。

そんなことを考えているオレを置いて、人差し指と中指を口元にやった格好で永琳が思案に暮れ始めた。視線が虚空を見つめ、微動だにしなくなる。

たしかこのときの視線の方向で心理分析ができるって話だが、オレは右も左もわからないのでやめておいた。右って相手の眼球つく手の方だよな？

「アナタはどの程度分かるの？」

「——あいつ？」

急に目に生気を宿らせて永琳が聞いてきた。だからってボードで人を指していい理由にはならない。

しかし……わかるって何が？ スリーサイズ？

「最低目の前の人なら、能力の有無を区別できるのかしらと言っているのよ」

「……まあ、わかるね」

クリップボードと仲良くなった頭の痛みに耐えてそう答える。

高速でアタックするのが月での恋の手法らしいです。

「——それじゃあ、行きましようか」

「……ん？ どこに？」

永琳は、ペンとクリップボードを後ろの机に置いて立ち上がると、さも当然そうに言った。

「その、能力者候補の家に」

「ああ、どうしよう!? 高く^{たか}振りあげたこの腕^{うで} 私^{わたし}のお月様^{つきさま} 逆^{さか}さまのお月様^{つきさま}」

机に座って紙を前に置き筆記用具を持つ。世間一般ではこれを勉強スタイルと言うそうなの。

駄目なんだよ、しなきゃいけないってわかってても嫌いなんだよ、勉強って営みが! 地上が早くも恋しくなってきた!

上半身を背もたれに預け、天井を仰いだ。月人の居住区は地下、青空も恋しいです。

「……………ここはお空のお月様、だけどさ。

「もう、早く^{はや}して! 強く^{つよく}振りおろした腕^{うで}は」

「——もう音を上げた?」

座っている椅子の後ろから声がして(このまま頭の後ろで手を組もうとするとか、椅子が倒れた振りをして後ろにダイブすればあれだな)、と思った。

命以外に惜しむものがあんなないから、止める。

「出たよ月のお利口さんが。ものの一時間もしないうちに地上の言語体系理解しやがって！」

「そこまで違ってもいなかったじゃない」

まあまあとだめすかすような微笑を浮かべられると、名も思い出せない父方のじいさん譲りの反骨精神がますます燃え上がるとですよ！

「ひらがな、カタカナ、漢字。どれも字の書き方が違うだけで、後是一部固有の発音とその表記字があるだけじゃない」

「要は一から漢字を覚えなオすのが無理なんだって！」

なのにそれを楽々覚えやがって………夜道に気をつける！

「まあそれは追々覚えてもらうとして………」

別に覚えなくて生きていける………たしかに文盲じゃないかと困るよなあ。

「ちよつとアンケートに協力願えないかしら？」

はい、と紙を一枚渡された。流麗な日本語でびっしりと質問が書いてある。

地上の字でいいからね、と言われて顔を上げ、永琳を見る。

「親交を深めようってやつか？」

「そついつ側面もあるわね」

目の下に隈が浮いてるわよ、と言った。

「五日ぶり……ぐらいかな。最後に外に出たの」

つまり永琳と出会ってから軽い軟禁生活だったわけか。

「もう一週間になるわよ？」

なんと、わちきが時代遅れともうすか。

「まあそれはそれ。これはこれ」

そう永琳に言って、丁度横を歩いていた少女に顔を向ける。もちろん彼女にオレは見えてなかったり。

「世界はオレに跪ひざまずいてください！！！」

ものすごく謙虚な気持ちで帝王な台詞を叫んでも見向きもされない。これがいのちのおもみだ！

「まあ痛い子扱いされている可能性も捨てきれないんだけど」

「私が痛い子扱いするわよ」

——おっと、永琳には聞こえっぱなしだった。

「見つかりたいの？」

遊びを中断して駆け足で永琳の背中まで戻った。唇どころか目線すら動かさない、完璧な腹話術でそう叱咤される。

我ながら無意味な茶目っ気を出す程度には、籠りっぱなしという状況に参っていたらしく、ついあちこちに目を向けて興味の種を探していた。

「心配御無用さね」

永琳の前までわざわざ回り込んでちつつ、と指を振った。
ずきつずきつと頭も痛んだ。

「この一週間だてに引きこもってたわけじゃない。……ついでにいうと引きこもりたかったわけでもないんだけど」

お外怖いよあ、お日様怖いよあ。……だからって暗闇が好きなわけでもないけどね。

「朝に話した『盲点を操る程度の能力』、それをこんなこともあるうかと『意識の焦点を操る程度の能力』に成長させてみました」

どうよ、とない胸を張ってみた。胸骨ぐらいはあるのかもしれない。

「……………本当、つくづく非常識な存在ね」
「なぜか見下げられた。いろいろと。」

「その他者から奪う能力の特性なのかしら？ 能力って、そんなほいほい成長するものじゃない気がするのだけどね」

「エイリンも十分ほいほい成長してますけどね」

顔より下を見つめながら続ける。

「まあそんな感じで、これを発動中はオレを知覚するのはほぼ不可能だから大丈夫。試運転から実戦投入だから根拠はともかく実績はないけど、大丈夫」

「それでも××××××歳なのよ？ と言われた。」

「でも結局、機械の監視は誤魔化せなさそうな点についてはどうなの？」

「ごめん今なんて言った？」

えっ。……………え？

「女性に歳を訊ねるのは失礼よ」

「いやそつちから言ってきたんだろうが」

嘘お…………と呟いて、額の汗をぬぐった。

あたりをぐるりと見回して、こいつらみんなジジババじゃねーかと、小さく…………小さく、叫ぶ。やっぱりめまいと頭痛がしてきた。

「その点は安心していいわよ。私が月の創立から生きているだけなのだから」

少し永琳との距離が開いていて、慌てて追いかける。

「いやさすが永遠の民……………と言っべき、か？」

「……………」

「……………」

沈黙の間をぬって汗をぬぐった。

「……………なんか暑くね？」

前を歩く永琳おねーさんに話を振った。

北国育ちだから暑さにや音を上げる程度の人生送ってきたわけなんです。

「——そうなのよね」

さすがの永琳も、暑そうに頭を振って同意する。

肩にかかった髪を後ろに払いのけて、覚えてる？ と聞いてきた。「最初に出会ったところ。あの近くに氣象操作省の実働ビルがあるのだけれど、ごくごく最近その玉兎たちが相次いで倒れたみたいなのよ」

なにしろ急なことだから、補充の人員も不足して管理が滞っているらしいわ、と言いながら立ち止まる。信号だ。

「玉兎つつたら——ああ、丁度その彼女みたいなの？」

わざわざ監視に引っかけりたくもないから慌てて追隨する。ついでに左手を伸ばし、ぴよこぴよこ跳ねる（表現に関して、主観が混じっている事是否定できない）ウサミミ少女を指し示して聞いてみた。

永琳が僅かに目だけ動かして、道の反対側を歩く彼女を見た。

「ええ、そうよ」

「ふーん……」

なにやら重そうな荷物を抱えてよろよろと歩いていく。進行方向が逆だから、遠ざかっていって、すぐに見えなくなった。

別にオレはルーズベルトの後継者気取っていた黒歴史も幸いにしでないから、別段何も思わない。

「文字の教材として渡された本の中に、玉兎は労働力って書かれていたけど」

永琳は、使ってたの？ そう聞いた。

一週間でも、一緒に暮らしていたんだからわかりそうなものだが、本人の口から聞きたかった。

その思考は、右も左もわからない——異郷の地だからってことに、しとく。

「——アナタの言いたい事はわかる。そう思ってくれていて、嬉し

いわ。……ええ、私自身直属の玉兎なんてものはいない」

そしてこれからも、と付け加える。

思い出したかのように脳漿も痛^{いた}んだ。傷^{いた}んでる。

……。

……。

……。

「携帯電話つてのがあるわけよ」

「携帯……電話？」

「まあ、遠くのヤツと会話が出来る機械を小型化した物なんだけどな、相手から通信の申し出があると、その相手を登録していれば好きな名前を出させることができるのよこれが！ 永琳がオレをド低脳と思っていればオレから連絡があつたときに『ド低脳』と表示されて、ああド低脳からのだなとわかる仕組み！ まあ全部が全部ド低脳と思って内心でも見下してたなら全員表示と一緒に結局区別なんてつかないけどな！」

一人で何々と笑って、あほらしくなった。

「あー意味わかんないな、ごめん」

——別に気にしてないわ。永琳がそう言う。

「それより、寝てないんでしょう？ 本当に大丈夫なの？」

……気にされてた。

「ぼらぎのーるがあります」

「それは痔に効くのよ」

ここで初めて、永琳がちらつとこちらに視線を向けた。

「そうこう言っている間に、到着よ」

「おっと」

星の家に到着後、玄関で永琳から離脱してふらふら歩き回っていた。ちよつとびびったぐらい広かったし、知人同士の世間話が済む位まではほつき歩いて罰は当たるまい。そのとき永琳も止めなかったし（出発のときに彼女がメスを一本だけ服の下に仕込んだのが見えた）。

カンに従つてとある部屋に来たのだが、視界には何も写らない。

……戻るか、子供じやあるまいしに………と思ったとき、何かに軽くぶつかられた感覚が。

「うー」

「ん？ 誰だお前？」

見えない壁にぶつかったぞ？ という顔を足元でしている赤ちゃんを抱えあげた。見えなかったはずだな。

独身なもんでもちろん子供もいなかったけど大した技術は必要ないだろう、と適当にあやす。うー、よしよし。

「あーあー！」

「おー喜んでくれるかー。素直だなー、それとも初心者に氣遣つてくれるの？ それなら、お前は将来美人になるぞー」

無垢な赤ん坊に人生の初っ端から汚い馴れ合いを教えていると、

「カグヤー？」と奥の方から声が聞こえてきた。

「カグヤか、いい名前じゃないかー。じゃ、またご縁がありましたらー」

「あー」

このまま床に放っておくのも悪いな、とは思ったが今のままだと赤ん坊が宙に浮いてるんだよね、傍から見れば。シユールな絵だ。

「オレは行かねばならんだ、すまないカグヤ！ 君のその笑顔を最後に見られただけで、オレは地獄にまで行けるのさ！」

なんか赤ちゃんと話しかけると語尾が伸びるよね。だから語尾を戻そうとカグヤに熱く別れを告げて、そのまま歩いて廊下に出た。

空いていたら不自然だから手早く扉を閉めて、廊下の左右を見比べる。和洋折衷……というか、よくわからない感じにこたこたと混ぜられた様な回廊が、右や左へながく伸びている。

「あ右や左の旦那様ア」

……………さて。

永琳を探すところか……ここ、どこだ？

やっと見つけた部屋に、そーっと扉を開けてそーっと足を踏み入れた。家自体と比較すると、やや広さを確保しつつも実用的な範疇に収めている点は評価に値する。全体的に落ち着いた雰囲気で調度品や骨董の類なんかが纏められ、住人の嗜好をうかがわせる。いい趣味だ、と小さく呟きながら、でも永琳とは若干内装の好みが違うなと思った。思える程度には、関係しているんでっす。

能力を使っているのにも関わらず一瞬ちらつと目を向けてきた永琳に首をすくめてみせ、能力の対象から外した。よくぞ気付いた。後ろから「わっ」の「きゃっ！」という貴重なワンシーンを見たかったのに。

——扉動いたらそりや気付くか。

部屋の中央に向かい合う形で配置されたソファア。さっきの家主の背中が見える。オレと視線がかち合う側に座っているのが永琳で助かった。

堂々と彼女の隣まで歩いて行くと、丁度会話が一段落つくところみたいですね。大人は大変だ。彼ら彼女らと比較したら、誰だって生まれたてみたいなものだけどさ。

「それでは、お願いします」

「まかせて頂戴」

……年上（悪くない意味での）にあまりからかう様な真似は慎むかと今までの自分を反省していると、よく聞いていなかった会話が一区切りついた。——よくわからんが、永琳が目の前の男性にヤキ入れてるって認識でいいのかな？

そこでオレの常にふらふらとしている注意力が、徐々に近づいてくる赤ん坊の泣き声をとらえる。

「永琳さん、貴方。カグヤを連れてきましたよ」

オレが入ってきた扉を再度開け、黒髪の（見た目）若い女性が腕にむずかる赤ん坊を抱えて登場した。

それを見るか見ないかぐらいで、永琳の耳元でささやく。手を添えて声を潜めれば、よくある黒服が「実は……」とごによる感じになるよ！ 重要なのは気分だよ！

「ビンゴ。——能力持ちだ」

「その子がカグヤちゃんですか」

そう言っただけで永琳が立ち上がるときに、ほんのかすかに頷いた。

そのこの男性の妻か？ まあその女性がカグヤをなだめようとする。

そのときに、カグヤが永琳を見て一気に泣き止んだ。

正確にいうなら……その後ろにいるオレを。

「あーたうあ」

「カグヤちゃん、ね？」

いきなり大人しくなったその子を抱いて、永琳がしたり顔で「やっぱり能力を持っていますね」とか言った。

そして月人三人が再び話し始める中、オレとカグヤだけが熱烈に視線でやり取りをしていた。

さつき言った台詞が眼前にちらつく（オレは行かねばならんのだ
すまないカグヤ君のその笑顔を最後に見られただけでオレは地獄に
まで行けるのさあ）。

「……………やあ、ぼくメツキー」

なんか僕もうやる気ないっす。唯一の救いはオレとカグヤ以外は
このことを知らないことだけか……………そして裏声が気持ち悪い。

「あら、すっかり懐いちゃって」

永琳に渡そうとしても、腕にしがみついて離さないカグヤ。

なんかデジャブ。

「それより、能力持ってるヤツの教育役なんだって？　そういうこ
とは先に言ってくれないと」

「先に言ったところで変わらないでしょうに。私だけってわけでも
ないしね」

結局、手始めに一週間だけ永琳が預かる事になったらしい。

あやたてう！　とか、とりあえずなんか言葉ことばを話しているところ
二歳ぐらいはいつてるのかね。自分だけの音から、周囲と比較して
徐々に言語を習得する大事な時期に、能力で無理くり話している才
レは悪影響なんじゃないかとも思うんだけど。

「とりあえず、その期間で能力の性質ぐらいは見極めたいのよ」

「……………ああ。オレみたいのだったら、うっかり暴走しましたじゃ洒
落にならないからね」

そうね、と頷く永琳の横顔を、西日が照らし出している。通りす
ぎる男どもが十中八九振り返るほどの美貌をだ。

……………まあそれで赤ん坊抱いてたら幻想を粉々に砕くかもね。男は
弱い生き物だから（表現に関しては以下略）

「ややうー！」

「おつとごめんよ」

抱いていたカグヤから弛めると抗議の声。普通に抱いてしまっ
たらもちろん空中浮遊になるから、やむを得ず着物との間で我慢し

てもらっているわけですよ。

能力の延長線で、体に近いものなら見えなくできるが彼女の声はどうしようもない。通行人に謎の赤ん坊の声が聞こえたところで、まあ……大丈夫でしょう。練習の必要があるな。

「エイリーン、カグヤが結構汗かいてきた助けて」

「子供はそんなものよ」

普通に見たら永琳一人で、意識がないものが見たら三人。

そんな奇妙な珍道中を、月の下の偽りの夕日が赤く照らしている。

抱きかかえる命を口の中に（後書き）

ちなみにこの小説内でのカグヤは男です。嘘です。

B G M
” H e l p m e , E R I N N N N N N N N ! ! !
”
b
y
ビートまりお

レシピは食欲（前書き）

区別ってなんですか？

レシピは食欲

やあ、皆、覚えているかな？ 自称人間のメイだよ！

前回鍛えた会話術を全開にして永琳を説得し、屋根と林檎を手に入れたんだ。

間違えたそれは前々回か書き出しの印象が薄いからすぐにとっちらかっちゃうね最初は紫に殺されるシーンを永延反芻していたよ！

話を戻していいかい？

前回ではエアコンも効いていない箱庭の中を（またもや！）歩かせられる羽目になって、小さい肉の塊を入手したんだ。

それを永琳は“カグヤ”と呼んでいたから、僕もそう呼ぶことにしたんだよね。

××物語じゃねーんだから月でそんな名前つけんなよとも思ったけど、究極的な異邦人である僕にそんな愚痴を聞いてくれる伴侶なんていないいいい。

エイリン可愛いカグヤカワイイ。カワイイ可愛い幼子のカグヤはするする、いやさすくすくと成長して今じゃもう時の帝に求婚されるぐらいさ！

能力も永遠と須臾……。

違った。

これは、そのほんの少し前の話。お話、だった。

少し羨ましい、お話。

死体は何を考えているんだろう。

歩いていた道を振り返り、自分の種族の証である長く伸びた耳を軽く動かしたとき、ふとそんな疑問が浮かんだ。

見上げると大きいビルが見える。普通気温はそのビルによって完璧に操作されているのだが、今はなにやら不備が起きているらしく、温度があまり外に出たくないレベルになっているのにも関わらず一向に修正される気配がない。……温度自体はそうでもない……はずなのだが、非常に不快。普段の気温に慣れてしまっていることを身をもって体感している——そんな中、私はこうして指定された物品を指定された人物まで届ける役目であって、こうして目的地まで歩を進めているわけだ。悲しきはお役所勤め。

本来はもっと効率のよい運送手段があるのだが、今回の届け先である月人の方が取り寄せに近い形で仕事の材料を注文しているのだ。当然その中には扱いに注意が必要とされる物もあり、なおかつ注文の回数も多い為今ではこうして私が専門に近い形で届けさせてもらっている。

今日はイレギュラーな事態によって外出自体に不平が出てしまっているが、本来この訪問は私の仕事の中でも一番目ぐらいに大切な時間だ。受取人である八意さんは、よくねざらいついでお茶に誘ってくれる。仕事中ののだが、上司も月でも非常に大きい影響力を持つている彼女に誘われる事に関してはほぼ黙認状態だ。

なぜそこまでよくしてくれるのか、正直未だに理解できない。それなりに長くこの関係性は続いているわけだが、よく「話し相手が欲しいのよ」と微笑まれてそのまま有耶無耶となってしまう。他の玉兎達なら気にせず疑問をぶつけるのだろうが、そこで口ごもってしまう私は皆に言わせれば「大人しい子」らしい。まあそんな気性だからこの仕事を任されているのだと思えばなんてことはない。

ない——の、だけれど——。

空いてる右手で耳を撫でつける、その私の横をまばらな人影が過ぎ去っていく。

事務所に戻っても、彼女から新たに注文があるまでは待機（それでもほぼ毎日出歩く程度には依頼がある）する。本当に、優遇された職場だ。戦闘訓練なんかに従事している仲間とは比べものにならない。銃器を片手に実戦さながらな訓練をさせられようものなら、模擬といえど私なんか三分で音を上げてしまう。マジ怖え。

……耳が動く。波動が雑多に飛び込んでくる。呪いだとか、怨念だとか……兎はゴシッうわさ話プが大好きなのだ。

この地区は人口の割りに閑静だ。兎の波動が聞き取りやすい——が、たしかにそのビルの周囲から何かよくないものを感じる。まあ、原因は大したことじゃないだろう。——特に月つきでは。

仕事に戻ろうと足の向きを戻す、その動作だけで私の脳内からビルに対する大半の印象が薄れた。

今回運ぶ量からして、多分お茶には誘われなさそうだ。

読書に勤しむなんて、前世に色々と置いてきてからこつち死ぬまでできないとも思ってたよ。できないとも思ってたか！

ミス、書く順番を間違えた。

胸中で舌打ちをしながら、ページをめくる。月での本の材質は木みたいだ。

前に案内された寝室。結局そのままオレの自室になってしまったその部屋の床に直接あぐらをかいて、カグヤを膝の上であやしなからこまごまとした字を追う。タイトルは『？でもわかる！　　サバイバル』とかなんとか書かれている気がする。その？が月での何のスラングかは知らないが、奇怪だなどだけ思っておくことにした。

『？でもわかる！』シリーズは、そのタイトルとは裏腹に並みの学術書よりも専門的な内容をタイトル通りわかりやすく書いているとの評判が高く（そう紹介されている段階で「？」の大体の予想がついた。悲しい事に）実際読みやすい。大事な事は二回ほど言ってます。

「……そこはかとなく侮蔑の気配がするんですが」

まあわかんないけど、と意識を本に戻す。

……やっぱり川の水を直接飲むとか馬鹿だったか。

「あつきゅー？」

「ん？ まるきゅー」

退屈そうに膝に座っていたカグヤが舌つ足らずに反復する声に、
図らずも癒されてしまった。

急に込み上げてきた愛おしさから抱き上げると、けらけらと明るく笑う。オレも頬が気持ち悪く緩んでいるだろう。

「Hey, my kitten, my kitten,

And hey my kitten, my deary,
Such a sweet pet as this

There is not far nor neary.

Here we go up, up,

Here we go down, down, down

y;

Here we go backwards and forwards

And here we go round, round, roundy

「ああー！」

わらべ歌に合わせて高く持ち上げたり振り回したり。

知ってるか？ マザーグースって、和訳すると「がちょうおばさ

ん」なんだぜ……？

「……おや」

喜色満面なカグヤだけど、その小さい肢体から空腹感を受け取った。

手の本を机の上のそのの山に追加して、

「お腹空いたか？ カグヤ」

「うー！」

「そうかそうか。……笑顔のままだからまいちわからないけど空腹ってことにしよう」

わざわざ床に降ろして歩かせるのも可哀想だし、そのまま抱えて

食堂へ向かう。――空きつ腹抱えてじつとしてろつてのも酷な話か。カグヤん家……なんだっけ、朝鮮人参？　そこから帰ってすぐ「美味しいもの作ってあげるからねー？」と永琳が台所に消えたことだし、そろそろ頃合いだろう。

カグヤから抱きついてくるから持っているのは簡単なんだけど、抱えたままで料理はできない。二人で大人しく席ついてるか、とカグヤを持つ手を直した。

食堂の扉を開けると、丁度永琳が鍋をかき回していた。湯気の向こうで、銀色がくるくるとリズム良く左右に揺れる揺れる。

永琳は銀髪で、カグヤは黒。……オレも間をとってピンクにでも染めてみるか。

「カグヤがお腹空いたってー」

「あら。まだできてないわよ？」

艶やかなカグヤの髪を梳きながら、できてないってさーと話しかけた。あー、と頬を引っ張られた、あー。

よっしゃ手伝ったる、とカグヤを適当に席に着かせようとしてひと悶着あったが、ぬるりと意識を外して調理場に立つ永琳のそばまで歩く。

「もつと遊んでると思っていたわ」

「いや、結構時間は経ったと思っていただけだね。眼窩周辺の神経の配置をささやかに勉強した」

目の下の隈をなぞるように指を動かしながら、大体30分ぐらいだったか、と言った。永琳は壁の時計と、ついでに寂しそうに椅子に座らされているカグヤをちらつと見た。

「そう？　私も生憎、時計は見ていなかったのだけど、15分程度だと思ってたわ」

「ふむ。その激しさゆえに二人の想いが悲しくすれ違っていたわけですね」

「悲劇的ね、主にアナタが。……こっちは大丈夫だから、カグヤを

お願いできる？」

「お安い御用。……オレはフルーツだけでいいや」

「大丈夫よ、今日は野菜スープだから」

子供好きをアピールしつつ献立の変更を要求したが、叶いませんでした。まあ野菜なら、食べられるけど。

香辛料を用意し始めた永琳に背を向ける。気分を払拭する為に、茶目っ気を出してカグヤの背後から忍び寄った。もちろん、能力で不存在気取って。

「しりゃー！」

「おおっ」

伸ばした手を叩かれて、抱っこを要求してきたので大人しくそれに応える。

普通に人を看破してきたこの子とかなんなの？ やっぱり能力を持っている証拠……でも永琳も見えてないし。

「この絶壁め！ ……あああ」

「ばやっ！」

悪口が分かるのか女性の本能か、背中へ回った小さい手に皮膚を思い切りつねられた。そのまま肋骨の間をぐりぐりと弄られる中、皿を運んできた永琳に目で助けを求めた。

「仲がいいわねえ」

「にききゃー」

既視感のある返しをしながら永琳が皿を並べていく。

もういいよ！ と、離す努力を放棄して、自分の椅子に座ってその足の上にカグヤを置いた。こいつの分の皿を引き寄せて、バカツプルの伝統をこの身で実践する所存です。

「大丈夫？」

右手でスプーンを持って、左手でもスプーンを持つオレを見て、さすがに永琳がそう聞いてきた。

「なあに、左手でカグヤにスープを飲ませながら右手で自分の分掬いっつ林檎を齧るだけだから」

「それを世間じゃ馬鹿げてると表現するのね」

「ききー」

「——まあ、懐いてくる赤ん坊を邪険にもできないし。若いうちが華つてことよ」

若い、若いよーと頭を撫でまくる、そのカグヤをパンを千切る永琳に突き出して、

「実はオレちよっと若い世代との会話に自信がな」

ツ——。

なんでオレ食卓に突っ伏して、ついでに頭の上にカグヤが陣取ってんだ？

「……………？ めきやって音が上からして、そっからの記憶が…………あれ？ 何してたんだっけ？」

「せあー」

「痛い痛いカグヤそこらの髪引つ張らないで痛い何故か痛い」

わけがわからないまま、後頭部をさすりながらカグヤを胸の前に抱えなおす。

目をこすって、永琳に「もしかしてオレ寝てた？」と聞いた。

「いきなり倒れたのよ」

あくまで微笑んでスプーンを握る永琳。

まあいいか。寝不足ってことにしておこう、と切り替えて自分もスプーンを掴む。

丁度オレの心臓の真上あたりに頭でもたれかかっているカグヤに、
「はい、あーん」と言いながらスープを飲ませた。

「カグヤ……もう誰か愛してる人と“はい、あーん”なんてしたのかい？ まだだよなア。初めての相手は他の誰でもないッ！ このメイだッ！ ——ッ」

「食事中は騒がない」

「はい」

「やうやー」

と、そこでカグヤがスプーンを嫌がった。

いやいやと首を振っていたのでなんだと思っただが、どうやら人參がお気に召さないようだ。

「あー……」

無理矢理口をこじ開けてでも食べさせようか迷ったが、それするとなんかダ目だと聞いた覚えがあるしな……。

ふむ、と一つ首肯してまず自分が一口食べる。

「ほら、美味しいよー？」

「……………」

カグヤが、オレを見て、人參を見る。永琳もオレを見る。そんな目で見るなよ。

数秒の葛藤の末、やっとカグヤがフォークの先を受け入れてくれた。フォークじゃないスプーンか。

じゃあ折衷案として先割れスプーンでどうよとか思いながら、カグヤがしっかりと噛んで飲み込むのを確認する。

「やっぱり喰わず嫌いじゃねーか」

カグヤの口元を拭きながらそう言って、視線が合った永琳と苦笑を交わす。

「その年齢で、本当に子供が好きなのね」

「まあ、そうかもね。——子供が好きって、なんだか危険な響き」
若作りってよく言われます、と返そうとしたんだけどなぜかカンがそれを避けた。

結局無難な調子で返したら、唐突に來訪を告げる音が頭蓋の空洞の中に響いた。

「っ……………」

盲点からの急襲に隠れた方がいいのかどうなのか、手がうろろうろして視線が定まらない。

「大丈夫よ、たぶん」

物凄く大丈夫できない言葉を言って、永琳が玄関へと向かっていった。

「やー！」

いきなり上がったカグヤの声にもびっくりして、慌てて下を見た。震えながら握り締めていたスプーンが何度もカグヤの頬を叩いていたらしい。

「あ、ああすまん」

「やーあ……………」

次にカグヤは皿の林檎に手を伸ばし、持とうともせず叩き落とした。それが床に触れる前に、咄嗟に伸ばした右手が掴んだ。

「……………」

そのまま握り締める。徐々に、手の甲のような腕の髄の中のような手首の動脈の中心のようなところに徐々に徐々に、沈み込んでいく衝動がた々溜まる。

くしゃみが出る、と大きく息まで吸い込んだのに出てこないような感覚。

相当に弱ってる。能力の使い方が思いい出いせないなんて。いただきます

「……………あーあ」

軽い溜め息を、一つ。

林檎を手首の力だけで上に放り投げ、重力に引かれ元の位置まで落ちたときには『喰い』終わってる。

「……」

能力で食べたところで満足感は噛み締められない。空いた手でも一つ林檎を取って、よく熟れた色合いをしている皮に噛みつく。果汁が弾けるように口の中に広がって、味蕾を刺激していく。

前は皮を食べたら背筋に悪寒が走ったのだが、今はない。能力からくる食欲か、歯が丈夫になったのかのどちらかだとは思うのだ。そういえば煮物の人参の皮とかも駄目です、あいつら面倒がって皮剥かないから結局自分のために全員分作るしかなかったな。

そうやって思考を流しそうめんを流す装置の横に水を流すように流して捨てながらも、餡子を運ぶ働き蟻よろしくせつせとカグヤにスプーンを食べさせる。失礼、スープを食べさせる。

一度わがままを言ったカグヤも今は快調に食が進んでいるご様子。この分なら世界を狙える。

げっぶってさせないとまずいんだっけ、と思っていると、音もなく廊下の扉が開いた。

「んー、おかえり」

「ええ、ただいま。――落ち着いた？」

中座した椅子に再び座る永琳。美人は仕草の一つ一つが様になるなー、と思ったのであった、自分。

「カグヤに癒されたよ。よく考えればボ口を出してないんだから見つかる理由もないしね」

そう、と返事をしてスプーンをとる永琳に、今の人は誰だった？と聞き返す。

「仲のいい郵便屋さん。いつもはお茶ぐらい誘うのだけど、今はちよっと遠慮させてもらったわ」

「ふーん。そういうのの原因は早めに取り除きたいよねー」

「げんいん、と精々原因っぽく言ってみた。きゅつと首を絞められた、レベルの殺気を感じた。」

笑顔の裏側をのぞく勇氣はなかったので、食べ終わったカグヤの皿を手早く片付ける。

「後始末はやっておくよ。ついでにカグヤのおやつも作っておきたいし。——とりあえず、カグヤを寝かしつけてくる」

「悪いわね。私の方も、これから半日ぐらい薬作りに集中させてもらって構わない？」

「じゃあ夕食も任せとけ」

食卓の重ねた皿はうつちゃって、とりあえず目がとろんとしてきたカグヤを寝かすために席を立った。

「蓮の字面から最初に連想するのはもちろん蓮見琢馬君なんだが、妹は蓮子がどーとか言っていたような気がするな」

蓮子って誰よと聞いても、「JST! JST!」とそれこそ連呼するだけだった。

アイツ、彼女、あの子。僕の中の代名詞は大体妹用と位置づけさせられております。

「JST! JST! ……………」

がりがりと頭を掻く。寝てない期間がそろそろ致命的になっているせいか、集中が時折ばつんと途切れる。今はなんだっけ、蓮の字がどーとか……だったか？

がさつと音がして、視線を下に向けた。床一面、自分の筆跡で書かれた膨大な量の字で埋まっている紙で一杯だった。

なんか手に持っていた紙面を読むと、記憶に無い記憶が新たな記

憶として“オレ”になった。

月で生きる事と、『穢れ』は切って離せない（参考——？でもわかる！　　月のあれこれ）。『穢れ』がないから物は腐らないし、月人は永遠の民を自称できる。……腐らない。言わせて貰うならば、この場合の腐る腐らないとは——要は『穢れ』の定義として捉えてしまっているのだらう。生き物に寿命を与え物から永遠を奪う、とされているモノ。本の内容が真実一辺倒ならば、元々永遠性というものは誰しもが備えているという事になり、穢れを克服した月の民は確かに『自称』するに足る。

ここで我が身に立ち返って考えると、『意識の焦点を操る程度の能力』。これが光の屈折を操るとかなら理解が早いし、機械なんかも騙し通せたんだが、この能力は『意識』をどうにかするもので、そこは会話の能力とも相通ずる部分があるのかもしれない。

確認できる範囲で証拠を取り揃えたところで『穢れ』と『意識』。確認とまではとも言えないが、これで世界はなにも目に見えている部分だけではない……と、まあ推察ができる。認識、概念とでも言えばいいのだろうか？　穢れという『概念』が存在できない世界。どうでもいいけど世界の世って字とひらがなのせって似てるよね。ついでに平仮名って字に漢字があるのもどうかとは思う。

そこで顔を上げて周囲を見回した。書かれていた本がある。再び字を目で追った。

そこが最初の疑問、「自分の気持ちから湧く感情を他人に移せるのか」に立ちはだかってくる。運がいいのか悪いのか、ここは現代水準がある域では軽々上回っている科学力が大手を振って歩いている月で、例えばその感情を正確に脳波として記録し他人に電気信号として打ち込む……なんてアプローチができるのかもしれない。だが残念ながらオレ自身にそんな方法は残されていないので、先の認識だとか概念の方面から攻めるしかない。攻めるしかないのだが、ここでその永遠性がどこまで及んでいるかが重要となってしまう。言い換えれば『変わらない事』。感情の定義固めとか諸々をふっ飛ばして進めても、自分のそれを他人に移した段階でそれは変化になるのだろうか。——変化というのも難しい話だ。拡大解釈してしまえば、結婚・育児だとか食事や成長も含まれてしまう。ここまで含めて考えるのは間違ってるだろうか、もちろん間違ってるよね。そろそろ右手が痛くなってきた。

そして、「最後に全てを完結させる重要な一文が残っているのだ
がそれを記すには余白が足りない」と結ばれていた。
紙を裏返すと何も書かれていなかった。

「……………」
さっきの永琳との『認識』のずれ。

……どうやら中々愉快的事態になっているようですね。

おもむろに立ち上がる。少し立ちくらみがしたから、こめかみを
押さえて須臾しゆゆった。

カグヤは午睡にふけっているし、永琳も届いた材料で薬を作るの
に集中したい、と作業部屋に引っ込んだ。この世の王にはなれない
かもしれないが、何かをするには絶好の機会だ。

急かされる急ぎ立てられる。『意識』を意識した衝動が、急ぎ立

てる。

オレが大事だなんて思ったものがどうでもいいもので、大事だと思わなかったものがとてもとても重要なもの。

「……………だったらやり続けるしかないんだけどさ」

オレに優しくない世界。

「オレの愛おしい世界」

レシピは食欲（後書き）

このペースでいくと、月編は早くて後6話ほどです。そして原作までのイベントが、大きい塊で……あれ、軽く数えて8つある。
……いつ霊夢に会えるのやら。

食欲はレシピ（前書き）

その目に映るものってなんですか？

食欲はレシピ

自称人間。

何を言っているのだろう。

自傷人間。痛覚つてのは生物に必要なんだと、痛感してますよ。

……それにしても、食欲ってどこから湧いているんだろう。

わかる人がいたなら、きっと羨ましいと思います。

暑い。どうだっていいが。
飢えている。どうでもいいけど。

今や視覚を痛みで彩り始めた偏頭痛で、偏頭痛。全体的にピンク
っぽい（魔界では人肉色と呼ばれているのは蛇足か）。

船を漕ぐように揺れている、右と左で尾を引く光景の速さが違う。

「……………」

わざとらしく走り出した。

辿り着かなくては。そして、探し出さなくては。そして、手を伸ばさなくては。そして、見つけ出さなければ。そして、声に出さな

ければ。そして、指差さなければ。そして、触れなければ。そして、映さなくては。そして、感じなくては。

喰べなくては、死んでしまう。

「見えているこの色はもしかしての某まん丸吸い込みキャラを模せというカーズ様からの交信なのか」

食欲が込み上げてきた。口の端の生唾を手の甲でこすると、異臭と共に右手の表皮が溶解していった。白い基節骨中節骨が視界に飛び込んで、世界を彩る。

肉の溶ける臭いはしないけど端の肌が泡立ちながら黄色く変色していて、自分の事ながら気持ち悪い。途端思い出したかのように血があふれ出して、手首までが一色に塗りつぶされ傷が治る。

「じょおおおだんじやあねエーっスよッ！ コラア！ ……いや、冗談、かーも知れねえが」

とりあえず、前に2歩進んで後ろに同じ分だけ下がる。素早く左へ、返す動作で右へステップ！ 反復横跳びの要領でもう一度！そして—— BとAがねえ！ と膝から崩れ落ちた。

「くるくるくる、つと」

風はなく、自分が動くときにだけ空が押しのけられ、ほんの僅かに乱れる。踏み出した下駄の下で、木と道がこすれる音を耳朵が拾う。この道は何色なのだろうか。

右足から左へ体重を移したときに、不意に湿った匂いがした。匂いというよりは……湿り気を直に鼻で感じたような感触。……。鼻で感じたとかいってにおいて視線を落とすと、左足で湿り気を感じていた。感じていたっつーか、出血していた。

丹前の裾が赤く染まり、元の茶色と混ざり合うわけもなく不愉快な色合いをかもし出している。「問題なく治す」と言うまでもなく治ったりするのは便利便利。誰かついでに頭か心が精神も治してくれ。

あとちよつとで狂う気が、ない可能性も否定は出来ない。

狂気……狂い。

バットで相手を滅多打ちにするだとか、眼球で食卓を彩るとか、もつと言えば人肉嗜食とか。

そんな、目にも優しい血が吹き出る描写だとかそういう無粋なものには要らない。オレにも要らない。

間違っているもの。あるいは——正しい事。

例えば大きく伸びた影に足を踏み入れること。その黒に包まれた瞬間、あるいは世界はひっくり返ったのかもしれない。

「We wish you a merry Christmas」

この世界で、自分の鼓膜しか震わせられない言葉を歌う。

「We wish you a merry Christmas」

信仰心なんて持っていないし、ここで意味を理解するものもないだろうから、それが丁度いいのかもしれない。

「We wish you a merry Christmas」

（片羽を掲^{かか}げて君に祈る。オレになることを）^{メリークリスマス}」

世界に数多在る宗教なれど、全てがまるで違うと言う事もない。

各地に三本足の鳥の話は点在しているし、おおむね黒鳥は不吉な存在だ。

吹き抜けの先には下水のような壁が見える。高層ビルの影が投げかけられ、近代美術を気取るそれに何気なく一歩踏み出す。黒から影の下へ出る。

そうして視界に色が戻った。空虚なれど鮮やかな桃花は消え、ただ真実というだけの味気無い世界が戻る。

「ども。人間に成り損なった妖怪です。妖怪に成り損なわなかった人間です」

「ばーつと目の前に“在る”白と黒の中間色みたいな何かに一応、心の籠らない挨拶を。下へと視線をずらすと、月人らしいやつが横たわっていた。」

「枝か何かでその死体をつつこうとも思ったが、冒瀆的だからやめておく。――枝がないから？ 何言ってるの？」

「人を踏み躪^{にじ}るってどう思うよ？」

目の前の、空間の染みみたいなものへと声をかけた。

「――それも、いくつかの種類は考えられるよな。いやえろい方の意味じゃなくて。無意識に無自覚に人の気持ちを台無しにするヤツ。トランプで城積み上げた瞬間にケーキ買ってきたよ！ と勢いよく扉を開けるとか」

「染みの返事を待たずに続ける。口どころか人間との共通点が何一つ見出せないシミーだが、無視されてるなら寂しいものがある。」

「『……げる』みたいに確信犯ならいいのかわいいのか。ちなみにこの確信犯の使い方は誤用ではありませんことよ。最悪のタイミングで最悪の事をされたらこいつわざとやってんのか？ なんてつい勘ぐりたくもなるしね。意識的に自覚してそれを行うヤツは、主観で断じるか客観で判断するのか。正義のためにするヤツと自分のためにやるヤツとでもまた違う気がする」

「てぶくろでろくぶて。くつしたの反対は？」

右手で左手首をゆっくりとなでまわす。徐々に手の甲へ五指へと動かし、五つと五つの指を絡め合わせる。

「オレもお前も、通常『悪』とされている行動を規制する社会とは無縁でいられる。オレは黄泉がえりだかD4Cだからこうして新たな世界に立っているわけだし、もしかしたらこのハンサムな顔の下に隠しているのかもしれないドス黒い衝動を振るう事にためらう理由も、もしかしたら無いのかもしれない」

――応答、なし……………え、なに、オレの顔ハンサムついてる？ ぎゅっ、と手を握りこんだ。肉に食い込む爪と骨がえらく冷たいと述べた。同じような感触を首筋に受けて、手をやる。指先が僅か

に濡れたが、前にもつてきたそれには何もついてはいなかった。

人差し指をねぶる。いやに鉄の味がした。「さっきの血が固まってこびりついているはず。だから右手は赤いはず」

再度死体を見た。足を正座のように畳んで上半身だけを後ろに倒した格好で、特に何も浮かんでいない顔を晒している。

死んでいる。

——枝がないなら下駄でつつけばいいじゃない。

「思うだけでやらない。やらないだけで思ってる。……妖怪は人間を食べるものらしいね」

首を軽く回す。頸椎をぐぎつと鳴らし、そのまま視線を前に戻した。

「逆にお前は『思い』だね。オレの衝動であり、月にはないはずの穢れであり、誰かの忘れ形見。

ここまで呼んだのはお前か。……まあそこに転がってる死体ではないだろうから」

からー、と言葉を切り、「染み」の反応を待った。

喰うしかない、と結論付けたオレの目には、変わらず灰色に見えた。

「世界が飢えるべきか自分が飢えるべきか。お前が消えるべきかオレが消えるべきか」

一歩、前へ踏み出した。「それ」がかすかに歪んだ気がした。

決まってる。「アイツ」だか「彼女」だか「あの子」、だったか。

「お前」が消えてくれれば、まあ嬉しいよね」

ばぐん。

うなる。——低く強く、重く重く。

あるいは、そう——蟲の羽音。右と左と後ろと前と上と下とそれ以外から聴こえる。つまり、何も聞こえない。

物理的な刺激となつて鼻腔を刺激する臭い以外の要因に辟易しているのに、足が動かない。治つたはずの、さっきの痛みだけが鮮明だ。主要な臓器は……活動中。肺とか胃とか。そのまま意識を内側に傾けようとしても、何かが全身を纏わりついているような感覚が神経を逆なでる。口の中で音と感触と臭いを突っ込まれたような味がしていることだし、早いとこどうにかしないとイケないかも。

臓物が腐つて蛆がたかるような臭い。

臓物が腐つて蛆がたかつて血が滴る臭いと音。

臓物が腐つて蛆がたかつて血が滴つて腐敗が進む臭いと音と感触。

臓物が腐つて蛆がたかつて血が滴つて腐敗が進んでいるような、

臭いと音と感触。鉄の味。

ばつん。どくん。

黒い。——色0784すら見えないほど、黒い。

上を見ているのか下を見ているのか、それ以前に体が見えない。

浮かんでいるようにも見えて、その実ただ突っ立っている視黒黒黒黒界がある。

何も見える。

何が見えない。

愛するものも美味しいものも綺麗なものも素晴らしいものも死因も慟哭も真摯も喜愛も色も己もケも阿も見ない。
けれど、永遠でもここにいたい。

ばつつ、どくん、どくん。

人間……？ …… あーはいはい、そうね、そうさね。

死ぬよ？ 男女二人で放っておいたら情死だなんだとぬかして、死ぬよ？

死ぬよ？ 無呼吸で幾ばくかもせずに死ぬよ？ 真空を吸ったら一瞬で昏睡するよ？

死ぬよ？ 自己防衛機能のはずの免疫やらの過剰反応で死ぬよ？
死ぬよ？ 全身の3分の1が焼き爛れれば死ぬよ？ 逆に中心温度が37度前後のはずなのに30を下回るともう危ない。死ぬよ？
血液を失ってももちろんそうだし、急激な喪失で血圧を保てないとショック症状も併発するよ。働きすぎてもそうだし、病魔に冒されると不味い。外気に触れえぬまま沈むこともある、そもそもゴールにたどり着けばそれまでだ。――餓死、とかもさ、考えといてくれい。

お前とは違うよ？

どくつどくん。

腐る。腐る腐る腐る。

爪の間から、鼻の穴から、耳の穴から蟲が這入ってくる。気持ちが悪いなんて気持ちじゃない。意識が空回るオレの血が滾る程度の怒り、で、身体が無い。体の内側を這い回られる事への、生理的嫌悪とそれをはるかに上回る向けようのない殺意が、空っぽの胸の中へ喰われている。蟲共が勤勉に体内を這いまわって「オレ」を喰い干切っていく。さらにさらに細分化し深奥へ末端へ向かって、細胞の一片を切り刻んでいく。蟲如き、如き！！単なる餌でしかないオレの、空いてきた体の空間に卵を産み付けられた。もう駄目だ。すでに血と肉と骨が尽き、代わりに体内を蟲が絶えず躍動する感覚に、まるで蟲の四肢を持ったような感想を抱いた。

見えるのは黒と黒と、黒？

心臓が、鼓動を打った。

気付いたら、いや気付かないで元の袋小路に立っていた。影が完全に、四方を壁によって囲われているこの場所を包み隠している。

「……………」

涙が出た。力任せに目をこすり、ぐすつと鼻をすする。

オレの中にあるのに制御ができないものがあって、泣きたくなくなるくらい暖かった。

「冗談じゃ、ねう……………！」

薄くて弱い、オレの心は、今の体験でもう限界だと告げる。

それでも、もうちょっとだけ……………思考を続ける。体感した直後にどれだけ把握できるのか、自分でも疑問だが。

———今『喰べた』ものは、「穢れ」。元々無理に霧散させていたものが吹きだまっていたのか、オレという存在がいる事による弊害か。おそらく後者だとは思うけど、正直どうでもいい。

今最も重要な事態——「穢れ」の味を知った今、自分の中のそれを自覚できるということだ。積極的に世界と調和する感じ。

駅では白線の内側までお下がりください、おい誰だ注意されてる

のはと左右を見たら皆オレの後ろにいて、鼻先をかすめる車体に「気付いていなかったの？」と皮肉られる。

『一步引いた』今、この月というやつがどれほどの狂気と狂気と力で満たされているのか実感できた。と同時に、本に書かれていた供述の中に、魔力という説明があったことを思い出す。

この感じている力の部分は魔力らしいが、割合的に2：1だ。

「穢れ……………穢れ、ね」

口の中で、噛み締めるようにゆっくりと呟いて。

上を見上げた。我が愛しい母星は、天蓋に阻まれて見えなかった。

そして——覚醒。

「——覚醒」

言ってしまったから、思考を直接言葉にしたいの外気恥ずかしいとわかった。

そんなオレを優しく見つめてくれているのは、どこかで見たことのある扉。よくよく見る振りをしながらも頭は永琳の家か、と判断する。

今の今までページを割いてきたことを夢落ちで済ませる気が、つつー理由で怒ろうか数模糊の間迷いインターフォンを探したが、自分の中の綺麗な部分と同じぐらい見当たらなかったからとりあえず入ろうと気を取り直した。どちらにしろ、オレという存在が露見しないことが重要なのだ。思いつき死体が転がっていたので、どちらかという夢のほうがいいと思う。

軽やかに廊下を歩き、永琳の気配がする……と思われる部屋へ。単に見慣れた食堂へ向かったともいいます。

「あら、お帰り」

自分というものを見つめなおさせられた直後に、輝かんばかりの笑顔。例えるなら教会の横に娼館がある感じ。逆か。

永琳自身もさることながら、座っている椅子ともちろんセットの机の上、さりげなく置かれている赤い弓と弦がとても素敵だ。

「たった今、速報で月人が死体で発見されたと連絡があつたわ」

前置きもそこそこに、いきなり確信へと進む話題。オレは机の上のに一切注意を払わず、永琳の質問に答える意味はあるのだろうかとか考えた。

永琳は動かない。

「……………何が言いたいのぞ？」

改めて部屋を見回すと、あちこちに花が入った花瓶が置かれている。それらを取り巻くように、見るからに体に悪そうな桃色の薫煙があつた。

「——薬師ならではの防御壁つてやつですかい。……そして疑われてるってわけか」

心外だなあとやって、大仰に両手を広げてみせた。

「疑いを晴らさんがためにこうしているわけですが、ね——そもそも、そんなものオレには効かないよ、影響ないよ。——毒物だろぅが劇薬だろぅが『喰え』ないわけがないじゃないですか」

営業スマイルを浮かべる。永琳も柔らかく微笑み返す。

「味わう事もできないような生き方、それこそ『味気』ないわ——

——。未知のものならば、少なくとも一回は『噛み締めて』みても遅くはないのじゃなくて？」

「——なるほどなるほど」

モットモットモ、と頷いてみるものの、沸々とわく怒りが、内側にこびりついてくる。

参つたな、さっきの怒りを八つ当たりするような悪い子じゃ、なかったはずなんだけど。

「世の中にはそれなりの態度つてものがあるよな？ 悲しいときには悲しい顔、嬉しいならにつこり笑って、怒ったら言葉なり態度な

りでそれを表現する。家族が困っているなら拳をかがげて向かって、どんなに嬉しい気分でも相手が悩んでいたのなら肩を抱いて一緒に泣いて怒ってやる」

話しているうちにだんだんと語尾が荒くなっていく。

とめられなかった。

「いえ、違うの、そうじゃなくて、ただ念の為に確認を——」

「たしかに共に経験した年月は短いかもしれない。特に永琳にはまばたきのような長さでしかないのかもしれない。オレが他に頼れる人がいないってのも、たしかにそうだろう。だけどオレとしては、少なくとも腹を割って話し合うぐらいには信頼していたつもりだったのに、それなのに——ッ」

「あー」

突如訪れた静謐。せいひつ

そして、足元で見つけた！ という顔をしている、カグヤ。

「……………」

「あー！」

—— ゆっくりと手を伸ばして、その柔らかい手をとった。全身でしがみついてくるカグヤに。

やっぱり、癒されてしまう。

「—— それじゃあ、今日のまとめとして。どんなことがあっても、赤ちゃんを一人にしない事」

虫がいいのかもしれない。

たった今、あんな事を言っただけで……それでも、永琳には笑っていてほしいと、素直に思った。

「ついでにカグヤの能力も判明したぞ。一瞬で距離を零にした、つ

まり時空間系だ」

永琳の向かいまで進み、椅子に腰を下ろす。沈痛な面持ちの永琳に、謝罪は不要、と目で語りかけた。

「……………」

永琳は何度か息を吸い、吐き、そして顔を上げた。

目にはまだ、ややその色を湛えてはいるが、ようやく見慣れた永琳に出会う。

気持ちを無理矢理押しとどめてもらう形にはなったが。

やっぱり笑顔が、オレは好きだ。

永琳の赤い唇が動く。

「アナタがないものだから、失礼だとは思ってたけど部屋に入らせてもらったわ」

「いや、居候でそこまで居住権を主張する気もないし、別に大丈夫」
さっきの初体験の影響か、少々言葉尻が震えた。

「……………これなんだけど」

そう言われて差し出された紙を一目見て、前言撤回。様々な憶測がくるくるくる。

「まさか美味しいプリンの作り方を書いたやつじゃないだろうね。
気持ちのやつ？ それとも精神のやつ？ いずれが月では危険思想？」

「……………」

あきれたような視線をよこされ、そのまま手の紙を渡してくる。
一目見ただけで、お互いの言動の不一致の原因がわかった。
紙には何も書かれていなかった。

「……………あれー？」

「やっぱりね」

紙の後ろに焦点をずらして、何がやっぱり？ と聞いた。
カグヤの髪をなでつけるのも、随分と久しぶりな気がするわー！。

「簡単に説明してしまうなら……そうね。月には高濃度の狂気で充滿しているの。……言ってなかったかしら？」

「……言われたよーな気がします。それで？」

「部屋に入って、散らばる白紙を見て最初に考えたのが、アナタがその狂気にあてられたんじゃないかってこと。でもそれだと本人がない説明がつかない。あくまで自己の内面に左右するものだからね」

結局どこにいたの？ と聞かれて、咄嗟に返す言葉がなかった。信じてもらえるもらえない以前に、自分の中でもあれが現実なのかどうか確信が持てない。

穢れを自覚したのは単なる必然だともいえるし。

「——ま、追々聞かせて頂戴」

「え？ いや、ちよつと待って、考えてるだけだから……」

「いいわ。——信じてるもの」

その台詞に、今度こそ言葉を見失う。ウインクうめえ。

「カグヤああ……。オレ、永琳に惚れてしまいかもわからんよ」

「あうー」

カグヤの全身を抱きしめて、そう吐露する。どんだけこの子はオレの髪を引っ張りたいたいんだ。

「——××」

……………ん？

「八意、××。そう呼んで頂戴」

「八意……○○？」

同じ喉から出てることを呪いたくなった、美声と発音。

「発音はまだ無理……みたいね。まあいいわ、覚えておいて」

なにせ本名なのよ？ と永琳ほどの美人に言われて、男としての喜びが込み上げてこないのは損かも知れない。オレは別にいいんだけどさ。

負け惜しみでは、ない。
多分。きっと。

そして。

「あー？」

幼く、自我というものが薄いカグヤは、夢から覚めた後で『能力』がないことに気を悪くした。だが気づく、なんだ——すぐ近くに
いるじゃないか、と。……………。……………？ 迎えに来てくれない。
いつもの様に抱き上げてくれない。どうしたんだろう。気になった。
少し『時間』は掛かったが、しばらく髪をなでられているとそんな不機嫌さも忘れた。

自分ごと椅子に座ったらカグヤは、彼女お気に入りの姿勢をとる。
左足の上に跨り対面で抱きつくのだ。基本的に暖かい体温が伝わるし、なにより『命』が丁度顔の正面あたりにくるのがいい。今日は
なんだか声がうるさいけれど、そんな事はお構いなしに髪やら何やらで遊ぶ。特に深い意味はない。

「やー……………」

「ほら、カグヤ」

いきなり『それ』が泥のように弛緩したことに疑問の声を上げると、永琳に後ろから抱きかかえられる。

「寝かせてあげましょう。すごく、疲れているのよ」

「……………」

そう言つのなら、そうなのだろうか。

だったら、ゆっくり休んでいられればいいな、と思った。

食欲はレシピ（後書き）

どうでもいいけど花瓶の煙はアロマです。すっきり沈丁花のかほり。

そういえば付け忘れてましたが、前回の兎さんは鈴仙じゃないですよ。

今のところ原作キャラは……3人か。ごめんね、まだまだ出てこないんだ。

BGM "We Wish You a Merry Christmas"
"Anonymity"

今日の献立、明日の献立（前書き）

笑顔ってなんですか？

今日の献立、明日の献立

「素人が」

そんな言葉と共にコンパクトな脛蹴りが放たれる。軸足から腰、蹴り足のもも、膝、つま先へと力が連動していく軌跡は見えるが、いかんせん体がついていけない。耐えられなくもなさそうな痛みなので、無視。

瞬間叩き込まれ、足の骨が砕け散るような感覚。無視。

「お、うつ」

ずっとポケットに突っ込んでいた右手を斜め下の角度からひるがえす。握り締めるカッターナイフに声をあげ、しかし反応されて易々と跳ね除けられる。場慣れしているのは嘘じゃないらしい。

手首を叩かれた衝撃で落としたカッターナイフが、アスファルトに落ちる光景を、相手は残った左目だけで見る。

「あ、あ、うがあああ――！」

やっぱり言われた通り爪を切っていればよかった。

相手の右目を抉った左手を一瞥して、そうかすかに後悔する。もう片方のポケットから出したティッシュで爪の間を取り除きながら、道に這いつくばっているその頭の横から蹴り飛ばした。襲ってくる痛みが、骨折していますよーと教えてくれた。

「ふざ、けん、なよつと。なに折ってくれてんだ」

さらに3発側頭部を狙って殴り、相手が完全に戦意をなくすところまで追いやった。ただ、今のそいつは呼吸音だけでもひゅーひゅーとうるさい。

抵抗する意欲が残っていると反撃を食らうし、その可能性を減らしていくと今度はびーびーとうるさい。中々難しいもんですね。

右足を引きずって近づくと、そいつは「あ、あひい」と気持ちの悪い声を漏らした。ついでにその顔も汗とか涙や鼻水にまみれていて、それ以上近づきたくもない。

「だ、誰だよお手前はあああ!!」

生意気な減らず口は齒を何本折った段階で静かになるか試したい衝動が襲ってくる。

「××××君だね?」

一転、押し黙る。そいつが黙り込むだけで、闇夜が一層存在感を増す気がするほど、あたりから音が消える。

暗闇なんて気が滅入る場所で、不謹慎にもオレは全身が滾る感覚で満ち満ちていた。

「常日頃から、妹を×^{おか}そうと周りに吹聴してたそうだな。だから、そう、なる……まえ、につ……」

ニンマリ、といった感じで歪む口元を、手で覆い隠した。冷静に進めようとしたが、話している間に猛烈な怒りと殺意から、吐き気まで催してきた。

「いや失礼」

その全ての感情の上から、笑顔をかぶせる。ハロウィンの力ボチヤのように、間抜けに開いた口の中に蠟燭^{じふん}が見え隠れするぐらいで丁度いい。

そして全力で感情を抑える。握りこんだ右手が自分の爪が食い込んで流血を見せ、左手が鎖骨を掻き毟って襟元を赤く染める程度。無差別な暴力衝動をぶつけるほど、物の道理もわからない小僧ではない……つもりだ。

落ち着け、冷静になれ冷静に。自分にそう心の中で言い聞かせ、何度も何度も深呼吸を繰り返した。逃亡する動作を見せれば、その都度拳を握って見せる。ようやく激情を振るわなくなる程度に落ちて着いたときには、右手が熱を失って冷え切っていた。

その手で顔を覆い、呻くようにして「なんで殺^{おか}す人間を×^{こら}しちやいけないんだか」と言った。おかすだかこらすだか言ったときに、そいつが人並みに怖がって見せたのが癪に障る。

「で、なんだつけ。本音を言えば一年単位で監禁から拷問までの一通りをこなしたいところではあるが、後々の………あ、そうそう。」

お前が他に襲った憐れな被害者達も団結したから、病院から出ても多分法的にお前は負けるからね。——まあ奇跡でも起こって、歩けるように喋れるようになれば、の話だけだ」

安心しろ、救急車は嫌々ながら呼んでやるよ、と気休めの言葉をかけても返事が返ってこない。自分の世界に閉じこもろうとするそのいつの右目をもう一度突くと、悲鳴と血が飛び出た。

「もっと言えば一週回って感謝の言葉すら飛び出るぐらいなんだよ。強姦の子細を話して回るといふ愚行をお前が犯さなければ、さすがにあのオカマの網にも掛からなかっただろうしね。——話はちよつと変わるけど英語の辞書で『GAYDAR』^{ゲイダー}って調べてみ、ゲイのリーダーって本当にしっかり載ってるから。オレの使ってる辞書だけかも知れないけど、あれには驚いたな……」

と、そこで、この事態の証拠を何か持っていけば、彼女達の慰めになるかな？ とふと思った。

こいつの指どころか腕もあんまり胴体にくっつけたまま残す気がなかったしきつちり道具も持ってきていたが、それ……人間はあまり喜ばないな、と自重した。

「……悲鳴はいくらあげても構わないから、1つだけ約束な。かなり破格の条件だと思うよ？」

首を掴んで無理矢理顔を近づけた。あわあわ言っているが、無視。……口を盛んに動かしているのにまったく声を出さないなんて、

随分と奇特な特技をお持ちで。それをここでする意味もわからないんだが……？

「——今回、妹だけは、何も知らない。泣き寝入りしていた被害者の女生徒も、お前も、それどころか自分が狙われていたことも」指先に骨の感触がして始めてそいつが青紫色になっていると気づいた。生意気な。

ゆるせん。

再びポケットの中から、今度は苦痛を与える用のちゃんとしたナイフを取り出した。ちなみに借り物だったりする。

「妹にこのことを話したら——いや、妹に金輪際近づいたら」
右手を高くかざし、劇的效果たつぷりにその宣告をするつもりが
悲鳴に遮られた。

先走った右手が悪いです。

——悲しい。

地上に帰らなくちゃいけないのが。そして、それがカグヤたちを泣かせているということが。

しがみついて泣きじゃくるカグヤに、そつと上を向かせた。

『今の制度だか体制だかさ、とつとと捻じ曲げて地上に観光旅行にでも来てくれよ』

もう流れるその雫を堪えようもしない、カグヤの頬にそつと手を添えて、につこりと笑いかけてやる。

『わ、わたし……』

『でもね、急がなくていい、ゆっくりとおいで。

そうしたら、メイ特製クロケットをこしらえてあげるからさ……』

一歩、後ろにさがる。

『とってもおいしいんだよ、カグヤ——』

「——っていう、夢を見たんだ」

「ふーん……。私的な解釈でよければ、まず最初の夢はそもそもおそらく自身の過去の」

「ごめん、2番目のしか話していないって設定だから」

数々の書き込みで真っ黒な図面に、単眼鏡のみで立ち向かっている永琳。その作業の机向かいでは、オレがカグヤのおやつにクッキーを練り上げている。

手の感触とカンだけで分量を決めて「あ、粉多すぎた」適当にこねる。最近は料理を作らないお母さんが増えているって話だけど、肩に力入れ過ぎなんだと思う。

食卓の端に置いたタイマーがチンツ！と澄んだ音を奏でた。「ちょ、待って、もう——ちよいっ」焼き上げるっ、と急かすその音に言い訳をしつつ、生地全体をまとめ始める。チンのタイミング、つまりオーブンが温め終わった段階で生地を放り込むはずだったんですが、何か？

すっすっす、と三回直線を引いて、永琳は単眼鏡を机に置く。「

——よし、休憩」と、宣言通りに大きく伸びをしてみせた。

オレの方は、型抜きが面倒なので生地をそのまま手で適当に丸くまとめ皿に並べ始めたところだった。

「お菓子作り過ぎよ。ここのところ毎日じゃない」

永琳が、机に頬杖をつく。皿のクッキーを指差してこのままで食べる？ と聞くと「いらないわ」と断られた。

「子供は体が小さいから比例して胃も小さいじゃん。おやつも食べさせるのが健康的でしょ」

「作り過ぎだつて言ってるのよ。どんなものでもとり過ぎはいけな
いわ」

「果物の果糖で満足はできない！　やはり手ずから味付けたものが
一番なんだつて」

子煩悩な会話がされてはいるが、もちろん永琳との間に子供がで
きたとかじゃなく。

能力の修行と称され、このところ毎日カグヤが遊びに来るのだつ
た。カグヤの親が子供だった頃からの付き合いらしい両家の期待な
ど露知らず、カグヤは無邪気に遊びに来る。さしずめ永琳は“永琳
おばさん”だ。

「ところで永琳」

笑いを必死でこらえて、今の精神状態で出来うる一番真面目な顔
を取り繕う。

「ファンタジーやメルヘンの世界の中に、鏡なんてありませんよ」

……………

セリフ間違えちった。

「……………メイ」

永琳が片手ではつと息を呑む口元を押さえ、その顔に驚愕を浮か
べる。

「私が強力な薬ばかり投与したから……………」

「今明かされた衝撃の事実！？」

金属製のボールがオレの手から滑り落ち、床との接触によって鈍
い音をたてる。

「……………」

「……………」

平静を取り繕って見詰め合う2人。

しかし、次第に次第に、オレが破顔していき、永琳が微苦笑を浮
かべる。

「しかしばあさんや……………。わしらが出会ってもう1年か、早いもん
じゃのう。わしも老いるわけじゃて」

「……………え、ええ、そうね、おじいさん」

今日の永琳はいまいちノリが悪かった。そしてオレのノリは悪い方向に絶好だった。

笑顔を煮詰めた鍋と生ゴミを直前で取り替えられ、「さあ喰え」と言われたような表情をする永琳だが、さすがに慣れた分立ち直りも早かった。

「カグヤもあんなに大きくなってねえ」

「昔はよく一緒に風呂に入ったのに最近じゃ嫌がられ……………あれ、まず入った記憶がねーや」

自分の妄想の中で、世のお父さんと同じ負け犬と罵られる道を歩もうとしていた。

いぬにく、いぬにく。

「あまり泊まらないからかしらね」

「いやお前が入るからだろ」

「一緒に入ればよかったじゃない」

「永琳が性別を偽証していないという確証がない。トロイの木馬の存在意義は城壁の中に引き入れられるまででしかないのだ」

「性転換薬なんてどうかしら？」

「うわーお、一部の人々の夢と希望が詰まってますね。——ちなみに副作用の方は？」

「なにしろまだ机上の空論だからなんとも言えないけど、とりあえず股関節周辺に『臓器を作り変える』痛みが生じると思われるでしょうね」

「想像もつかない痛みですね」

以上、恒例と化しつつある掛け合いです。12ヶ月もやってりや微妙にお互いの思考が透けてくる、先が読める。

でも風呂の話から性転換にいくとは思わなかった。

椅子から腰を上げ、生地を並べ終えた皿を、オープンの中に突っ込む。

何より皿のままで大丈夫ってのがいいよね。焼きあがるのに本来が15分ぐらいだから、月製だと……20秒ぐらいかな、とそのままボタン1つで謎の技術を作動させる。

オーブンが据えられた棚に背を預け、目を閉じた。「いつまでも月にもいられないし。今のうちに砂糖パワーを溜めておくんだって」永琳を、直視したくなかったから。

人間が動くことをやめても、無音の世界なんてありえない。いろいろ聞こえる中、本当に無音を求めたいのなら自分の中に埋没でもしてるべきだ。

1年。今のオレでも長い時間で、それでも短く感じたのは誰のおかげか。その誰かさんが、まぶたの裏側に鮮明に浮かび上がる。そしてもう1人も。

今も昔も眺めていると気が安らぐ暗闇の中に、電子音が響いた。まぶたをこじ開け、色の世界を創造する。その代価は焼きあがったクッキーです。

「……………」

「……ん」

皿を掴んで手前に引き寄せ、出来栄えを眺めていると永琳が何かを言いかけた気がして、振り向いた。

こっからだ、永琳の華奢きゃしゃな後ろ姿だけが見える——先程笑みを交わしたときと何1つ変わっちゃいないのに、その背に拒絶されている。

いくらオレだって、できることなら続けたくない……先延ばしにしておきたい話題の一つもあるから、そのまま沈黙を貫いた。

ただ普段と同じように、あるだけ。

なんとなく椅子ではなく座布団の方に座り、出来立てを摘む。：

……自分を天才と錯覚した瞬間だった。いやまあ、出来立てだと何でも美味しいよね。誰でもそうだよ。

その右に永琳が座ってきて、同じく手を伸ばし始めても、特に異は唱えなかった。

椅子とは違って、座布団はその距離感が大事だったり……するのかもしれない。

「いいらつしやいませええ!!」強烈なドップラー効果を伴わせた雄叫びと共に、部屋の戸が開け放たれる。

より発声源に近い永琳が振り向き終え、“どちらかというとおれのセリフウウ!!”の「ど」と突っ込もうとしたオレが一拍遅れて振り向く、その瞬間にはカグヤは宙へと飛び出していた。

「無限の彼方へ、さあ行くぞ!」

(お前は誰だよ!!　そしてシリアスな空気返せよ!!)

——まずい!　このままでは勢いのついたカグヤの運動エネルギーが永琳を巻き込んでオレを襲う!　女性とはいえ2人分もの重さでオレはなんか……あれ、まずいことになるってかこんな考えられるほどアドレナリンが出る事態なのかというよりこれももう走馬灯のよう……って感じじゃねどいうこと?!)

ここで時間を止めて「やはり…ポルナレフか……」とかできないオレは、冷静に右手をついて逃げ出そうとする。冷酷な発想だが、ひとりを助けようとして全滅してしまうのはさげなくてはならないからで、腹の底から「ザマミロ&スカツとサワヤカ」の笑いが出てしまうが

ずるつと体が流れ、さらに大きくバランスを崩した。

(なッ!　な……なにイ~~~~~~~~、バカなッ!　…………ま、まさか、まさか!)

『フラグ』……………『さっきボウルを落としたという、フラグ』
……。

果たして右手は、その五指がボールの中に突っ込まれていて。

（なんてこった……………このままだと3人ともやられる……………ギリギリまで一緒に倒れる振りをして回避一閃のチャンスを待つつもりでいたが……………）

蓬萊山カグヤの理性が、この場に到着し久しぶりに2人に会った
という思いの前に崩れ去り、彼女自身が宙へ躍り出てから、まだほ
んの1^{たんせつな}刹那しかたっていない…1・6秒程しかたっていない……。

——しかし——

あとその半分にも満たない時間で最終の決着はつくであろう…彼
らをつつみ込む運命を受け止めることだけは…どんなボウルにもで
きないのだ…。

「ちぐしゅうーッあの太陽が最後に見るものだななんていやだー
ーッ！」

「いただきますーすー！」

「えっ？ えっ、えーと……………」

オレとカグヤが思い思いに叫んだ。いまいち永琳は乗りきれなか

った。

「あつつつつ!!」

結局、2人を柔らかく受け止め、120センチ程の弾丸の威力を背と床の摩擦だけで止めたオレが苦悶するのモ。

抱えた2人の笑顔を守れたなら、どうということはない瑣末ではない。

「文明が発達するほど食事が多彩に、そして柔らかくなるって本当だな」

やたらハイだったカグヤが落ち着いて、3人でコーヒーとクッキーで食卓を飾る（内訳としては永琳がブラックで、残りが牛乳と砂糖をイン）。

「そうなの？」

案の定、文明の「ぶ」の字も知らないカグヤが首を傾げる。

文明を育むどころか年齢が文明を85568556855685568556ヤゴコロ。物知りな永琳おねーさんは、すまし顔で黒を嚥下する。

机の下の地獄から退避するために身を乗り出して、カグヤの口元を拭った。踏まれた足が痛い。

「ほら、クッキーの粉こぼれてるこぼれてる……。昔の主食は小動物の丸焼きみたいなものだったんだけどさ。殺してすぐ食べると、これがまた硬いんだ」

たぶん半日ぐらい置いとけば腐乱がいい感じに進んで柔らかくなるんだろうけど、日本人の心は活け作りに見られるように新鮮さも大事だよなーって叫んだかもしれない。

最後の1つを永琳がカグヤに譲ると、それを2つに割って差し出したカグヤ。

水を差すようであれただけどオレは眼中にないんですね、わかりません。

オレと永琳が暗く沈んでも、カグヤが空気を壊す。
妖怪でも、天才でも、完全ではないから。

今と、昔と。

幸せって、そういうもの。

今日の献立、明日の献立（後書き）

月では冷蔵庫はただの食物を冷やすためのものなのだろうか。

感想の条件を変えてみました。わざわざインしてまで意見したくねーやという方も、ぜひ。

胎動する「ト」(前書き)

手に取るってなんですか？

胎動する「ト」

「メイってなんなの？」

「いや、なについて言われても……」

答えに詰まったから、椅子に座ったまま身じろぎをして、肩をすくめた。机に置いた画用紙へ鉛筆を走らせながら、膝の上のカグヤに「酷いこと言うなあ」と、とぼけてみせる。

机と本棚、椅子と寝台の他は特筆するべき物もない自室で平和的に絵を描いていたオレは、騒々しい乱入者が気に入っているらしい場所を提供することで、今日も平穏を保つことができていた。オレに座ったカグヤの後頭部を見つめて、これが透ければ一々顔を横にずらさなくても紙が見えるのになーと思う。

その答えに不服なのか、「だからあ……」とカグヤは続けて言った。

「苗字がメイなの？ 別に名前はあるの？ ……って言ってるの」

「……あ、そういうことか」

正直、眠かったりする。

うつかりあくびを噛み殺し損ねながら、カグヤの肩口に顔が乗るぐらい密着。そして両手で体を抱きしめ、逃げられないよう固定した。

愛を伝えるように後ろからゆっくりと、「命、『メイ』。メイだけでお終いで、それ以外が多分ないから名前だとは思っよ」と囁いた。同時に、遠慮なく全身をくすぐり始める。

「きゃ！ ちょ、ちよつとどこ触って……」

壊れないように加減した腕の中で、小さな『命』がじたばたした。言葉とは裏腹に、カグヤの声や抵抗にはほのかな愉悦がこもっている。

「ほら、体に素直になっちまえよお」

「んっ……！ だ、誰が、あんたなんか、にっ！」

オレが肢体を余すところなく撫で回せば、こいつ骨とか大丈夫かと心配したくなるほどに身を擦じらせて、カグヤの方もなんとか逃げ出そうとする。最近はお互いにどんどんと白熱してきた。勝者はなんとなく優越感に浸れるだけだというのにな。まあ、二人で遊んでいるだけで楽しいんだろうと、一人で頷いてみたりする。――ちっ、なかなか足首を掴ませなくなってきたな。学習したか。

そんな無邪気なじゃれ合いに、少し悪戯心が胸中で首をもたげた。とうとう堪え切れずに子供っぽい笑声を上げたカグヤに、不意打ち気味に耳の裏へ息を吹きかけた。

「ひゅあ?!」

あらぬ声を叫び、反射的にカグヤが仰け反る。頭がオレの胸板に当たって、止まる。

逆さまなカグヤの顔がなんとなく愉快で素敵で、思わず声に出して笑ってしまっていた。目の焦点が戻ったその顔がみるみる赤く染まって、小さな口が「ひ、卑怯よこんなのっ!」と叫ぶ。

普通にカグヤが笑い出してからやったわけで勝負はオレの勝ちなんだけど、今度は割りと本気で抜け出そうともがくから、解放、手を離す。床に転がり落ちて、上目遣いにオレを睨みつけた。

目尻を光らせ、小刻みに震える体を自分の手で掻き抱くカグヤと、その視線の先のオレと。

……………あ、あうとー!

丸椅子の背もたれから起き上がり、まだ彼女のぬくもりの残る膝へ肘を寄せ、あごの下で両手を組む。カグヤは、乱れた動悸を呼吸によって整えている。社会とか、倫理とか、難しい事はわかんない。

しばし、膠着状態が続いた。オレは考えるのが面倒だから完全待ちの姿勢でいるだけなんだけど、カグヤは果たしてなにを考えているんだろうか。

頭の中身どころか、心が透けて見えたなら、机の上の紙を見る以上には便利だろう。

きつと。

「……………」

出会ってそろそろ二年になるか。その間、カグヤの瞳の輝きが須臾とも陰ったことなど一度もない。美味しいものを食べれば喜びに光り、悲しみもまたそれを違う色で飾り付けるだけ。ふとしたことで怪我を負っても、永琳の治療の間じいつと耐え続けるその姿を、見つめ続けていたから――。

今回もまた、オレの根負けだった。

「ごめん。悪かった」

そう言って、抱きかかえるように――あるいは、あがな贖うように――両手を差し伸べる。

声は、返ってこない。

「許してくれませんか――と、ね」

「……………」

もうひとしきり睨みつけ、ようやくカグヤが立ち上がる。無言のままに距離を詰めてきて、オレの手を素気無く叩いて拒絶する。そのまま自分でオレをよじ登った。

「……ん」

座り具合を確かめるように身動きし、その後頭部が数回揺れた。その重みと暖かさに、安堵するオレがいないことも、ない。衝動的に、再びその小さな少女を抱きしめる。今度はただ優しく、ちようど暖めあうように。

カグヤが、オレの腕にさらに腕を重ね合わせて、言った。

「――クッキー」

別に、心が読めるほどカンが鋭いわけでもないけど。

その背中の裏で、カグヤがどんな顔をしているかぐらいは、わかるつもり――だったり。

「また、焼いてね」

まあ、わかっただけでは――どうということでも、ないよね。「今日はワッフルでも作ろうかと思ってたんだけど」

「別に、またいつかでいいわよ」
拗ねたような声が、返ってきた。

「ところで」

カグヤの髪を撫で付けるのを一時中断して、先程から感じていた疑問をぶつける。

「部屋に入るなり投げ出した、あの紙袋はなに？」

オレの視線の先には、部屋の隅で横倒しとなった問題のぶつが、持ち手を扉の方へ投げ出し悲しげにへたっていた。

「お母さんが永琳に渡してくれてー」

それに見向きもせず、カグヤは机に齧り付いて紙に絵をぐりぐりと書き殴る。

「――先に渡しておけよ。この前なんか『最近カグヤの扱いがぞんざいだ』って食卓に突っ伏して泣いてたよ、永琳。……………あれ？

その直後の記憶がない……………夢だった、かな」

次に覚えてるのがベッドから起きたところだし。

「兎に角とにかく。早く永琳に持って行ってあげなさいな」

そう告げて、無造作にその長い黒髪を掻き上げてみた。とりあえずカグヤが動き出すまでに、何本三つ編みができるか挑戦してみる。

「……………はい」

と、一本目が完成する直前に、カグヤが膝から弾みをつけて飛び降りた。

「というか、そもそも能力の研鑽に励むっていう目的があるだろ。今回ぐらいはきっちりとなしてきなさい」

左手の親指と人差し指の腹を擦り合せながら、紙袋へと歩くカグヤへそう言った。

「建前って言葉の意味知ってる？」

信じられない、という顔をしたカグヤが振り向いた。
込み上げてきたあくびを喉の辺りで喰い殺す。

「昨日寝てないからさ、ベッドが手招きしてきてしょうがない」

「……ばーか！」

見送りましようか、とオレが立ち上がる前にはもう、カグヤは扉から廊下へと駆け出していた。

「……とと」

気付いたら、椅子に座ったまま上半身だけをベッドに横たえて睡眠を貪っていた。

何度か瞬きをして、この部屋の暗さが時刻に起因しているのだと理解する。窓から気紛れな光源からの届け物が降り注ぐ様を眺めていて、いつの間にか夜空に月を探し虫の音色を期待して耳を澄ましていた。

床に両足をついて立ち上がり、窓辺まで近寄った。想像していたよりも遙かに明るい光が目撃^うち、思わず視界を閉ざす。

ゆつくりと両眼を見開くと、星々のきらめきが顔を覗かせていた。何か確たる光が足りない気がしないでもない夜空では、青き惑星が一度たりとも主役を張れない夜会が、今夜も行われてた。

精神文化が成熟していても、望郷の念は湧いてくるのだろうか。
「ねむ……」

大きくあくびを漏らし、寝ていた間に凝り固まった体を回す。説教臭い爺さんに逢^あってから5日間と1週間、足して51週間。つまりまあ12日分、不眠有休で頑張ってたわけだが、狂気充満する月でそんな事するのはいくらオレでもやりたくもないね。

誰だ実行したのは。馬鹿か。月以外でも普通に危ないわ。

そんな風に朦朧とする視界と意識の中、なんとかいつもの部屋まで歩いた。なにやら声が聞こえるところから、カグヤはまだいるようで一安心。

まあそうでなくても、カグヤなら帰る前は最後に必ず声かけていくさ、と納得しつつ扉を開ける。

まず目に飛び込んできたのは、永琳、カグヤ、兎。

カグヤ、兎、永琳。兎、永琳、カグヤ。

「イナバー？」

手に抱えた兎を、カグヤが幸せそうな顔でもふもふともふっている。

「……………」

目をこすって、もう一度見てもやっぱり室内の様子は変わっていない様子。要するに、誰か説明してくれ。

「えーと……………」と、永琳に視線を向けると、しきりと永琳が目で問いかけてきた。

“ なにか知らない？”

“ …… なにかってなんぞ”

“ 『イナバ』 って知らない？”

“ 先日因幡の白兎を話したせいだと思う”

「イナバー」

——むしろオレの方が知りたい。

何故だか胸に一抹の寂寥を感じつつも、とりあえず椅子に座る。

「はい」

「ん……………」ありがとう

猫のように微笑みを浮かべた永琳からお茶を受け取り、静かに啜る。ズズッと音を立てるのは個人的な美学に反する。

むむむ、緑茶。などくだらない事を考えながらも視線は一箇所定まらず、対面の永琳、手元の湯呑み、向こうの方のカグヤ及びウサ公とを往復する。

「……………」

何この気持ち。……！？　これはもしかして……！

「こ、鯉」

「寂しい？」

茶柱が立っていた。てか大量に茶葉が浮かんでいた。

「そうっすね。この茶の入れ具合で、この前話したあの愛情以外に称賛する点が見当た」

「そうじゃなくて」

昔病氣とまで称されたオレのはぐらかしを、永琳が一言で軌道修正する。

「いえ、他意はないのよ、もちろん。だけど、いつもアナタだけがあの子と遊ぶというのは、いかなものかしら——って事を、いい機会だしはつきりさせておきましょうと、そういうことよ」

あの兎は、情操教育とでも思ってくればいいわ。そう言っ指差す白兎は、どこかで見た事がある気がする。

「気がするっつーか、月の兎はあそこから進化するわけじゃないなら、という過程の上でしかないんだけど、いや永琳の事だからそんな事はないと思いたいけど、もしかするともしかしたりしちゃったら困るから、だから一応念の為に聞いておくだけなんだけど——」

——あの兎、地上産ですか？

——そうよ。

……………　そうよ、という事はイエス、という事でつまるところ…

……………　おおっ、jeezus。

「これ」

自分の心臓のあたりの胸を指差す。

「これがここにるのがバレたら、不味い？」

「かなり不味いわ」

「あれ」

赤い目をした白い毛玉を指差した。

「僕とご同胞？」

「そうね」

「よし今夜は兎肉で香草焼きだな」

「よしお父さん張り切っちゃうぞー、と椅子から立ち上がったところで、突き刺さる二つの視線に気付く。

「……イナバを食べる、の？」

胸の前で兎をひしと抱え、怒気をはらんだ目で見上げてくる、カグヤ。

「酷い人ね」

「おい、何さり気なくそっちついてんだ、お株上げようったってそうはいかねえ！」

いつの間にかカグヤの両肩を抱くようにして立つ永琳に、少々氣勢をそがれてしまった。

「……お爺さんは、誰とでも話せば分かり合えると今際の際に言うてました。

死因は、山で熊に襲われたからだそうです」

腰を、再び同じ位置まで下ろす。はあ、と溜め息を一つ吐きながら、何故だか頭痛がしてきた眉間を押さえる。

……………。

どうーするの、なんて責任の所在を求めるなんて、簡単………だけど。

カグヤの両腕の中で、鼻をひくつかせる兎を見た。

「飼いたい……いやさ、一緒にいたいんだな？」

いつもの無邪気さが欠片も見当たらない、カグヤの目を見据えた。

「……うん」

真摯に、首肯をする。

——よくわかんないけど、一応不味い事なんだよ？ それでも？

「じゃあ、真面目にしっかり育てるんだよ」

ついぞ出ることがなかった言葉は、噛み砕いて適当に嚥下しておくに限る。

最悪永琳に丸投げしようと思った途端、永琳の目に剣呑な光りが宿ったから、見なかった振りをしておく。

「うん！」

やったねイナバ！ と叫んで兎を高く掲げるカグヤを尻目に、「いやあ相も変わらず押しに弱い性質たちなもんでねえ」と、苦笑と言葉を永琳に投げかける。

「……まあ、とりあえずありがとうね。あの子の気持ちを固めてくれて」

「そう言わせるように仕向けたくせにー」

永琳も、否定はしないわ、と同じく苦笑いを浮かべる。

「——それで、結局のところ相当まずいんだろ？ 地上から連れてくるなんて」

急に視線をそらした永琳をねめつける。

「まあ今更、か。一人にもう一匹増えたところで大した影響はないだろ」

永琳に、というよりはむしろ自分に言い聞かせるようにして、そう呟いた。

多分、カグヤの笑顔を壊したくないから、という事においておいた。

胎動する「ト」(後書き)

正直やり過ぎた感は否めない。どことは言わないが。わっふるわっふる。

私を責める赤い肉眼濁った裸眼（前書き）

違いってなんですか？

私を責める赤い肉眼濁った裸眼

「……だんだんだんだん」とん」とん」とん。　「だんだんだん」とん」とん」とん」とん」とん」とん。

背中にカグヤを負ってはいるが、ひたすら一定の間隔でまな板に包丁を叩きつけていくこの行為の孤独感を拭い去るほど確かなものではない。ネギが、その過程によって次々と切断されていく。だんだ……とんとんとん。耳が振動を受け取るその都度、一つ一つ正確に生み出される輪がその切断面を見せて横たわる。それは世間に言われるような苦痛を伴う単なる作業等では決してなく、かといって自己との対話なんてものでもない。台所に立つ者が、握った包丁と打ち鳴らされる旋律、果ては一本の緑黄色野菜から“みじん切りされたネギ”という一つの形へと移り変わる、その流れでもって構成していく、自身の世界なのだ。指先でネギが、包丁が、自分自身と化し全てを教えてくれる。やがて「オレ」は、自身の認識そのものがこの台所全域へと拡大していく。奏でた音色が耳朵から伝わり、その喜びに震えた腕がまた新たな躍動でもってそれに答える。先程孤独感といったが、それは正確な言い回しではない。全てが自己でもって完成しているこの感覚を表すには、既存の言語ではどうやってたって不可能なのだ。一巡するまでもなくこの世界は完成していて、この永久思考が円環を描くように回るようにいて実は螺旋状に回るからこそ世界が膨れ上がる。……ああほらやつぱり」とん」とん、じゃなくだんだんだん、だ。人ごとみたいに俯瞰しているオレがいて、ネギを切る音とその色鮮やかさとやけに響く鼓動

——なんだっけ。……たかがネギを切る音だけど「とんとん」と聞こえている以上、今現在のオレはまだ辛うじて普通に正常な方向に向いているらしい。寝ているカグヤの熱に抵抗するかのように、心臓が冷たく落ち着いている。

いやしかし、寝ていないってだけであそこまで自分を見失うとは思わなかった。カグヤん家逝ったあたりからの記憶がないとかね、情けない。意志の強さだけはちよっぴり誇ってもいいかなと思うていたのに。

結局、祟りだか穢れだかを喰ったらしい。よくわからないが実際に自分の中になんかあるこれのせいで月の狂気への耐性がついたらしく、今ではごく普通に寝られるが――どう回りまわってオレん中にあるんだかね。どうでもいいことは覚えていくせに、変なところであやふやだったりするんだから困りものだ。……そりゃあ、詳しく知りたいんだったら永琳に聞くのが一番手っ取り早いんだろうが、なんとなくそれも気が引ける。だって何て言うんだよ。“オレが狂ってたらしいときのこと教えて頂戴”ってか？

「そつえば、前のところで使っていたまな板年々磨り減ってきてネギがうまく切れないんだよな」

思い出せないといえば………それこそ「昔」が、まったく思い出せない。自分の名前、学校の位置、肉親の顔。家が畳かフローリングか思い出せないからか、望郷の念すら湧いてこない。……元々そんな奴ですけどね。

どこで教わったかもわからない見解だけがあり、どこで知ったかもわからない知識だけがある。読んだ覚えのない本に、できるという漠然とした確信のみが具現する技術。出身は寒いところってぐらいはわかるが、それだけで、家のドアがノッカーなのかノブなのかすらわからない。

どうだろう、一ヶ月ぐらいじっくり不眠不休で自分の脳内整理をしてみれば思い出せるのかな？

「――カグヤ、起きた？」

軽く背中を揺らして声をかける。みじん切りされたネギを包丁の刃に乗せて入れ物の中に入れながら、返ってこない返答を待った。

ここで寝たら不味いつて場面でも、容赦なく睡魔は襲ってくる。

「寝たら死ぬぞー！」なんて極限状態でなくてもあるはずだ。

何て言ったって、三大欲求。人間サマの本能の前じゃ、理性も薄氷の如し。

ならば。ならばならば。オレのあれは……

「そう。それは愛」

と、いうより愛——って感じで誰かいい話にできるんならしてみやがれ。むしろしてください。

——あ、ちなみに永琳は能力が時空間系だという意見には懐疑的。お互いに一步も譲らない熱弁の末、本人の成長を待とうということになった。

でも重力レンズとか言われてもわからないのが普通だと思うんだ。時を操る能力こそが最強よ。

一ヶ月。

存在と物事の基準が人間のオレでも割と短いとは感じる、一ヶ月。

その間、カグヤは甲斐甲斐しくイナバの面倒を見た。——まあ来られない日の方が多いから、実質的にはオレと永琳と、三人で等分

ぐらいだろうけど。

何度も持ち帰ろうとして、その度にやっぱり不味い手段で入手したらしい永琳は全力で止めていた。

『メイや永琳は毎日会えるなんて、ずるい！』とは何度も言われた。『役得ー』なんて言いながら兎の鼻先を撫でると、赤い目に何かが見えた気がした。『壁とか齧ったりもしないし、飼い主に似ないで賢い兎だなあおい』『おらあ！』脛を蹴られた。

一月が経ち。累計では……どのぐらいだったっけね、三年ぐらいか？

『そんなにも経ったのか』と思う自分と、“おお遊者^{ゆうしゃ}メイよ情けない、まだそのぐらいでしかないのですか”と思う自分と。

誰でもいいので、一月の意味を教えてください。

永琳の向かいに座って、ゆっくりと湯気が立つ湯飲みを啜った。食卓の上にはお茶請け代わりの金平糖^{こんぺいとう}と花林糖^{かりんとう}。

右を見る。永琳の隣では、カグヤが膝の上で兎を遊ばせていた。今は左手で大人しく金平糖を口に運んで、右手を机の下に隠しているのを見ると、イナバは兎肉になったか寝ているらしい。

視線を戻すと、そこに座る永琳が机に突っ伏している。銀色の清流が永琳の肩から背中と無造作に流れ、消え入るほどかすかに聞こ

える吐息に合わせて微細に上下する。枝毛の一本も見当たらないその髪が、僅かな運動によって輝いてみせていた。

静かな室内に響く、花林糖と金平糖が噛み砕かれる音。時折カグヤはもう一方にも手をやるが、オレは基本的に花林糖のみを選んだ。だって金平糖ってなんか甘いだけじゃん。カラフルだから色彩的に美味しそうだけどさ。隣にあるだけで他のものが美味しく頂けるけどさ……………けどさ。

舌で転がしながら、これ突起二十三個あるなとカウント。べ、べつに金平糖が——といったものように無駄な方向に思考を向けようとして、何気なく眺めていた永琳これこのままだと風邪引くんじゃね？ と気付く。女性へのさり気ない気遣いに定評のあるオレとしたことが……………いやでも永琳って薬もなにも利かないんじゃね。毒でさえもって言うていたし、風邪如き……。その上、さらっと「昔暇つぶしに作ってみた賢者の石よ」とか言いだしそんな女ひとですよ？

「ねーメイー」

「——んっ？」

まあなんか掛けられる物持つてくるか。…………この茶が冷めるまでに、とか思いながら二杯目を注ぐと、カグヤが口から花林糖の端を出して啜えながら声をかけてきた。今日は猫舌気味なんだよ。

おっ茶柱。

「永琳風邪引いちゃわない？ なんか掛けたげたほうがいいかな？」
そう言つて首を傾げる。動作に合わせて髪が揺れ、すっと口の中へ菓子が消えた。

「ん、そうだね。そうしてあげてくれる？」

「わかったー。イナバちよつと大人しくしててね」ボリボリガリ。一旦椅子から立ち上がり、腰掛けていた所にイナバを再び戻す。最近あまり跳ね回らなくなってきたイナバを一撫でしたらしいカグヤは（机の影でいい感じに見えない）、そのまま部屋から歩いていった。

残されたのは、二人と一匹。飲めるもの一種、食べられるもの三

種……いや四種か？ 棚とかを入れなければ。

「ひゅー……。平和だねえ……」

のーんびーり……とした空気で、今日もお茶が美味い。

食べ物美味しく感じられるのはいいことだ、と一人で頷き、湯飲みを一啜り。手慰みに茶を回していると、茶葉が縁にへばりついた。

しかし、永琳が徹夜明けでこうなるとは珍しい。もっと言うなら徹夜すること自体珍しい。なんだろうね、万能細胞でも見つけたのか？ 湯飲みを手で包むように持っていると、熱さに音を上げて机に置いてしまう。置いた湯飲みを指で弾こうとしたが材質が陶器っぽいのでやめておいた。右手を開いて見つめると、裂け目のような生命線が……あれこれ短くね？ と、金平糖を口に放り込む。

疑問ごと押し隠すように、両の手を擦り合わせる。左右とで熱の違いを感じ、生やさないままの爪を見た。や、だって切るの面倒じゃん。

「めんどめんど、面倒ことは……」
……がりつ。

廊下から足音が近づいてくる。足は二本ですね、と推察していると、扉を開けてカグヤが顔を見せた。立ち上がろうとすると、大丈夫、と首を振ってみせ、そのまま薄い毛布を両手で抱え静かに永琳の傍まで寄った。

「お疲れ様、カグヤ」

永琳を起こさないよう、あくまで静かに毛布を広げるカグヤをそう労わる。

「メイが言っと、なんか不自然に聞こえる」

仏頂面でそう返してくるが、いやいや言葉の真意までそうとは限らないぞ。だから泣くんじゃない、オレ。

……悲しくそう自己擁護した。この場で一番優しさが必要なのは、意外とオレなのかもしれないよ？ ……どうでもいい、あっそうですか。

そんなカグヤ、昔と比べて口は達者になってきたが背丈はと言うとそうでもない。椅子に座る永琳の肩に掛けてやるのに爪先立ちしていたのを、誰かが見逃してはいなかった。

——昔って、おい。何歳だ。

「んん……」

と、掛けられたことで目が覚めたらしい永琳が寝言混じりに漏らす。……お前はいいことをしてあげたんだよカグヤ。だからそんな目で見てくれるな。

「……3120秒ほど寝ていたかしら」

「そういう狂気染みた天才っぷりやめて」

両肘を机に乗せたまま軽くあくびをし浮かんだ涙ごと目尻をこすったところで、永琳は掛けられた毛布に気がついた。寝起きでも損なわれることのない美貌のまま、背後を振り向く。

「あら、カグヤがやってくれたの？ ——ありがとうね」

「うんっ」

臆^{おそ}たけた笑みを浮かべ、いい子いい子と永琳に頭を撫でられているカグヤ。満面の笑みを浮かべ、それでいてはにかむように身をよじった。

なにこの対応の差……思春期？ だとしたら成長早過ぎねーかこれ、さすが月人オレたちにできない事を平然とやってのけるそこにシビれるあこがれるウ。

永琳につられて、オレもあくびを噛み殺す。

平和だ。平和です。歌でもひとつ歌いたいような気分。

「忘^{わす}れたことを思^{おも}い出^だしてた 千^{ちとせ}歳^うに埋^うもれ無^なくしかけてた」

きーちゃんを通して、ではあるが、オレもそれなりに月の生活に

同調しようとはしてきた。郷に入っては郷に従え、とはいえ異文化間の意思疎通はただの人間如きに越えられるぐらい小さなものでもなかった。

有り体に言つて、理解できない。

「月^{つき}から落^おちた……」

そこまで歌つて、オレ——それが可能性は高いとは言えないがオレの後ろにいるかもしれないヤツ——へと向けられる冷やかな視線に気づく。二対の眼光は『今すぐ船倉に穴の開いた豪華客船で世界一周旅行に逝^いつてきて』と雄弁に語っていた。

「メイ」向かつて右の人影、個体識別名カグヤが口を開く。

「いろいろ言うの面倒だから、死んで」

「率直過ぎるだろ！ もつと婉曲に表現しておこうよ！」

「そうよカグヤ、言い過ぎよ。こういうときには『椅子の足拭きにでもなつてろ！』と言うのよ」

「人類の下にある物のさらに下？ 酷くね？」

「でも永琳、ほらあるじゃない。人が椅子に立って何かしていると、その椅子をぐらつかせたくないような気持ち」

「とりあえず言わせてもらつと、歌っただけだろ！ 宗教上の理由でもあるのここ？」

待て待て待てー、と両手を振つて二人の止まらない罵声を制す。

「下手くそ」さらりと永琳が言えば、カグヤも「音痴」とすげなくこきおろす。そのまま座つたままの永琳に腰掛け、徹底的にオレと決別する構えを見せた。

「客観的に自分を見れないの？ へつたくそだよ？」

「よくわからないけれど、歌い手の声をそのまま出そうとは普通しないわよ」

「いいんだよ好きなんだから」

妙に悔しそうに「やーい音痴ー」と囃^{はや}し立ててくるカグヤの髪に、

抱きしめるようにして後ろから支える永琳が優しく指を通していく。一見したら手間のかかる子を慈しむ母……といった絵だが、銀髪の方のしまりのない笑顔が雰囲気をぶち壊している。永琳はなんかもうどっちでもよさそうだ。

横目でそんな永琳を反面教師として心に刻みつつ、肩を竦めてカグヤに苦笑いをする。思い出して、すっかり冷めたお茶に手を伸ばした。

……不味い。

「……………」

なおも不服、と顔でありあり表現するカグヤに金平糖の皿を押し出した。四つだけ残ってるんだ、オレに死ねつつーのか。

「誰だって完璧にはなれないさ。足りないところを補い合って、愛し合う。それでいいじゃないか」

ありのままの相手を認めるすること。……カグヤには少し難しい話だったかね。

暫しの静寂。幕間。

オレの囁る音と、カグヤがもぞもぞと動く音。それと永琳がカグヤを愛でる音だけが、耳を通り抜けていく。

あくびが出た。

次回には、カグヤも成長しているんだろうか。成長していくんだろつか。一抹の寂寥感を覚えなくてもないが、それが……ん？ 次回ってなんだ？

そうそう、その次回と言え^ば。

誰か死ぬらしいですよ。

私を責める赤い肉眼濁った裸眼（後書き）

未だかつてない、本文にいくまでの主人公の能書きの長さ。

B G M “千歳の夢を遠く過ぎて” b y I O S Y S

濁る瞳は何映す（前書き）

引きあうってなんですか？

濁る瞳は何映す

「はいはいはい——って、きーちゃんか。毎度どうもねー」

「あつメイさんでしたか。こんにちはです」

「いつも配達ご苦労様。——そうだ、アメいるかい？ 味は別に人参味じゃないけど」

「……メイさん。兎が皆ニンジン好きだって偏見は、私嫌いですよ」

「えっ、そうなの？」

「ええ、もう、都市伝説はおろか神話ってレベルです。月の自称知識人にも『ニンジンやつとけばいいだろう』って人が未だにいるんですよ？ 信じられます？」

「——へー、そーなのかー」

「……あ、美味しい」

「そりゃよかった。——あ、立ち話もなんだしちよっと上がってかない？」

「いえ、お仕事中なので……すみません」

「まあまあ。永琳ともよくお茶してたんでしょ？」

「……永琳、さん？」

「あ」

「そういえば——どうして永琳さんの家からメイさんが」

「ごめんね、迂闊だった」

パチン。

「どうもねきーちゃん。配達ご苦労様」

「——あ、はい。ではこちらになります」

「はいはい。……アメ、いる？」

「いえ、もう舐めてるので結構ですよ」

「おや、いつの間に。……人参味、だったりする？」

「いつかも言った気がしますが、兎とニンジンをイコールで結ばな

いでくださいってば！」

調達してもらった木の塊を大まかに削りだして表面に塗装を加える。加工した木面に、こちらはやや丁寧に九かけ九のマス目を引き、湿気を飛ばす。その間で生成の段階で出た木屑から五角形を作り、それぞれの駒の名前を彫り上げる。彫り駒とはいえ素人としては中々の出来だと思っただぜ？

かたつと軽い音を立てて、その将棋盤の歩兵を一つ前進させた。盤面から見れば少々奇妙な一手だが、勝負とは相手の呼吸を崩した方の勝ちだとオレは信じてる。つまり体力は大事ってことだろう？ ふむ、とその手を受けて永琳が王将を下げた。パチン、と軽快な音と共に駒を指し、邪魔臭そうに髪をかき上げた。こういう格好いい女性じょせいをなんて言うんだっけか、瀟洒しょうしや？

まだまだどうにもなりそうな盤面だが、永琳からしてみればもう詰みも同然なのだろうか。……羽生名人とどちらが強いんだろうかとか思うね。

「『あらゆる薬を作る程度の能力』」言って、駒台から桂馬を掴み上げる。「『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』」左手で口元を隠しながらどこに指そうか決めあぐね、親指と中指で駒を弄ぶ。「お互いにとにかく言うのはよしておくとして、だ」

能力だけで考えれば、だが——こと戦闘に関して、圧倒的にオレ

の能力が勝っている。よくて相打ちか。よしと思考を定め、進めた歩の頭に桂馬を置いた。「どちらにしろ、いらない能力だね」

どうでもいいことだが、オレは永琳に勝てる気がしない。

「……………」対する永琳は持ち駒から歩兵を盤面に参戦させ、こちらが狙っていた筋道への防御を固める。どうでもいいが、呼吸を乱すとか言いながらまったく考える素振りを見せずに指し返されたりする。

「人という種全体にとって必要なのは個々の異能なんかじゃない」昔から見たら今の科学はそれこそ魔法に見えるだろう。………つかまず地上と月の文明からしてそうか。泥水を真水に変えて、天候を支配して、ほつときや死ぬような怪我まで回復させて。

今だ、不死だけはクリアできていなんだとか何とか。………本当か月^{ミツ}。

「扇子の一振りで森一つ薙ぎ倒すような力は、いらない。一瞬で相手の首を掻き切る剣豪や、全てを握り壊す悪魔も、必要ない」

お互い面倒な時代に生きてしまってますね、と駒を詰めた。どうしようかね、玉砕覚悟で突っ込んだ方が延命できる気もするが。

歩がない将棋は負け将棋とはよく言ったものだよ。ないと困る。

「……………そういえば、どうやって月に来たかって話はしてた？」オレの貧弱な陣地から、永琳のクソかった美濃囲いへと視線を移した。「方法自体の検討は話し合ってたはずだけど」

「たかが木屑……ああ、あの少々胡散臭い理論か」

人類全体にすべからく恩恵を与えたもう発明者なんかは、もうちょつと称されてもいい気がする。だって『魔法』を人類全員が享受できる『技術』にしたんだぜ？

永琳が苦笑いして、それから腕を伸ばして駒のズレを直した。

「そう言わないの。私だって納得できないし」

「そっちはともかく、オレはそもその魔法ってところから信じられないんだけど」

「そう？」と、涼しげに返す。「——月では、能力というよりも技

術として扱われてるわ。もう魔力は感じられるんでしょ？　だつたら理解できそうなものだけだね」

「だからって月見てただけで空間跳躍って……」……おっと、もう歩がない。「自分の周囲の全てを『喰い』尽くしたら、その精神はさらなる高みへ——ぶつちやけると天国行けると、そんな風に考えていた時期がオレにもありました」

「普通それは死ぬと思うわ」すすーと香車を伸ばす永琳。「——子供でも死ぬってきちんと理解してるわ」言い直された。

さあどんな詰んでまいりましたよ。この盤面見て戦況が理解できないやつは眼科へ行け。

「魔法の使い方はいくらでもあるけど……」盤面に目を落としたまま首を振って、「まあ『運』がよかったのね。結界で閉ざされた月と地上が唯一繋げられる満月の『日』に、『雲ひとつない夜空と月が映り込む湖畔の傍』、『膨大な妖気を持った』妖怪が行ったから」……こうしてみると随分な運ゲーだったんだな……「自分の生き死にでさえこんな調子かと、我ながら空恐ろしくなる。「けどそれ通すなんて、月の結界って案外ザルなんじゃ……」

「結果もそこまで馬鹿な侵入方法は考えられてないわよ」

「馬鹿ってなんだよ。頭悪いって言えよ」

「どう考えてもそっちの方が印象悪いわよ」

はあ……と重々しい溜め息まで吐かれた。そのまま王手をかけてく……なにこれえげつねえ。

「それで——薬の方はどう？　眠くなったりとかは……」

ふざけた空気を払拭するように、永琳が姿勢を正す。ちら、と壁の時計に目をやった。「暇つぶしにかまけてるのもいいけどね。一応一応」再び盤面を見たところ、勝つまでの時間を計算したらしいぞ！

「実験熱心……？　なのはいいことだ」揶揄するように言って、「問題は人体実験ということだけ……いやまず治験の手始めがオレってところで……」

「妖怪じゃないの」

「ですよー」

お喋りの間に体に意識を傾けてみると、投与直後には感じられた薬効が失せていた。こちらの顔色で大体推察できたらしいが、ひとまず伝えておく。「量が少なかったのか。まさに毒にも薬にもならないってやつだね」

「本当に？」

「意志の強さと自己把握に定評があると自称してたりするから」

「おかしいわね……その薬が効かないとなると男じゃないか胃がな
いかの二通りしか考えられないんだけど………」

「なん……だと……？」

咄嗟に言葉は出たものの、それ以上続かなかった。自分を省みている間、おそらく相当虚ろな目をしていたと思う。

「ちよつと待つて待つて待てやコラ、大和男子はいつまでも男であつて、千年先まであなたを愛すると誓つてるから女でいさせてくださいのはずで」

手で押さえた口はあるだろ、着流しの隙間から手をつ込んで腹を触つて胃の消化活動も感じられる、そしてマイサン——。

「おい」

「よかつた五体満足……」

んんつと咳払いして、何事もなかったかのように駒を取り上げ、打った。

「————メイ……命、^{メイ}ねえ……」

「どしたの、^{ヤッコロ}八意さん」

いえね、と返しながらの一手が無常にもオレの陣営の急所に突き刺さってきた。

「……いい『名前』だと思つて」

うんうんと首を小刻みに上下させ、

「名前つてのは重要よ。——おそらく、アナタが思っているよりも遙かに」

「……ごめんなさい」

でもルーミアっていい名前だとは思うよ？ ホントだよ？ 皆の知恵袋的存在えーりんが認めたのだからオレの命名センスも悪くはあるまい。

「——えーりんえーりん」

「えーりん違う、永琳や」苦笑を浮かべながら、「——それに」

「おお、夜を八とわくる我等の偉大なる八意よ——『会』い逢う『

話』は我が域なれど、この身に抱く心は貴方に線引かれる……」

……すなわちは、

「××」「○○？」

「××、よ」

「……○○」

……。

「ええいこの××！」

「伏字にすればいいってもんじゃないから」

「それじゃ、この香車で……『思慮深い玉碎』とか？」

「まあ……そんな“感じ”かしらね」

言いながら、その通り王手を仕掛けた。

この……二人零和有限確定完全情報ゲーム、だっけ？ 要するに将棋とかオセロとか、完全に相手の手を予測できるゲーム。割とよく遊んでいます。——戦績？ 言わせんな妬ましい。そんなんで永琳と勝負になるのかっていうと、これになるんですよ。「最初から最後まで盤上を支配するいい練習になるわ」とのことで、適度にいい勝負になるように手加減をしてくれるのだ。

いや、傍から見るとすごく情けないとも思いますけどね。わか
つてるさそのくらい。

「読みより漢字が重要な。魔術的にも重要になってくるわ」

香車があつさりと獲られる。

さてお次は……と見た盤面が、思いつきり詰んでいた。

「それじゃあ、敗者の務めはきっちり果たしてね」

「——これ思っただけど、負けるヤツ確定してね？」

罰ゲーム！　と実にいい笑顔で指差してくる永琳が眩しい。って
か黒い。

意義あり！　な気持ちで、負けじと扇子で差し返した。扇子？

心の目で見えるんだ。

「気のせいよ」

「あっそうですか」

貴方が犯人、うおっと。扇をもぎ取られた……らしい。

優雅な所作でそれを持ち替え、手首を振ってびしっ！　と音が聞こえるぐらいのパントマイムを見せてくれた。気のせいか……気のせいらしい。オレも疲れてるんだな。

「それで、今日の献立は？」

人間、楽を覚えると駄目だってよく言いますよね。昔の人はよく言っただもんだ。

「昨日の野菜炒めの残りを適当に玉ねぎ入れて卵で閉じて、ホウレン草を適当に胡麻で和えて甘く味付けて、適当に汁物を……」

「適当すぎるっ。だから名前が大事なんだってば」

ばしばしと扇子で叩かれた。

スカスカな中身すら持っていないオレは、そんな扇子でも痛い気がした。

「名前……名前、ねえ……」

しかし、まあ……ねえ。

ルーミアはともかく。

命メイなんて、名乗ってるだけで……。

背負ってる自覚なんて、ないんだけどさ。

「いい名前なの？」

「——ええ」

何が、とも言わない。いつものことだから。
だから、即答される。

「……………そーなのかー」

頭を垂れたトメントーサ（前書き）

光ってなんですか？

頭を垂れたトメントーサ

「……………そーなのかー」

舌で唇を湿らせて、一言そう呟いた。

幻想、仮想、予想、妄想、空想の順に変わる不変の基準で世界は色付く。流麗な永琳の頭髪をその銀を、円窓の向こう側から現れだした日脚がこちらに投げてよこす。あくびを催すように目に刺さる光に、知らず知らず寒気立つ。

あくびが出た。

組んだ腕が皮膚の熱を奪う。気休めのぬくもりが背筋を振るえさせて、体が芯から冷えていく。

思い出せない故郷の感覚。幻想の郷さと。埋没する——というよりは、『喰われている』——記憶の、その残滓が、この感じに哀愁と懐かしさでざわついている。

ここは……………寒い。

「シリアスな地の文の裏で何やってるの」

「一皮向けば人は皆タンパク質なのさ！」

さり気なく将棋盤の改変を行おうと伸ばした手が（握り）潰される。顔を逸らして口笛をふふひーと無様に吹きながらも水面下で懸命に握られた手を離そうとしてやっぱり彼我の力差の前には抗えなかった。皆の中では最弱の部類だったが、それでも格としては下位の中で一、二番ぐらいの妖怪ではあったはずんだけど。

「滞りなく料理を作るならどうぞ好きなようにして構わないわよ？」

「……………どうどう」

顔を戻してもどうせいつもの笑顔。冷や汗を頬に感じつつ打開の方法を探る。てか意識ずらしてんのになんで気づける掴める。さすがえーり助けてえーりん腕が痛い！

「うおおおおおおおおおお！ 突然ですがこれは『気合いの雄叫び』ですッ！ 指さしていただきますッ！」

雄叫びを上げ、一ミリも動かない重ねられた手に世の無常を感じた。負けましたーと駒を離し、離された永琳のぬくもりに少しだけ寂寥を感じたりする。

「ちよつと餅つきに」

座っていた座布団に足を立て、袷の前を整えながらその扇子は差し上げます、と言うと、永琳は渋い顔をした。

「隠語の意味違うからね？ 本気で言ってるなら殺してでも止めるわよ」

両で組んだ指先から血が退いていく。命の源が通わなくなった手は、必然——冷える。

はてさて、一体どっちが死人の装束だったかな？

「いやだなあ。永琳だったら生け捕りぐらい簡単でしょうに」

「生かしておく価値がないわ。身内を狙ったのだから」

釈然としない、といった風情で盤を片付ける永琳が、視線を落としたまま言う。

「——まあ、それこそ、当然だ」冷えて、凍えた体に苛立つ。思い出す思い出さない以前に、致命的に遅れている気がしてならない。「オレは、殺せなかったけど。殺さなかったけど」

——いやだなあ。それこそ、お寒い冗談だ。

当たり前、過ぎて。

「おはよー」

氷筍の如く突っ立っていたオレの背後から、寝起きで間延びした声。振り返らなくてもわかる、聞きなれた声。

……そうだ。カグヤがいるのに、突然永琳が是が非でも薬飲むべし、と言って聞かなんだった……んだっけか？ お泊り会のテンションのカグヤに夜通し付き合って、そこから仮眠もなしに永琳とお喋りしてた計算だ。……まあお互い聞き上手話し上手なもので、熱

が入るとお休みからおはようまで過ごしていたりも別に珍しくないけどさ。

「ねえ永琳、メイ、イナバが起きないの」……イナバが起きないのイナバが起きないのイナバが起きないの……。

妙に快活で薄っぺらい声が、頭の中で木霊して聞こえた。……………

…響く、響く。理屈では後ろにいるとわかつちやいるけど、頭の中で直に反響しているようだ。

本来の用途を与えるために、眼球をカグヤへと向ける。視界が百八十度もないと一々大変です。

……起こして起こして起こして……。

響く音に合わせたかのように周囲が間延びして見える。とうとうオレにもスタンドが発現したのかと思ったら、急に立ち上がった永琳がオレの後ろへと歩んでいく様子で単にオレがどうかしてるだけだと気づいた。

ホント、永琳には気づかされてばかりだ。

いやあと頭を掻いて、腕を上げるなんでもない動作にもう一度寒気立つ。寒いと眠くなる性質なもので、以前「冬眠かつ」と言われた記憶が。——今度眠くならなくなったら水風呂でも入れればいいのか？ 風邪のリスク背負って健全な睡眠を得る……いやでも、寝ないとおれっち狂い気味。

「……ウサ公が？」いかにいかに首を振って、試験終了前の必死こいたチャイムのような思考を喰い殺す。脳に頼る他ないからこうなるんだ。

体ごと向き直り、背後を視界に入れる。

イナバを抱えたカグヤの右肩に手を添えた永琳が、膝立ちのままオレに振り向いた。

この寒気よりもカグヤの震える声よりも、その永琳の表情で全てがわかってしまった。

「ねっメイ……起きないでしょ……？」

純粹にいぶかしんで、どこかで理解していて、それでも求める――

——一縷の希望、期待。皆に助けられ、過去を見失ったオレには絶望的なまでに重い感情。重すぎる“想い”が伝わってきてしまう。彼女の腕の中のイナバ『だったもの』は、意外に綺麗だった。それこそ、万が一を考えてしまうほど。

「ほら、まだ起きないよ？　こんな寝坊助だったっけ……………」

「カゲヤ。——『カゲヤ』」

感情が揺さ振られる。さぞわかったような顔をしてうんうん頷いていればいいのに、うすっぺらい言葉を生み出していけばそれでいいのに——理性がそれを許さなかった。理性が拒絶すると、『会話』が成り立ってしまう。……………異能はいらないと言った途端にこれだ。

そして、振り返ったそのまま、一步も進めていないままのオレがいた。なにものよりも重い『命』を、彼女の代わりに持つてやりたいのに。足が躊躇う理由はどこにもないはずなのに、まるで馬鹿のように立ち尽くしていた。

「いつもなら大体起きてて、寝ててもすぐに起きて耳を何度か動かして、触ると鼻は少し冷たくて湿ってて、目が黒いからお前は玉兎とは少し違うねって撫でて、思ったよりも高く跳ねなくて、永琳が可愛いわねって言うときとメイがそれより美味そうだって言うてきて……て、そっ、ん……………イナバっが……………っ——！」

「『大丈夫だから……………わかってる』」

だから、一人で抱え込まなくていい……………そう、言った。

っつ——と、カゲヤの腕が伸ばされる。

「オレから……………お別れ、だな」

その手は確かに、求めたものを掴んだ。……………掻き消える前に。両手にゆっくりと置かれたイナバは、からっぽの重さ。「……………さようなら、^{ハラカラ}同胞よ」眉間を撫で、軽く首の後ろを掻く。いつもはそこまだだが、オレはイナバの顔を覗き込むようにして、「……………一足先に逝っててくれ」

自分にも聞こえない言葉を告げ、優しく永琳に手渡した。昨日ま

でと変わらない手つきの永琳が、憂いを含んだ目を閉じて、胸の前に抱える。

そのまま数度体を撫で、やはり低く何かを呟く。「……それじゃあね」そう微笑んで、最後に頭を一撫でした。

「……さあ、カグヤ。最後のお別れを………してあげて」

普段と変わらない笑顔に、どこか悲しみを湛えた永琳がカグヤを促す。嫌がっているのかと思うほどおずおず、とカグヤがイナバを抱いて、腕の中を見つめた。

「……………」

何度が具合を確かめるように腕を動かす。オレには見慣れたいつものふたりだけど、まだ何か違うらしい。

そしてようやく動かすのをやめた。そのまま、ただ沈黙を貫く。オレも永琳も、カグヤが探す言葉を、見守っている。

やがて、ぼつり……と

「ありがとう」

別れは心の『何か』を筆記取っていく。愛するヤツならなおさら、空虚で冷たい穴が空く。

それを悲しいと表現する。

人は悲しみに襲われたとき、涙を流す。——それが、その流した事実を踏まえ前に進んで行く。進めない自分の弱さを悔いて、立ち止まる事と進む事とを恐怖して、その上で歩きだす。

オレとは違って、カグヤは優しい。正反对だ。強くて、優しくて、おまけに美のつく少女さんで、眩しいぐらいに『正しい』。満月みたい。どうしようもないぐらい正しい。——いや、理由もなしに、ただ正しい。ただただ正しい。月の光はオレたちの『影』をどうしようもないほど強く照らし出すけど、もしその光が美しくても、対比として『闇』は色濃く映る。涙という正しさが光るカグヤは、『正常』とでも言うべきか。

対比ならば。

正しいの反対は異端で特異で、それこそどうしようもなく『異常』。

妖怪は仲間意識の強さこそあれど、その対比はなかった気がする。

……泣きたいときに泣けないの、と……ほざくつもりは、ないけど。

悲しかったのは、本当だ。

頭を垂れたトメントーサ（後書き）

「ぬくもり」ってひらがなの方が温かみがある気がする。

シリアスな、場面は、深呼吸しながら、ゆっくり、読んでってね！！

散る散る垂れる（前書き）

寿命ってなんですか？

散る散る垂れる

「……さ、カグヤ」

「……………」

穏やかに穏やかにゆつくりと、永琳がカグヤを促した。

最後に言葉をかけたつきり一言も喋らないカグヤが、その言葉に一拍置いてイナバから視線を外す。その眼差しが、戸惑うような仕草と共に手に抱えた『命』と目の前の永琳とを行き来する。

さあ……と、永琳は手を差し伸べながらも自分からは動かない。

その瞳は、あくまでカグヤ自身からの決断を待っているようだった。その行動に一拍遅れ、カグヤが何かを言い損ねたように中途半端に……口を開いて、閉じた。

今にも何かが零れだしてしまいそうなカグヤの表情と、永琳のいつものゆるく唇を結んだ笑顔は対照的に映る。——まあ、その伸ばされた腕が、小さく……ごくかすかに震えていなければ………みたいな、話で。かく語るオレ自身、我がふり直せ。

ただ、待っていた。

「イナバ……………」

呟く。撫でる。揺れる。淡い期待が立ち消えるのを見た。交差する。移る。流血。理解していないわけではなかるうに、それでも決して惜しんで悔やんで憾んで……そして、手放した。

「カグヤ……………いい？」

「……………うん、大丈夫」

永琳の腕の中で、イナバが抱え直された。そして、淡く白く光ります。だす。

——驚くことじゃないらしいと、カグヤの顔を見て認識した。もしかしたら月ではごく一般的な方法なのかもしれない。

光が徐々に明度を増し、それにつれてイナバが薄れ………て。光の中へ隠れていくイナバが、まるでその身を光に変えているようで。

そこまで強い明るさじゃあなかったけど。
それでも、オレは目を閉じた。

「あ……あ」

もういいかなーなんて思ってコンパコンパ口呟いて。声を頼りに、閉ざしていたまぶたを見開いた。

張り詰めている時間がいつきに消し飛んだかのように、涙が後から後からカグヤの頬を伝っていき、言葉にならない嗚咽を漏らす。そうやって一度一線を越えれば、感情が決壊するまでそう時間はかからなかった。なんかえろいのはご愛嬌。……この、えろいだとか思う自分の意思是、果たして自前のものなんだろうか。ちゃんと強くてニューゲームになってる？ 間違えて最初からだったらどうしようもないよこれ。

なぜか唐突に浮かんできた、割と重要っぽい疑問の向こうで……カグヤが、泣いている。カグヤが……泣いて、い、る。

……思い出が一つ二つ、と増えていくのに。

なのに、それを受け止める根源の部分が根こそぎ無い。悲しい寂しいと思う気持ちは何を根拠にしているのかも、哀れと思う気持ちは自分の何と比較しているのかも。いつ何時と比べて空腹なのかも今までで一番の幸せも自分の精神の我慢の限界も、ノックしてもし

もしと問いかけても三つめの目で通つても次にお前は狂う過程に狂いそうになると言つても――。

うん、そう、そんな感じですねー……うん。危ない危ない、一日徹夜したぐらいでおちおち一線越えちゃいらんねえ、べらんめい。

……べらんめい。これいいな、「前」のあだ名という事にしておくか文句あつかべらんめい。

狂気とは走りこむものではなく元々抱えているもの。暇つぶし程度で噛んでみる、その程度のもの。寝ないと狂う、つまり寝たら狂わない……わけでもないか、ないが。

しゅわしゅわーつとイナバを付した永琳が、永琳の背から、意志の形が見えて……。

なんでか、怒られそうだった。涙は流さなかったが無言の永琳の威圧があつた――。奇妙な友情はなかつた――。

「『イナバは』」

言いかけて、思い直す。能力を使えば思いは間違いなく伝わるけれど、なぜだか……これは、自分の言葉で言わなければいけないという……使命感？ 自己満足？ ……あながち間違いでもなさそうで、否定できないのがつらいところだ。かくごはいいか？ オレは漢字がわからない。

「イナバは……」

メシの時ひとかけらも油断をしない生物などいやしないし、たった一人で喰つていけるやつだっていないだろう。寄り添つて、支え合う、助け合う。

それじゃあー、やっぱりイ……致『命』的に足りない。

愛し愛される関係。お互いがお互いの存在理由で、全てを失くしても世界中を敵に回しても共に眠る夢を見続けたいと思えて。相互依存なんて生温い言葉を跳ね除け、それどころか愛以外の何もかもを拒む。……その、どうしようもないほどに歪んだ想いが――

なぜだか、オレの薄っぺらくてスカスカな胸の穴を、塞ぎかけた。

「……幸せ、だったから」

雑多な感情思考を一緒に振り払う、言い切る。そう、幸せだった。さすがに『会話』まではしていなかったけど、それぐらいはわかる。

美味しいものを食べたり心に響く音楽に出会えたり、幸せの基準はいくつかある。定義はない。じゃあカグヤは？——正しさはあって、しかし力がない……というか、強さがない。別に便宜上に過ぎないからどうだっていいけど、要は力の強さと、それを振るう理由。理由なき暴力は愛する者の胸を容易く抉り、力なき……って、これはどっかで聞き齧ったよ。な気が。……結局は思い出せない事柄ぞ。

だから、オレは例え残りカスだろうとなんだろうとかき集めて、真摯に口を開く。うつむくカグヤの

「——うるさいっ!!」

ビクツとなった。全身の血が逆流したのだった。比喩だった。

背筋に冷水をぶっかけられたように明確な害意が向けられた感覚が湧いた。

。

「なっ——なによ、そうやっていつもいつも、勝手に、勝手に——っ！」

「

」

「し、幸せって——『幸せ』とか、そうじゃないって——私、はっ

「」

。

「メイは関係ないもんね!! 他人ごとだもんね!! そうやって——このっ……!!!」

「」

「——いやよ! いやっ! わかってる! でも、それでもっ認められない! 認めたくない——」

「」

「イナバは……私は……違っつ。違っつの! そんなんじゃない! 違っ——」

「」

「そんなの違っもん!! 馬鹿メイ!!」

「」

「メ、メイなんて、いう、嫌い、大ッ嫌い!! あ、あ、メイなんて、そ、メイなんて!!」

——死んじやえばいい!!

「……おーこれちゃったよ」

冗談めかして肩を竦めてみせた。もちろん、オレですら騙されな
い三流の芝居ですけどね。

カグヤが部屋から飛び出した、そのときのままの体勢でいる永琳
に痛みをこらえながら声をかける。ますます血の気が失せ、疼痛を
催す右手の指が冷たくて、先のほうの感覚がほとんどわからない。

……治るまで『時間』がかかりそうだ。

「……どうでしょう。チョコレートで仲直り、とか」

結果だけ見れば、カグヤの言ったことは正しかった。

「優しいおじさんがくれるチョコは全ての問題を解決するじゃない
か」

「……………」

振り向いた永琳は、わらっているような、おこっているような表
情をうかべた。

さすがに、左右ひたいしようでは——なかったけど。

「いやあ、オレの心がフロストバイト」

照れ隠しに頬を掻きながら、うわ指冷た、そう言った。反応がな

いのが怖いから未だ肩は竦めたままです。表情のない瞳つてのはまさにアレ。アレと言ったらアレです。察せ。

「そんなわけで、善は急げ。膳も急げ朝餉」

無意味な雑音をいくら重ねても、永琳は視線を合わせたまま何かを言い出す気配もない。まだまだ動く腕を無意味に振り回し、自分のいった言葉を契機にするように傷む体を持ち上げた。

ひょいと足元を見る振りをして、目を合わせないように

「メイ」

——行かせては、くれないみたいだ。

「あえて蒸し返すけど、主語を言わないとどう解釈されたって文句は言えないし。そこを伏せたまま進めてもきつと読者も理解できないと思うんだ」

——あがが、また電波が。

名指しでご指名が入ってしまったからには仕方ない。立ち上がった体勢そのまま、片足が空を泳いでいるその不自然のままで、顔を上げた。さて、暖簾に腕押し作戦とでもいこうかとかなんとか、考えた。

「どこへ……行くつもり？」

……だけど。

どんな軽薄な言葉で『ずら』そうとしても、騙されない見逃してくれない。優しい、優しすぎる。……まさに、『喰え』ない女性だ。^{ひと}

……いや、優しいんじゃないくて『強い』んだな。

「ちよつと地球まで」

お、一瞬だけ呼吸のタイミングがずれたよ、“ずれた”よ？ こは畳み掛けるべし、とカーズ様からの指令を受信しました、オレ。

「ちよつと雉を撃ちに」

「……………」

「ちよつと京都まで」

「……………」

「そうだ、ループルへ行こう」

「……………」

「年始年末は、北海道へ」

「……………」

「餅つき、はさつき言っただか……」

腕押されるどころか崖に突き出されたのは、オレの方だったようです。一人でべらべら喋るならともかく、対面の相手がとことん黙ると駄目な子なんだよねオレ。お喋りなんで余計空しさを再確認する。口を動かさずしてここまで言の葉とやらを積むほどですから。

「ありふれた言い方だけど——優しさと甘さは、違うわよ……？」

口を開いたかと思えば、これだ。

人の急所を抉るのが快樂というわけでもないのが拍車をかける。その言葉がどれほどの影響を与えるかを理解した上で、その上で、オレを心底心配しているから、というのがわかる。わかるようにも、言ってる。

「……いやだなあ。そのぐらい、わかってるって」

そう、自分が違ってる事ぐらいは、理解してる。

「——そう」

それは重畳。そう言って、片目を瞑って微笑んで見せた。

「……続きは、私の部屋で話しましょうか」

「オレにゃあ、時々永琳がわけわからなくなるよ」

「——そう、かもね」

あくまで寂しそうに、永琳は笑う。

「取り乱してるみたいね」

……わざわざ場所を移す意味はあったのだろうか。

部屋に二脚しかない椅子の、永琳が座らない方に腰を下ろす。いつ見ても知性つてヤツが空気中に散布されてそうだなーとか思つて壁際の本の群れを一瞥した。適当に抜き出した本のタイトルとページを言えば、そこから朗読してくれるよ。知ってた？

「何をおっしゃる。無意味な自我の強さだけが唯一のとりえのこのオレに“取り乱してるみたいね？”はっ、泣かせるねえ」

とりあえず無難に返しておいた。本音言つとさっさとカグヤンと行きたいんだけど、諸々の障害（主に社会とか永琳とか？）に阻まれて、つまるところ永琳に付き従うしかないわけです。あちらを立てればこちらが立たぬ。人生どうしてややこしくなるんだろっかねい。

「だったらどうして、廊下を歩くだけで何度もつまづくのかしら。

——メイ、つまり……」

「いやいや、これは本当に」

言い募ってくる永琳に待ったをかける。そして、『右手』を見せた。

「これとか、証拠じゃね？——多分今のカグヤにオレは近づけねーわ」

もちろん比喩的な意味合いで『時間』から放り出された右手は、動かなくなつてもしょうがねえなつてレベルで、しかししつこく足掻く。腕なのに足掻くとはこれいかに。

そうもちろんオレだから！。

「……それ、は」

「見た目最悪でも、再生の兆しはある。別になくても大して困る時間は永くないし」

指を動かそうとすると、実際にぎぎぎとしちゃいけないような音がする。肉体以外の負傷と見たが、どうなんでしょう。手当てを、と席を立つ永琳をいらね、と制して、しばし黙考。カグヤを踏み蹴った罰なのか。今までの罪なのか。これが のぞんだ けつまつなのか。

傷付くぐらいなら、心なんていらないだとか――。

そんな贅沢言ってられるような環境でも、なかったしね。

「――これでよかったのかしらね」

声と共に、部屋に波紋が生じる。投げられた一石は永琳の自嘲気味な自問だった。

「……………」

口を開いて、何かを語ろうと……する、した。

かけるべき言葉が、出ない。見つからない。どこぞに忘れてきたか――それとも、そんなものの最初からなかった……のか。

「――そんな顔しないで頂戴よ。……ちよつとだけ、弱音が……ね」
浮かべた弱々しい笑みが、オレの心を抉る。……責任転嫁。笑みを見たオレが一人で勝手に傷ついた。

弱音を吐こうとしたら逆に吐かれて……永琳のためと、何でもなような振りをする。

もしかしたらその演技は、ばれているのかもしれない。

――だとしたら。

お互いに強がってるねと、笑い合えるのかもしれない。

ふと思い立って、辺りを見回した。
月の時計は、この部屋になかった。

散る散る垂れる（後書き）

以下今回のボツ会話。どこの予定だったか、わっかるっかなー？

「この脳みそヨーグルトが！」

「ヨーグルトって何よ！」

最近名前が被ってる事がわかり、主人公の名前を漢字表記で出せない。まあ気にしすぎなんですけどね。にゃー。

B G M “ S w e e t R a i n ” b y J a z z t r o n i k

君のいる場所（前書き）

名前ってなんですか？

君のいる場所

泣き叫んで、そしてそれ以上に腹立たしくて——果たして、自分がドアを開けて入ったのかすらもよくわからない。

我に返ったカグヤは、メイの私室の床に座つてすすり泣いていた。ドアに背をつけていて、ちゃっかりそのドアには鍵をかけている。

「……………うう……………」

だが、気づいたからといって、今の今には関係がなかった。絵に描いた餅で飢えが満たされはしないように、例えここがこの世の黒の深淵だとしても、悲しみが消えてなくなるわけではない。

胸に去来する悲しみが、再びカグヤの声を奪う。

声を押し殺して泣いた。半ば意地のようなものだ——弱さを、見られたくないという……子供染みた。既に部屋を飛び出したという前提があつても、手で口元を押さえ、ただ耐えた。流れ出る涙には無頓着に、必死で嗚咽を飲み込むカグヤは、この今まで感じたことのないぐらいの感情の強さに吐き気にも似た感覚を覚え始める。常に眩暈のように視界が眩み、揺れ、重苦しい何かが腹の底でのた打ち回る。

この苦痛から逃れたいという衝動がその身を焦がす。赤く燃やす。これ以上苦しみたくないという後ろ向きな欲望が、燃え盛る業火の中へも飛び込ませる。

汚れたくはない。

穢れたくはない。

私の全てを、燃やし尽くして——。

ふと、一瞬だけ身震いするほどの寒さを感じた。胃液のすっぱい味が喉の奥まで迫り上がってきて、思わず口を押さえた方の手へと重ねた指で深く爪をたててしまう。自分がわからない。何者かが自分の中を切り開いてきて無理矢理に突っ込んでぐちゃぐちゃに掻き混ぜたような、薄ら寒くなる痛み。壁と床が意識から消えて、自身すら見えない闇の中に放り出されたように視界が回る。

ごつつという鈍い音がどこからか聞こえ、それが、自分が床に横倒れた際の音だと気づくのに、揺らぐ視界は不便だった。

這い寄る夜にいくら怯えても、硬く目を閉ざしてさえいればいつかは日が差す。まるで潮が引くように衝動が消え、その代わりなのか残滓のようなものが残った。自分には肉があり、血があり、骨があるというのに、この破裂するかのような感じはなんなのだ、と力グヤは悪態をつく。涙は枯れ果てたのか、頬に乾いた不愉快な感触があるだけだ。不愉快不快、そし先程の………自身の、苛立ちも目立つ汚れや埃はないようだが、いつまでも床に寝そべっているのも馬鹿らしいと、とりあえず上半身を起こした。造作もなくできたから、幾分落ち着いたらしい。ただ、泣きすぎたせいで目は内側から押し付けられたように腫れているだろう、と考える。以前ひどい風邪でうなされていたときにも似ている。

「……………」

立ち上がろうとすると、猛烈に頭痛がした。仕方がないから手近なベッドまで這うようにして距離を詰める。———そういえば親も、二日酔いだとかでこんな風にやっていたな、と思い出して、ふっと笑いが零れた。

ベッドの縁までたどり着き、足はおざなりに体だけでシーツへと飛び込む。埃を舞い散らせてから、メイの臭い……と眉根を寄せたがそもそもあまり使われた形跡がない。以前に丸めた紙を突っ込んでおいてやったら案の定、次に来たときもそのままの位置にあった。

「……………メ、イ……………」

口の中で、小さく呟く。シーツの冷たさが心地よい。手を、滑ら

せるようにその上で動かした。

——風邪で寝付いて、快復してから最初に来たとき、玄関へ入った瞬間に抱きしめられた。行動の意味はいまいちわからなかったけれど、心配してくれていたのはわかったから、しばらく二人してそのままでいて。メイの顔を見上げたとき、「ひよつとしたら泣いてるかな？」と意地悪く思ったりもした……別にいつも通りだった。が本当はお見舞いに行きたかったんだけどね、と言われて「じゃあ来なさいよ」と軽く返した事までは覚えてる。永琳の方は家族ぐるみのお付き合いつてやつらしいし、実際薬は彼女特製。その薬を渡しに来たとき、「ごめんなさい、って言うてくれと頼まれたのよ。……メイは来れないから」と言われて、別にそのときは永琳だけで十分だと思った。りんごを剥く手が綺麗だったのまで覚えてるし、別に今日来てくれないからって、と思っていた。……はず。

……でも本当は、結構真面目に来て欲しかった——んだと思う。同じぐらい好きな永琳の手前、強がっていた。別に一々日記をつけるような性格でもないから、理由まではわからないけど、その日はずっとむすつとしていた。気づかれてはいないつもりだったけど……どう考えてもバレていただろう。二人して苦笑しっぱなしだった。何よ、二人して子ども扱いして……なんて反発は、どうしてかメイだけに湧いてくる。どうしてか、子ども扱いが受け入れられない。気持ちが悪い。メイには、『同じ』でありたい。対等に見て欲しい。自分の底を手繰っていくと、どうやらこの感情、根底の部分はさっきの憤りにも似ていた。

顔を乗せているシートに体温が移ると、途端にうつとおしくなった。がーっと叫びながら体を起こして立ち上がる。そうして、あちこちに散る神経を引き締めて、気持ちを新たにする為に声に出した。「……よし。ごめんなさいって、謝って……とりあえず、謝ろう」不思議と、先程までああも乱れていた自分の気持ちを今はもう客観視できていた。

泣き叫んだとき、何かを言い捨てた気もする。多分ひどい事を言っただろう……メイに。というか言うならメイ、例え覆水が盆に返ろうがそれ以外は考えられない。

周りを見回してみた。変わっているところもあるが、相変わらず机の上はなんだかごちゃごちゃしてる。……なんだかここに入るのも久しぶりな気がする。最近「二人で部屋に閉じこもると永琳が××××を見る目で見てくる」とかで、あまり入れてくれなかった。

そのメイは、気紛れに何かに没頭して飽きるとあっさり興味をなくす。木屑だらけだったり、書付で足の踏み場もないほど埋め尽くされていたりしても次に来たときには大概綺麗さっぱりなくなっている。毎回机と寝台ぐらいいしか共通項が見出せない。

視線を動かすと、部屋の一角に背もたれ肘置きもなく、ただ素っ気無く上に人を座らせるだけの椅子と、三脚に置かれれば一色で塗りつぶされたキャンバスとがあった。その床だけ紙が敷いてあって、その辺には筆や絵の具、鉛筆で簡単に描かれた絵だとかが密集している。……これにも、もう飽きが来たのだろうか？

その、イーゼルに据えられた絵に興味を惹かれて、近づいてみる……見てもいいんだろうか……見られたくないんだったら隠すなりなんなりするだろうし……などと、頭のどこかで言い訳を考えていたが、目は引き寄せられるように絵を捉えていた。

黒い。

第一印象は、その一言だった。

よくある感じの、やや縦に長い長方形。その布地が、四隅を残した黒い「丸」でぐちゃぐちゃと塗りつぶされている。足元の物を蹴飛ばさないように注意しながら目の前まで近づくと、適当にも見える線の運び方には統一性があった。なんかこう……斜め線とかではなく、円を描くような。乾いている事を確認して、指を走らせてみた。

上から下までずずっと動かすと、黒い丸のさらに真ん中のところだけ、微妙に盛り上がっている。というか、横から見たらそこだけ

盛り上がっている。どれだけ絵の具を重ねたんだ。

「んん……？」

もついいか……と思ったときに、一瞬だけ絵の何かが気になった。片目を閉じてさらに目を凝らすと、これは……。

「金……色？ 何だか……人、みたいな……」

黒い絵の具だけで重ねているわけではないようだ。釘なんかで引っかいたら下の色が出てきそうだが……何を描きたいのかよくわからない。

。

伝わった。

何を描きたいのかはわからないけれど。

かなりの『時間』が、この絵に費やされている。

君のいる場所（後書き）

*実際に男の子の寝台の中にティッシュを突っ込んでおくのは大変危険です。真似しないでください。

妙々嬢雅（前書き）

絶えるってなんですか？

妙々嬢雅

——ぼおおん、ぼおおん……。

面倒がった給仕が落とした皿が、重力に従って素早く落下する事すら面倒がつて——それでも、粉々に砕けてしまったような、あくびを誘う気だるい音が響いた。

カグヤがちよいちよい訪れるようになってから永琳が用意した柱時計が秩序を知らせる中、組んだ足に両手を乗せる。地球だろうが月だろうが基本、和服。一張羅。これしかないの意味で。もちろん永琳が何着が見繕ってはくれたけど、月の服は中華だかわけわかんないし、日本人には和服が一番合うのよ。……ああでもジーンズにはまだちよつと未練が。

「いやあ、昔は狂ったなあ」「そうね、傍から見ているおもしろかったわよ」

コイツめ、言いやがる……と、こうして笑い合ってみれば随分と昔の事のように感じられる話題に花を咲かせた。

——カグヤ自身から来てくれるか、という不安を誤魔化すように「月の力の一端——そうさな、月光ビームとでも名付けようか——の発信源にいるもんだからねえ。文字通り頭ん中が花畑だった」

「昔はもつと凄かったのよ、その月光ビーム」
「マジで？——まあ、今となつてはいい経験だった……と言えなくもない……かな？」

——ぼおおん、ぼおおん……。七回あくびが出た。しつこいようだけど、寝てなくてね。
てかホント寒い。カグヤに抱きつきたい。カモンカグーヤ、レッズスネークカモンよ……。……永琳は……。論理的に、ね。

「……そういえば。雪山で遭難したときは、水分補給のためだから雪を食べてはいけないのよ？」

「知らないよ。どうだっていいよホント寒いよ抱きついていい？」

「メイ。寝言寝言」

「寝言なもんか、永琳はオレにとって大切な存在だか」

「えいつ、千ページ越えアタック」

「超痛いっ。しかも角！」

「まあ作者の欄には私の名前が書いてあるんだけど」

「何その自慢！ 悔しいしめっちゃ腹立たしい！ ビクンビクン」

「タイトルは『活字で学ぶ！ マンガが巧くなる方法』」

「売れ残りが山を作りそうな臭いがプンプンする！ 不思議！」

「内容は主に水を沸騰させる方法についてびっしりと」

「オレなら一ページで書けるわ、訴えられるよ——ってペラペラしたら一ページあたりの文字数が半端ないっ」

「どこその作者とは書く速度が違うわ。——ってしまったわ、本を渡したら身を守る物がないのかわ」

「わわわのわ、油断したなエイリン」

「えいりん、もといこのヤゴコロエイリン、一生の不覚」

「さて、そろそろこれもノクターンの方に移るときがきましたなぐへへへ」

「その笑い方止めて」

「はい、すいません」

「苺屋、そっちも家具屋よのう」

「いろいろ違いすぎる」

「いいのよ。作者が最近ほのぼのの定義を見失い気味だから」

「オレの中の永琳像もどんどん見失われてる」

……………。

ひとしきり言葉が交わされて、後には静寂だけが残った。オレは自分が思ったよりも下種な笑い方が合う事について、今後の身の振

り方を見失いかけた。第一部はオレがダークサイドに堕ちるまでをこのまま描ききって、第二部からは裏切っていたようで実は裏切っていないかった永琳との死闘の末に黄金の精神を受け継いだグーヤが世界の命運をかけてオレと対峙！——将棋で！みたいな。

意図せずに出たという感じで、はあ……、と永琳が溜め息をついて、肘掛けに置いた腕で頬杖を突く。幾度と扉へ向けられる目線は、その心中を察するにはあまりにも容易で、かけるべき言葉は……それこそいくらでもある。

「……花火が綺麗なのは一瞬で散るからだよね？」

——おキツネさんの能力。……とは、言うものの、の。結局口から出るのは無意味な感嘆符だけだった。語った都合が悪いから、誤魔化す。話題の焦点をずらして、相手の意識をずらして。あつらえたようにオレと符合するのは、『会話』と『焦点』の能力を自分の都合に良いように改悪しているからなのか。……だったら、元々の持ち主たちはどう扱っていたのか。オレよりも、正常な使い方をするのだろうか。

実際、横に並べて鑑賞できはしない能力を持っている以上「そういう気がする」って感覚は以外と重要で、決して無視できるものじゃない。「これはできそう」「理屈じゃ効かないけど、これはできない」なんかを変えるには、本人の意識改革が必要だ。いやホントホント。猫の足音に誓ってもいいよ。

「それは」

急に、永琳がオレへと視線を戻した。頬杖を突いたまま椅子に背を預けたその輪郭は、何だか全体的に斜めに傾いているように見える。

「それは、本当にカグヤの能力の結果なのね？」

これ？ と無造作に掲げた右手に永琳が頷いてみせる。

「……まあ、あんまこう言うのもなんだけど、意図しない暴走つてヤツですよ」

ぐーぱー、と右手をにぎにぎして無事治ったよアピールをしてお

く。まだ僅かに指先が震えてるけど。

「さっきも言った気がするけど、オレが違ってる事ぐらいはわかってるつもりだから、カグヤがまだ能力の使い方を理解してなくても仕方ない。大丈夫、わかってるって」

「仕方がないとまでは言わないけれど——あの子はまだ小さいんだから、情状酌量の余地はあるわね？」

「あるわね——……と言いますが、ないわけないでしょう？　みたいな意味合いを感じましたが、間違っちゃいませんねー？」

「というか、永琳とカグヤってどうなんでしたっけ。

「というか。永琳とカグヤって、どうなんでしたっけ？　どうと言うか……」

付け足すように言っ、そこで言葉に詰まる。

考えてみれば不思議な関係性だ。オレも人の事言えないけどさ。今度永琳にどうしてオレを拾ったのか聞いてみよう。

「あー、今の質問は一旦取り下げて」取り下げて、と言葉の間に荷物を降ろすような身振りを入れる。「——愛してる？　カグヤを」強いて尋ねるなら、理由とかも。

「理由なんてないに等しい。……それが愛するって事でしょう？」

……そーなのかー。

「まあ、そうだろうね」一言、ぽつりと。

果たして永琳に言ったものか、何なのか。

「それに、精神もまだ未熟な段階で能力が発現してしまうなんて……責任の一端はアナタにあるとしておきましょう」

「否定はしないが……随分と理不尽っ、と心の中で思っておく。――

――そんなに難しいかね、能力をどうこうするのに」

「……アナタに話しても無駄だったわね、バケモノ化け物キチガイ」

「お前が言っかい、天才」

——カタカナで書くと“キチガイ”に似てるなーと、思っておこうか。

愛されてるなーとも、心の中で思っておく。

ボー……ン、ボー……ン。いきなりそんな音がして、彼女は思わず声をあげるところだった。

いつもの部屋にいない以上、残る可能性として永琳の部屋へと足を運ぶ中、少し前から永琳が設置し始めた時計が都合七回鳴った。いつだかメイが鳩が出てくれば……と妙に口惜しげだったが、寡聞にして自分は鳩という鳥を知らない。

不気味に響くその音に急かさせるように、廊下を歩く足を心なし速める。

「……だけど、何て言おう……？」

そう呟いて、我知らず視線が落ちる。そこで、交互に迫り出される爪先を凝視した。どたつどたと裸足が床と接する度に、決して小さくはない音を立てている事に気づいて、慌てて慎重に足を下ろす。

――。

目的の部屋を通り過ぎていた。すぐさま踵を返して、たった今歩いていた廊下を辿る。……精神のにつらいものがあった。

――本当に、何をしてるんだろう。

自嘲気味に口の中で、小さく呟いた。同時に口内が妙に乾涸びて
いるような感覚。そのまま、唾を嚥下するように喉を鳴らした。

しーん……と静まり返った空気が耳に痛いほど響く。その中を、
きゅっきゅつと抑え気味な自分の足音だけがしていくのは、あれだ。
メイが前に言っていた「えびくろす」って奴だろう、と一人頷く。

そして二人がいるであろう部屋の前まで辿り着いた。見えない向
こう側からは、期待していた通り話し声が漏れ聞こえてくる。――

期待、というか……あんまり嬉しくなかった。どうしよう……と、
この期に及んでまだ考えがまとまっていけない事を言い訳に、扉まで
目と鼻の位置といえるほど近づく。

「それは……」

「難しく………。……ガオン！」

その扉を開けようとしていたのかどうなのか、前へと伸ばされて
いた腕が硬直する。

「でも………。らって……んな……」

「いや、ありえ………。じゃない。………。もね」

不明瞭に、途切れ途切れでしか聞こえない会話に私は萎縮させら
れる。

……そうだ。何を言い捨てたのかもわからないんだったら、一方
的に罵声を浴びせたんだとしたら、メイに嫌われてしまっているか
もしれない。

気持ちの良くない想像が浮かんで、それが一層私から行動する意
欲を奪っていった。知らず知らず現状を維持する事に意識を傾け、
扉に両手をつけて張り付くような格好になる。

私は――愛されてるのだろうか。

「両の手で掴んで伸ばしたゴム、その片方を離したらもう片方が痛
い。そんな感じ」

急に、先程よりも明瞭な音として聞こえた。言っている事は相変
わらず要領を得ていないが。

「そう思わない？――カグヤ」

「いつ!？」

反射的に身を引いてしまつて、手で突き出すようにした扉がぎぎつと軋んだ。

ドドドドと心臓が早鐘のように脈打つて自己の存在を証明してくる。痛いほどに踊り狂う動悸が働きすぎているのか、こめかみにまで脈打つ鼓動が届いてきた。冷や汗が吹き出て思考が空回る。どうしようどうしようどうしようどうしよう――。

「いい加減出といでカグヤー。百数えるまで待つからー。ひゃーく、きゅーじゅきゅー」

腰の入っていない、明らかに面倒臭がつているなと思わせる声音で、カウントが始まつた。

「――あら、そういえば今何時？」

「はちじゅーきゅー、んー？ 七時だな、ろーく、ごー、よーん」それは反則だろオオ！ とカグヤが思う暇もあればこそ。

どうすればいいか、と一瞬迷つたカグヤの目の前の扉が内側に開いた。空気が押し退けられるようなその勢いに負けない速さで、その内側から手が伸びる。カグヤの首の辺りを素早く無理矢理掴んで、同じく強引に室内へと引つ張りこんだ。

「っきゃー！」

ぐいつと引つ張られて、思考が追いついたら今度はメイの胸の中。将来脱毛の影に怯えなければならぬほどに頭を撫で回され、口にしたい言葉も言わなければいけない言葉も、何一つ出す事ができない。

「はっはっは！ そうかそうか“許してくれている”のかカグヤ！」

「い、いやっ……何？」

ギブギブつとカグヤが腕を掲げて何とか話す隙間を作り、助けてえーりん！ と部屋にもう一人いるであろう女性の名前を呼ぶ。ちなみにその頭上ではメイが対面に“最初に抱きしめる役得役得”と目で笑い、あくまで優雅に微笑む永琳の指が分厚い本の背表紙を撫でていたが、あまり関係はない。

「ちょ——ちよつと！」

止まない雨に業を煮やしてカグヤが叫ぶと、おつと失礼、とメイが自重する。部屋に引きずり込まれるなり振るわれた理不尽な行為の末、やっと一息つけた事に安堵してから一転、叫んだ口が二の句を継げなくなる。

「……あー」

カグヤの目の端に涙が溜まるのを見て心のどつかで「眼球舐めてー」のかも思う変態であるメイは、カグヤが言葉に詰まったのを見て、去り際に何を言ったのかを知っている事に気づく。心象理解度も変態級。

「いや……まあ、ねえ」

濁すように、カグヤの髪を掻き上げる。ふと、初めて抱き上げたときよりも随分大きくなったんだな、と思った。

「私——」

「はいストップストップ。——お互いに失礼な事言ってしまいました、ごめんなさい。それでいいじゃない」

瞳を潤ませて何か言いかけるカグヤを制し、難しく考えすぎなんだよ、このバカグヤ——とメイが抱きしめる。

それに対し、バカつて何よ……とカグヤが口に出そうとするが、しかし続けて言われた言葉で、ただメイの温もりを受け止めるに留めた。

「イナバの事は——」

溢れる涙を、隠すようにメイの胸に顔を埋める。沈静化していた傷口が、またも開いた気がした。痛いから、辛いから目を逸らしていた部分。心を凍てつかせ麻痺させて、極力考えないように思考の外に追いやって、自分を守るために閉じ込めていた感情。

——隔てていた。

私には……それが——。

けれど、この痛みを受け入れる事が、私とイナバにとって……身勝手かもしれないけど、多分一番いい事なんだと……そうカグヤは思った。

「無神経だった。カグヤの気持ちを思ってたやれなくて、オレは——」
「——違う、そうじゃないの」

再び相手を遮るような声が、今度はカグヤから発せられる。

小さな体が、歓喜興奮恐怖拒絶激怒爽快悪寒愉悦感動……複雑な感情によって、震えた。メイに抱えられているまま、しかし直視できずに顔を伏せる。

「私は、多分……一人が怖かった。悲しくて、心が……押しつぶされそう、それで……メイに、あんな事言っちゃったんだと思う」
嗚咽を飲み込んで、カグヤが自身を吐露していく。あんな事、と言ったときにその表情がにへらつと笑った真意は、おそらく、メイにも……永琳にも、わからなかっただろう。

「でも……でも、でも！」
顔を上げたカグヤが、二人を見る。濡れて、純真に光る双眸が問いかけた。

「私は違ってた———そうでしょ？」
人一人、部屋で俯いているだけで寂寥に心を蝕まれてしまう。
人一人では、寒さに凍えても肌を寄せ合う事すらできない。

ヒトひとり……では。

「……馬鹿ねえ」

カグヤが、ふわっ……と、永琳に抱きしめられる。
「メイにバカグヤって言われても仕方ないわ」

抱きしめられて、見上げるカグヤは、破顔した永琳を見て、必死に落涙を抑えた。——笑うべきだと、わかっているから。

「それ遠回しにカグヤに馬鹿って言ってませんか？」
「言っていないわよ」

その後ろから、髪を撫でられる。
メイに、支えられる。

一人によつて、以前「奇妙」と称された三人は、一人の腹の虫が
鳴くまで、笑い合つた。

妙々嬢雅（後書き）

バカグヤって聞いた事ないけど言いやすくね？

な、第二十二話「妙々嬢雅（みようみようじょうが）」でした。
タイトルに深い意味はない。というかそんな言葉がない。

B G M “ A D E L U S I O N - 迷妄 - ” b y S O U N D
H O L I C

思い出す事と、何か（前書き）

理解ってなんですか？

思い出す事と、何か

「ほう……手前、今何て言った……？ カグヤア……」

「何度でも言うわよ。——そんなの、怖くも何ともないわ」

「ごちゃごちゃと物が取り散らかされた机の上、カグヤとオレの視線が交差する。眉根を寄せてみせるが、すました顔でせせら笑ってきた。」

「ここでふん——と鼻の一つでも鳴らすのは、クロナギか。」

無造作に丸められた紙屑を掴んで、あえて誇示するようにゆつくりと指を一本一本握りこみ、開く。手の平から現れたのは、塵のような幾ばくもない白い粉。何度も何度も粉々に粉々に粉々に粉々にされたそのしろーいのは、再度右手を握って開くと完璧に消え去った。

あえて緩慢なほどに間を利かせて、「……だったら試してみるか？」「ええ」ほとんど即答に近いそれは、予想通りだ。

椅子から立ち上がり、同じく机に両手をつけて身を乗り出してくるカグヤと睨み合う。その代赭の瞳からは、決して浅慮からではなく確たる自信があるからゆえの余裕さが垣間見えた。

そのまましばし見詰め合う。見合いでもしているかのような沈黙は、お互いに出方を窺っている——のだが、こちらは既に先制打を与えて場の主導権を握るしかないところまで追いつめられていた。

悔しいが後手に回らされている。猫が鼠をいたぶるような微笑を浮かべるカグヤに、オレが番外からの一手を投じられている為だ。

『言霊』^{コトダマ}という概念がある。別に概念と言ってもオキシジェンを

引つ張ってくる必要はないが、この場合要は意味合いを離れた意味……とでも言えいいのだろうか。ノーベル賞と聞けばとりあえず何だか凄そうで、アメリカの子供たちがデイズニランドで「どうしてピカチュウはないの？」と疑問を抱くような感じ。『得意技』あるいは『十八番』は決める事に意味があるのだ。御迎えが来たら

皆きつとあきらめて逝くけど、でもその御迎えを倒せば寿命が延びるとしたら？——ステキッ。じゃあもしその御迎えが江戸っ子氣質でついでにさぼり魔だったら？……話が逸れた。

この場合問題なのは“常日頃からカグヤに繰り出しすぎていて、それに対してカグヤの恐怖心が薄れてしまっている”という点だ。もちろん警戒はさせられるが、あの表情……間違はなく何かを仕掛けてくる……。エンジン音だけ聞いてブルドーザーだと認識できるようにわかった！もといわかる……。相手はこちらの手の内を知り尽くしているのにこっちは未知と遭遇しなければならない、この差。それを埋める為に、観察……観察する。人間には限界があるのだよポルナレフウ……。相手のパンチは手を見ていては避けられない、だから肩の筋肉を観るように……。人間である限り限界は訪れる……。相手の呼吸に自分も合わせ、必殺の瞬間を待つ。獲物に飛びかかるカマキリのごとく息を潜め、待つ、ただ待つ。猫を噛み殺す瞬間を。——鼠はいたぶられているのではない。猫が、決して慢心せず最後の最後まで鼠の戦力を削ぐのだ……。っ！

タイミングを合わせ、カグヤが動き出すのと同時に先手必勝！とばかりに相手の右側へと飛び出すが、まさにまったく同じ事をカグヤも考えていたらしくすぐに鉢合わせとなる。咄嗟に蹴り足をくりだして来るが背後に軽いステップで飛び退き、避ける。

「喰らえ！“奥義・巢魔異瑠節斗！”」さきに言っておくと、楔カウンターの有無はどうでもいい。

お返しに放つ、両手を使った残像が見えるほどのラッシュ。だがやはり見越していたらしいカグヤは、彼我の身長差を逆手にとってラッシュの下を掻い潜り懐にもぐりこんできた。

「おらあ！」

深い前傾姿勢からのえげつない^{リバーブロー}鳩尾打ち。息を吸った瞬間に、無警戒だったオレの腹部へカグヤの拳骨がめり込んで、素で「うつ……」と呻いてしまった。……誰だこんな教えたの出てこいや、ちよ脂汗出てきた。

「犯ヴァーガーだッ！！」

左手で握った右拳を包むようにして、えぐい攻撃をしてきたカグヤに振り下ろす。単なる意地で放つような攻撃は容易く避けられ、何の躊躇いもなく顔を狙ったカグヤの反撃を首を振ってかわす。組んだ両手を解いて右手を相手の脇腹に伸ばして、華奢な肋骨を感じながら逃げられないように掴んだ。その手に少し力を入れ「巢魔異瑠節斗を愚弄する者は死して償いを受けてもらう！」うわああ……などと言っているが無視し、冥土の土産となるであろう宣言をする。

北斗残悔拳……ッ

喧嘩は駄目よ」

言葉と共に頭を叩かれた。

振り返ると、思わずうわああ……と零れてしまふ人影が。

「うわああ……」

「二人揃ってそんな感想？」

「うわああ」

「うわああ」

「うるさい」

もう一度頭を叩かれる。視界の隅ではカグヤも叩かれた頭を抱えて呻いていた。

そんな永琳も、一応、ただ暴力を振るいに来ただけではないらしく、お茶を乗せた盆を机の端に置いた。興味深げに、今カグヤと遊んでいた卓上のゲーム盤を眺め始める。

「ねーとりあえず続きやろうよー」

「——ん、ああ、あいあい」

永琳にありがとう、と言おうとして、復活したカグヤの声の方に目を向ける。永琳自身見てるし、別に大丈夫だろう。

二組の目が見守る中でカグヤが、全体的にチェスに似たそのゲーム盤の上の、自分のコマを掴んで四マス前進させる。

「キャラクター【カグヤ】の移動によって伏兵が登場」

魔物が出現する範囲まで到達したためその旨を伝え、魔物を表す

コマを盤面に追加。全体的に一箇所に纏まるように配置する。

「うげつ。……じゃあ、何だかいい感じに固まってるし範囲魔法撃つとく」

言つて、数種類のサイコロの中から6面の物を選び出し、三個纏めて振った。カグヤの小さい手からサイコロが零れ、硬質な音を立てて落ちる。

「6面サイコロで三回……能力値の13プラス4+5+4で26か。オーケー、鬼畜火力で雑魚は全滅。この戦闘ではもうその魔法は使えません」

「まあネタキャラだし。力自慢のウィザード」

「杖で次々と魔物を撲殺していく魔法使い……シュールだが、まあいい。じゃあ【螺子切り童】の攻撃」

「まだイニシアチヴ先のNPCいるよ」

「おっと、間違えた。それじゃあどうぞ」

どうぞ、と手の平を見せて促すが、期待に反して割と渋いカグヤの声。

「んー……どうしよかなー……。その【螺子切り童】ってボス強いんでしょ？」

「カグヤのキャラは【知覚判定】失敗してるけど……うん、まあ強いよ。ストーリー上重要だし」

「アナタたちって、一度たりとも同じ遊びをしてない気がするわ」

うんうん唸りだして考え込んだカグヤと、少し呆れた様な声音とひとまず永琳の方へ、何ぞや、ってな顔を向けてみる。ついでにやってみる？ と聞いてみる。みるみる。

「要は将棋でチャンバラごっこやる感じだよ」

「そう？ ……遠慮しとくわ」

物凄い形相をしているカグヤを見ながら問いかけると、同じくカグヤを見ている永琳が答えた。「はい」「おっと、ありがと」親を、ミス、お茶を渡されて、英語で言うてんきゅー的な意味合いの言葉を返す。

一口啜る。熱つ、と舌に触るか触らないかで引つ込めた。大人しくフーフー吹いて、ファンファーレを奏でる事にする。ばやばやと立ち昇る湯気に透けて、カグヤにもお茶を渡す永琳が見えた。

「——何か、メイの淹れるお茶より永琳の方が美味しい気がする」

ああ、茶柱こそ立つ気配を見せないものの今日も今日とてお茶が美味しい。カフェイン中毒のオレも、手の平から伝わるぬくもりに心癒される毎日です。聞き捨てならねえ、そんな事してる場合じゃないって意識の端っこが訴えてるけど気のせいだよ。

「何かやってるの?」「んー、別に何も」

「おはぎでも食べたいな……」

「じゃあ、あれ。永琳だからよ!」「私だからって、何それ」

「適当に生地作って餡子入れれば完成……か?」

「メイより永琳の方が素直に美味しいって思えるアレよ。悪く言えばブランド効果」「最後のがなければ素直に嬉しかったわね」

「小豆とかあるのかな……」

「……ふう。どうでもいいわね」「ええ、そうね。——熱くないかしら?」

「——よし、面倒だ」

「うん、大丈夫……って、さっきから一々うつとおしい!それ食べたいわよ!」

ひとしきり悩んだ末決断をしたのだが、カグヤに何か美味しそうだから作れと言われてしまふ。ぶっちゃけた話不可能です。

「うつとおしいっておま……」

「存在しているだけでうつとおしい」

「ひどい!」

「けれどないとないで寂しいのよね」

「嬉しいようであんま嬉しくないです」

取り持つように永琳が言ってくるが、実にコメントしづらい評価をしてくれた。

ふてくされて、何かを誤魔化すように腕を組む。ふと、我ながら

子供染みてるとは思えど精神年齢が一桁だからきつと関係ないぜいやっはアー！ な妙案が浮かんで、右手の人差し指をピーン、と伸ばした。

「今日の夕飯はネギオンリーにしてやろう」

——誰かに作ってもらった方が、美味しいのよ——。

たかだか『前』を覚えているんだかどうかも怪しい程度、作る料理だけを比べたところでオレに軍配が上がる道理もないんだけど。レストランでバイトしてたとか代々の暗殺者家系だったとか、そういった便利な設定も書き忘れてたし。

……いつだか、冗談めかしてそう言っていた。楽しんで生きるのが私よー、という具合に。

“じゃあ、してあげようか？”

——嘘には引っかけやすい方だと、自覚している。

目をずらし。口を隠して耳を塞ぐ事もできたけど。「いやまあ年貢の納め時、ってやつ」とかなんとか……誰とはなしに、言い訳した気がする。

言い訳して。とりあえずまあ、永琳の体重を倍にしてやろうという目標を立てて、ついでのように体重を知るすべがない事に気づいた。まあどうでもいい、余談なんだけど。

「それじゃ、できたら呼んでね」

人のネギ発言を華麗に無視した永琳が立ち上がる。ちょおま、僕は本気だぞ！ ……七パーぐらい。

そんなわけで僕は永琳を見送った後にカグヤと向かい合ったのだ。ふと見ると、カグヤは普通に口リいかった。

「ねー聞いている？」

ウホッ！ いい幼女…。

「変な顔してないでさー」

と、そんな事を考えていたオレは、変な顔をしていたらしい。「

どの辺？」「全部」「いつから？」「最初から」などと言い合って、いつも通りの予定調和。

今までと、これからも。依然、変わりなく。

「楽しい時間って、すぐに終わっちゃうねー……」

月人は気が滅入らないのだろうか。夜半と定められた時間になっても暗闇とは程遠い薄墨を見る度にそう思った。

これが種族差か。きつとオレの精神耐性ですら、彼女等のそれで割るとゼロに等しいんだろう。

「世の中、そうそう都合よくはできてないんだって」

ふと、胸中の寂寞を吐露したカグヤに、したり顔でそう言った。ゲームでのボス戦が終了し一段落着いたところで、今日はこの辺にしておきますか、と断りを入れた直後、嫌いな食べ物を出したときと同種の顔ではあ……と嘆息。サイコロを仕舞って、後ろに回ってどうした？ と頭を撫でた。

「もう時の流れの無常さを感じてるのか？ —— 永琳を考えてやれよ、お前がそんなだったら一体どうすればいいのさ」

「いや、違うわよ」

撫でるオレの手に逆らわず、そのままぐでーっと机に突っ伏した。「なーんて言うかさ。こう………なんだろ」

重ねて伏せた手に頬を預け、なんだろ？ と首を傾げてみせた。うりうり、と頭頂を触りながら、ふむ……と相槌を打つ。

「……なあ、カグヤ」

「ん？ なにー？」

ところどころがやや跳ねた後ろ髪に声をかけると、そのままの体勢で返事が返ってくる。

「――全ては終わりから始まりまでがある。つまりは『永遠』と『一瞬』」

腰の辺りまであるそれを、手櫛で上から下へと梳いてみた。指と指の間を艶やかな黒髪が流れ、まるで水を掴もうとしているかのような感覚を与えてくる。

「口じゃうまく言えないけど、何か変な感じなんだろう？ カグヤの能力は、もしかしたらその辺に関係しているのかもしれない」

「んー……」

そうなのかな……とカグヤが呟く。能力の事は、わかってる？ 聞いた。

「ん……永琳が言うには、私も持つてるらしいんだけどね。……よく、わからない」

声音の端から困惑が滲んでいる。勉強はともかく、こればかりは自分と向き合うしかないからねえ……。

「メイも持つてるんでしょう？」

「ん？ オレ？」

「そ。能力」

座ったまま、体ごと振り向いて「ね、どんなの？」と聞いてきた。「能力を扱うって、どんな感じなの？」

「えー……オレえ？」

急に手持ち無沙汰になってしまった右手で頬を掻きながら、言い洩る。どうするんだよ、こうしてよくよく振り返ってみるとこすずるいようなの多くな？ できればいつものように適当に流しておきたい話題だったが、永琳に聞いたのか口ぶりがやけに確信的だった。

「……」

「メイ？」

「……いや、まあ何と云うか」

本当に、何と言いましようかね。

「……『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』」

「ふーん……」

結局、「メイらしいね」との事。ありがたやありがたや。

「どういうのなの？」

「ま、名は体を表すという感じ。『食べる』能力だね」

「それって、どうやってわかったの？」

「どうやって……か」

言われてみると、ほぼ目覚めた直後に能力に気づいてるんだな才し。しかも参考になりそうにない方法で。

「いや、『能力あるんだろー』って言われて、自分の内側に意識を向けたら、何かあったーみたいなの」

「使えねー」

自分の感覚で説明しすぎたのか、一言で切って捨てられる。我ながらしょうもない説明だしね、誰だってそー思う。オレもそー思う。「予告し……ん」

言いかけた言葉が、飛び込んできたカグヤによって遮られた。

「自分の事なのになからないうって……変、なのかな」

——昔も今も、抱きついてくる癖は変わらない。

ぼつりぼつりと漏らす言葉は聞こえ、その表情は窺い知れない。

その肩を抱いて、また少し大きくなったな、と思った。

「時空間を統べる能力なら、カグヤ。お前は『世界』を支配する程度でなくてはならないッ！——は、冗談として」

脇腹をねじられた。

「始まりと終わり。ことさら重要なのは、自分が理解できる規模まで落とし込んで『理解した気になる』こと。知ってたか？ 正六面体なんかは四次元における物体の断面なんだぜ」

「えっ、えーっと……？」

「三次元物体の断面は必ず二次元である三角形なり四角形になったりするだろう？ だったら三次元物体は四次元のもの断面なんじゃないかという……まあどうでもいいけど」

オレ自身よく知らないし、と付け足すと、胸に頭突きをかまされた。

おうふ、とよがって、絡み合ったままくりと回る。カグヤが座っていた椅子に、今度は二人で座りこんだ。そこでカグヤが顔を上げ、一旦立ち上がる。いつものように、オレに背をくっ付ける様にして座り直すと。

「……ははっ」

何故か、自然と笑いが込み上げる。何笑ってんの、と言われても、可笑しいものはしょうがない。

無くした物を『なくす』ことなんてできやしないし、いつまでも未練たらたらに引き摺ってしまう。

誰もがいつだって探し物をしている。

「……カグヤ」返事を待たずに、「人は、その一生を使って何かを探しているのかも知れない」

「……なーに、それ」

「その『それ』を探す事が、人生なのさ」

聞き慣れた、呆れる声。構う事はないさ、とも思ったり。

「でも人には限界があって、わかってもない物なんて探していられないとか飽きたとか、そんなのを除いても——いつか必ず『終わり』と出会う。そして、探すことの出来ないその場所まで来ると、それに『神秘』という名をつけて納得するんだ」

「ふーん……」

聞いているのか聞いていないのか。少なくともその声は「あ、コイツ聞いてねーな」と思わせる色をしていた。

……お前は、ほんのちよつとだけ探すことのできる場所が多い。

区切りをつけることができないものには手を出さない。……幸せになるうだとか、強くなるうだとか、そんなものは全部自分の中でうまく折り合いつけて生きていくしかない。

「こんなところだ……まごついてる『時間』なんて、ないだろ？」

カグヤは、膝の上で小さく身じろぎした。

思い出す事と、何か（後書き）

作中でやってるゲームは「D&D」と言つて、何か、こつ、サイコロで進めるチェス的な。そういうものなんだ程度で大丈夫。

変えられるものはかえられる（前書き）

聞こえるってなんですか？

変えられるものはかえられる

「ちょ、まって、無理、そんなの——」

「大丈夫よメイ……痛いのは最初だけ。すぐになんともなくなるから……」

「大体これ普通逆じゃ——アッー！」

「ふふ……ほら見える？ すっかり刺さっちゃってるわよ……？」

「嫌ー！！ いだだだだだいっ！！」

「ほら、力抜いて………っ、出すわよ……！」

………。

うつ……。

「誤解を招くうめき声はやめて頂戴」

「はい」

“まっど”で“さいえんていす”な顔した永琳が見えた気がしたけど、全然そんな事はなかったぜ！

……え、何、注射されてただけだよ？ 若干、嗜虐的な笑みと共に頬を赤く染めていたとか、そんななんもない……これは真面目に、これが普段から不真面目に生きていると肝心なときに信用されない、いわゆる『狼少年』状態か。……どうでもいいけどね。

「……相変わらず、細いわね」

針を差し入れた腕の患部を処理している最中、ふと思った……という風に永琳が言った。そしてそのまま右の手首に五指を回してくる。その、溶ける雪の様なぬくもりと感触が、出し抜けにうなじを逆立たせた。

けれども、その手を握り返す事も、簡潔に離してくれと拒否する事もせず、ただ甘受する……壊れる前に死ぬ前に、最後まで覚えておくものを選ぶとして、なかなか適当だと思ふものを。

掴まれたまま具体的な反応をせずにいると、咎める様に手首を握り締められた。いくつかの血管が潰されて、血が阻害される感覚が激しくなっていく。反射として、戸惑いに起因するかのように指先が震えた。

何か、永琳に言おうとした。お互いに睨み合っている様な視線が交差し、オレが口を開きかけると何かを諦める表情を作り、目を伏せた。そして手首から指も緩められる。緩めた手の輪の中で、軽く爪を立ててきた。

痛まない程度に。

——そして、自分を刻み付ける様に。

続いて後処理として、きびきびとした動作で今度こそ右腕に小さくガーゼを貼られる。……けど、最初は脊椎注射とか言っただよこの人。——想像しただけで怖い。

「細いって……」

一方的に繋がられたような、右手の先にあつた永琳を噛み締める。正面から向き合っておいて、何かを言い澀んだのは、永琳の言葉が足りないから。……きつと。

「まるで——今にも、死んでしまいそうなほど……よ」

黒い瞳がオレを見た。目を逸らした。あながち外れていないのが怖いところだ。

椅子に座って、膝と膝とが触れ合う距離で、心まで掴まれているようだった。その月に、魂を見透かされる。

その目が、見透かしてくる。

——弱ったね。見透かされるのは好きではないのに、自身を覆い隠す事も、何故だかできずに弱ってる。弱った……………弱ってる。

——とここで、月が陰るまで、今に至るまでを列挙しておく必要があるかも知れない。ほわんほわんタイムなのか！。

ほわん、ほわん……………とかドラえもんで最も使われる擬音だと思う。根拠は特にない。

「帰る」

ある日ある午後、昼とも夕暮れともいえない微妙な時間帯で、永琳は本を読んでいた。言い直そう、永琳が本を読んでいた。

扉を開けた音で聞こえ辛かったかな？ と余計なお節介から再度言おうとしたとき、永琳がこちらへと顔を向けた。――妙に無機質な感情を抱かせるその目が、きゅうう……っと、月の満ち欠けの様に瞳孔が細くなっていく。

「――耳や脳の検査をして欲しい、とかじゃなく？」

「あー、まあ、頭の中は一回診てもらった方がいいのは自覚してるけどね、いやそれが」

話は聞かせてもらった、オレは帰る！ とか思いながら、後ろでに扉を閉め適当な椅子に腰を下ろす。がらっ、ぴしゃっ、すたすた、どすっ。

「死ぬ時ぐらい、故郷で死にたい」

他、諸々の事情理由を差っ引いて置いておいて、それでもやっぱり……恋しい。

肋骨をへし折りたい娘もいることですしね。

「でもどんなに頑張っても、サバ折りで骨なんて折れないんだよね」

「サバ折り？」

「あ、いや、こつちの話」

ふーん……と興味なさ気に返しながらも、本を置いて会話に集中してくれるところが好きです。

「今故郷に戻ったら目にハチミツを塗りたくられる目に遭うわよ……」

……と言ったら？」

「カグヤが大きくなるまでは、ワシや死ねんのお」

「まあ、それはそれでいいけど」

ふむ、と長い指を頬にあて、思案顔。そして聞いてきた。

「帰り方は？ この前言った、故郷を強く思い出す物」

「あるよ。調達自体はこの間にしてもらっていたんだけどね」

「きーちゃん、ありがとう。多分永琳は人參クッキーなんて作らないだろうから、それで許しといてください。」

「……………そう。じゃ、大丈夫、か……………」

頑張ってね、とえらく軽い調子で言われてしまった。ここまで軽

い応援は、吹雪の中でおつかい行ってこいと言われたとき以来だ。

「『フン!』 変わった永琳だ……。 お前の欲しいものはなんだ……?」

永琳おまえの欲しいもの……それはっ——ロードローラーだッ!

「欲しい物? そうねえ……この辺で一杯お茶が欲しい、ってところかしら」

「遠回しに注いでこいつてか」

味は保障できませんよーなんて言いながらも、せっかくだし、と部屋を出る。

原始的な方法頼みだけど、時間を引き延ばす事なんて他に——

——ああ、カグヤは望みある。

「……なあエイリン」

「なに?」

片手で押しのける様にして扉を開けたところで、そのまま背後に声をかけた。

案の定すぐに声が返ってくる。当たり前だ。

——はて。オレは、無言の返事を期待したのだろうか。

「どうして、あときオレを拾ったんだ?」

開け放った扉の先の廊下の壁に話しかけているのに、返事を期待している自分を……自分が。

自分……?

「拾ったなんて……」

そう言って、苦笑する気配が伝わってきた。

「自分のことじゃないの」

「……ん」

どう言えばいいかわからずに何となく口ごもると、別段気を悪くした風でもなく永琳は、変わらない調子で言ってきた。

「——カグヤ、ね。 あんなになついていたのは、アナタの持っている能力に惹かれたのよ」

「……………」

ダウト、と言えはいいんでしょうか？　むきゅー、とだけ言っておく。

「いつだかに教えてもらった以上はあるんでしょう？　私は最初よくわからないままだったけど、幼かったあの子は直感で理解したのね」

スタンド使いは引かれあう……と呟いて、どうせならスタンドがよかったとも思った。

まあ……どうでもいいけど。

「いやね、あるとき言ったもの以外は上手く扱えないからさ。やっぱり、他人（？）の能力を無理矢理奪うとなると、いろいろ面倒なんだな」

「使える、使えないは別にしても……ええ、何となく……わかるわね。意識すると、普通有能力持ちとはどこか“ずれてる”……ような」

「——では、ここらで話の腰をずらすとして」
振り返った。

「何かある？」

「特には」

さつさと注いで来い、とのジェスチャーを承った。どうもお互い、素直じゃない。

……懐に入れた、今のところ唯一お土産にしようと思っているブツが、一瞬だけ煩わしく思えた。

そんな経緯を経たお茶を啜って、一息嘆息。

見ると、永琳も特に問い詰めてくても泣くわけでもなく、茶を運んでいた。引き止める素振りも見せないってどうなんだ。

これじゃ、いつも通りだ……とも思う。思わず、苦笑いが零れた。ん？ と、そんな動作は目ざとく気づいてくる永琳に、何でもない、と首を振った。

「——これ以上いると、お前に惚れちまいそうだしね」

「あら、それもいいじゃない」

急に見知らぬ土地で骨を埋める覚悟が固まってきたから、女って怖いね。

「オレの半分はバファリンで出来ているんだぞー」

「優しさは半分なのね」

半分どころじゃないぜ………と、言おうとして。言いかけて、口を開きかけて。開いた口が塞がらないとも言っけど、実際に口を開けっ放しにしておくとしてもなく間抜け面に見えるから注意が必要だぞ。

このまま無為に過ごす事は、諦観だろうか。一種の逃避なのだろうか。

「……また、会いましょう——とは、言わない」

——言えない。

「……………」

「——カグヤには」

急に話を変えても、どのあたりから張り付いたのか、笑顔という仮面をつけた永琳は、あくまで微笑んで見せている。眩しい笑顔、でもなく——どちらかと言うのなら、諦めている様な顔。やめてしまった様な表情。

気持ちが理解できずに、気持ちが理解できないままで見詰め合う。

いたたまれなさから、口を開いた。

「……………あー。どうか行つたとしても、どうしても。任せた」

左手の人差し指と親指の腹を擦り合わせながら、多分カグヤは泣いてくれるのだらうと思つたら、心が痛い痛くて。結局、他人任せ。泣いて欲しくはない……………けれど、泣いてくれる事は……………幸せ、なんだらう。

——痛いって、心お？

そして、そのまま沈黙が降りるに任せた。

僅かばかりに舌先で遊んだに過ぎない湯飲みを、ごとりと机に置いた。それを契機とする様に、永琳が言う。

「——どうしても、行くの？」

不自然にも感じられるほどの溜めを置いて、永琳が言う。

突然。

その笑顔が、剥ぎ取られた。

「カグヤも……………私も、悲しむ……………のに」

言葉を途切らせて、固く結ばれた唇が、言葉尻と共に震える。その震えはすぐに肩を、その肩にかかる銀色に伝播した。

決心していた心が揺れる。駆け寄って抱きしめようとする。壊れた分際で、その、壊れそうな……………いつになくか細い肩を抱きしめようとして——。

突き放した。

「帰るんだ」

しょうがない。

しょうがない。

——しょうがないだらう。

「もう決めた。……いや、決めていた」
もっと言っなら……『決まっていた』。

そして、椅子に腰を下ろしたままで、床に目を落とした。
見たくないものを、見ないように。ずらせないのだから、目をやらないようにする。

……それでも、音が………声が、聞こえてしまう。必死に押し殺そうとしている声に耳を塞ぎたくなる。

「……………」

ゆつくりと椅子から立ち上がる。肉体と意識の半分ぐらいのところで『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』を突くと、急に視界が荒いモザイクのようになった。久しぶりのその感覚に視神経を喰われながら、他人事のように感謝の念を抱く。

そして緩慢に扉へと歩いてゆく。能力を、弓の弦を引き絞る様に力を溜めるためと、何を言えいいか考える時間を稼ぐために。一歩、二歩……と頭が着々とカウンントを進めていくのに、口の方はまったく働いてくれなかった。

とうとう扉の前までたどり着いてしまったとき、ふと顔に違和感を感じ、頬に指先で触れてみた。

感じた暖かみは、自分じゃないみたいだった。

「……じゃあね」

さっきのように、声は返ってこない。

そして、扉を閉めて、力を使う。

恵まれた異能がオレを存在ごと食った。

変えられるものはかえられる（後書き）

どんな陰惨な目に合わせようとも、それがオリキャラなら大概許されるよ！

逆に、それ以外だとかなり神経を尖らせて会話なりを書いていきます。ノリだけで書き進めた話もちらほらあるけど。

構想の段階では「穢れ」にもう少し触れ様としてたみたいですが、蛇足気味になってしまふのと当時のメモが見つからないため断念。いよいよ次回から「カエルと内臓編」、と見せかけて番外編突入！メモ探し出すよ！

B G M “ t h e w a y w e l o s t ” b y a k i

始まりが終わって、始まりが終わるとき。（前書き）

主人公の諸事情により、今回のこの欄は自粛させていただいております。

始まりが終わって、始まりが終わるとき。

始まり。

生生生生生生生生生生
生生生生生生生生生生
生生生生生生生生生生
生生生生生生生生生生

終わり。

、

生生死死生生死死生
死死死死生生死死死
生生死死生生死死死
死死死死生生死死死

生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生

生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生

生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生

生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生
生

—
始まり。

設定？（前書き）

月自体に関しての設定紹介はまたどこかでやるかも。

とりあえず、これは人物のみな上、カグヤのパパママなどあまりにモブ過ぎる人は登場していません。

設定？

——『自傷人間』

メイ

・本当に時間を戻っているなら見てみたいもの——らいでんためえもん。

・意図的に触れてないもの——ルーミアの服装。

・座右の銘——「まず白米ありき」

・好きなおにぎりの具——紫。

・苦手な事——寒い環境（人間並みに動きが鈍る。寒過ぎると狂う）。

・簡易略歴

（昔のことは割り切り）

←

←

月

カグヤが寝間着のボタンを掛け間違えて「一緒にねるー」と目をこする姿を見て胸が切なくなった。

そのまま横になってグダグダと寝物語を聞かせてたらカグヤは寝ていた。ついでに夜も明けていた。

家族構成が徐々に明らかにになってないよーな気もする。——あ、お爺さんうんぬんはいつものごとく口からでまかせを言っただけみたいです。きつとそのうち八人兄弟だったとかいう設定が飛び出すんだろうとも思う。

月ではぺらい精神力してましたね。貧弱メンタル。今後主人公っ

ばい見せ場の一つもあるでしょう。予定はないけど。

また、月編の最初彼は月人の言葉を理解できていませんでした。つまり、そのときぶつかったあの女性が呟いたのは固有名詞ですが、果たして。

「自分よりも精密な動作をどうやってイメージするんだろうね？」
だとかで、スタンドが発現したら精密動作性はC以下、なのだとか。
カグヤいわく「基本耳ざわり」、らしい。

——『何処へ跳ねる月兎』

イナバ

・簡易略歴

（産地直送）

←

←

月

カグヤには愛されていた分深く愛していた。カグヤの影響。
カグヤがいないときは怯えていたのかもね。だれかの影響。

モデルは「みえるひと」のクロックラビットから。主人公の名前

よりも先にカグヤのペットとして出そうと決めてましたが、むしろ時計のイメージは咲夜（ry

カグヤのペットになったときにはまだ子兎でした。あまり時間経過とか意識して書いたためしがないんですが、それでもウサ公の月滞在期間は数ヶ月間と決めています。

彼（？）が白い光に包まれるーだとかって場面は、主人公が“死”闇“ルーミア”黒”とイメージを持っている気がしたので対比として書きました。でもそれだったら後々重要になってくるかと思っただが全然そんな事はなかったぜ！

カグヤいわく「気合出せば十メートルは跳ねる」、らしい。

——『人は語るみかわ屋さん』
きーちゃん（仮名、ないしあだ名）

・簡易略歴

貴方の町の、きーちゃんです。

一時期、夢枕に今は亡き兄が立って盛んに永琳のところへ行くなと警告していた。

本兎も何となく不安に思っていたが、しばらくすると出てこなくなってしまうた。

名前はあれだ、キャピタンとか何か、適当に。「き」から始まっていれば、それが貴方だけのきーちゃんです。

周りからはいわゆる半端者と思われる、素直で大人しい子。以前は雑用に近い仕事についていたが、ひよんな事から永琳専用に近い配達屋さんに。好きな物は新鮮なフルーツ。特に皮を剥く物が好きなんだとか。

勤務態度は真面目で丁寧、仕事面では意外と優秀。使ってみたら有能だった、という事もあり上司からの評価も（兎としては）高く、その上永琳のお気に入りである以上彼女の先行きは明るい。ただし出番はもうない。

前に戴いた感想にもありましたが、「濁る瞳は何映す」の冒頭で主人公に「ずら」されてます。多少融通の利くキング・クリムゾンみたいなアレです。種族としての抵抗力の悲しさと、真面目な性分もあってその手の能力なんかには簡単に引つかかってしまいます。出番はもうないから関係ないですけど。

メイいわく「美味しそう」、らしい。

——『穢されぬ無垢なる姫様』
カグヤ

・簡易略歴

月 ↑今二二二。

お別れ言えなかったね、ごめんなさい、とか書いた手紙が残っていればよかったのに。

のちのち半端ない事になる。痛心を慮った永琳のらしくない失態だったねと後で言う。

一応修行だか勉強だかの名目があるのに、遊んでばかりいるような気がするのは彼女が優秀だから。こうして秀才に怠け癖がつくんですね、わかります。また、メイの悪影響を受け結構な甘党です。本当にどうでもいい設定。

永命線なんてスペル使ってくるぐらいですし、幼少期の彼女に主人公が与えた影響は決して小さくない……などの設定は、皆々の脳内補完にお任せ。手抜きとは、言わない。

天真爛漫、純真無垢。そんな風にメイに言われたことがあったが、彼女は言葉の意味を知らなかった。作中ではグーヤだのバカグーヤだの言われてますが、一応作中ではあれ、年齢一桁ですからね。

タイトルはともかく、主人公の名前が名前だし蓬莱な方々とは結構接していきます。……時系列としては当分先ですが。更新頻度としても、当分先。

このカグヤは一体どう永琳をだまくらかして薬を作らせたんだろうか……。地上へ行く動機が、永琳はおるか誰にでもバレるぐらい明白なのに……。泣き落としか？

メイいわく「割と残酷」、らしい。

——『千歳の夢を遠く過ぎても』

月の頭脳、八意永琳（××）

・簡易略歴

（公式で億いくつてどういう事なの）

←

←

月

カグヤも小さいときはあんなに可愛かったのに、と常々語っている。

ある夜カグヤの部屋への廊下でメイと出会ったのは、お互いに内緒。

ラストで何の脈絡もなく注射シーンを入れてしまったため、やむを得ずこの作品では隙があれば人をぶつさすのが好きな属性が付属している事になった……のかもしれない。——それはそれでありかもしれない。一応、あれは増血剤とか栄養剤とか、まあ一言で言えばドーピングみたいな事してました。

公式ではその頭脳ゆえ話の内容が難解に過ぎる、とか。悪食の永琳は優しさ半分増量中だから、会話もこちらのレベルに合わせていてくれているらしいですよ奥さん。「天才」、と一言で片付けられるステキキャラも考えものね奥さん。むしろ邪魔か。

咲夜さんとの接点がないんだけどどうないせう。誰かとの隠し子だったとか……駄目か。能力から考えてカグヤとか……………。

それはそれでありかもしれない。
メイいわく「結構趣味が悪い」、らしい。

番外編……誰かに背負われて 上（前書き）

愛って。

番外編……誰かに背負われて 上

深まる秋と、日々色濃くなる冬の影に怯えるかのように蟲の音が草木の合間に響き、風がそれを受け踊るように身を振る。ありふれた光景が、月明かりの下で今宵もまた行われていた。今ゆつくりと、雲が月を覆い隠していく。

秋風が身を切る冷たさを運び、森に息づく獣共が鼻先を下げた。一匹で、または群れで身を寄せ合い、闇に服従する。夜は飢えた狩人が動き出すと、食われるしかないものは本能的に知っていた。とりわけ、輓近は捕食者も迂闊に狩りに出歩けない。炯炯とした一条の光も許さない規格外を、忘れては——ならない。

——しゃり、しゃり。りいん、りいん。

生い茂る青草を地に伏せる音がする。音の頭上では、風が凧いだ。

——ざつ、ざつ。いいりいん、りいりいん。

風と、蟲だけの独奏会に、雑音が混じる。

鬱蒼とした森の隣にはなだらかな地形が広がっている。月明かりが柔らかく光を投げかけ、それを受ける草に、異物が紛れている。月から見れば、ふらふらと彷徨う点に道が連なるようにも見えらるう。

風に攫われた雲から明かりが漏れ出す。再び振り注ぐ光が照らし出したのは、檻^{ぼろ}褸を纏った枯れ木の如き老人だった。節くれだった両の手を揺らし、おおよそ確かとはいいい難い足取りで歩いている。小さく、禿げ上がった頭。斜に影が掛かった面相の目蓋は硬く閉じられており、その上に眼球が直接生えていた。

——じゃり、じゃり。いいん、いいいん。

上から下まで、身に着けた襦袢切れに倣ったのか、もれなく小汚い。禿頭にも、地を踏む裸足も薄汚れ、泥がこびりついている。着物の体裁を成していない布の内側には、今にも「ペキン！」と音を立てて折れそうな、まさに骨と皮の軀。それが、膝程まである草を踏み拉いて歩いていた。

「くーべーつーするモノなど 無い……」

調子つばずれな歌が老人の下まで聞こえてきた。長く尾を引くその音に、目蓋のない眼球がぎよろりと動いた。老人の口元が我が意を得たりとばかりに歪む。皺だらけの口唇で失笑を形作り、老人は足をその音源へと向けた。

ぐるりぐるり。さらに二つばかりの眼球が、首筋と後頭部とに生える。ありえない箇所^なに在って、それらは欠片も自重などせず蠢いてみせる。

しかし、当の老人は卵ほどもあるそれを、埃でも払うかのように掌で擦って消す。いけねえいけねえ……気が急いてんな……。厭な歯抜けの口が呟き、そして顔のあるべき位置に生える眼球も透けるようにして消えていった。

そして、暫し歩いた老人の目が、山の麓で悠々と水を湛える湖を見た。

向こう岸まで見通せるほどに開けた夜。その湖面は青というより蒼くうねり、泰然と月明かりを揉み拉く。魚などの生き物の気配がない、静かな湖だった。蛙ぐらいはいるのかもしれないが。

——くれえな。

夜半という時刻にも関わらず、老人が当たり前のような感想を抱いた……元々、そちらには大した用がない。

そよと風に靡く。この風景画の中でも随分と控えめな位置にある木の、その幽かに上下する枝。その影に溶け込むかのように、樹皮に背を預けた人影の方を見るように顔を動かした。歩き出し、近づく。

歩み寄る間にすら、その細い輪郭は数度も咳き込んだ。かすれしやがれたそれは、老人が歩く音より余程か耳ざわりだ。

「よお」

会話をするのに不自由はない、だが近いというわけでもない……もつと言えれば何の前触れもなく食い殺されはしない位置で老人が、唸るようできて、奇妙に甲高い声を発した。

「ああ？」

輪郭が声を返す。身を擦るように振り返り、相手を視認する。

「おりや流れのモンなんだがよう、お前さん。『見たところ』妖怪のようだがよう、ここいら辺にやあ音に伝え聞く大妖怪の方々が住まわれるつてえ話じゃねえのかい？ 一晩歩き回つて、獣の一匹すらも見当たらなくてよう、すっかりまいっちまいたい」

つるりと顔を撫で上げて、ひとしきり事情を語る。つらつらと、ハクに住まう黒尻つっ一名の知れた大妖怪に拝顔賜りたい、といった旨を述べた。

「……盲^{うぐ}が見当^{うぐ}たるつて、どんなだ？」

怪訝な顔つきで、未だ木に背を預けている男が言った。

「おおつと。そりゃあお前、ちよいと言葉が過ぎるつてなもんだい、さね……この、『目』の具現妖に対しては、な」

お望みとあらばと、瞬く合間に老人が目を生やして見せた。

潰れた両目の真ん中、眉間に真円の眼球が、再び浮き出る。自己を誇るように数度眼窩の中を行き来し、ひたと相手を見据えた。

「……………」

木の下の男は、それを押し黙って見据え——背後にそびえる深山を指差した。つられて老人もそれを見やる。

「あれな、あの山の切り立ったところ。前はもうちょい緩い曲線だったんだが、崖みたくしたの——オレなんだわ」

「……ほお」

「お前が探してる妖怪やかいも、そこんとこで皆死んでるぜ」

悲嘆も、愁嘆も、嘆きも、何にも動じた風もなく。

単純な、一つの事実を言つてのける男。額の目をひん剥いた老人が、合点がいったというように何度か頷き、聞いた。

「そりゃ、つまり……」

二度、三度と頷く。

わかる、わかる、わかる。

「鎖々翼は今お前さんの腹ン中つて事かい」

「——ああ？」

先に口火を切った文句を、今度は少々の溜めと驚きを含ませて示した。何を思ったか、落着けた腰を浮かせかけ——しかしすぐに座り込む。軽い驚愕の色が、その瞳孔が細くなつていくのに合わせ瞬く間に無関心に奪われるのが見えた。

そして数度、から咳。水気のない音がした。

「小汚えジジイが……」

言いかけて、何かに気づいたように口を閉じる。

「……ん、そういう事なのか？——『盲点を操る程度の能力』」

しかし、と男が顔を伏せる。手でもって、右の目を覆い隠した。

「何かいいね、それ。できるできないというより、やらなくちゃいけない気がしてくる」

口ぶりからは、老人に倣い口でも生やすかのようなだったが、その手が擦るのはあくまで右の眼。声音は無気力そのものだったが、彼以外にこの場にいる者は、その欲求はそうそう逃れ得ぬものであると知っている。

彼を観察する老人の口元は終始嘲っていた。

「後三十センチ近づいて来いよ……そうしたら射程距離………あ
ー。……いや、もういいや」

図書館の上での射程距離を巡る死闘でも思い出したのか、座り込んで
いる方が舌戦を放棄する。それを、今のところ一つしか「見当
たらない」老人の眼球が射抜く。老人が言った。

「——随分荒れ狂った心境と見えるが……？」

語尾を上げた。何故なら、問いかけた老人自身……疑問に思っ
た事柄だったからだ。

「……ああ？ ……いや待て、『心境』？」

「いや、それで平素通りだあ？ ……信じらんねえが、まあそう
なだろうな。……となると、だ。お前さんはその“自分以外の全
て”に対して常に興味が掻き消えていく”つ”状態が続いてるわけ
かい……。今の状態に問題があるとすれば、それでも平素は事新しい
興味ってもんがどんどん湧いてくるもんだから誤魔化せられるが、
今はその興味の大元が根こそぎになっている、と……」

「おい」

静かに死が沸き立ち沈む清い清い湖面に、波紋が二重三重、広が
った。成因は過不足ながら数思い当たれど、そのどれもがここには
成立してはいない。

「急に饒舌になったと思ったら——待って待ってちょっと待っ
て」

尻すぼみに声を途切れさせ、男が急に明瞭に話し出す。物憂げな
声音から、軽薄とも取れる色へと変わった。

「ササバを知ってるって、そりゃあジジイお前………どういう事？」

「さあて、な」

左手の親指と人差し指の腹を擦り合わせながら、男が興味深げに
聞く。それを、くつくつ……と喉を鳴らして笑い、老人がはぐらか
す。

「件の烏に関しちゃあ俺も又聞きだい。俺に近いつてな話を聞いた
もんでよお」

言外に一見である事は否定しつつも、ならばどうなのかとまでは言わずに、片頬に笑みを浮かべた。

「ササバがお前に近いって？ 笑わせんな、八咫鳥は太陽に住まう神々の眷属だぜ」

嘲笑されているのを理解して、男はさらに被せて人を喰った様な事を言った。その声と表情から彼自身微塵も信じていないのが丸わかりだった。

「——だが、妖怪だろお？」

「……………」

老人の問いに、男は何も返さない。

「お前さん、知ってんならよお……………鳥の妖怪ってなあどのくらい飛べんのか、教えてくれねえか？」

男は何も——返さない。

知っているか知っていないかで考えれば——『理解している』のだが。

「いひやひや。まあ……………知らねえってんならそれでいいけどよお」

何があつたかも、教える気はねえみたいだしな、と老人が続けた。所在無げに頭を掻き、首を左右に振る。

「こりや無駄足だったと言わざるを得ないねえ……………。黒い太陽だとか何とか、色々と面白そうだったんだが……………」

その表情は残念無念、と如実に語る

「まあ、伝聞は所詮伝聞、か。……………そも、太陽がこんなところにいるわけもなし」

みんな、食われちまあな。

「……………」

「——とと。ところでお前さん、今更で悪いが、いってえ一人で何してたんだい」

最早用はなし、とばかりに立ち去ろうとした老人が、そこで急に

踵を返した。

「一人で何に話しかけてた？」

そう聞く老人の首筋、男からは死角となっている位置に、またしても眼球が一つ湧いてくる。握り拳よりもなお大きいそれは、何一つ見逃しはしない、とでもいうように瞳孔の周りに血管を浮き立たせた。

「……………」

男は何も、喋らない。

「あくまでだんまりかい……………まあいいさ、もとより単なる興味本位。言っちゃえば、ここらがどうなるうと知ったこっちゃない。……………それも、もう自然の類しか残っちゃいなさそうだがね」

老人は肩を竦めてみせ、それでもまだ名残惜しげに「それにしても、鎖々翼つつーのは惜しかった……………」と呟いた。

「……………ま、今となっちゃわからん事」

どうにもならん、と老人が。

喰い殺したるか、とは男が、それぞれ零した。そして、男が会話を断ち切るように視線を湖に戻したのを皮切りに、老人も再び闇の中へと帰っていく。

「……………それが、あの月まで届くほど飛べるのかも……………知れない」

段々と周囲の黒に紛れていく背中に、男が呟いた。
言葉と共に、水面に映った月影を波紋が乱した。

「嫌^{いや}：白^{しろ}い白^{しろ}いこんな朝^{あさ}の世界^{せかい}で独^{ひと}り けど もう何^{なに}も喋^{しゃべ}れない
もう歌^{うた}すら歌^{うた}えない」

——メイの部屋に残っていた手記より。

（永琳は文中の『おキツネさん』が何らかのスラングだと解釈した）

『相手と会話が出来る程度の能力』。別にいい。在るのだから疑
う由もない。

以前誰かに言った気がするの、「おキツネさん」という事だ――

——ああ、はぐらかしたんだっけ。まあどうでもいい。

だがまあ、書いてる内に重要な事を失念しないように最初に書き
出しておこうか。

・あんな状況に置いて、どうしてこんな能力を持った妖怪がいたのか
最初に目覚めるまでに、勝手に攻撃でもされて自前の能力が勝手に
喰い散らかした……とても簡単に思っていたが、どうして中々不
自然だった。気持ちが悪い。家に鍵をかけたかどうかあやふやなま
ま旅行に行くようなものだ。めっさ怖い。気づかないでいればそれ
はそれで。しかし思い至ってしまった以上は適当な回答で誤魔化さ
ないとどうにも噛み合わせが悪い。やっぱり人間、暇だと余計な事

を考えてしまうものだなー。今度永琳に暇の潰し方を聞いておこう。飢えは人の肉体を殺すが、退屈は精神を殺す。オレじゃあ喰い合わせが悪い……のか？ どうでもいいけど。

・ここで一回本題をド忘れした。書き出していて正解だった。

人は言語を使用していた。妖怪も言葉を話す。しかし両者は意思疎通ができなかった。三段活用っぽくしてみた。やっぱり微妙。

——人型の妖怪の言葉はどうなのだろうか。ルーミアの「味」は大将やクロナギとはどこかしら違ってたし。味とか書くと妙にえろい。閑話休題。存在の仕方が微妙に違っていた気がするわけですよ。はい。

動物何かから“成った”妖怪は、生を背負う。それ以外の妖怪は、役割を背負う。ちらっとそう考えたけど、判断材料が少ないので保留します。

でも一応、書き出しとこうか。

オレは「食欲」を。

ルーミアは「闇」を。

おそらくルーミア

(以下、非常に読解が困難な字体で書かれており、これ以上読み進められない)

——炎天下。猛暑。ヒートアイランド。

本日の状況を言い表すにはどれが適切だろうと、適当な木の影に座りながら思った。

そこは、いつもの森の中で多少木々が身を開けている一画。学校の教室程度に開けており、今まさに行われているような事をするには打って付けだった。

眼前では大将とクロナギとルーミアとが殴り合っている。拳で語らう戦闘本能。まあ殴り合いってのは比喩的な表現で、実際は……なんだろ。戦闘訓練？

「……血気盛んだこと」

木陰に隠れようが一向に和らぐことのない暑さにうだりながら、彼ら彼女らの戦いを何とは無しに見物する。慰めのように一陣の風が吹くが、汗の滲んだ肌の不快さを強調するだけに留まった。

暑い以上に、あれは怖い。臆病と罵るなら罵れ、あんなの人間が参加するもんじゃねーよ。ルーミア対熊と狼ペアで、常日頃行われている日常行事。その一環とはいえ、まあ確かにその効果は徐々に見えてきてはいる。

二対一にも関わらず、ルーミアはその小さい体躯と能力で善戦どころじゃない戦いっぷりを繰り広げている。最初の頃は大将に突貫↓腕の一撃で木に叩き付けられる↓繰り返し、だった。その内、まずは闇を使って木に叩き付けられるダメージを防ぐようになり、叩き付けられる前に体勢を立て直すようになり、腕で振るわれる最初の一撃を防ごうとして吹っ飛ばされるようになり、吹っ飛ばされなくなり。傍から見ても長かった。三日目あたりから、素人のオレが戦術のようなものを施した成果である。誰か褒めて褒めてー。でも「攻撃は当たると痛いから、痛くないように防ぐか避けるかしよう」って……戦術か？ 戦術か。

つらつらと考えていると、三人が一旦距離を取り合った。

後ろに飛び退いたルーミアが、荒れた呼吸のまま再び突進する。宙へ飛び上がるが、飛び上がった足元に大将が四足で体当たりをぶ

ちかましてきた。それに素早く反応したルーミアがその鼻先を蹴りつけ、その勢いでさらに高く飛び上がる。

高さを保って上から能力で悪さしようという腹だったらしいが、そこに一足早く『駆け』上がっていたクロナギが襲い掛かる。

「わわっ！」

半ばのけぞったような姿勢で、ルーミアがその両手の間に闇を形作る。一呼吸で自身の腰から上ぐらいまで膨張した闇は、クロナギの鼻ぐらいには掠ったのかも知れないが、再度クロナギが『駆けて』、回避。ルーミア自身も後ろへ倒れこむように落ちて、腕の中に抱えていた闇を自分をも飲み込むほど大きくし追撃を防ぐ。二メートルほどの黒い球体がゆっくりと下降し、地面に触れた瞬間晴れる。軽く着地して見せたルーミアが、「はぁー……」と大きく息を吐いた。

「二人ともー。もつと手加減してよー」

「駄目だぞ」

疲れたーと言ったルーミアに対し、それでは意味がないと返したのは大将。クロナギの子供たちからも鬼教官として若干恐れられ気味だが（彼の鉄拳教育を受けた妖怪なら皆同様の気持ちを抱く）、彼は意に介さない。人間たちに同胞を殺させまいとする気持ちは、なたでここよりもかたいぞ！

しかし、クロナギの方は何故かオレを見た。

「……交代だな」

「ちょ」

突然の理不尽な人事異動に、しかしオレの体は満足な抵抗もできないほど呆けていた。もうなたでここなんていわないよママン。

「次メイがやるの？ 頑張れー」

「まあ、それもいいか」

次々と上がる賛同の声に、何となく抵抗できない雰囲気を感じた。だがでっという。

「だるいー面倒ー暑いー」

「やらないと——噛み付いたぞ」

「ちょ」

事後申告された痛みには声を上げてしまう。文章として無理がないかこれ。幸い（？）今のところは若干牙が腕に食い込んでいる程度で済んでいるが、ぶつちゃけこの人らは「治るならいいだろ」と骨まで砕いた前科がある。あつ人じゃねーや。とにかく抵抗を……。

「ぐふあふあぐ（このままだと腕を噛み千切りそうだ）」

「本音言うと超やりたいです」

さすがに切り口から新たな腕まで生えるか自信がないし、そんな痛みに耐えられる神経もしてない。脳裏に浮かんだのは、以前クロナギがこの妖怪の山まで迷い込んで来た人間の頭を噛み砕いた瞬間だった。二の舞は避けたい。

腕から口を離れたクロナギが、とととと戦場の中央まで戻っていく。口を離れた瞬間に大きく舌なめずりした事は、見なかったことにする。

「それじゃ、行ってこーい！」

渋々腰を上げると、入れ替わりにこの木陰を占拠する気満々の顔で、ルーミアが背中を叩いてきた。

「……まあ、死なない程度には」

若干引きつった笑みをルーミアに見せ、大将とクロナギのところまで歩いていった。宣言があんまり大袈裟じゃないところが妖怪らしい……と言っているのか。

今は二足で立っている大将と、その横に並ぶクロナギの一メートルほど手前まで歩いて、身構える。身構えた、と言っても、やや前傾になって気を張るだけだが。

「……お手柔らかに」

大将の肩の筋肉——毛皮に覆われて判別しにくい——が、予備動作を行ったのを見た瞬間には、そこから放たれる一撃を回避しようと全身に力を込めた。そのままほぼ予想通りの軌道を描いた、右爪の一閃を掻い潜る。大将の、平素は理性的な光を湛えている眼が

素早く現状を把握し、やや剣呑な具合で追撃の頭突きをかましてきた。

だがその巨体と重量ゆえに、急な運動には速さが乗らない。右足で思い切り踏み込み、繰り出す頭突きにドンピシャのタイミングで拳を合わせ、踏み込みの勢いも乗せた全力のアップを振り上げる。鈍い打撲音と共に、鮮烈な痛み。

「あがつー！」

分厚いゴムでも殴ったような感覚に握り拳を痛め、右肩まで外れそうになった。結果、もろに頭突きを喰らって無様に後ろへ吹っ飛び、地面に間抜けな字体で長々と「1」を刻ませられた。頭を打ちつける事だけは防いだが、背中全体に激しい擦過ができる。

痛みに呻く間もなく、大将の頭上を越え中空からクロナギが襲ってくる。仰向けの体を無理矢理左側に傾け、左手と左足を軸に右足を浮かす。下駄の歯でクロナギの鼻ツ先を狙ったが、まさに目と鼻の先で再度宙を跳躍、距離をとられた。振りぬいた右足の勢いのままに地に着け、左手と腹筋を使って体を起こす。

「ちょ、たんまたんまつ」

慌てて二人にそう言う。攻撃が来ないのを確認し、左手でもって間接が外れかかっている右肩を掴んで、歯を喰いしばった。

——みりいつ。

なまじ自分の体だけに、体内を振動が伝わるとかなんかで、より想像を超えた生々しい音がした。痛み自体は絶頂を越えており、中途半端に弛緩したような感覚だけがその残滓として脳に伝わる。

涙目になりながらも、右手を動かして神経に不備がないかを確かめた。あつたら困る。

「よし、治ったな？」

「再開だ」

「え、いやちょ……っ！」

視界の外、真横から大将の剛力が振るわれた。ぎりぎり屈んで直撃を避けるが、耳に残る風切音に全身が怖気立つ。とりあえず一旦

は距離をとる為に、一步下がって

脳が揺れた。

今度こそ完璧な死角からの攻撃。クロナギの体当たりが右肩にぶち当たり、地面に叩き付けられた。耳鳴りに似た感覚がオレを襲い、強烈に視界を揺さ振られているような眩暈が吐き気を催す。

客観的に把握できたのは、叩き付けられ倒れこむまでの一瞬。地面に当たったときに、後頭部までをかばう余裕なんてなかった。

「—————×××××、……！」

あ、ま、痛っ……おおう、いた、「—————痛いつー！」

まだ左右に揺れている視界の中で、狼の癖に馬乗りしているクロナギが、オレの上で赤い舌を突き出していた。

言葉と共に、まだ無事な左で払いのけようとするが、鉛並みの重さがある綿が纏わりついているみたいに、体が動いてくれなかった。弱々しい抵抗は、避けもしないクロナギの頭に当たる。耳が動いた。「えー……。メイ、弱すぎるよー？」

女性に早いと言われてしまった。

クロナギが上からどいても、しばらくはそのまま倒れたままで、ダメージが抜けるのを待った。声も出せない。

喰い散らかした人間と、それを捕喰する妖怪。それを、平静を装って見つめる、オレ。

むせ返るように強い血の臭いの中で、骨を噛み砕く音だとか肉を引き千切る音だとか、そんな益体も無いものだけがする。真っ先に頭を砕いて脳漿を嚼ったクロナギは今、脇腹から徐々に胸の方へと頭を動かしている。邪魔な肋骨を一本一本噛み砕いて、丁度心臓のあたりに鼻先を突っ込んだ。前足を無造作に死体に乗せ、たまに思

い出したかのように尾を振る。黒い毛並みが赤黒く染まる事にはまるで無頓着に、熱心に食事に取り掛かっている。周囲に他の妖怪の影は無く、それどころか知られてすらいない。たまたまクロナギと話しながら歩いていると、その横たわった人間を見つけ、あつという間に喉笛を噛み千切ってしまっていた。曰く彼女の子供たちにはまだ早い味、だそうだ。

今はもう見当たらないが（まさに面影がない……と言うのか？）、喰われている人間はまだ髭も生えていないような若い顔立ちをしていた。青年と言ってもいいぐらいだ。

まだかかる？ 聞いた。

そろそろ満腹だ。クロナギが答えた。

「いやまあ」まだ尾を引く吐き気を堪え、頭を左右に軽く振って言い訳をする。「日差しが暑いから、って事で」

右手首の間接も十分逝ってるし、これ以上は無理、と言う。

「貧弱め」

大将に罵られるが、ここまで基礎スペックが違つと理不尽とかもうそついうレベルじゃない。

「情けないなーもう」

「ルーミアお前、今日おゆはん抜きな」

番外編……誰かに背負われて 下（前書き）

——なんですか？

番外編……誰かに背負われて 下

「ヒヤッハー！ ルーミア様の御視察だ〜っ！！ 汚物は消毒だ〜！！」

「わはー！！」

黒風、熊の大将などと内々の間で呼ばれている大妖怪が住まうその山に、とある二人組みの歓声とも悲鳴とつかない——おそらくは絶叫という認識で正しい——叫びが木霊していった。照りつける日の光に山全体が焼かれる中、一種奇特な清涼剤に聞こえなくもない山の中腹のあたりで木陰に横たわり、陽射しを避けて体を横たえていた然る熊妖は、五月蠅げに鼻を鳴らした。自らのねぐらと定める洞窟に響いたその声にたたき起こされた黒狼は、同じように目を開ける子供たちに優しく甘噛みをし再び午睡に耽る。

その叫びに眉根を寄せたのは何も彼らだけでなく、その山の妖怪全体が「ああ、またか」と諦めの入り混じった感慨を抱いた。しかしそのルーミアと命の二人を黙らせる者はいないし、実力からいってもそれができるのは大妖怪の二者だけなのだが、それらも特に動こうとはしない。

結果として、山の頂上から駆け下りる二人を止める者はいなかった。

「わははは土下座しろ！！ 消毒されてえか——！！」

「あははは！ 行けー、走れー！」

メイが背にルーミアを負い、戯者の如き台詞を吐きながら山の傾斜を駆け下りて行く。

「今日は……その程度か」というような感想を持たれる二人は、眠りこけている妖怪の耳に蜂蜜を塗りたくってみたり木々を薙ぎ倒しながらじゃれ合ってみたり、とにかく前科の枚挙に遑が無い。今回は大した実害がない、と判断されたのか、わざわざ駆け抜ける二

人の前に立ち塞がりおい止める、などとたしなめる妖怪はいなかった。おそらく一言話す前に轢かれるだろう、と大方察しがつくのもあった。

山の中でも特に勾配のきつい道筋を選んで走っているらしく、ドップラー効果を実証した声が瞬く間に遠ざかっていく。

山中に声が響いてから、一分も経たずに山に平穏が戻った。

サチと呼ばれる妖怪は、「兄貴の性格が今のような時と物静かな時、どっちかに終始定まっていれば山は安泰なのに……」と零した。

そのような世評は露知らず、メイは背中一面にルーミアを感じながらひた走る。普段活動の中心にしている山を降り終えるとルーミアの『闇』を潜って移動。ぬるり、と虚空から抜け出した場所は見知らぬ森の中だった。

「——ここどこ？」

「知らない」

獣道という上等なものなど無さそうな、木々と静寂だけが支配している森。身をよじって答えたルーミアの声が、樹海の奥懐へと運ばれ消え去った。

「ねーそれより、もっと走ってよー」

「……まあまあ」

盛んに生い茂った樹葉を透かして降り注ぐ陽光も、苔むした地面に目が慣れたためか翠緑に映る。騒ぐルーミアを宥めながらも、彼は割りと慎重に歩みだした。自身のカンを頼りに、とりあえず森を抜けようと画策する。その心中には他の妖怪の縄張りにでも入っていたら不味い、との思いがあったが、すぐに「襲われても返り討ちに出来る」と歩を気楽なものに変える。

「のんびり歩いたっていいじゃない——というか、下りない？」

「ヤダ。面倒よ」

遠回しに下ろそうと、彼は腕でルーミアの足を支えるのをやめるが、肩に肘を付かれてその体勢が継続する。まあどうでもいいやとすぐに諦めた。

下駄の一本歯をやや危なっかしげに道に突き立てながら、メイがぶらぶらとルーミアを垂らしつつ歩く。彼の肩と頭にしがみ付くだけで体を支えるルーミアは、下半身をそのまま前後左右に揺らす。うっとおしいと言われてもやめない。振り子のように反動がついた彼女が左右に揺れる度にメイの足並みもそれに引きずられ、酔っ払いのように揺らぐ。

濃厚な緑の匂いを嗅ぎながら、二人は歩いていった。

傍から見れば非常に馬鹿らしい阿呆らしい。だが、二人の口元に浮かんでいるのは、にやついた笑い。

「……っ」

「あははっ」

地肌から苔を剥ぎ取る足取りが、だんだんと不規則にきまぐれに、そしてより強く踏み出される。

メイは、うなじに温かい吐息を吐きながら笑うルーミアの情動に当てられたかのように、喉の奥で笑ってみせる。

「そらっ」

「うわっ！」

彼がその場でぐるりと回る。急な回転に振り落とされぬようルーミアが慌てて首にしがみ付き、世界すらも回っているような感覚に歓声を上げた。

呆けたようにあちらこちらと体を揺らし、坂から落ちそうになれば片足を下駄が軽くめり込むほど踏ん張る。大樹にぶつかりそうになれば蹴りつけ逆側に体をやる。蹴られた樹は、ぶるぶると奇妙な

揺れ方をした後に、その葉の大部分を落とした。

「……あつはつは」

立ち止まったメイが笑う。背後に問いかける。世界の全ては、これで完結しているとも言つように。

「——走ってみる？」

言つて、上半身を軽く倒した。その傾きに乗りルーミアが体勢を整えて、足をメイの腰の辺りにやった。そして、言う。

「——もちろん！」

両腕でがっちりと彼女の足を固定したメイが、その言葉を聞くが早いか駛走する。バネのように勢いよく駆け出し、薄暗い森の中を駆けていった。

途中障害となるものはどこからともなく闇が蹴散らし、押し折り、蹂躪した。今、彼らが通り過ぎた場所の古木が、その分厚い幹の根元を七割方失つてゆっくりと崩れていった。

先に倒木があるうと喰い散らし、粉碎する。急激に陥没した場所も、その上を闇を固めた足場で疾駆する。

「ねっ、メイ」

「ん？」

狼を追い抜かす脚力に臆せず、ルーミアが至つて明瞭な声で言った。両腕を彼の胸元に巻きつけて、口を彼の耳元に近づける。

そして、右手で真つ直ぐに進行方向を指し示した。

「このまま最後まで走つて！」

その指の先から近づいてくるのはやや急な坂だが、弾むような彼女の声音はその先の事を言っていた。指につられてメイが視線をその先にやると、木立がその坂で途切れ、木々では抑えきれない陽光が漏れ光るのを見た。彼女を支える手に一段と力を入れ、最後の傾斜を駆け上がる。

「飛んで!!」

「うお、おおおお——!!」

明るい日の光の下に飛び出すと、目に映ったのは崖っぷちぎりぎりの絶壁。思わず踏み止まろうとした足が、ルーミアの声によって逆に大きく踏み出される。

二歩で崖までの距離を零にした。

三歩目、右足で思い切り踏み出した瞬間——自身が重力の束縛を逃れたような、爽快な浮遊感を感じる。

恐怖のようなものはなく、ただ走馬灯にも似た意識の引き伸ばしが——眼下の川の流れる音が消え、背中のルーミアの重みすらなくなつて、ただ頬を撫でる風だけを感じていた——一瞬、メイに訪れた。

その刹那、首に回された腕に、ぎゅっと力がこもる。

視界の両側に、『黒』が広がった。

「いやあああっはっはっはっはっはっはっはっはっははははははあ
あ!!」

「わは——はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはあ
あ!!」

理性がねじ切れたように狂笑するそれは、ぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる
螺旋を描きながら、ただ落ちていく。翼のように左右に突き出され
た闇も、ただそれに追従し旋廻するだけ。強いて言うなら僅かばかり、滞空時間が延びたぐらいか。

一つのもののようにくっつく二人が、いつの間にか正面から抱き合い、そして哄笑する。ただ落ちているだけとはいえ、五十メートルもあればそのぐらいできるのか。

目紛るしく回転する崖肌と空と水面と、その中心たるルーミアを見据えながら、メイがふと思う。

—— あっこれ、死ぬんじゃない？

結論から言うと、死ななかった。

近づいてくる青碧色の死にメイが内心びびった時、ルーミアは実にクールに対処する。即ち、広げていた闇をその身に纏った。それだけ。

黒い塊が着水した瞬間、膨大な量の水が舞い上がり、水面は砕けたガラスのように粉々に砕け散る。細かい水飛沫が無数に降りかかって川は局地的に豪雨となった。

ルーミアの闇は叩きつけられた一瞬の強烈な圧力に押し負け、川の中に二人を放り出す。ハンマーで叩いたような衝撃で押し退けられた水がすぐさまその一帯を荒らし、二人を別々に引き離れた上で水中に引きずり込もうとした。

メイは、まさかいきなり水ん中投げ出されるとは露とも思っていなかった。というか、事態によく着いていけてなかった。

ただ理解したのは、圧倒的な量の水が上といわず下といわずに襲い掛かってくる事だけ。

その冷たさによって瞬く間に心臓を縮こませられながら、必死に手足をばたつかせて水面を目指した。幸運な事に水は飲まなかったが、荒れる水流にあちらこちらと弄ばれ、翻弄される。生き延びる

ために動かす手足は重く、だんだんと息苦しくなっていく恐怖と、じれったいまでに近づいてこないゴール、そして足のつかない不安さが、彼を苛んだ。

有り体に言つて、彼は泳げなかった。

脳の端が、搔き毟りたくなるほどに焼ける。もとより突然の事で息を大きく吸い込んでいたわけでもない彼は、実際に胸が潰れるような圧迫感と絶望を抱き、死に物狂いで光を求めた。恐怖のあまり、大声で叫びたい、だがそれすらできない、無力感。

「——っは——!!」

命からがら、やつと川面を割つて、空へと踊り出る。意識とは無関係に肺が酸素を求め、酷使した体は鉛のように重い。

それでも彼は、荒い息のままに辺りを見回す。その胸中に抱く——空を飛ぶことすら出来ない自分の能力を、これほどまでに恨めしく思った事はない、と。

「うえっごほっ!!……うああ、ルーミア!!」

気管に粘度の高い唾が絡み、肺の底から絞り出るような空咳を繰り返しながら、ルーミアを探す。立ち泳ぎなどと上等な真似がいつまでも続くはずもなく、水の流れにまたもや溺れさせられかける。

「メイッ!!」

「ルーミア!!」

そして、それほど離れていない位置に彼女を見つけた。同じくメイに気づいた彼女は、自分の能力で作り出した闇に掴まって、必死で流されまいとしていた。自分を浮かばせられないほど精神的に動揺していた彼女は、しかしメイを見るなり即座に彼に向かって身を投げ出す。

流される二人の指先が組まれ、お互いに引き寄せる。流されながらも二人が近づきあって、暫し荒い呼吸のまま酸素を貪る。

メイがルーミアを抱き寄せて、そのまま流れに逆らわずゆっくりと岸を目指し始めた。

疲労しながらもルーミアが握りこぶし大ほどの闇を浮かばせ、そ

れを手掛かりに川を横断していった。俯瞰するならロッククライミングを地面に対し水平に行っていくようなものか。

二人がようやく岸までたどり着き、絡まったまま転がり込むように川原へ体を上げる。随分と押し流されたのか、周囲には二人が飛び降りたような高さの崖など既になく、ただ平地が広がっていた。陰っていた太陽が二人を労うように雲間から顔を出して、その光を投げかける。

どちらともなく体を離し、二人揃って仰向けになる。動くたびにぐしゃぐしゃと不愉快な湿り気を含んだ音がした。メイの方は背中に感じる石の感触に眉根をひそめたが、疲労に任せて体を投げ出した。

「……疲れた」

「……そーなの……よねー」

精根尽き果てたようにメイがそう吐露し、ルーミアが同調する。

一瞬陽光に目が眩んだ彼は、腕を顔の上に乗せて対抗。死んだように動かない。

「……がじ、がじ、がじ。なのかー……」

「……何それ」

「メイが……お腹すいた事って、前言ってた」

「……はて」

顔を横に倒し、ルーミアを見る。目を細めながらも、彼女はまた太陽を仰いでいた。

「……私が悪かったの。ごめんなさい」

しおらしく述べた言葉は、いつになく殊勝なものだった。間違ったら死んじやってた、と。

だがその横顔は、生涯の宿敵と対峙してるかのような、そんな不敵にも——見えた。

……でも。それでも。

「私は——楽しかったな」

と、そこでルーミアが顔を戻す。多量に水気を含んだ髪が、その上気した頬に張り付いていた。

「どう？」

そして、につこりと笑う。

「……………あっはは」

つられたように彼も笑う。多少、苦笑混じりだとしても、はつきりと笑い声に分類される声を上げて。

「——二度は御免だけだな」

「えー、そーおー？」

くすくす笑ったルーミアが、手を横に伸ばす。それだけで、周囲が僅かに陰った気もした。

昼夜も陽光も月光も日も影も問わず、彼女は宵闇の妖怪だから。

「飛んでるみたいで、すつごく楽しかったよー？」

ちなみに彼らが元の山まで戻るのに丸二日ほどかった。メイは途中から、ルーミアに肩の辺りを噛まれる痛みに耐えながらの帰郷だった。

「ホント？ 絶対こっちであってるの？ オレそういう帰巢本能とかなないからね？！」

「多分あってる。——それより、お腹すいたのか……………」

「痛い痛いやめて降りてお願い降りて。闇潜ろうよ妖気撒き散らすのやめようよ、獣も寄ってこないしすぐ帰れるかイテっ！」

「疲れてお腹すいてて、どっちも無理よ」

「何で八重歯立ててきてるの？ ねえ何で？」

「……………あっメイの血甘くて美味しい」

「なあ大将」

「何だ」

普段雑多な妖怪たちが数多く住み着いている山から少し離れた川原。適当な岩に腰掛けて、川の中に入って魚を獲る大将に声をかけた。

既に日は落ちていて、月明かりが頑張ってくれてるとはいえ周囲はかなり暗い。そんな中で着々と獲物を重ねる大将は夜目でも利くのだろうか。

ここは、先日ルーミアと臨死体験した川とは違う。でも濡れるから、わざわざ入りはしない。大将みたく魚も獲れないし……ベツ別に、トラウマなんかになってるわけじゃ、ないんだから……！

右手の親指と人差し指の腹を擦り合わせながら、聞こうとしている内容を舌の上で転がして十二分に吟味する。彼のモットーは、情けない事を言う精神でも肉体を叩き直せば変わる、というものだからだ。

「大将って、人殺した事あるよな？」

「ああ」

足元に魚が飛んできた。既に岸には五匹ほど、同じく彼の釣果（？）がビチビチと身をよじって跳ねていた。

「喰った事は？」

「あるぞ」

再び、水中に魚影を求め始めた。四肢を注意深く動かし、次なる

獲物を探す。

「あれらは弱い。小賢しい知恵をつけた分、呆れるほどに脆い」
知性的な響きを含んだ深いバリトンが、人間をあれら、と呼んだ。
いやそれはどうでもいいんだが。大将が自分から付け足して話すなんて、珍しい。

「——というか、何でアンタら以外の他の妖怪って弱いのか」
雨でも降らないかと空を見上げる。少々曇り勝ちだが、少なくとも目を凝らせば視界には困らない程度には、月が出ている。

返事がないから大将の方に目をやると、ざばあ！ と激しい水音がした。

魚を口に咥え、オレと同じく茶色に包まれた暴熊がのそりと歩いてくる。オレが体重を乗せた岩の前まで来て、そこに腰を下ろした。
「お前が何を考えているのかは知らんが」

そのまま食事をするのかと思ったら、黒い瞳をこちらに向けて言ってきた。とりあえず、いつでも逃げ出せるように居住まいを正しておく。

「お前は妖怪だからといって、そこらの兎が人間を殺せるとでも思っているのか？」

「いや全然」

右手を適当に振って、至極当然、と返す。

「……ならいい」

そう納得して、大将が食事に入った。器用に前足で魚を掴んで、そのまま頭を噛み砕く。大将たちとは違い、火を通さなきゃ喰えないのが人間の辛いところだ。

そうしてしばらくの間、川の流れる音と大将の咀嚼する音だけを聞く。

途中、食うか？ と聞かれたから喰べれない、と返しておく。

「——ああ、そうだ」

そつやって呆けていたところに急に声をかけられて、一瞬何事か理解が遅れた。

「人間は知恵を使う。俺にはそれが、恐ろしい」

「――恐ろしいっすか」

言葉尻を拾って、そう反芻する。恐ろしい……ねえ。

「いつになく饒舌じゃないか？」

ふと思つてそう言つてみた。苦い思い出があるんじゃないかとか、いい加減思い付きをそのまま口にするのはやめようとか、魚が生臭いとか、どうでもいいんじゃないかな。と自分の中だけで呟いて。ゆっくりしていつてね。

「……そうだな」

少しの間の後に大將は、そう認めた。返つてこちらが拍子抜けするぐらいに、あっさりとしたものだった。

そして、もう用はないとばかりに川に背を向けて歩き出した。

「そうだなって大將、アンタね……」

足を持ち上げて岩の上に胡坐をかき、組んだ足に乗せた肘でもつて頬杖をつきながら、すぐに闇に紛れた背中に向かつて溜め息をつく。歌でもひとつでも歌つてやろうかフフフフハハハハ。ドナドナーっと。

と、そこでふと感じた不穏当な気配。実にスカスガしい気分でもハレバレとした気分でもなく、どちらかといえば災厄。一字違えれば最悪、愛厄。はて、字面からは判り辛いが白菜とも似てるよね、声に出して言つてみるんだ。

ひょいと首を傾けると、大將が歩いていった方向とはやや違ふところ、森が背景に在るべきなのにも関わらず、一部チヨコレートでも零したように真っ黒く塗り潰された箇所があった。ふよふよと動いているように感じるのは、オレの方にあの事象に対する知識があるからだろうか。

その暗さ黒さは、暗闇に光がさし込むような実に晴れ晴れとした気分だった。逆だ。

「あの宙を漂うドス黒い暗黒空間は……ルーミアか」

自分で納得するように口に出し、あああれルーミアなんだなと、

よしちょっとルーミアとお喋りでもしようかと、そういった心意気をですね、こう、自分の中で形作るわけですよ、はい。オレにも何言ってるかわかんねーや。

「HEYジュード！　じゃねーやヘイジヨジヨ、もといルーミア」
ほらごらんジュリエッタ、案の定Rumiaは気づいてないみたいだぜ。まあジャック、そんな風に呼ぶだけで固有名詞三つも言うからよ。

「へいそのルーミア」

立ち上がり、暗にルーミアって一杯いるんじゃない？　と思わせる台詞でもって近づくと、暗黒成分がこちらの方を見た……気がする。顔がどこかについていうレベルじゃねーぞ。

「あら？　——メイ！」

そのまま、丁度幼女が駆けてくる程度の速さで——ちよこっちなんな！

「きゃっ！」

「痛ッ」

どうしてか抱きつく直前で飛んだらしく、とっさに身を屈めて抱擁しようとしたオレの顎とルーミアの頭頂部が鈍い音を奏でた。強制的に夜空を仰ぎ見るほど仰け反って、脳が揺れる。端的に言おうか？　吐く。

「まあ吐くとか死ぬとか一々言うたびに実行してたら社会成り立たないよね」

「いったーい……」

そのままケツから倒れ込んで、体を張ってルーミアを受け止めた。結果論とも言います。

片手で口を押さえながら、呻くように現代社会の欠陥を指摘する。ルーミアは、人の腹の上からどこうとはしないまま頭をさすって、少し涙目になる。

「少しは後先を考えなさいっての」

「痛い痛い痛い痛い！　ごめんってばー！」

頭を鷲掴んで力を込める、この……なんちゃらクロー……大將クロー？ で折檻とお説教を行うと、おもつくそ腕を叩かれた。ごめんの意識零である。

掴んだまま腕を上げれば、おそらく持ち上がるんだろうな……妖怪だから、とか思いながら手を離してやる。両のこめかみを抑え、やや怒った目で見上げてくるルーミアに、一言。

「そーいう事やってつから、この前みたいになるんだよ」

すると青菜に塩でも振りかけたように大人しくなる。まあ実際にはかけた事ないから、言葉のあやってやつだけど。

「……ごめん」

うつむいて、ぽつんと呟くルーミアを見て、このネタでしばらく揶揄していこうという考えを即座に取り消す。

仰向けに倒れつつ、今度こそ正面から抱きしめた。

「まあ、そんな怒ってないから。あれはあれで結構楽しかったし」

「……ホント？」

「ああ。……二度はごめん被るけど」

「——うん、うん！」

人の話を聞いているんだか聞いてないんだか。

まあそれも、ルーミアらしいといえなくもないだろう。

突如、ふっと思った。

どうしてオレ、こんな能力なんだろう。

番外編……誰かに背負われて 下（後書き）

書き忘れてました。

ルーミアたちとは大雑把に春、秋の終わりまで。実は一年経ってない。

カグヤたちとはおよそ数年一緒に暮らしてました。

ルーミアとは短いけど強烈な毎日を送り。カグヤは三日から一週間に一日程度しか合わないけれどとにかく年単位で期間が長い。

——あれこれ、永琳が勝ち組って事なんじゃあ。

B G M “ m o o n l i g h t s t e p ” b y L i z T
r i a n g l e x L i k e a r a b b i t

さよならには短いありふれた日に

「おり、おちんちんランドはつまってるよー！」
「わあい！」

——下駄の歯を、太く突き出した枝に対し垂直になるように、足をやや傾げて踏みつける。飛び乗った勢いで撓たわんだ膝をすぐさま伸ばし、次の枝に跳んだ。

視界では捉えられないが、木々の枝を飛び跳ねて走っているというのに、地上からぴったりと追跡されている気配がする。ルーミアを背負ったまま、横ざまに右の握り拳を思い切り幹に叩きつける。単に木を叩いただけ、追跡してくるものを怯ませられたかは定かではないが、その反動のままに強引に進路を変える。わあい、と声を返したルーミアが咄嗟に創った闇を足場に何とか次の枝を踏んだ。はっと鋭く息を吐いた。

「故郷はつーいている、乗り越えるべき過去かつこ、きっと、この、おーれは、矢の先行けるはず、レクイ、エーム発動だああ」
「わあい」

背中中のルーミアの妖気が蠢いた瞬間、両の足を揃えて宙に現れた闇をそのまま蹴りつける。今後は無理矢理に勢いを殺し、真下に落下。

直後、オレの頭が占めていた空間を子供大の火球が“轟！”と音を立てて駆け抜けていった。

「——おお」
「わあいっ」

着地の瞬間、追ってきた犬のようなそれなりの妖怪が牙を剥いて飛び掛ってきた。

おお、と軽く声を上げて。
つんのめった左足を軸に、縦に振り上げるようにして右足を回す。下駄に食い込む肉の感触。鼻緒が抜けて、犬と一緒に下駄も飛んで

いく。

背中の奴の分遠心力がついたらしく、そのまま倒れかかる上半身を左手で地面を叩いて起こした。わあいと言ってルーミアが傍に生えた赤い果実をもぎ取る。

拾いに行くのが面倒だなと思ったら、足元に闇から下駄が放り出された。

——それなり程度じゃあ、オレたちは止められない。

のた打ち回つてもがく犬に止めを刺そうと歩み寄った。瞬間、先ほどの火炎弾が顔目掛けて次々と打ち込まれる。

初弾を一步飛び退いて避け、次弾は逆に本体に近づく事で目測を狂わせ空ぶらせる。接近を嫌がったのか、発射地点がオレを回り込むように右へずれていき、一際巨大なものが撃たれ途端に沈黙した。

「どうしよつか」

「んー」

木の実の汁がついたらしい指をしゃぶりながら、ルーミアが思案に暮れる声を出した。

その間に、今度は針の穴を通す正確さで足首を狙った火球。造作もなく踏みつけ、『喰う』。

……”どうしよつか”。

つまり——。

「——懲らしめる？」

「おっけー。じゃあ、まあ、目的は『万が一』生きてたら聞きだせばいいか」

首に回されていた手がするりと脇腹を撫でてくる。鈍痛。小さく呻いて、食いしばった歯の隙間からはと鋭く息を吐いた。

——おそらく何の能力も持たない犬一匹と、火を飛ばしてくるもの、そして音もなく肉を抉る能力の妖怪の三匹。

腹の傷の治癒が阻害されている。走る間にいろいろとルーミアが

栄養になりそうなものを集めてくれたが、そもそもまだ『栄養』の蓄えはあった。しかし、傷口から競り上がる火のような怖気は脈打つように疼痛を放ち、肉を徐々に腐らせてくる。

ルーミアが脾腹から指を離し、オレの手を掴む。

主意識の利害が一致し、『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』と『闇を操る程度の能力』の境界が曖昧に揺れる。「ルーミア」と名付けられた暗闇と、「メイ」と呼ばれた飢餓感とが溶け合い、混ざり合う。『闇』と『食欲』に特化した純粹さが、それぞれに穢されて少しだけ色を変える。

木々の隙間からさす日の光が、少しだけ辛くなった。

背中越しに、腹の虫の音が響いた。

「お腹空いたねー」

「……いや、別に」

比較的わかりやすく、好戦的で獰猛かつ貪欲になるルーミアに対し、オレは感覚の一部が共有されるぐらいが関の山。

太陽の下で晒し出される影、その中に潜む犬共をぼんやりと察知。やや体の均衡を失いつつも、それこそ飢えた猛犬のように猛烈に走り出した。

「この岸边メハンが金やちやほやされるためにマンガを描いていると思っていたのかアー……ッ……ッ！」

踏み出しかけた足が、止まる。

ほんの五、六歩先に、茶ぶちの猫がいた。オレと目が合っても逃げようとしめない。

「猫はおいしいのかー？」

見とがめたルーミアがオレの肩越しに手を伸ばした。

「いや、待て——」

——去れ！！

放たれる怒気と、圧迫感さえ感じる叫び。

今度は左足首がごっそり貫かれた。

左へ傾く視界と体。

瞬時に全てが闇に覆われた。

おかげで、続く連撃は防げたのであろう。闇の塊を掻き分けるように、三本になった手足で地にうずくまる。「——ルーミア」と呟くと、闇が晴れた。

顔を上げなくてもわかる——馴染みの妖気、ルーミアはすぐ目の前の辺りで手当たり次第に能力を振るっていた。ほうりよく

——龍神が道なるぞ——！！

骨が軋むほどの力で地面を叩いた。痛みから、頭の中へ手をつっ込んでしまいたくなる衝動さえ覚え、空虚でしかないオレの中が赤く、そして真つ黒に塗り潰されて。簡単に容易く限度を超えて爆発する怒りという赤みが一瞬も過ぎない内に冷えて、飽きて、残ったがら^{がら}んどうを何かが何かが、満たす黒く。

何の為に生きている？

ルーミアの為、かな。

言い訳めいた決心と間断なく疼く激痛とで思い出すのは、一つの終着点たるこの能力の使い方。底の方に残っていた『栄養』をかき集めて一気に引きずり出した。

本来なら意識せず行つ過程を経て、足から肉が生える。

泡のように内側から赤黒い肉が膨張し、破裂するかのよう膨れ上がった瞬間、人間の足首が出来上がった。

ご丁寧に下駄まであるその足について立ち上がる——喰うために——殺す。

「嗚呼^{ああ}苛々する。そう何度も何度も殺されはしないぞ。喰うぞ。喰うぞ。殺すぞ。」

口に出した言葉がまたオレを掻き立てていく。飢えさえも火種に燃え上がるこの手の怒りは、混じって“黒く”なったこの体によく

馴染む。——実に馴染む。

数度まばたいて見た視界の先には、猫と対峙するルーミア。視認した途端、背後から多量の火球が、まさに弾幕となって降り注いだ。『喰う』事で直接の被弾を抑えたが、飛来し、さらにオレの周囲に着弾したものが瞬間的に燃え上がり、今のオレよりもなお貪欲に酸素を食らい尽くした。

ふっ——と酸欠で意識が遠のきかけるが、“バチンッ”とルーミアから意識を叩き込まれる。

前へと倒れかけた体を無理矢理起こし、一種真空状態に近かったこの場所へ猛烈に吹き込む暴風に、耐える。そして、一気にルーミアへと駆け出した。

——愚か者共が！！

再び、頭に直接響くかのような音。耳障りだ。

ルーミア……ッ！

叫びかけた刹那、彼女の足元からその華奢な肢体を沈めるように闇が完全な球体を形成、次いでその表面に白い火花が走る。何度も何度も何度も何度も不可視の攻撃がその一瞬だけ白く光り、砕け散る。

それを直に眼で見てようやく、事ここに至って思いついた。先の火弾と、おそらくオレの脇腹も足首をも抉り取った攻撃である白い火花。

過剰に過ぎるそれらの能力の火力。

妖気ではない。ありえない、こんな味は覚えていない。オレともルーミアとも、力の質が違った。正邪善悪どちらにも染まり得る、ぼやけた乳白色——。

不味いかもしれない。

無防備になるのも構わず地面に膝をつき、右手を自分の影の中へ突っ込んだ。ずぶりと僅かな抵抗と共に、腕の中ほどのあたりまで

が黒の中に沈み、腕の確かな存在感と、物理的には千切れているという違和感との差異に歯を食いしばる。

だがそれでも、闇の中に掴んだ右手は確かだと——そう強く想う。目の端に羽とくちばしの銀色が映り込んだと思うが早いかな、今度は影越しに繋いでいる右腕を正確に七発の業火が撃たれた。空気を焦がしつつ迫るそれをきっかり七度喰えば、力のおぼろげな輪郭がわかってくる。

「私たちは——」

さらに右手に力を入れる。

浮かんでくる闇との対比で一層白く生える顔と、血のような唇の色。炯々とした瞳を耀かせ、闇の中からルーミアが飛び出した。

「二人で一つ——は、ちよつと違うような」

オレに意識できない速度で、見えない火花が三度飛来する。宙に広がった“黒”がその全てを弾き、防ぎきる。

ルーミアが背中に飛び乗った衝撃で、少しよろけた。

「じゃあ、二人で一人？」

「——うん、それが近い、かも」

重さを確かめるように、背負ったルーミアの足を持つてぐるぐると数回その場で回る。幾度も二種類の能力に狙い打たれるが、造作もなく喰い、闇が弾く。

相手の正体がわからずとも、力の大本を理解したオレは行使された瞬間に位置が特定できる。そして、自身の見える範囲まで、という凄まじい射程距離を持ったルーミアの闇が、オレという足を得てその性能を十二分に発揮すれば最早近接・遠距離共に相手はいない。

「二人でなら、ね」

「誰だつて倒せるよね！」

二人でなら、空をも飛べる気がする——。

カチツ。

音がした。

目に映る全てが青みがかった銀になる。

なんつ。

背中がぬくもりがない。言いかけて、叫びかけた声が、中途半端な格好のまま口から零れ、奇妙な静謐で一挙に満たされたこの場の雰囲気には押し負けたかのように、無音のまま霞む。

重苦しい気配が渦巻いていた。

……ルーミ、ア。

どくと鼓動が響く。青く青く蒼く、満たされ、音のない世界。どくと鼓動が響く。

意識でも能力でも存在でも、繋がっていたはずのルーミアが感じられない。

剥き出しのまま放り出されたオレに残ったのは、無駄な自我と食欲だけだった。

心臓の鼓動を感じる。

共有……一方的に引つ張られていた部分の飢えが、汚らしい衝動が、『黒』が強烈な反動と共に内側を荒らす。

何かを耐えるように、その青の中で膝をついた。

ふと、視線が感じられ。

顔を上げた。

——あれは。

今までが青いフィルターを通して世界を見つめていたのなら、こ

れはまさに視界が青の一色で塗り潰されている。

“そいつ”の視線だ。

一方的に観察——見下ろされている。存在の格が違う。理不尽に過ぎた、理解の範疇を超える文字通り『規格外』の何か。

自我を持たない世界や力の集合のような側面と、オレの中の飢餓感が喰らいつこうとする確たる一の気配が混合し、溢れていた。青い光に貫かれる。ルーミアとの繋がりは立たれているのに、その光がオレのどこか妖怪である部分を戦慄かす。まだ消化し切れていない低級妖怪が腹の中で怯えているのか。それとも、オレが。

——違う。

飢えに苛まされる中での最後の矜持、自分が人間である事の、自尊。

……自損？

『良き』。

試すような視線が遠ざかっていき、それと共にオレの意識もまた蒼い中で薄れていった——。

時間と時間、世界と世界の隙間から叩き出されるようにして、ふっと見開いた。

見慣れない木々、森だ。

ちちちちと腹の虫を誘う穏やかな鳥の囀りが聞こえて、仰向け

になっていた体を起こす。

寝転ぶオレを囲むように、猫と、鳥と、犬の白い骨が並んでいた。よくわからない状況と、最早慢性的な頭痛に頭を抑えながら、立ち上がる。大きく息を吸って、吐いた。

（平素から感じてはいるが）どこか満たされない、何かが欠けているような感覚とどこ右に引っ張られて顔を向けた。

「——いいつ。メイ——！」

足元の骨に一瞥くれてから、声のするほうへ——ルーミアの許へと歩き出した。

さよならには短いありふれた日に（後書き）

混じり合うというよりも、ルーミアがメイの一部を取ってメイもその分食らいついているに近いです。

月と闇と君の狭間で
(前書き)

希望ってなんですか？

月と闇と君の狭間で。

——六回目えー。

「いーち、にい……、よーん、ごーお……」

水が滴るような湖に、いや、滴るような水の中に足を遊ばせていると、足の先からだんだん自分が水になっていくような妄想が体を締め上げる。緩慢な恐怖の輪郭を感じた。

「きゅーう、じゅう……、じゅーに、じゅーさん……」

初めは永琳の仕業かと思った。できるできないでいったら、できる事ではあるだろうし。——だけど、大切な人で。永琳もそう思ってくれていた。

カグヤの影響かとも思った。寿命をガリガリ削られていたわけだし、加速した時間を速められてとうとう時間停止のような状況に陥ったのではないかと。——でも、やっぱり、考えたくない。

——罪か、罰か。

暗く暗く青い世界、やや急勾配の坂のイメージに浮かんでいた。いつかの心象風景とほざいたあの像だ。ヴィジョン

登る気にさせない坂の最下部に腰掛けて、後ろの坂以外一面に広がっているであろう水の中に両足を突っ込んでいた。何にせよ暗くて、坂の上も見えないし水の向こうも見えない。

いや、オレの心象風景ならばどうせ、“見えないようにな……っている”んだろうけどさ。

水面を、蹴りつけて。

——『もう何年何十年何百年、この奇妙な場所に閉じ込められているんだか』。

見ればオレが座つているところが丁度、坂と水との境界線ボーダーラインになっていた。右耳の方向へ堅固そうな壁が続いていて、左肩の方には黒々しく絶壁がそそり立っている。波みたいな高尚なものは起きずに、壁と水との色際ではぐずぐずともどかしい侵食合戦が勃発していた。水っぱい壁、壁みたいな水。馬鹿に描かせた絵のように、果てもなくただひたすら両者が伸びている。ふと、壁が崩れ落ちて溶けていくような幻視。足に絡みつく水はモノクロな胡蝶。

とても、中途半端な場所。

例え斜面がぐずぐずに湿つていようと、傾斜が七十度近くても、登ろうとする気概さえあれば登れるだろうけど。

例え蒼然として、漬している自身の足さえ見えないような不気味で不安を感じる水溜まりでも、多分きつとどうにかできるだろうけど。

何も、しない。

この宙ぶらりんな場所で、引つ掛かって、停滞しているだけ。

中指をこめかみに突っ込んでぐりぐりと最高にハイってみたいんだけど、指は虚しく皮膚を擦るだけだった。この状況みたいに、オレは脳ミソ掻き回す事すらも自由にできない。でも自由って……ああそうだ、オレもう人間じゃねーし。社会体制に拠って生きる必要が失せたのだから、自由って言葉が一際輝くのか。かがやくのか！カグヤなのかーそーなの……そうなんだよ。

——時間だけが、過ぎていく。

唯一不変で不便な数字に頭の中半分傾けていれば、無意味なこれにも色がつくような気がする。

まあ何度数えたか、忘れたら御の字だしね。

「6744、6745……、6747、6748……」

どうして月から素直に地上へ行けないんだと、ちよつと理不尽さを呪いたくもなつて——いや正直、そろそろ本気で拙い不味い。頭パープリンになつちまうんですよジョセ爺。お××ぼカタストロフィとか叫ぼうが何しようがどうか冷静に盛り上がれない自分が片隅にいるわけで、少なくともオレの狂気つてのは自身の主観性の二分割に起因していくんだなと判断できてしまう。

——またしても。

意味もなく立ち上がろうと、足を引き上げて地面を踏んだ。しかし、前かがみになった体に突如圧迫感が押し掛かる。もたげた頭を押さえつけられたみたい、芯に力が入らなくなる。

精神的にも。

——殺す。

最早何度目なのか、疑問に思う事すらも厭わしくなる感情が、押さえつけられた事に反比例して噴き出して来る。オレに触れるな、オレを見るな、オレに構うな……子供染みた反発も何もかも抱えてひとからげにする。一樣に「自分が不愉快だから」湧いてくる感情だ。

単純な根性論ではない——と、実は今現在もそう思っている。

“どうしてオレが殺せない”。

傲慢だという自覚はある。だけど、世界の中心にはオレが在る以上、他者なんて本当の本気で殴れば死ぬと、殺せるのだと信じてい

る。祈つていると言い替えてもいい。強欲で、愚鈍で、浅ましい。要は食欲なんて、そんな能力。

——あー……。

人間並みの力に戻ってしまった……いや、厭らしく生きる事をすり減らし続けている分、人間などとはおこがましい——蛆虫。蟲けら。身の毛もよだつほど嫌悪するあれ程度が、オレに似つかわしくて……。

……でも、それはやっぱり嫌だ。

立ち上がるうとしたのとは反対に、今度は膝を抱えるように身を擦^こつて、卑屈さから小さく卑猥に醜悪になろうとした。

図らずも、水にオレの顔が映り込んだ。近づいてふと、血に似ていると気付く。あるいは「前」に思ったが、忘れているか、だが。映った命^{メイ}が、たった一滴の水で歪^よんで蕩けていった。

オレには——世界が善く見えなくなった。

——落ち着け、冷静になれ。クールになるんだ、オレ。狂わないように、自分を保って慎重に慎重に。

先が閉ざされたこの状況でハンサムな誰かが突如助けに来てくれる可能性に丸をつける事はねーな、と考えている自分。

カウントする自分。

経験のようなものが頭の後ろ側に積もっていくような気がして、これが濃くなっていくにつれて『狂えなくなるな』と思う自分。

無限の牢獄とでも言えいいのか。この状況に心が適応して対応しようとして躍起になって、

——あー。

今までのオレにさよなら、ってやつですよ。

血塗れた心臓^{メイ}の奏でる鼓動を数え上げるように、ゆっくりと口ずさんでいく。

「15002、15003……、15005、15006……」

「16692、16693……、16695、16696……」

実は狂っちゃうつての、あれ嘘なんだ。

妖気がね……減ってっているわけでして、その。

“スマン、ありゃ ウソだった”と言って許されるなら死んでも言わねーけど、何ていうかさ、オレ……氣づいちゃったんだ。氣づいたつつつても彼女が知らない男とあるいているだとか彼氏が知らない男と歩いているだとか、そーいうんじゃない。期待を裏切られたっつーなら、正直スマンかった。

何というか、結果のわかってる出来レース。わかっていなければ出来レースと言わないって無粋な突っ込みは無しよ。

——『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』。

実際に、口で食べる必要があるわけではない。何それすげー不便。でもその代償として、何かを食べ続けないと餓死してしまうのだ！ 何それすげー不便……量？ 一日三食も食べていけば十分じゃないかな。

だが、食欲が人間並でしかなくと、こんな場所に引きこもっていたらどうしようもない。好きで引きこもっているわけでもないけど……って、前にどっかで言ったな。

好きでこんな能力なわけでもないんだけど、まあそれは置いておこう。

問題は、これが常に懷から妖気を喰っていつてしまうところ。

月では妖気の補充も出来ず、ついでにカグヤの能力の影響も相俟って実は相当危機的だったのだが、まあそれはそれ。楽しかったしね。

あの時森の中で気がついてから、ある程度妖怪としての質が整うまでは、ルーミアに限らず誰でも舐めていた。自前の妖気じゃあとてもとても“エサ”を賄えなかったから、他人のお零れを漁っていた。だんだんと落ち着いてはいたけど。多分ルーミアに半分ぐらいなすりつけていたんだろうとも思う。でもやっぱり他のヤツを妖気ごと存在ごと喰っちゃまうのが、一番手っ取り早かったけどね。

でももう終了。最後のアレで相当膨れ上がっていたけど、抱え込んだ妖気がそろそろ底を尽きそうだ。今思えば山も齧ったんだから、地脈とかそこら辺に目覚めていてもよかった気はするんだが……まあどうでもいいや。

—— 飢餓感も、精神の限界に穴を空け始めている。焼け付くようだ、狂いそうだ。

でもってそれがどう嘘かというと。

…… 覚悟、しちゃうんですよ…… 常識的に考えて……。最後の力を振り絞る？ まさにそんな感じ。あなた『覚悟して来てる人』ですよ。異論は認めない。

『目標』のようなものが出来る。

あるいは、墓碑のような。

そういえば、実家に置いてきたオレの鉢植えは元気かしら？ ないんて妄言を……。

—— いや待て、前世でなくとも、そう！ 八意家があるじゃないか！ オレが全てを諦めて精神も毛根も廃人となる寸前、寸止めのタイミングで永琳たちが「この鉢植えは—— アナタのよ」とか言つて光と共に颯爽と。やべえオレそんな風にして助ける価値ねーや。

劇場版にご期待ください。

カグヤにも耳障りと言われたし。終いにはあなたを殺して私は死なないっとか言われたほどだし。くやしきなんかねーし。

強いて言うなら、殺したいほど想われてる……ってのが、その屈折具合が結構愛おしかったりする。似ているから。同属を嫌悪するぐらい素直な性格も生き方もしてこなかったツケが回ってきていたりする。

……自分の考察なんて楽しくないからやめよう。何回もそう思ってきたけど数字が一巡したあたりでまたやつちまう、でもとりあえず今はやめよう。

目を閉じていると、自分と闇の境界が曖昧になる。あやふやにするのは性分となってきたけれど、ずれたのを戻す方は生憎、性格からして向いていない。大の苦手です。安西先生……バスケ……どうでもいいや。

物事を放りっぱなしの投げっぱなし、そのくせ細かいところは気になる……。

いやいや。

自己判断はユングでも読んでろってー、話で。いあいあ。はす……

……なんでもない。

とかく——自分の意識の範疇から微妙にずれた、体の端っこから蟲にでも喰われる感覚……といえますか。

右腕を持ち上げようとしたらぼとりと落ちる。

夢でも見ているみたいに、体から意識が引つpegされて『悪夢』を見る。この状況終わんのかな……ああ、足の感覚が消えた。

ところでオレ、蟲って嫌悪とか吐き気って範疇じゃあないんだよね、既に。なんだろ、この憎悪のようなような何か。生前、生きながら蟲に喰われたエンドだったとか？ 蟹とドラム缶があるつつし。……視界が、不味い、楽しい事楽しい事……そう、これが終わったら時間能力なスタンド発現は確実！ やべえテンション上がった。きた。

……ん？ あれこれ……あれっ？

心臓メイか何かしんないけれど妖気が……何これ。ビタミンチャージ、妖気回復です少佐、寿命が一気に倍程度にまで膨れ上がりました。

供給されたという事が二等兵？ その通りであります少佐、生憎こ
こは戦場でも何でもないからアパムが弾持ってきててもクソの役にも
立たないのであります少佐。

……………。

……ルーミア、か……？

そういう事なのか？

——『私が死なせないよ？』って事なのか？

渴いた喉で水を一口だけ飲んだようだ。辛い物を食べて水を一口
だけ飲んだようだ。焼け石に水程度の、結……結論の先延ばしでしかない
妖気寄こして、このまま絶えず供給されてりや半永久的に『このま
ま』だぞ、オレ。どうするよ。どうするよ、オレ。つづウく！

……あちらに、^{ルーミア}どれほどの事が伝わっているのか。

あの能力で形作られた心臓は、どのくらいオレたちをつなげてい
るんだろうか。「ゆっくり死んでいてね……！」ぐらいは言っ
てもらいたかったんだけど。

この状況は、ルーミアのせいではないと思っている。

——この愛おしさは、伝わっているのだろうか。

「せんとんでろーく、せんとんでなー……、せんとんできゅー、

せんとんでじゅう……」

後頭部に、鈍器で殴られた時の感覚に近いものが広がっていく。
どこか、立ち眩みにも似ている。

仄暗い水を手で掬い上げて、そのまま零した。端麗端麗と、ぬる
つく雫が源に還るのを、もう何度繰り返しただろうか。

永琳みたいに賢くないから、数えられない。

でも、カグヤみたいに綺麗じゃないから、やめる事も出来ない。
澱んだ幽かな死臭が周囲に立ち込める。降り積もる雪のように、
柔らかに生命を抱擁する匂い。

——故郷で空を見上げると、薄汚れた灰色の雪片がよく視界を穢
していた。そんな気がする。

そうだ、これが終わったら本当の雪を見よう。文明に汚染されて
いない美しい雪の中に埋もれて死ねば、あるいは。

死ねるかもしれない。

——がつくりと。

睡魔に抗っている時のように、一瞬、無意識が意識を切断した。

どうしてだ。楽しい事を考えているはずなのにどうして、眠くな
る。寝たら死ぬぞお、でもむしろ死にたい不思議。不思議っ！

『私が死なせないよ？』——うんそうね、ありがとう。殺されたい。
祟りか、呪いか。どうしてだ、オレは愛して愛されていた……は
ず。鈍いせいなのか。殺されそうになって生かされていて鈍いも何
もねーよ、死ね。誰が死ね？ オレが死ね、むしろ死んで死にたい。
よく思い出せないけど死にたい、思い出せば死ねるの？ じゃあ死
ね、前世はジョジョ好きな妹がいて病弱で今際の際に生きて——と
か言われてしまっていた事にしようぜ、とても素敵だが矛盾が起こ
ってる。あの時殺してしまってるから約束守れてない、約束って随
分一方通行だな。多分その妄想の妹さん約束って考えちゃいねーと
思うしよくある遠いところへ逝ってしまった……以上に遠いところ
に来ちまっている。大体生きて。だろ？ 自殺しなきゃおっけー。
殺すのはオッケー。しかも殺したっていつよ？ あー……おうけい

そうかもしれない、な？ 結論。殺してないしそもそも無問題だから——そうそう。死ぬにあたってはやもやした前世の思い出せない記憶だったな。これで万事解決だ。約束に殉じる為に生きた。そしてジョジョ好き、こうしてみると天秤の片側に随分な違和感が……まあどうでもいいや、そうそうどうでもいいさ。さっ早く死ねよ、いやちよつと無理っぽいかな、……好き嫌いしてばかりで、好き嫌い？ 口から出任せて……まあ他人のこたあ言えねーんだけどねえ。

食事？ ——嫌い。

会話？ ——嫌い。

他人？ ——嫌い。

ほらね。全部一色に塗り潰しまうんなら黒く塗ったところ白くしても相違ないじゃん、いやいやお前さん——あなたさん？ まあどうでもいいや。白黒じゃなくて紅と蒼だからこれ、あーそーなのーおめでたいねー、御目出度いのは紅白じゃん、どうでもいいよホントに。本気で。

ところでさ、ん？ 今なら多角的に判断できると思っただけど、へーこれ多角的なの。……まあ。いいんじゃない？ どうぞお続けになつて、では続けますわ。これ。どう見る、どう見るって……好き嫌いの多いオレに対する能力の仕打ち。とか？ 結果的に奇妙な延命措置が図られてるが、予期せぬ横槍。心臓で想ってるってやつだね、……何か字面がこえーよお、そーなのかー、やべえ殴りてえ七回殺してえ、何で七回、生き返られちゃあ困るからさ、なるほどなるほど……猫か。でも猫なんて喰べたつけ、いや。空腹感的に後それぐらいだから、なるほど、でも本当に七回分なのかね。これ終わったら試してみよう、好奇心は？

猫すら襲う。

「千飛んで十二、千飛んで十三……、千飛んで十五、千飛んで十六……」

大伽藍及び腰蹴り（前書き）

「飢えという病の辛さを本当に理解しているのかい？」

大伽藍及び腰蹴り

音ともいえぬ虚ろな「気配」がした。

孤独に耽る森の中に静寂が落ち、陰鬱な雲に遮られた太陽がなけなしの熱を放る。光はどこにも届かないまま、風が運ぶ冷氣と雑ぜられて散り散りに消え去るのだった。

気の滅入るような空模様だが、雨の気配はない。時折木末を掠めるように鳥が飛んだ。

——押し退けられる。

次の瞬間、折り重なるようにして生える木々の合間で、“彼”が静かに落ちていた。

彼が血の中に倒れ伏していた。
地の上に彼が横たわっていた。

一見すると、“彼”とはとても気づかない。死んだように、ぴくりとも動かなかった。挽肉ミンスミートのような、原型を探す事も難しい肉塊。枯れ葉を敷き詰めた寝台の上で、死んだように、ぴくりとも動かなかった。

——酷く薄っぺらい。

ジグソーパズルのように彼を組み立てられる者がいたとしたなら、志半ばで頓挫するだろう。あるいは時間が巻き戻ろうとも、“そこにある分”だけでは足りない。幾ばくかの肉塊と少量の血痕。ある種の残りカス。

そして、空気が淀む。だらしなく零れている血の生々しい色合いとは逆に、“彼”から立ち上る死臭は随分薄かった。

かさ、かさ、と微かな音を立てながら、小さい蛆虫が彼の頬の近

くを這う。積もる落ち葉の上で、矮小な体を擦らせてゆつくりと這っていった。

——ひら、ひら、ひらり。

木々が落とす落日の枯れ葉がまた一つ風に舞い、踊る。音もなく、粗い螺旋のような軌跡を引いて、

消えた。

彼の傍で掻き消えた。そしてもう一枚、二枚、葉が続いて落ちる。先の葉を追うようにして、虚空に身を投じた。

空間に波紋が生じる。

風が澱む。

林檎が引力に惹かれるように。

特別な事は、何も——何もかもただ『彼』に食われるだけ。

彼に意思はない。月と闇の、人間と妖怪の、時間と世界の隙間で独りよがりに浮かんでいる。

飢えから解放されるのか？

——『飢え』が解き放たれて。

四季が三順する頃には、森そのものが死に掛けていた。

数多の生物らが寄り集まって作り上げる秩序を食い潰す存在。意識の外側で無造作に振るわれた欲望が加速する。

およそ五、六十メートル四方。獣はとくにそこを離れている。

飢えたそれは陽光をも糧とせざるを得ず、陰気な雰囲気始終包まれた地帯と成り果てていた。鳥はその一帯の上空を飛ぶ事すら嫌がった。

ビグンと跳ねる。

風だけはいつまでもそこに向かって吹き込んでいる。

まるで世界に穴が開いてしまったようだった。

ビグンと跳ねる。

足りない肉を形成するだけのものを掻き集めようと、飢えを満たすに足るものを求めようと、欲望が世界を食らう。

一部分が腐ればその『存在』がやがては全体を腐らせていくように、大地は力を失う。その能力の範疇にない土地だろうと、それは、存在しているだけで腐敗にも似た現象を引き起こしていった。

臭いはない。音はない。命あるものは皆食われたか逃げ出したからだ。

残ったのは灰色の大地。

三の四の五の乗算。“一通り”食い散らかされた残りかず。そして。

『命』^{メイ}と呼ばれた飢餓感が、何も無い虚空から吐き出された。

「おれは人間をやめ……」

命が、立ち上がるうとする。

手首について半身を起こしたが、幾度も痙攣をする足に拒絶される。頬で乾いた地面を擦った。

「……ああ？ ああ、あ」

言葉を忘れたというより、喉という感覚に戸惑うような。

半端に開いた口の端から涎が零れる。嗚咽のような声と共に、地面に薄く染み込んだ。

右の眼球は眼窩の奥で暴れまわり、左のまぶたは閉じられたままだ。

何かを払うように振り回された左腕の勢いによって、体が反転し仰向けとなる。そのまま膝を何度も曲げて腰を浮かし、打ち付ける。急に四肢の動きが止まる。

「……ああ、そうか」

今度ははつきりと、意志を感じさせる明瞭な声音。鈍重ながらも

適当な動作で体を持ち上げると、両の足で大地に立ち上がった。

命が己の裸足を見た。ややあつて、右足をその場で踏み下ろす。地面と接触する瞬間に下駄が現われ、一本歯が代わって踏みしめる。左の足も同じようにする。

頭を上げて、彼が周囲を見渡す。まるで夢の中の世界のような、どこまでも無味一色な平坦さがあるだけだった。

躊躇いがちに、彼が一步踏み出す。

その場に座り込んでしばし呆然と目の前を見据え、また立ち上がる。

一步、歩く。再度腰を下ろし、自分の両手を力なく見据えた。

その手が、口元を覆う。

「……ああそうさこれが救済の味」

低く、抑揚をつけて呟いた。

指の間から、隠し切れない笑みが浮かんでいた。

すつくと立ち上がると、今度は何も邪魔できるものなどいない、というような確かな足取りで、周囲には目もくれずにその場を立ち去った。

目覚めだした飢餓感は特に目的も定めずに歩きだした。磨耗した精神は極端に刺々しい妖気を抑え切れず、暗くて黒いそれは時に暴発した。

突如引き付けを起こしたように笑えば、喉に穴が開く。太陽に手をかざせば皮膚が内側から捲れだし、歩いているだけで大腿部が腐り落ちる。

その度に彼は、痛みさえも娯楽であるかのような薄ら笑いを浮かべたまま、周囲の存在を手当たり次第に食う。傷が癒えると再び歩き出す。時には一昼夜ばかりも、じっとして、身動ぎしないまま、口を動かし続けていた。

やがて、体が馴染むにつれそういった事は少なくなっていくたが、

代わりに寝る時間が増える。基本的に、雪の積もる冬は洞窟なんか
に籠ってやり過ごしていたが、春先に寝て真冬に目を覚ました時な
どはそのまま雪を踏みしめて歩を刻んだ。

——どうにも、感覚が鈍い。

幸か不幸か、と彼が胸中で独りごちる。

寒風に頬を叩かれ、次に彼が目を覚ました場所にも、一面の銀白
色が広がっていた。

太く伸びた木の枝に寝ていた命は、覚えのない雪化粧に目を瞬か
せる。

途端、濡れた服に体温を奪われるように、徐々に冷えていく自分
を意識した。

——身を縮こませて、長々と息を吐いた。白く立ち昇る。

「カゲヤア……えーりん。さびし、くはない……けど」

灰色がかった雲の下、辺り一面が薄暗い。彼が、幹に背を預けた
まま、体を揺すって雪を払いのけた。

体に強く巻きついてくる寒さに、一瞬、このまま寝てしまいたく
なる欲求に襲われる。また数年は飛んでしまうのだろうか、この冬
はやり過ごせる。でなければまた寝ればいい。

飢えを満たせないなら、寝てた方がまだましではある。

「ああ、あ」

数度、軽く咳き込んだ。顔を上げ、もう一度寒さに体を震わせる。
逡巡し、結果として枝から飛び降りた。降り積もった柔らかい雪
が衝撃を吸収するが、鈍い音と共に足首までがすっぽり埋まる。

「下駄、の意味がまるでね、あ」

寒さと久々の覚醒によって上手く回らない舌で言いながら、片脚

ずつ雪から抜き出す。そのまま数歩歩いてみたが、いつそ裸足の方がいいほど下駄が邪魔になった。

脱いだ下駄は鼻緒に指を通し、右手に下げておく。そのまま当てもなく歩き出す。

貪欲な精神は、苦痛にもすぐに慣れる鈍感なもの。だがそれでも、日が沈むまでには洞窟が何かを見つけたところではある。

新雪を踏みしめる音に、ふと背後を振り返った。

点々と続く足跡。自分の影は、足元の真下にしかない。

曇りの日の、こんな風なのっぺりとした違和感が好きだったと、吹き込む風に胸元の布を手繰り寄せながら思う。

……ふらふらと、小一時間ばかり歩いただろうか。

葉を全て散らしてしまった木々が行く手にそびえている。無音の森の中を、彼が踏み行く音だけがぼんやり響いていった。ざくざくと、弱々しい陽光に照らされた雪は柔らかく、重い。

「けほ」

空咳をした彼は、頭を上げて何かを探すように左右を見渡した。

立ち止まって鼻をひくつかせていた命が急に、右手に向かって歩き出した。雪の音が少しだけ速くなる。確かめ直すように何度か臭いを嗅いでいたが、足取りに不安はない。

木と木の間隔が狭まってくる。木々の間を縫うように進んでいった。

やがて。

雪に半ば埋もれるように倒れている少女の前で、命が足を止める。色の無い、透き通った黒い眼差しで、少女を見下ろした。

臭いはなかった。寒さに鼻がおかしくなった事以上に、降り積もった雪が吸い取ってしまったのだろう。

少女の、肩の骨が見えるほどに深く切り裂かれた傷から流れる血も、彼女の周囲の雪を僅かに赤く染めるだけだった。身動きもしない。雪は、その生命さえも徐々に吸い出しているのだ。

——放っておけば死ぬだろう。

何の感慨もなく彼が思った。素っ気無く、ただありのままに述べただけであり、これからどうしようかと迷ったが故の単なる事実の反芻である。

濃厚な、重い水のような死の気配に包まれ、今にも立ち消えんばかりのか細い命の香り。

元々、彼は血の臭いに惹かれて足を運んだだけである。近寄った時に初めて生きた者の鼓動を気配として感じ、野犬に食われていなければ御の字（食える量が増えるため）程度にしか考えていなかった。その点では彼も獣の大した差はない。彼もまた肉を食らいに足を運んだだけなのだが、まだ生きているとなれば少し勝手が違う。こう見えて、まだ、生きたものをそのまま食った事はないのだ。

どうするか。

空咳をする。側にしゃがみ込み、うつ伏せのそれを起こす。淡く黄色がかった着物を腰の位置で一纏めになっている荒縄。その下の冷え切った体は固く強張っていて、まるで血が通っていないようだった。

やや暗い、地味な色合いの茶色い髪と、紫に変色した唇が目につく。

しかし彼は特にそれらには気を配らず、傷の真下の雪をつまむと自分の口の中へ放り込んだ。舌の上で転がすようにして溶かし切ると、ややあつて満足そうに頷く。己の手の甲を爪で浅く裂くと、薄っすら滲んだ血を少女の乾ききった唇に垂らした。

反応は劇的だった。見る間に傷が内側から盛り上がった肉で埋められ、後には傷一つない白い肩が露になっていた。彼は不愉快そうに眉を寄せる。

「けほ」

しばらく迷っていたが、少女を持ち上げて小脇に抱えると、先ほどつけた自分の足跡を辿り始めた。

途中呻き声のようなものが零れるが、目覚める気配はない。彼が、少女の傷だらけの肢体を見下ろして、それらが徐々に癒えていく様

子を目の当たりにしつつも歩いていく。そこに、労わりだとか、憐憫という感情は浮かばない。

漠然とした日の光が、だんだんと遮られていく。一層暗くなった森の中で、彼が頭上を仰ぎ見た。

薄曇。そして、雪がちらつき始めた。

命が歩く足を速め、やがて走り出した。

大伽藍及び腰蹴り（後書き）

主人公は自分専用のメガザルの腕輪を装備してます。
ただしコストパフォーマンスは酷い。

【次の話の展開のアンケート】

「手を突っ込むなら？」

一、扇風機

二、血が付着してる宝箱

- ・感想に一番か二番を書いてください
- ・次の話の展開を見事予想した方がいたら無条件で採用
- ・いない場合一番でいきます
- ・期間は今月一杯でお願いします

あくまでお気楽にお答えください。最後の彼女の生死が変わるだけです。

（アンケートは終了しました。ご協力ありがとうございました）

妖怪不変（前書き）

「本当に覚悟しているのなら言えないはずさ」

妖怪不変

しゅうしゅうと水が沸き立つような音がする。

食欲の権化たる彼が数度行きつ戻りつして探した場所は、洞窟と呼ぶにはあまりにも小さい、山肌が二メートルほどぼっかり抉れた岩のうろだった。ちらちらと視界の中を舞う雪に埋もれ、他との見分けがつきづらい。メイが少女を背中に背負い直し、一二歩穴へに入る。当たり前のように雪はうず高く積もり、外と大差ないが、気にした風もなく裸足で岩の壁を蹴りつけた。

一瞬で、奥へと続く穴ができた。

彼が、一応背中の少女にも気を遣いながら、屈んで新たに開けた穴をくぐった。能力で食い破った穴は腰の辺りまでの高さしかなかったが、その向こう側には普通に立てるだけの空間が広がっていた。メイがそのまま能力で即席の洞窟を『食い』広げていき、やがて不気味なほど表面が滑らかな岩屋が出来上がった。

メイが少女を適当に下ろし、持っていた下駄も隅に放る。肩や髪などの雪を払い除けながら、伏したまましゅうしゅうと音をたてる少女をまじまじと見つめた。

仰向けに倒れた少女からは、湯気が立ち昇っている。

岩屋の中までは光も射さず、外が雪模様とはいえほとんど真夜中に近い暗さだった。

その中で少女は薄く発光している。桜のような淡い桃色。臃げに照らされる、座り込んだメイがぼそつと呻く。

「——寒い」

やがて、外からびゅうびゅうと風の音が聞こえ始めた。雪こそないが、洞窟の中にも吹雪の冷は容赦なく入り込む。

メイは先と大差なく、足を組んで座り込んでいる。吐く度に、息が、白く濁る。少女も変わらず、目を覚ます気配はない。だが、先ほどは持て余していたがゆえに漏れていた妖気——熱と、光を放たず、それを己へと向けていた。傷もほぼ癒え、ばかりか指には鳥類の鉤爪が伸びている。

若くて甘い妖気が岩屋の中を満たしていく。メイは、ぼんやり、己の血がここまで妖怪にとって都合がいいものであるのか、と思う。

——この少女は妖怪だった。

だからどうした、とも思っていたが。

メイが彼女の血から理解したのは、妖怪の血が強く出たあいのこであるという事だけ。久々に食った同属の味は、文字通り血生臭いはずの血液を格別の味へと変えていた。駆り立てられた欲求を、少女の妖気がくすぐる。

彼が自制のためか、わざとらしいあくびをし、そこでようやくこの少女をどうしようかと考え始めた。彼ならばこのまま数十年数百年と冬眠もできる。だが、ごく若い妖怪に過ぎない少女はそうもいかなない。

——食うか死ぬか。

眩きを、聞きとがめる者はいない。

つつ、と頭が下がる。彼がまどろみ始めた。寒さと飢餓の中で見る夢はきつといいものに違いない。確信めいた思いを抱くが、頭の隅では、実際にはまたいつもの夢を見るのだろうな、と半ば諦めていた。闇に包まれ、進めない坂と水とに浸された中、ただひたすらそこにある夢を。そして、夢にすら飢えはついてくる。満たされる事などあり得るのだろうか。

彼自身が、“飢え”なのだ。

——夢も現も地続きだ。

しかし、今回は違った。

見覚えのある顔が笑う。縁取る金髪が首の動きに合わせて揺れ、につこり微笑んだ彼女の右手が胸に触れ、心臓を潰す。

——心臓？

につこり微笑んだ彼女の右手が胸に触れ、心臓を潰す。闇が、黒が、寄り集まって形を成し馬鹿みたいに空いた胸の穴を塞ぐ。黒い心臓^{メイ}が出来上がる。少女が微笑んだ。

——少女？

少女が、微笑んだ。

手を伸ばす気も起きずに、ゆっくり、死の淵に沈んでいく。

最早誰もいない。……飢えと、暗闇だけ。

「あああああああッ！」

突如間近で叫ばれ、メイが気づいた時には頭に酷い鈍痛が走った。後頭部を地面に打ち付けていた。胸倉を掴まれ、飛び掛かられたのだった。

彼の意識は急な現実感に馴染めず、空っ滑りする。叫ばれた言葉も不明瞭だ。

「……………ッ！」

鎖骨の辺りから顎まで、血が飛び散った感覚。やはり擦り切れてい、と彼が思う。

霞んだ視界が徐々にあからさまになっていき、同時に、痛みもやや戻ってくる。

薄い、吐き気を催すような血の臭いがした。

馬乗りになった少女の前髪が一束だけ白くなっている。メイの喉を潰す十の指には猛禽の爪。それら全てが“みちり”と気管を裂いた。

「こっ……ひゅ。ひゅ、ひい」

半眼のまま、唇から血が伝う。肺に血が入り、それを吐き出す為に咳き込む事すら出来ない状況。胸の奥が膨れ上がるような感覚を、ほとんど物理的に感じた。

喉から命が零れる。薄い、血の臭い。

激情にわなないた少女が、凄まじい殺意を湛えた目を向けていた。

苦し紛れの抵抗のような緩慢な動きでメイの腕が上がる。振りかざされたそのろくな力の籠っていない腕を跳ね除けて、少女が、右の五指をぎゅっとたわめる。

尖鋭な凶器が、メイの心臓に突き立てられた。

「あつ？」

今度は反対に、メイの首に食い込んだままの左手と右腕とが、一瞬で『食われ』た。少女の肘から先が消え、断面からは鮮血が迸った。理解できない少女が腕をやたらめったら振り回すが、その顔がぐいと仰け反る。

メイが、下から少女の首を掴んで、右手を握り締める。発作的に、怒りから、少女の腹を「ドン」と殴りつけた。

瞳から光が失われる。

腹部から引き抜いた拳は肉を圧壊し、血が吹き出た。メイが手を離すと、少女の体は力なく横に倒れた。

メイが、数回咳をした。

飢えているくせに時間の大部分を逃避でやり過ごす、食わぬ動かぬ襲わぬがゆえの弊害だった。

繰り返す空咳はいつの間にか途切れなく喉から出て、えずくように四つん這いになった。血痰を吐くぐらい激しく咳き込んでいるが、替わりに漏れるのは粘り気のある唾液。唇の端から糸を引き、垂れた岩肌を軽く泡立たせる。

何かを求めるように手を伸ばし、闇雲に伸ばされた指が丁度腰で結ばれた荒縄に触れた。

少女を、周りの岩と伸ばした手ごと食う。

まだ新鮮な死骸を半ば当然のように能力が反芻する。彼の中の『飢え』という虚無に放り込まれた肉からは魂以外の全てが浮かび上がってくる。

彼は、憎悪という感情を足掛かりにざっと記憶を洗い出した。

——幼少の頃から辺りには人間が普通に存在している。小さい頃は、女の子にしては腕自慢の腕白として育ってきたらしい。喧嘩、

下り物、幼い精神が理不尽だと思つ種々の出来事。

——骨まで達する大怪我を一度負つたらしい。治りの早さに、成年者は奇異なものを見る目を向けていたようだ。

左手の親指と人差し指の腹を擦り合わせる、彼の中で『少女』が四方から食われ、散り散りになつていく。手遅れにならぬ内にと、さらに深く、深く吟味する。

——最も根深い記憶。日が落ちて月が昇る刻限……とうとう、眠つていた血統の業が顕になつたらしい。髪と同じ胡桃色の翼が母親に見咎められたのか。眠っていて、自身の異形にも気づいていない娘を妖怪として見なした。年の頃十四と三十日前後である。村を叩き出されはしたが、気味悪がつた村人はあまり手を出さなかったらしい。とはいつても、残つた家族は当然村八分だ。

はあと一つ溜め息をついて、メイが額に手をあてる。そこまで辿れば前後の推察で残りは埋まる。食つた分は当座の存在維持に当て、怪我には自前の妖気を回す。じくじくと傷が痛み、心臓の方に集めた妖気の大部分を奪われ、結局総合的にはますます飢える結果となった。

人間——特にそれを生きたまま『食べ』ば、十や二十も食べば、当分安泰ではある。気が乗らないのは己が人間であるからだ。

彼が岩屋の隅で小さくなりながら、とりあえず、次に起きたら人里を探そうと心に決めた。

妖怪不変（後書き）

・タイトル以外嘘っぱちの次回予告

ある日ぶらぶらと森を歩いていたメイ。しかし突如辺り一帯が暗闇に包まれる。この世にも竜王が出たのかと若干期待したメイだったが、普通にルーミアが沸いて出た。

「出た、陰日向っぱいイメージ皆無の妖怪」「なのかー」

「とりあえず心臓返してくんね?」「いいよ」

ルーミアのよだれでべとべとのまま返され、けっこう！ 僕の心臓は妖怪のヨダレでべとべとだア！ と言いたいメイはぐつと堪える。なぜなら、能力も返してもらわなくてはならなかったからだ。

しかしそこに月から超弩級の砲撃が仕掛けられる。二人が普通に死を覚悟するレベルだった。心当たりがないようであるメイだったが、今更月に戻るわけにもいかない。というか近づけそうにもない。

「オレ……諏訪編が終わったら竹取物語だと思っていたのに、でかいイベントが二つもあつたんだ……」

「そーなの……えっ?」

（注）次にルーミアが直接出るのは竹取編の後です。

「世界の半分をやるから私を出せえええ!」

「いや、ちょ、ゆかりんでるから」

（主人公がルーミアにくれてやろつとするリボンは回り回って慧音のところへ）

次回「大袈裟な二拝二拍手一拝」

更新日未定。

大袈裟な二拝一拍手一拝（前書き）

「忘れ去られる事に安堵しているのかい？」

大袈裟な二拝二拍手一拝

——久しぶりに起きた途端、これだ。

人の感情は愛か憎悪しかありえない、などと豪語するらしい。する者もいるらしい。

あえて反論もせずに唯々諾々とするならば、オレは食欲の妖怪として、愛情も憎しみも、湧き上がる衝動を何かに向けるだけのものでしかないと定義し理由付ける。

愛し感情を相手にぶつける。

憎み感情を相手に投げつける。

自己愛が感情を自分に向けるなら、自己嫌悪は感情を自分に向けるのだ。

つまり——『衝動』と『嗜好性』。

「自分を嫌悪しようがそれは本質的にただの慰めに近い」

呟きながら、頬を引っ張るに近い事をする。

（ヒント、引っ張るは引っ叩くに語感が似てる）

眼前に、蠱惑的なエサが、二羽。

厚い雲に覆われた、気が滅入るような空模様だった。緑色に繁る森のどこから、甲高い声で鳴きながら鳥達が飛び立った。オレは生い茂った下草を掻き分けながら、酸素を求めて乱れる呼気を騙し騙し走っている。

月から奇跡の生還を遂げたいのち大事にする大妖怪こと、ワタクシめ命は今まさに、羽の生えた食料を追い駆けている——いや、追

い駆けていた、だった。

昔を思い出すに、今のオレは大分弱っている。獲物に飛んで逃げられるなど、かつて無限の妖気とスタンドパワーを誇っていた頃には無縁だったのに。

つい十分ほど前、川原でちゅんちゅん騒いでいた見た目は幼女の鳥妖怪二羽を見つけるが早いか飛び掛り、喰いもしない内からその生気に満ちた存在を『喰らう』だけでどれほど飢えが慰められるかと考えていた時が華。忍び寄ったはずが二羽にはあっさりとばれ、そのせいで無意味な上に疲れる逃走劇に時間を費やす破目になってしまったわけだ。

何せ地上に降りてから一度も使ってこなかったものだから『意識の焦点を操る程度の能力』の扱い方を忘れてしまったのかと思いきり、再度念入りに自身を隠匿するが、まるでオレを視認出来ているかのような反応に変わりはなかった。——臭いか？ 内心に問いかけてみるが、芳しい答えは返ってこない。

ええい、あれらを喰ってしまえば理由なんて明白なんだが。

「おい木っ端共！ 待てオイ。別に何もしないから！ 殺すだけだから！ サツと殺してすぐ喰うから！」

怒声というか、単なる掛け声に近い。——しかし、最近の妖怪は飛べるのか。前方にだんだんと小さくなっていく二羽も、種族としては鳥なのだろうから別に飛んだっておかしくはないが……。

あきらめて足を止め、逃げられた方向を未練がましく見続けながらも、釈然としないものを感じた。

以前にも鳥妖は喰ったのだから、オレが飛べたっていいはずだ。もしかするとその鳥妖が飛べない鳥だったというだけなのかもしれないが、最早喰ってしまい消化も終えている為確かめるすべは皆無だ。

どちらにしろ、不可能とまではいくまい。あの二羽だって翼ではなく妖気で飛んでいたようだったし。

もちろん一番手っ取り早いのは“飛べる”能力持ちを喰う事なん

ただどさあ。

「この……ね、もうね、全身が食べる態勢に入ってたわけなのに裏切られた感覚。どうしよう、どうしてくれよう」

仮にも人間の姿をしたものを殺す倫理観がどうのこうのという御託はいらない。世界の真実はこの抱えた食欲と心臓の鼓動だけだ。

どうしてくれよう。

しつこく妖気を追いかけて巣を襲うか、とか雑多な思考をめぐらしながら、ぼんやりと空を見上げた。先よりも一層重く灰色を晒す雲、雲、雲。

ラジオの音量を下げたように、一呼吸置く間に肌に触れる空気が質を変えた。これは、と思った時には、顔に二粒の滴りを感じた。ぽつ、ぽつ、と続々雨が落ち、押さえていたものが一気に噴出したような豪雨となった。

瞬く間に全身が濡れそぼち、鼻が雨の匂いを嗅ぐ。

……雨の神様つてのがいたなら喰う。喰おうと決めた。

しかるに睡眠が必要だ。不愉快な雨を凌げる場所で、少なくとも雨気が消えるまでは眠る事が——まあ、逃避と言い換えてもいい——急務である。

急げ急げ。水音が鼓膜を犯す。雨垂れが地面を凌辱する。そうだ、もし次にあのガキ共を捕まえたらあの翼を引っこ抜いてやるう。目の前でわざと口で翼を咀嚼してやって、オレから逃げた事を死ぬほど後悔させながら手足を順々に潰し、飽きたら適当に殺してやるう。オレが悪いんじゃない。鳥妖ごときが大妖怪に抗った事が悪いんだ。

「温厚なオレもあれには殺意をいヤッダバアアアーツ!？」

視界がかなり悪いせいで坂に気づかず転げ落ちた。下駄すべつちった、と転ぶ寸前に軽く茶化してみたが坂というか丘に近い傾斜を体一つで落下する破目になった。口に泥水が入る汚ねえ。

坂が途中で終わってそのまま宙に投げ出される。つかの間浮遊感と回転する視界がオレを支配したが、無情にも重力はオレを固い大

地へと叩き付けた。胸骨が軋むほどの衝撃と左半身に起こる鈍痛。まさか人間が地面を弾む日が来るとは思わなんだ。

「いつ……はっ」

苦痛に片目が歪む。

肺が痛んで呼吸がままならない。まだ動く右手を突いて体を浮かし、幾らかでも痛みを和らげるように、ゆっくりと息を吐く、吸う、吸う、吐いた。

……妖気を治癒に充てるより、肺を『喰って』作り直した方が早いだろうか？

少しずつ呼吸が楽になってきた……が、体はまだ痛み悲鳴を上げている。効率を度外視して、数年は寝ていられるだけの妖気を痛覚遮断と治療に回した。心臓の辺りから滲み出すように、妖気は一度渦巻いたあと体全体に回っていった。

体を打ち付ける雨の感覚が戻ってきた。そして、オレを睨む視線に気づく。

顔を上げると、数メートル先に岩の割れ目のような穴があり、その奥で狐が尾を逆立ててオレを威嚇していた。目を凝らすと、その母狐は数匹の子供を庇っている事もわかる。

「……………む」

意識できるわけないのだが、オレから目を逸らさない。またか、と思った。『意識の焦点を操る程度の能力』が効いているのかいなのか、牙を剥き出して、オレを睨んでくる。小癩にもちよつとした妖気を纏っていやがるし。

精神活動の程度によって能力の効きづらさがあるのか——それとも、母は強し、ということか。

寄生虫とかが生理的に怖いから別に食べないよ、と言い捨てて、半ば強引にあくびをしてみせた。

「……………最初に食べたという狐の影響か」

痛みが退かない。とにかく、限界だった。

雨ざらしの中で、せめてもと体を丸める。半年も寝ていれば痛み

は消えているはずだ。

まぶたの裏側の宵闇に意識を蹂躪される中、肉の体もそろそろ限界か、と一瞬思った。

「——ぬ？」

そら恐ろしい。

それほど長く眠るつもりはなかったのに、体中をツタが這っていた。能力は発動しなかったのだろうか。近寄るのが血を流すものであれば意志に関係なく出てくるが、浅ましくせに融通の利かない能力にうんざりしつつも、バリバリと太く長く成長していたツタを力任せに引き千切る。

樹齢数百年は優に超えるであろう巨木の、地面から突き出す苔むした根。

むしろこんな場所で寝ていれば、ツタどころか耳から這入った力ビが脳ミソで繁殖していてもおかしくなさそうだ。何やら人を腰掛けさせる魔力を発していた、そういう事にしておこう。

よっこらせ、と大仰に言いながら立ち上がり、階段状になった根を一步一步降りていく。辺りには似たような規模の樹木と、根と、苔と、そういったものらで構成されていて、気分はまるでジブリ作品の中に迷い込んだみたいだ。シシ神様出てきたらどうしよう、一口で喰い切れるかしらん。

四肢の延長のように馴染むこの下駄でも、人間が歩きやすいよう整備された道もない、薄暗いからといって生い茂った木を間引く者もない森中を歩くには不向きだった。何度も、下駄の一本歯が根に生えた苔を剥がす。

漠然とした意識のままに歩いていると、そびえる幹に額をぶつけ

た。軽く小突かれる程度の衝撃。しかし痛い、ろくにバランスも保てず後ろ向きに倒れてしまう痛い。

「あう……」

引っくり返ると、分厚く張られた枝の隙間から僅かに垣間見える空があった。小さな点のようで、しかし目に鮮烈な青を撒き散らすそれは、この中から見上げるには酷く不釣り合いで。

空の青さを否定するほどの、深緑と暗がりの闇の色。

どうやら、覚えている以上に森の奥深くまで入り込んでいたみたいだった。

——どうしたもんかね。

「……寝る前に見た、あの人里に寄ってみるか」

意図せず口をついた案は、わりと良案に思えた。

足の震えを無理矢理抑えつけて立ち上がり、人の気配がするような所へ歩き出した。

「余はお腹が空いていますでおじやるぞえ。豪勢な和食を振舞うがよいぞー」

豪勢なら、洋食でも中華でも許容する寛大さも持ち合わせておりますゆえに。

「中華だけ何故かしらに食の字が入っていないのかしらん……あー、頭回りません事よ」

アチュチュチュチュチュ。アチュ、チュ？

四六時中想ってるのですよ。べろべろべろべ。

……村に着いたらどうしよう。真っ正直に頼み込んで、果たして許してくれるだろうか。

もちろん、手厚い歓迎なんて期待してはいけない。妖怪がうるちよろする時代で、徒党を組んでいるでもなく退魔を行うでもない手合いはそれすべからく妖怪なのだ。オレに関しちや間違った認識じゃないから強く言えない。……でもさあ、もうちょっとこう、同じ人間同士信じあう心つてもんが、ねえ？

基本的に往来という行為は確立されておらず、おまけに外から絶

えず脅威が襲い来るとなれば、自然と集団は閉鎖的になる。つまり交易で美味しい目を見るにはまだ早い。まだまだ物々交換しかないような時代ですし。

ただ、そこらの妖怪に聞いた話、その村“ミシャグジ”とかいう名の神が信仰されているらしくてねえ。

どこぞで聞いた事があるその神に、多少興味がないといえは嘘になる。

——だってお前、祟り神つつーんだぜ。

どんな味か好奇心を刺激されないようでは、生きている価値がないに等しいだろう？

結局、見つけるまでに一昼夜掛かった。

人間でも妖怪でもない、薄い神の気配を辿りながら森を突っ切ると、山間にひっそりと佇むような村を遠めに見る。山と山との間、周囲から押し退けられるような場所に、それはあった。

薄い、神の臭い。——なのに、近づいているにも関わらず、まったく濃くない。

人の臭いがしない。

「いやあ、さすがのオレもこれは予想外……」

やがて、建物の目視が可能な場所まで来ると、道なりに縄のようなものが垂らされている。木石と、その縄自体からオレの進入を拒むような力を感じたが、妖怪ではない証拠に今持っているだけの妖気を喰い尽くすと、圧する力が弱まった。拍子抜けするほど緩い警備体制を心の中で嘲り、道を遮る縄を意に介さずに引き千切って村へと入る。

オレですら鼻で笑う程度の簡素な家々。覗き込んだそれらの中に、あるいは道端に、綺麗に形を保った白骨が横たわっていた。

井戸のようなものはなく、溜められていた水は大半が腐っている。ただ干し肉はいけそうだったので、ありがたく頂戴した。能力のせいで食中毒とも寄生虫とも縁がないが、気分的な問題だ。

一通り村を見回すと、次に情報源を捜し求めた。いくらオレとて、そこらの白骨喰ったところでどうにもならん。犬でも猫でも探して——喰おか。そんな感じた。

さほど掛からずに、村を囲う柵の隅に寝そべる一匹の猫を捕まえた。

なあ、と鳴く。何がなあじゃいと喉元を両手で締め上げると喚くわめよりも先に”ボキッ”という感触が伝わって、一拍遅れて尾が跳ね上がる。

その尾が再び垂れる前にはもう、事切れていた。

首の皮を掴んで、目の前に自分の『口』がぽっかりと開いているイメージを持つ。そこにすつ、と猫を落として——喰う。

………にゃあ。

猫じゃあ多少不安だったが、おおそはわかった。後、こいつはただの野良だという事もわかった。

——「流行り病」である。

だが、村の光景を見れば全滅は容易に想像できるが、あの白骨共はどういう事なのだろうか。死体が皆腐って骨から綺麗に剥がれ落ちる前に、臭いを嗅ぎつけた獣がやってくるだろうに。

——村に入る際の力を見るに、信仰するべき人間を失った後もどうやら、あの神とやらは随分頑張ったらしい。祟り神だって元は伝染病だろうに、それで信者を失うとは少々滑稽でもある。

村から少し行った所の、縄で封印されていたあれが祠か。

目指す神とやらの場所を見定め、おもむろに地面へ唾を吐いた。混じった猫の毛。

今の猫は幸せだったのだろうか。思いながら、木壁の影に置かれていた壺を蹴っ飛ばすと、濁った水と共に羽虫が大量に飛び出した。

——全滅した村の守り神。それなら、場所を変えればいいのに。

それとも、神が移動したなら祟り神になるんだろうか。

祠までの、さして険しくも遠くもない道のりを、悠々踏み行く。

言い方は格好良いが、なぜだか妙に足が重い。まる三日徹夜した体

調のときのように、体全体に圧し掛かるような気だるさがあった。
村を出て、祠までのたかだか数メートルの小道。

突然、目の前の地面から“ぬう”と白っぽい影が伸び上がって、
行く手を塞ぎだした。半透明で、地面から直接浮かび上がっている。
何より、薄い神の臭いを纏っていた。

象る形は——蛇か。

「世界の敵の敵っ」

先んじて害するために殴りかかった。振り上げた右腕は変わらず
重い。しかし、放った裏拳が丁度蛇の顎の辺りを吹っ飛ばした。

少しの間様子を窺っていたが、残った胴はぶるぶると震えたかと思
うと徐々に徐々に薄くなっていた。多少体が軽くなっている事
に気づく。

「門番……なのか？ ……なのかー？」

呆気ない幕切れに言葉を失ったが、信仰が尽きた神はこんなもの
なんだろう、と納得する。格闘技ぐらいはこなせないと門番とは呼
べないのだよ。

さて。

「……ん？」

今、消えたはずの蛇の臭いが突如湧いた。ほんの数歩先の、古び
た祠の中に。

御神体のようなものに宿る類のやつだったらしい。神の在り方な
んてわからない。

「……………“落とした小指——心に突き刺した”」

あー……………鳥の小娘を喰ってからこっち、あたら感傷的になっ
てていけない。

——オレは人間だと、いくら力説しても物事を脳でしか考えられ
ない輩は勝手ぼざいて妖しモノであると決め付けてくるばかりか敵
意でもって殺しにかかってくる。『これ』は必要悪だというのに人
妖問わず、同属喰いであるとして害してくるなら、オレも飢えを満
たすのにやぶさかではない……………んだが。

しかしどうだ、これは――。

足が止まっていた。白昼夢のような、茫^{ぼうつ}として取り留めのなく流れる思考。

――これが祟りだというのなら、畏れや敬いよりもまず怒りが込み上げてくる。生殺与奪の権を握られて、殺意に至らない方がどうかしている。

からからと下駄の音を響かせて歩いて。祠の戸は片側がだらしく開いていて、この場所の、どうしようもなさというやつを現しているようだった。

長い間使われなかった代償か、どこかが引つ掛かっているようで、強情に開く事を拒否する戸の隙間に身を滑り込ませる。

祠の造り、それ自体は御神体を囲うように木板を張っただけの、至極簡素なものだった。地面には埃の積もったいくつかの捧げ物。

そして、この狭い神域の中央に座する石。神宿る石。

それほど大きなものではなかった。膝をついて屈んだオレの目線よりまだ下、人の頭程度の大きさで、やや青白っぽい事を除けば、ありふれた単なる石にしか見えなかった。

背後の戸から差す陽光はオレ自身が遮っている。薄暗い祠の中で、石が僅かに光を放っているようにも見える。

『……………』

「いいい……」

石を見つめていると、いきなり頭の中にぐわんと音のような何かが入り込んだ。

『……………』

何かの視線を感じる。確かに気配は感じるのだが、目には何も見えない。

断続的に雑音が割り込んでくる。胸の奥から妖気を強引に汲み上げ祠を満たしても、中々静かにならないばかりか軋んで可聴域の限界すれをどんどんどんどん駆け上がる不協和音。

声のようではあるが一向に意味の取れない音に業を煮やして、目

の前の石を一息に『喰った』。

途端、オレの中が嘘のように静まり返る。

石は、そのほとんどが神の依り代であつたようで、猫の額ほどの情報しか理解できない。本当に神だつたんだろつかと疑いたくなるほど、自我というものが希薄で、さしあたって有益そうなものは一つしかなかった。

「……大社とな」

ミシャグジの統括たる神が在るらしい。広大な王国を築いていて、人々は畏れ敬い信仰を捧げる。そんな、強大で、かつ上質な神が。

「……んん」

知らず生唾が込み上げてきた。

あれを探すついでに御目通り願おうか、少し迷う。どうもその場所はずいぶん遠い。

手慰みのように、供えられていた壺を持ち上げた。首がやや細くなつていて、白い米酒が多少残っている。

「……崇り神、ねえ……」

御神酒を零す。ゆっくりと——地面に。

腐敗した臭いと、ボウフラのような蟲が静かに広がっていった。

大袈裟な二拝二拍手一拝（後書き）

諏訪編突入。次話で彼女に会え……はしないかな。

妖怪とその外側（前書き）

「中々意識されないが、弱いという事は罪なのさ」

妖怪とその外側

月がその欠けた体を晒ながら、夜空に浮かんでいる。

輝く夜だった。真夏の気温と湿度がじつとりと着物に纏わりつくせいで、例え妖怪といえどもとても快適とはいえないが、それでもその山の中にいる者たちにとっては良き夜だった。

「なんだアありや……」

「アホ。見りやわかんだろ？」

闇の中にひしめいているのは、総勢六体もの妖怪たちだった。囁き合う。

「決まってるじゃねえか、なあ」

「殺してくれつつってるようなもんだぜ」

各々が見つめているのは、山の向かいに位置している峰。妖怪は闇の中でも夜目がきくとはいえ、山一つ向こうはさすがに距離があるが、かすかに感じられる気配と、なにより先ほどから行っているその“行為”がそこにいる者を大っぴらに示していた。

「カアアグヤアアア！」

“……かああぐやあああ！”

そう、人間がたった一人で、妖怪の刻限に山へとこのこやってきたばかりか、事も有るうに大声で騒ぎ立てているのだ。どこぞの幽谷響が律儀に返す事に気をよくしたのか、「ヤホ！」などと叫ぶに飽き足らず、罵倒謙遜謝罪、拳句の果てに早口言葉にも挑んでいる始末。

自然現象とは違い、妖怪山彦は言葉が終わるのを待ってくれる事も、気をよくさせた一因かもしれない。

「助けてエーリン！」

“……助けてえーりん！”

ほとんど直接的に近い自殺だった。救いようがない。そのうち歌でも歌いだしそうな気配すらあった。

彼我の間には深谷が口を開けているが、情報収集系の能力持ちがいるため、それが人間である事は疑いようがなかった。同時に、極々微量の神気も感じられたが、薄過ぎて不安に思う事も難しい。力ない神の加護だとか、その程度だろう。

この妖怪らは、つい先日とある村の祀り神の力が消えたため、その庇護下にあつた人間の肉を求めてハイエナのように群がつてきたのだった。神を退かしたものが何であれ、力の強い妖怪は気の向くままに食い散らかしていく傾向があるのだから、最悪でもおこぼれにはあずかれる、と踏んでいた。それに、まずない話だが、もし人間の方が神を見捨て信仰をやめたのなら——想像しただけで、種としての欲求が“ぶるぶる”と奮えるのを全員が感じていた。多少道草を食つても、その村へは今夜中に辿り着ける。ならば……。

銘々の口元が残忍な形に歪む。人に近く、しかし半端にしかその形を宿していないせいで、酷く異質なものに見えた。

そのうちの、唯一空を飛べる妖怪が腕を広げた。その両腕には羽があり、翼ともなる。

「んじゃ、おめえらはゆつくりと来いや。先行つてるからよ」

その鳥妖は人の顔に無理矢理猛禽のパーツを取り付けたとでもいうような、奇怪なものだった。耳はなく、瞳に瞳孔はなく、黒いくちばしがとりわけ目を引いた。軽く飛び上がり周囲の木の本に上る。枝の上から谷底めがけて虚空へ躍り出て、途中羽ばたいて垂直に落下する軌道を修正、射られた矢のように真っ直ぐ人間のもとへ

飛び去ってしまった。

「クソ、あの野郎」

「ナメた真似してくれやがったな」

犬が強引に二本の足で立っているような妖怪が二体。

炭のように真っ黒い妖怪と、虫を思わせる触角に複眼を備えたものの、茶色い毛が顔といわず全身に生えた狸。

先んじた一体に遅れじと、残る五体がいつせいに夜の中へ走り出した。

『妖怪』の右側を虫妖と狸が疾駆していた。四つん這いに戻った犬らがやや前を先行している。虫の声が騒々しく響く中、草を蹴散らして五体が猛然と駆け出していく。音に気を払う必要はない。鳥が先に殺しているはずだから、今はただひたすらに速く辿り着いて取り分を多く確保する必要があった。

『妖怪』が頭の中で、いかに自分がより多くあの人間をせしめられるかと画策しているように、この妖怪たちの間に連帯感とか仲間意識というものはまったくなかった。それぞれでは他の力ある妖怪と渡り合い、縄張りを獲られもしないばかりか、多少修行を積んだ人間にも苦戦させられる程度であるため、半ば厭々手を組んでいるだけ。この内の誰かが抜き出した力を手にしたら、あるいは得るためならば平然と他の五体を裏切るだろうし、『妖怪』自身もそうするからだ。

特に『妖怪』は、この中で二体しかない能力持ちであるため、よりその意識が強かった。精々が中級妖怪止まりの奴らとは話が違う、力さえ手に入れば、こいつらなんて邪魔でしかない、と。

あの人間に大した力は感じなかったが、食うまではわからない。鳥だけが力をつけるような事になってはならない。

突然、犬のどっちだかわからない「キャイン！」という悲鳴が聞こえた。

さすがに四足のものほど速くは走られない『妖怪』ら三体は、走

りながら顔を見合せて、

「どうした、アイツら、とうとう肉と自分の手の区別もつかなかったのか？」

と狸が言っつて、虫妖も馬鹿にするようなニヤニヤとした笑みを浮かべている。

(……………ああ?)

しかし、『妖怪』は何故か頭のどこかで警鐘が鳴るのを感じた。漠然とした違和感——だが、それが一体何に起因するものなのかわからない。杞憂と言いつ切るには、やや——。

『妖怪』は他とは違い一人一種族だったが、それとは違う別の部分で五体との隔たりを感じていたし、その思考は自然他への見下すような姿勢に繋がっていたから、走る速度を少し緩めて二体を先に行かせた。魅力的な未来に思いを馳せれば馳せるほど、どうにも雑魚と同じ考え方を持つ事が我慢ならない。『妖怪』にはただ保険程度、つまりはただのちよつとした意識だった。

今は地力でこそ他の雑多な妖怪にも劣っているが、鳥の探知能力とは違い、『妖怪』の能力は純然たる戦闘用のもの。強大な能力持ちの常であると聞く、人間に例えられるこの“柔らかい時期”さえ生き延びられれば、晴れて好きなだけ人間を襲う事が許される大妖怪だ。

——『妖怪』は特別おごっていたわけではない。

中途半端な力しかない今は能力持ちを危険視する強者に狙われるため、ひた隠して雑魚どもと組んでいた方が安全であるし、どんな事になろうとも他を囫にして逃げられるだろうと踏んでいた。それはおおむね正しいがしかし、このときばかりはまずそもそも前提条件を誤解していたのだった。

「遅いぜ君たち。これがスタンドバトルだったら今頃ジョースター一行は全滅してるな」

軽快な口調で、何故か、酷く耳障りな声だった。木々の間を抜けると急に開けた場所へ出て、月の光が落ちるその場所に、至極当然という顔で“それ”はいた。

——『妖怪』はこのとき初めて、“大妖怪”というものを目にした事になる。

「カスみたいな能力だったよ、鳥クン」

氷塊を飛ばすぐらいはしなくちゃ——と、木の切り株に腰掛ける人間は、その周囲に散らばる羽を見下ろして、退屈さを隠そうともせずと言った。

「ああ。犬はよくわからなかったな。いきなり飛び掛ってくるもんだからつい殺しちゃったけど、能力なしにしては強かったのかな？

蛇は鳴くと仲間を呼ぶつーが」

淡々と、平坦な口ぶりです。事実そいつにとってはどうでもいい事なのだろう。色のない表情。犬の前足を下駄の歯でもって転がしていたが、不意に力を入れて踏みしめるとその前足が掻き消えた。踏み潰されたのではなく、まるで一息で丸飲みにされたかのように消え失せたのだ。少なくとも、『妖怪』にはそうとしか思えなかった。

『妖怪』が二体に先んじらせた差は僅かに二メートルほどで、この距離があればとりあえず逃走は可能だと本気で思ってた木立を突っ切った、そういう距離だった。

ここまで近寄っても、相手から妖気は感じ取れない。辺りには薄い神気と六体分の妖気。だが、多少の鳥と犬らの気配が、あの人間から——と考えて、『妖怪』は愕然とした。

こいつは、この妖怪は『食った』のだ。同じ妖怪を、何の躊躇いもなく。殺し合いはすれど、まさか同族を食う輩が——。

そんな最悪の相手が目の前にいるのだ。高々二メートルの差が何だというのだ、犬の悲鳴を聞いた時点が、逃走に移ってもギリギリ逃げ延びられるかどうかの瀬戸際だったのだ。自分の保険とやらが滑稽に過ぎて、引き攣った笑みしか浮かばない。それでも『妖怪』は必死の逃亡を試みようとはしているのだが、足がまるで根の生え

たように動かない。既にもう、蛇に睨まれたカエルのように、精神が萎縮してしまっていた。無意味な抵抗さえ許されない、存在の格からくる圧迫。その重圧に、『妖怪』はほとんど押し潰されそうだった。

同族食いが立ち上がって、こちらに歩いてくる。

狸と虫がそれぞれ押し殺した悲鳴を口の中で上げるが、それには無頓着に、妖怪はまず狸の前に立つと、そら恐ろしい事にいきなり指を、

——ズブツ、

と狸の頭に生めた。全身が断末魔のように小刻みに震えるが、中指が少々脳を掻きまわすと静かになった。なぜ殺すのだろうか、妖怪が、力ない狸の体を支え、自分の腹へ突っ込んだ。

『妖怪』の目には腹がいきなり横に裂けて、ずらりと牙の並ぶ顎が一呼吸の間に死体を飲み込んだように見えた。

次いで、今度は虫の喉を片手で潰した。これもまた、死の痙攣が止まるのを待つてから食う——その瞬間が、見えない。全身の細胞、その一つ一つで捕喰をしてもいいのだろうか。

己の命運が眼前に見えている『妖怪』にとって、それは瑣末ではあったが。

目が合った。『妖怪』は死の予感に身を固くしたが、しかしどういう腹積もりか、妖怪が声をかける。

「国に、帰るんだな。お前にもまだ、ガイルだろう」

本当に意思疎通ができているのか不安になる。油断したところにかぶり、でもないのだから、本当に意味がわからない。

「——妖気を感じなかったからか？ オレを殺そうとしたって事は。そしてそれは、この先他の人間を殺すって事だ。あまり調子に乗るんじゃないよ」

耳元で風船の限界以上に息を吹き込まれているような、いつ襲っ

てくるかわからない恐怖。

瘦躯で、茶色の着物を着崩した、まるで人間のような妖怪。下駄を鳴らして、一步、一步、歩いてくる。

「あ、あ、あ——ああッ！」

『妖怪』の意志が脳内麻薬のような体の虚脱感をかなぐり捨て、捕食者へ向けて自身にとつての必殺である『能力』を叩き込んだ——。

『増える程度の能力』。

本体と同じ力、妖気でもって“自分”を生み出す能力である。これによって、意識さえも同じものである“自分”を増やす事が可能である。仮に力をつけて強力な妖気を——そして多数の展開が可能になれば、さぞ凄まじいものへとなっていたであろうそれが、二体、瞬時に捕食者を挟み込むように襲い掛かった。

妖怪はふむと言うだけで、その一メートルのところに入ったときにはもう、『妖怪』の分身、能力の具現が消え失せた。先ほども見た光景だが、まさか触れもせずにも方向へ使えたのか。

「——クソがッ！」

完全に死を覚悟した『妖怪』に、捕食者が咄嗟には信じられない一言を放った。つまり、

「お前は喰わない」

——である。

「なあ？ 見逃す……というか、お前みたいなカス能力いらねえよ」その代わり——と妖怪が呟き、『妖怪』の首を片手で吊るし上げた。目の高さが揃うと、『妖怪』の足は宙でもがく。

「が、あああ……」

「宵闇妖怪に会ったら言え。金髪の、闇を操るガキだ。いいか？

そいつに、“メイは戻ってきた”と伝えればいいんだ」

首を絞める捕食者に両手で抗うが、首に掛かる腕はびくともしない。

『妖怪』が腕を増やして捕食者に殴りかかる。しかし、妖怪に触

れるか触れないかというところで全て『食われ』た。

「殺しに來たアホどもの中でお前が一番人間の形に近い。そうさ、力ある者は必然人間の形をとる——だが、例えお前が年月を積んだとしてどうかなるのか？ 大して『喰って』ないからあまり理解できてないが、体一つ分のストックを作るにも数日かかる能力がなんだっつーんだ？」

「があ……あ」

不意を打って捕食者が首から手を離した。『妖怪』が支えを失い、落下する寸前で——右腕を、胸のド真ん中に捻じ込んだ。

辺り一面に血飛沫を撒き散らしながら、『妖怪』の体が檻褸切れるように吹っ飛んでいく。その途中、『妖怪』が倍ほどに膨れ上がったと思った瞬間、四肢が爆裂し、五体の『妖怪』がてんでばらばらの方向へ向かって走り出した。

一人残された捕食者は、右腕全体にべっとりついた血を鬱陶しげにぷるぷると振っている。

その場で、さて——と独り言ちる。

「Pienso que un sueño parecido
no volverá mas

（あんな夢は二度と戻ってこないだろう）」

のろのろと、元のように歩き始めた。

——東へと。

妖怪とその外側（後書き）

BGM “VOLARE” by Gipsy Kings

ありふれた嫌悪感について（前書き）

「君だけの秘密を知っているのは誰だ？」

ありふれた嫌悪感について

建物から出る、その出入り口のところ垂らされた皮を退け、外に踏み出すとやおらに辺りが明るくなっていた。見上げると空には太陽が昇り始めていて、闇夜は駆逐され隅へ隅へと追いやられていく。夜の終わりに一抹の寂しさを覚え、何とはなく俯いていた。足元から伸びるオレの影は他のと比べどこか薄いような、あるいは濃いような気がした。

背後で皮の捲られる音がした。振り返ると、木造の民家からいかにも一家の大黒柱然とした、キビキビと歩く女性が現われた。

「お早いですね、タチさん。まだ明け方ですよ」

若干おどけて、両手を横に広げて言う。しかし、彼女は豪快に肩を揺すって笑いながら、

「お天道様が出たなら働き始めないとねエ。この辺じゃどこもそうさ、メイさん」

「はあ……」

耳が痛い話である。夜更かし上等寝過ごし上等（それも年単位）のオレってば最強ね。

曖昧に笑ってごまかすオレに、相手もまた笑いながらつかつかと歩み寄ってきた。

「もう行つちまうんだらう？」

「ああ。ええ、まあ」

「それでどうだい——」

内緒話のような雰囲気でも、まったくその声量を弛めなかった。

「娘とは寝たのかい？　ン？」

「いやあ——」

村の若い衆は違ふところで寝泊りしている云々。今夜は折好く娘が空いているから云々。

正直、一晚宿を借りただけの男に娘を薦める母親に、オレは常識の隔たりを痛感せずにはいらなかった。オレの方が頭一つ分ぐらい身長が高いのだから、下から覗き込むようにして訊ねてくる彼女に、取り成すように言った。

「巡礼中は、ほら、いろいろ厳しいから」

「あら。それじゃ溜まつたりするだろう？」

「いや、まあ、どっこいどっこい」

下卑た話——というわけではない。これが時代というものなのだが、あまりにあけすけ過ぎる話ぶりに、オレもやや気圧されぎみとなる。

「そついうもんかい？」

腰に手を当てて、ふん、と息をつき、オレを上から下まで眺めるように頭が動く。

巡礼と言ったが、もちろんそんな平和な目的に終始する可能性は極低いので、あまり突っ込んでこないでくれると助かる。

諏訪の地とやらに近づいてくると、村を守護する神の力もまた当然強くなってきて、それが逆に「大丈夫！ 何もしいから！ ちよつとだけだから、先つちよだけだから！」とミシャグジだか一度言いくるめてしまえば村人に疑われる心配はいらなかった。神への信頼の裏返し、入って来れるのだから人間だろう、というわけでもちろんこつちはそれなりに痛い。ルパンが顔の変装を剥ぎ取るが如く「支払いは任せるオ！ バリバリい」と妖怪らしい部分を喰い捨ててきたのだから。そろそろ、次の村へ行く道程も妖気は出さない方がいい。ここのミシャグジに加護をかけてもらって、気配をごまかすのもいいな。

大多数の人が麻の繊維をほぐして編んだような服を着ている中、オレだけ何か上質な着物というのも神の命で各地回ってんだ！ という設定に色をつけてくれる。三つ前の村にはやたら拝んでくるばあちゃんまでいた。ごめんね、この服、髪とか爪みたいな皮膚の延長でしかないんだ。

「アタシヤ山一つ向こうの村から来たんだけどサ、どう、通った？」
「んん？ イッコ爺さんそこか？」

「そうそう！ いたねエそんな耄碌ジイさん……どうだった？」

「ありや耄碌通り越してボケてたな。——でもまあ、元気そう、ではあったかな」

無意識のうちに脇腹を撫でていた右手に気づいて、矢庭にキリキリと引き攣るような痛みが走った。

唯一オレが人間をやめたモノと看破した爺さんだ、そうそう忘れられるわけがない。高床倉庫の影から強襲されて、危うく『喰う』ところだった。その上、腹に突き立ててきた短刀が本当に力ある神器、神気の宿る物だったせいで、五日は経つはずなのに未だ傷が治らない。恥ずかしい話だがあの痛みには『キレ』たね。そりやもう、その後はあつという間に人が集まってきた、爺さん耄碌してんだ、ゆるしてけれ、と平謝りされてしまった。仕方がないから短刀だけはどさくさに紛れて喰ってやった。

おそらく、苦笑を通り越して苦々しいような顔をしているんだろう。

あくまで快活に笑って、

「そんな顔してないで。あれでも昔は妖怪相手に戦ってきたらしいんだからさア」

「ありや。顔に出てたか？ いやさ、ちよつとばかり愉快的思い出があるもんだからね」

左手の親指と人差し指の腹を擦り合せながら、笑みを交し合った。改めて辺りを見渡すと、民家から少し離れた場所で、青々とした苗が風に揺れている。よく知る水田ではなく、陸に直接植えられている。それらの間を時折半透明の蛇のようなものがゆっくりと泳いでいた。

「村の門は向こうだよ」

見越したように、指でもって指し示される。

木でできた家屋が十数件点々と続き、そのさらに向こう側、確か

に門が見える。

「そのまま東に真つ直ぐ行けばいい」

「——いや本当、お世話かけました。何ができるわけでもないんですけど、せめて気持ちだけ」

向き直り、深々と頭を下げた。意味が通じなくてもお辞儀をしまつ。これが日本人。

「ンな事いいつてば。それより、村の男衆がつい何日か前、洩矢様にご挨拶伺ったばかりだからさ、ついでによろしく言つときな」

「ああ、うん。会った時に」

ここから大体三十日前後かかる距離らしいから、オレなら片道一週間で強行できる。

最後にもう一度笑いながら礼をして、門へと歩き出した。

——そろそろ、神程度のもんでも喰わないと飢えて死にそうだ、とか思いながらも。

そもそも、神の存在意義とは何だろう。

ここで自他共に意味ではなく意義を問うのは、“生きている理由”などという世迷い言に、それこそ、意味なんてないから。

誰が望もうと誰に疎んじられようと、自分が“ここ”にいる事なんて脈打つ心臓の鼓動が証明している。

誰かに愛されていてこの痛みは消えないし、誰かに憎まれようとこの涙はいつか止まる。飢えるし、傷つくのだから、欲求を満たす事に何ら躊躇う必要もない。

ついでに言うと、オレは生まれ変わりも信じないようになってきた。月から消えた時の、あの時間の狭間での、精神の苦痛をオレは忘れたりはしない。水と闇と無音が広がるあの『場所』で数を積み

上げる作業は、オレから薄っぺらい死生観を奪い取ってしまった。
死んだらおしまいなのだ。

あの時間が無意味なものになってしまふ。死ねない。死にたくない。
い。

オレは、あの空虚な五千年を耐えたんだ、他の雑多でどうでもいいような命なら、オレにくれ。オレにとって、オレは価値がある。
だがお前らは価値がない。

この身に背負う死の匂いはアレに再会するため。

——あの白い肌に歯をつきたてて熱い血潮を味わうという幻想。

そんな、屈折した思いの一方で、楽になってしまいたいと頭の中で囁く、音。

満たされない食欲として歩くのはもう疲れた。能力という体裁をとってオレの背後に足元に揺蕩うその黒い衝動に喰われてしまいたいと、泣き叫ぶ歯軋りの音が聞こえる。

生きたまま喰らう事こそが本懐。魂など離しはしない。オレ以外の全ては永遠に腹の中で死んでいろ。

そうとも、ありとあらゆる全てを喰らうという事は、その先がない。
い。

オレが“行き止まり”なのだ。

水がより低い場所へ流れるように。

世界を下から喰い尽くす。

——喉笛に噛み付き、この力を取り返すために。

——アレを探さなくてはならない。

二拝二拍手一拝がわからないから、胸の前で十字を切ってみた。

特に天罰も下らなかつたけど。

ここは、祭儀場と思しき諏訪大社のまあまあ広い一角だった。広いというか、信者集めて祈らせるなら本殿でやれよ、とは思うのだが、まあ。

規模からいえば村どころではない、まさしく“国”という土地の中には神が祈りを受ける代行としていくつも御神体があるようで、午後も大分過ぎた刻限に、村長クラスのひげ、ヒゲ、髭、見事に髭面ばかりの男共が密集し、御神木に向かって頭を地面に擦り付けていた。髪の一部を切り、血を捧げ、鹿の生首なんかを掲げる姿はこの宗教だと言いたくなる——ああ、宗教か。シシ神サマー。

神殿は小高い丘の上に建てられており、その下の平地に青い田が広がっている。時々、どこからか半透明の蛇がするすると登ってきて、代わりに別の蛇が田んぼへ向かう。

『意識の焦点を操る程度の能力』を使って、今度こそ路傍の小石以下になっているのだが、別段今は効かなくても困らない。見つかったところで極論、全部喰えばいい話でので。

一見すると単に古びた木に男たちがひざまずき、信仰を捧げている。祈りは確かに“力”となっているように見えた。御神木に想いが向けられ、あの忌々しい神気というものが徐々に徐々に湧き上がり、形を成すのが見て取れた。ここの神の格なのか、見る間に怖気誘う類の、半透明の力となる。

「……しっかし………」

平伏す集団のさらに三步後ろで、どこぞの文豪よろしく気取った仕草で顎に手をあてた。

あの力はなんなんだろうかね？

神と人間、どっちを『喰った』ら手に入れられる？ オレは人間は生きたまま喰った事がなく、神も忘れ去られ朽ちかけたカスしか喰った事がない。妖気神気で比較したら必然後者が強く、飢えを満たす以外にもアレに対する一つの手にはなるかと思っただが。もし洩矢とやらを『喰って』も神の力が手に入らなかつたら。……国

の民丸ごと喰うしかないのかー？

ううむ。

同属はあまり、食指が進まないんだが。

長々とくだらない矜持について考え込んでいたせいで、ホワイトスネイクに一手遅かったな、と言われるような事態に気づくのが遅れた。

つまり、オレの足から伸びる影に、同じくシルエットだけの蛇が絡み付いていた。

「なんつ」

反射的に一步後ずさって——胸の中の黒い心臓が、一度強く動いた。

御神木の神気が寄り集まって具体的な形を成し、いつか見た白い鱗の蛇が、オレを睨みつけていた。

「お」

辺りが一面、すっぽりと影に覆われる。

何事かと思った瞬間、大小入り混じった岩が降りそそぎ、全てが押し潰された。

肉がひしゃげる聞き慣れない異音がして、血の臭いと共に惨劇の終幕を告げる。

「……ひーどい事するねえ」

呟いた言葉が空恐ろしく聞こえて、ろくに響きもしないままに虚空へと溶けて消えた。

突如降ってきた分厚い岩石の文字通り真ん中で、ぼんやりと上を見上げてみた。もちろん、何があるというわけでもなし。そもそもまだ目が慣れていない。どこもかしこも真っ暗だった。

寺で突く大鐘に落ちてこられたら、こんな感じだろうか。見えずとも重苦しい閉塞感は肌を這って伝う。能力で『喰え』たのは精々が一メートル四方……もちろん、このまま喰いながら真っ直ぐ外へ出るのは簡単さ、でもその途端に狙い撃ちされる気がしてならねー。

どうするかな、と背後の岩壁に背を預け、下から立ち上る死臭についつい渋い顔をしてしまう。

下駄の齒で足を引っ搔けば、僅かに濡れたような感触が、した。逡巡は一秒にも満たない。

地面と、中身をくり貫いた岩。すなわち四方の“土”から感じた悪寒に従い、背中側の岩を『喰う』、そのまま倒れ込むように飛び出した。

岩を迂回し御神木のスタンド、白い蛇に喰らいつこうと走り出した途端、“それ”が視界に入った。

“それ”は小柄な少女に見えて、少しアレを思い出した。

前に『喰った』白い蛇と同質の、しかしその濃度が比較にならない神霊が鱗を軋ませながらすると這って、“それ”に一定のリズムで巻きつき、覆い隠している。

人間をも容易く飲み込める大蛇を気にも留めずに、空五倍子色のその瞳が俺に向けられる。

「今ので死んだら、さすがに拍子抜けだったわ」

一瞬でこの厳格な祭祀場を酸鼻極まる泥梨へと塗り替えたのは、信仰の対象であるはずの神自身だった。

「……酷い事を」

無性に痛快さを感じた。喉を鳴らして笑いながら、岩の下からはみ出す腕を踏みつける。大雑把にしか狙いのつけられない能力で地面ごと喰う。

——最初に喰った人間は、獣に襲われ半分以上喰われた少女の残りカスだった。川辺だったと思う。血が、水と混じり合ってどんどん薄く濁っていったから。

『もったいない』。

あの時と同じくただそう思っ、岩の下からはみ出ている不調和な腕を『喰った』。その栄養は全て妖気に回し、少しでも力の水増しを図る。

不味い。非常によろしくない。全盛期ならともかく、今のオレだ

と殺せない……かもしれないと考えてしまつほど、目の前の神の力は忌まわしい気配に満ちていた。

咀嚼——。

特に死に至る直接的な影響は感じられず……やはり、純粹に、巨大な質量によつて瞬時に潰されて死んだらしい。

そう、あのカスみたいな白蛇の思念が正しければ、この神は『崇る』のだ。

すでに足元からは、地底を這いずる脆弱に過ぎる土着神の、最早怨念に近いものがオレを祟ってくる。底知れない力を直に食らい——“喰らっている”。名前を忘れ去られた古き神々、あるいはそれすらに満たないもの共の視線。いくらオレでも存在しているかすら曖昧なものは喰えないが、そこに悪意、ないし悪意が宿るうものならば逆に喰いつかない方が難しい。

『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』。

オレというフィルターを通し、飢えの中に文字通り森羅万象の全てを放り込む能力と考えていれば精神衛生上都合がよろしい。

つまるところ——飢えているのだ。

“不味いもの”というのは、どこにでも有りえる。調和を壊すはみ出た体の一部しかり”

目の前の、少女のツラをした神は、やはり——美味そうだった。

幼さも顕な肢体。手首には錆びた腕輪がはまる。身の丈よりも長い三叉の槍の刃先もやはり錆び、逆に華奢な腕が抱える木柄の部分は黒々とした光沢を纏う。

従えた蛇よりもお白い指先から、槍の柄に巻きつくのは——^{ツタ}蔦。睨むように、そしてどこか喜悦が浮かぶ目と、同色の髪。神の髪は肩口でその背丈を揃え、^{びん}鬢の一掴みが赤い糸で纏められていた。

薄紫の衣は膝ほどまで垂れ、踏みしめる御^{おみ}足は爪がそれぞれ五つづつ数えられる。ゆつたりとした雲のように白い袖口。僅かに傾斜した胸元には青銅の装身具が下げられ、花のような造形があしらわれていた。

虚勢なのか多大な自尊心なのか判別のつきづらい目でオレを睨みつけてくる。

捕食者に怯えを知られる事を避けるのは当然だが、そろそろ無抵抗の相手の一つでも登場しないものだろうか、と思った。

傾く西日が伸ばすのはオレと神、二人分の影だけで、光は蛇を捉えない。

「誰そ、彼」

夕方になった。

魔と人が入り雑じる刻限——黄昏時、である。

ありふれた嫌悪感について（後書き）

BGM “Take It Easy” by Eagles

月下老人大罪に死す事（前書き）

「手足の爪をも 抜かしめて 神やらひやらひき
（手足の爪も抜かせて、神の仲間から追放した）」

月下老人大罪に死す事

我ながら、平仄が合わぬ話ではあると思うのだが。食い合わせの悪い、何だかもうどうしようもない事でもあるし、あるいは単に誤解をしているだけのような、薄っぺらい話のような気もする。

詰まるところ、オレは酷く矛盾している。

心がどこかに（そしてオレに）あるとして、普通なら真っ直ぐ伸びているはずの部分が途中でひん曲がってしまっているというか、根底の部分が何かぐにやぐにやしたものに入れ替わっているような能力の方は呆れるほど直情なものにも関わらず、それを抱く器が安定しない。オレとしては別段異常をきどっているつもりもないし、極々一般的な存在であると自負しているつもり、だが。

とりあえずエサの皆様には、オレと対峙したときにはすでに手遅れなのだと、いい加減気づいて欲しいものだ。

例えば、この洩矢神。

喜悦と焦りと、それでもまだ生殺与奪の権利が己にあると思っている目つき。

蛇を体に纏わせて、自然体で立っているだけだが、全身から立ち昇る禍々しい力はこの神殿全域を薄く覆っていて、隙を見て逃げ出すなんて事は不可能そうだった。オレの周囲だけ力及ばぬ空白となるのだから、それはまあ、当然。

小事の融通が利かない食欲の能力はしかし、致命的なところメイで無敵の盾となり得る『口』だった。

大地の裏側から呪い祟られる感触——それがまるで血のように肌の下をのた打ち回る。土着神だろうが、無数の意識がオレを押し潰そうと間断なく圧力をかけ、どこからか五十は下らない数の人間の兵士が詰め寄り、それらがオレを包囲する。——面倒くさい話だ。

どう見てもオレが人間にしか見えないのであろう、極少僅かな困

惑を表情に浮かべる兵士たちを横目で眺めながら、ただ一人の少女を見据えた。……あれだって、とても神には見えないのに、とか思っている。

不可視の攻撃——追隨する痛み。だからなんだと思う。血液の中にガラスの破片が流し込まれたような苦痛。直に受けたならばいくらオレでも彼岸を渡ってしまう、神の攻撃。死なない程度には能力がこの祟りを駆逐してくれる。そして、オレがすべきことはあまり多くない。一つ一つ、建設的にいこう。

悠々と、周りの殺気をものもしないまるで神のような気楽さで、一步、喰らう為に踏み出したとき。

予定調和のように妖気が丸ごと吸い出された。

わけもわからず、前のめりに倒れ、強かに鼻を打った。

「——いッ」

咄嗟に放った、周囲の空間を喰い散らかす『口』を偶然掻い潜った小さな小さな小石がこめかみを弾き飛ばし、一部が肉にめり込んで埋まりやがった。

——これが妖怪退治。そして今回オレは退治される側。

土着神の中にも能力持ちがいるのかと胸中で思う。オレの中から妖気を一瞬吸い出していったあの能力は、欲しい。妖気を吸い出された瞬間に、逆干渉で『ありとあらゆるものを喰らう程度の能力』が噛み付いていったが、オレの中の“命”が増えないところをみると殺せなかったようだ。

それでも、精神を少し喰い干切ってやったから、しばらくは大丈夫だろう。のろのろと、あえて緩慢に立ち上がりながら思索する。

“みちみち”と傷口の肉が内側から膨れ上がるように蠢き、激痛が走る。どうする。再生が遅い。

「生きているのか死んでいるのか、よくわからぬ妖怪だな」

腹の底を探って、残った“命”に愕然とする。

あと、十七回。

「日も落ちてくる頃合故、比類なき“ミシャグジ”が統括を前にして拝顔の榮に浴する我が身は喜びに打ち震えておりまする」

指を、こめかみに突っ込んで無理矢理石を抉り出した。激痛に眼と唇が痙攣しながらも、精一杯に笑って見せながら、言った。

「御返し——だっ」

腹の“命”を五つぐらい一気に汲み上げ、左手に集めた妖気と共に形成、月の彼女のあの赤い弓を模して練り上げようとしたが失敗くつろいでいつて頂戴ねみたいな旨を叫ぶ饅頭のような、球状の黒い物体から変化しなかった。

すでに右腕は祟られ肘から先が真っ黒く変色しており、これを治すのに何匹『喰え』ばいいのか、考えるのも億劫になる。うにゅ？しかし、洩矢神目掛けて投げつけた全てを喰らい尽くすはずのオレの妖気を、少女を守護するかのように蛇が鎌首をもたげて「ぱくり」と正面から飲み込んだ。半透明の蛇が突如肉厚の実体を持ち、胴体をくねらせて少女から離れたかと思うと己の尾を咥えそのまま虚空に掻き消えた。

ぴこーん。命が増えました。

「物騒だな」

「ではそろそろ殺」

——す、と唇が形を作ったときになって、ようやくオレは、完全に後手に回っていた事を知った。そこら中の岩に混じって妙に姿勢良くそそり立つ四つの岩が力を帯びて、その、オレを中心に据えた

『陣』が出来上がっていた。

欲求を満たさないオレに苛立ちを覚えたのか、オレの中で飢えがついと視線を上げさせる。眼に映る、あれを喰えとせつついてきた。オレ一人で陣なのか？

けど、あー。

大地が裂けて奈落への穴が足元に出現したとき、

地の底から濃厚な死の気配を感じて、

伸ばした腕は、少女には届かなかった。

ぴこーん。

月下老人大罪に死す事（後書き）

今回か前回に全盛期云々言ってますが、そもそも彼に全盛なんてないです。妖気が多くても使う方法を持たないので。あるいは、彼女といった時期のことでしょうか？

命が増えたよ！ やったねたえちゃん！

四対の神の瞳孔（前書き）

「
楽に死ねると思うなよ
」

四対の神の瞳孔

「——ヤ様。——モリヤ様！」

本殿の板造りの上を乱雑に踏みつける音。

日本中に広がるミシヤグジ信仰の統括、崇られる大地、「洩矢諏訪子」が男を後ろに連れ歩いていく。厳しく顔をしかめた祟り神の腰には、一本の無骨な鞘に納まる長剣が下げられていた。その後ろを神官服を纏った男が、腰を屈めてドタドタと追従する。

「実りを乞うてきた村長^{ムラオサ}らをあのように殺されましては、人心に反発が生まれますぞ！ 一体、なにゆえ——」

「各村には使いを出せ。夏の間作業を容易くし、秋には豊作を約束すればよい」

「しかし、今後もこのような暴挙に出ては、民の心は離れるばかりです！ きたる大戦を前にして何を考えておられるのですか——」

「妖怪退治だ、已むを得まい」

「は——？ ……や、畏れながら……モリヤ様のご威光の前に、いやはや、妖怪などとは……」

「強大な妖怪だったのだ」

「とはいえ、いくらなんでも——」

「もつとも、己の力に飲み込まれていたがな——」

「それでも……と諏訪子が呟き、廊下の終わりで立ち止まった。

「——私はしばし休む。残りは手筈通りに」

なおも言い募ろうとした男だったが、自身の肩ほどもない彼女に横目で“ちら”と睨まれると、「うつ……」と身を震わせた。

「ここは、私の風祝以外の立ち入りは禁じてあるぞ。男などもつての外……。あー……う、そろそろ日の出になる。下がれ」

「……これは、出過ぎた真似を致しました」

深々と頭を垂れながら男が後ずさっていった。

——そうとも、今まで見た事すらない。ここまで浅ましい妖怪とは——と諏訪子が思いながら、帽子のつばを掴んだ。

廊下の先には部屋があつた。風祝が一子相伝の秘術を使う折、秘伝中の秘伝の儀式の際にしか人は立ち入らず、ある意味でそこは諏訪子の自室ともいえる場所だつた。湿気を逃すため入り口には戸でなく簾のような物が多々下げられており、諏訪子がそれをくぐるときしゃららと鳴つた。

部屋の壁は六面からできていて、中心には上半身だけの妖怪が転がっていた。

先ほどまでの騒ぎの現況——肘より先の右腕を喪失し、腹から下がどこかへ千切れ飛んでいるその妖怪は、うつ伏せの体勢のまま頭をもたげ、彼女を見とがめると、片目を閉じて「へっ……」と笑つた。力尽き、死ぬ寸前のものが腹を括つたような笑みでもあり、強者が相手のささやかな抵抗に一応反応してみせたような笑みでもある。罨に掛かつた獲物を前にしたようにも見え、どうしようもないものに対する“受け入れ”のようにも見えて、あたかも複数の意識が混在しているようだった。

「いやあ——」

つかつかと諏訪子が歩み寄つて、男の腹を蹴り上げる。鈍い打撲音がして、強制的に仰向けにさせられた男の胸に、彼女は腰から下げていた儀礼用の剣を深々と突き立てた。鉄を鍛えたその剣は床にまで食い込んで男をはりつけにする。

「——ううん、なんかデジャヴ」

大して気にした様子もなく、極々のんきに男が言った。胸からも上半身の断面からも血は零れない。どころか、胴の切り口からは臓器だとか骨や肉は一切見えず、なんだか黒いぼやぼやとしたものが覆っていた。

「お前は——」幼さが際立つ唇を舌で湿らせて、一度言葉を切る。ちらとのぞく赤い舌が艶めかしい。

「——何なのだ？ どうしてここを襲ってきた、大妖怪ともあろうもの知性で——あ？ いやまさか……『八坂』の手の者か？」

「何を言ってるかさっぱりだな。スリーサイズとこの剣の意味とその——なんだ、気色悪い帽子について説明するアルよろし」

「私の問いに答えろ」

剣の柄に手をかけた。しかし怯むでもなく男がニヤニヤと笑って、「ああ？ それが人にものを頼む態度か？ ぶっ殺すぞ」

ぐり、と剣が回されて、男の胸に刀身の幅の穴が生まれる。床ごと肉がかき回されるが、男は動じた風もない。

「神を喰って自分をセルフ信仰して無限に神力とやらが得られるのなら、人を喰う理由が一つなくなると思って」

「……ここまで浅ましい妖怪も初めて見る。本当に目的はそれだけか？」

「ルーミアっつー金色の髪した妖怪を……」

「知らんな。どうやってあれから抜け出した？」

「黙秘します」

言って、まるで元からそこにいなかったように、突如男の姿が掻き消える。

「な——ッ！」

慌てて諏訪子が剣を抜き払い、四方へと視線を彷徨させたとき、消えると同じぐらい容易く男が姿を顕にして「では次の質問をどうぞ」と言った。

寸分違わぬ位置で男が現われるが早いか、諏訪子が高々と剣を掲げ再び振り下ろした。今度は神としての力が込められた刃が男の肩を易々と食い破る。剣が肩に刺さった瞬間男が顔色を変え、残った左手で刀身を掴むが、触れた指は真っ黒く犯された。良く見ると黒く見えるのは隙間なくびっしり書かれた文字であり、『人間人間人間人間人間人間』と——少なくとも、男にはそう見えた。

「どれだけ横暴なんだ。だから仏教如きに台頭されるんだ」

ぼやくように言って、変色した左手にちらと目をやった。肘の半

ばまで黒くなり、その手の平の辺り……人間の口ができる。皺のよ
うな線がすうっと奥行きを持ち、剣呑な牙と舌がべろりと覗いた。
「……だから駄目なんだ」

気味悪いと呟いて、男が手を握り込む。直後、男の肘が、肌と黒
の境目で千切れ、手首が床に落ちた。一連の捕喰を何者にも認識で
きない方法で行う事ができる男の能力によって食われ、腕は力なく
ぶらぶらと振られる。その断面もまた黒く、まるで、彼にはもう生
気が残っていないようだった。

諏訪子がこの奇行を眺め、そして千切れた手首に目を移した。そ
れは、踊るように一度床で跳ねて「メキメキッ……」と内側から捲
れ、流動する液体のような、腰から先が崩れた真っ黒い狼のような
塊へと変貌を遂げた。あくまで手首の如く小さく、黒い輪郭をさざ
波のように絶えず波立たせながら軀を引きずり、無音で吠えた。目
のあるべき位置の口が、軀の至る部位の『口』が飢えを叫び、最も
手近にある肉へ——諏訪子の肢体に食らいつこうと這い寄る。

死に掛けた男そのものより遥かに醜悪で禍々しい“それ”を見た
諏訪子は一步退き、虚空から己が従える土着神を呼び出した。半透
明の鶴のように見えるその土着神は、しかしろくな抵抗もできぬう
ちに狼に食いつかれた。祟りも、力も、何もかもを食い尽くす獣は、
捕喰を終えると僅かに厚みを増し、まるで用は済んだと言わんばか
りに部屋の壁へと這っていった。木壁など何の妨げにもならず食わ
れ、そして今度こそ——

……イイイイイイアアアウ！！

精神を掻き毟る断末魔を黒い狼があげた。食い破られた壁の穴か
らは朝日が零れ、光から逃げ出す獣はじゅうじゅうと泡立っている
——融けている。

当初の半分ほどに身を削られた獣はそれでも、這って、這って、
床に縫い止められ身動きのできない男の肩に食らいつく。それをさ

らに男があんぐりと大口を開けて“パクリ”と飲み込み、そして再び静寂だけが残った。

「ああ……………」

それらを諏訪子はただ震えて見つめる他なかった。今ここにきてようやく、諏訪子は自分の失態——いや、防御も何もまったく問題にしないこの妖怪の理不尽さ……………そして、それが現われたという不運に思い至った。

「あ、ああ……………」

齒の根が小刻みに打ち震える。無意識のうちに後ずさりしてしまう……………神といえども生きている以上、それは仕方がない事だとすら言えた。

妖怪は床の上でのた打ち回るが、見かけ上の存在と力の源とを分けている剣は抜くに抜けず、当然食えない。

しようながない、という感じで男が彼女に言った。

「これ抜いてくれるなら見逃すけど？」

あっさりと言い切った。『晴れているから釣りでもしよう』とでも言うような気楽さで、事実今この場において男は完全に神を圧倒していた。

「それは……………できぬ。貴様は私の民を殺すのだろう」

「ワタシ元人間だから進んで同属を喰おうとは思わないんだけどさあ。そこら辺の妖怪喰うから——」

「——承諾できない」

頭を振って、諏訪子が会話を打ち切った。

「貴様はただ能力に支配されただけの——妖怪ですらない、それ以下“モノ”だ。私が始末をつける」

諏訪子の脳裏には先の一戦。あのときにも精神攻撃は通用していたし、今の様子を見ても肉体そのものは人間並みに虚弱。つまり、やりようはいくらでもあるのだ。

——ただ。

もし、これが真に死んだとき、この能力は果たして——。

「もう体の維持に回す妖気も残ってない。食事を持って来いよ」

「……ほざけ」

簾のしゃらんという音を聞いて、部屋を出たとき諏訪子は知らず止めていた息をほう、と吐いて、あの男の狂気の質を鑑みるにはたして期待通りの結果が得られるのかと、しばらくその場で考え込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487m/>

東方悪食歌

2011年10月20日04時19分発行